

宮平遺跡

——長野県北佐久郡御代田町宮平遺跡発掘調査報告書——

2000

長野県御代田町教育委員会



1 富平遺跡出土 捷文中期佐久系土器（大井源寿氏蔵）



2 宫平遗址出土土器



3 宫平遗址出土遗物

例　　言

- 1 長野県北佐久郡御代田町所在の宮平遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本発掘調査の概要については、第Ⅰ章に記してある。
- 3 本発掘調査報告書作成の作業分担は以下のとおりである。

◎ 遺物復原	伴野有希子、神藏惇子、砂連尾恵美子
◎ 遺物実測	鳥居亮、神藏惇子、砂連尾恵美子、中込輝子
◎ 遺物拓本	伴野有希子、神藏惇子、砂連尾恵美子、中込輝子
◎ 遺物トレース	鳥居亮、砂連尾恵美子、神藏惇子
◎ 遺構トレース	鳥居亮
◎ 遺物写真撮影	鳥居亮
◎ 遺物観察表作成	本橋恵美子・堤隆
◎ 版組み	小山岳夫、神藏惇子、砂連尾恵美子、中込輝子
- 4 遺物展開写真については、小川忠博氏に撮影いただいた。
- 5 本書の執筆分担については、文責を目次に明記した。なお、IV遺構と遺物では、遺構および石器を堤が、土器を本橋が分担執筆した。
- 6 自然科学分析については、立教大学鈴木正男先生、国立歴史民俗博物館永嶋正春先生から玉稿を賜った。
- 7 本書の編集は、御代田町教育委員会の責任のもとに、堤隆がおこなった。
- 8 本調査・本報告書作成に際し、以下の方々から貴重な御助言・御配慮を得た。
御芳名を記して厚く御礼申し上げる次第である。

(順不同・敬称略)

緑田弘実、川島雅人、前原豊、中沢道彦、秋池武、櫛原功一

凡 例

- 1 遺構の略称 穴居址 — J
土 坑 — D
礎 群 — R
グリッド — G
- 2 挿図の縮尺
穴居・土坑 = 1 : 60
土器 = 1 : 4 石器 = 1 : 2、1 : 3 土偶・垂飾・耳飾 = 1 : 2
以上が基本的なものである。これ以外のものも含めて挿図中にその縮尺を明示してある。
- 3 図版の縮尺
遺構写真的縮尺については統一されていない。
遺物写真的縮尺については、挿図と同一である。
- 4 出土遺物一覧表<土器>の法量は上から順に口径・器高・底径を表すcmである。
- 5 出土遺物一覧表<土器><石器>の法量は、—は不明、()が現存値、()がない場合は完存値を表す。単位は、cm・gである。
- 6 遺構の覆土・遺物胎土の色調については、『新版標準土色帖』の表示に基づいて示した。
- 7 挿図中におけるスクリーントーンは以下のものを表す。
 - (1) 遺構
遺構断面 = 斜線 焼 土・炭化物 = 網
 - (2) 遺物
石器研磨面 = 網
土器赤彩面 = 網
- 8 石器石材では、頁岩を頁岩Ⅰ・頁岩Ⅱとして分別した。頁岩Ⅰは黒色で頁岩Ⅱよりやや緻密なもの、頁岩Ⅱは肌色で頁岩Ⅰよりやや緻密さにかけるものをさす。これ以外にチョコレート色で緻密で良質なもの（たとえば東北地方にあるような）を硬質頁岩とした。

目 次

例 言
凡 例
目 次

I	発掘調査の経緯	堤 隆	1
1	発掘調査に至る動機	"	1
2	発掘調査の期間・体制	"	2
3	発掘調査の体制	"	2
II	遺跡の環境	"	5
	ドクトル・マンローと宮平遺跡	"	8
III	層 序	"	10
IV	遺構と遺物	堤 隆(遺構・石器)・本橋恵美子(土器)	11
I	住居址	"	11
(1)	J-1号住居址	"	11
(2)	J-2号住居址	"	15
(3)	J-3号住居址	"	16
(4)	J-4号住居址	"	22
(5)	J-5号住居址	"	33
(6)	J-6号住居址	"	38
(7)	J-7号住居址	"	39
(8)	J-8号住居址	"	42
(9)	J-9号住居址	"	43
(10)	J-10号住居址	"	48
(11)	J-11号住居址	"	49
(12)	J-12号住居址	"	50

(13) J-13号住居址	堤 隆(遺構・石器)	本橋恵美子(土器)	54
(14) J-14号住居址	"	"	55
(15) J-15号住居址	"	"	60
(16) J-16号住居址	"	"	66
(17) J-17号住居址	"	"	67
(18) J-18号住居址	"	"	72
(19) J-19号住居址	"	"	74
(20) J-20号住居址	"	"	74
(21) J-21号住居址	"	"	75
(22) J-22号住居址	"	"	78
(23) J-23号住居址	"	"	79
(24) J-24号住居址	"	"	80
(25) J-25号住居址	"	"	83
(26) J-26号住居址	"	"	85
(27) J-27号住居址	"	"	86
2 土 坑	"	"	87
(1) D-1~D-5号土坑	"	"	87
(2) D-6・D-7・D-8号土坑	"	"	87
(3) D-9・D-10・D-11号土坑	"	"	87
(4) D-12・D-13・D-14号土坑	"	"	88
(5) D-15・D-16号土坑	"	"	88
(6) D-22・D-23・D-24号土坑	"	"	88
(7) D-25・D-26・D-27号土坑	"	"	89
(8) D-28~D-40号土坑	"	"	89
(9) D-41号土坑	"	"	90
(10) D-42号土坑	"	"	90
(11) D-43~D-46号土坑	"	"	90
(12) D-47号土坑	"	"	90
3 炉を伴う土坑	"	"	90
(1) D-48号土坑	"	"	90
4 灰及び骨片を伴う土坑	"	"	91
(1) D-50号土坑	"	"	91

(2) D-52号土坑	堤 隆(遺構・石器)・本橋恵美子(土器)	91
5 土坑墓	"	92
(1) D-19号土坑墓	"	92
6 石棺墓	"	93
(1) D-17・D-18・D-20・D-21号石棺墓	"	93
7 磁群	"	93
(1) R-1号磁群	"	93
(2) R-2号磁群	"	94
8 土坑等出土の遺物	"	94
(1) 土坑出土の土器	"	94
(2) 土坑の石器と土製品	"	97
9 グリッド出土の遺物	"	97
(1) グリッド出土の土器	"	97
(2) グリッドの石器と土製品	"	102
(3) 黒曜石原石と石核	"	102
(4) 石棒	"	103
(5) 土製円盤	"	103
(6) 土偶・顔面把手	"	103
(7) 垂飾と耳飾	"	103
10 宮平遺跡発見の土器	大井源寿	103
(1) 発見の経過	"	103
(2) 資料No.1	"	104
(3) 資料No.2	"	104
(4) まとめ	"	104
V 理化学分析		161
I 宮平遺跡の黒曜石の分析	立教大学一般教育部 鈴木正男	161
(1) はじめに	"	161
(2) 黒曜石分析	"	161
(3) 熱中性子放射化分析	"	161
(4) 判別関数	"	161
(5) 黒曜石水和層による年代測定	"	162

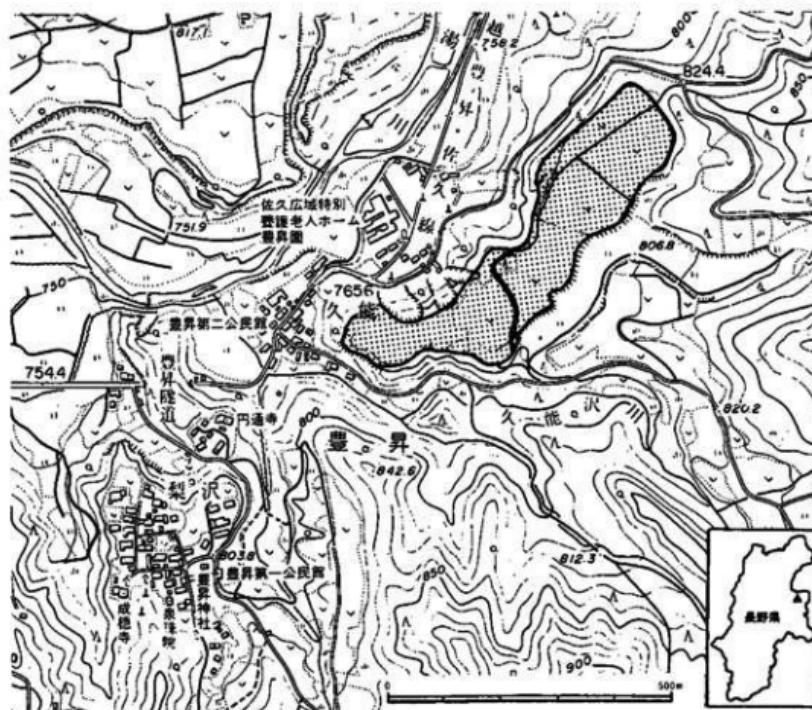
2 宮平遺跡出土の赤彩土器の分析	国立歴史民俗博物館 永鳴正春	164
VI 総 括		本橋恵美子 167
I 宮平遺跡の縄文土器	"	167
(1) 概 要	"	167
(2) 加曾利E 3式・加曾利E 4式土器について	"	167
(3) まとめ	"	178
2 浅間山麓の敷石住居址	"	179
(1) 中期後葉から後期初頭の遺跡分布	"	179
(2) 柄鏡形敷石住居址の様相	"	179
(3) 柄鏡形敷石住居址の出現	"	180
(4) 柄鏡形（敷石）住居址の構造	"	180
(5) 御代田・佐久地域の敷石住居址	"	182
(6) まとめ	"	183
V 写 真 図 版		187

Ⅰ 発掘調査の経緯

Ⅰ 発掘調査に至る動機

長野県北佐久郡御代田町大字豊昇字宮平において、昭和56年度農道舗装事業が計画された。農道は、町史跡である宮平遺跡の中心部を通過しており、舗装に際してはその破壊が余儀なくされた。このため、調査団長を永峯光一先生に、調査主任を林幸彦氏にお願いし、御代田町教育委員会が主体となり、佐久考古学有志及び地元豊昇地区・広戸地区・町職員・佐久市教育委員会の方々の協力を得て、緊急に発掘調査を実施し記録保存を図ることとなった。

(事務局)



第1図 宮平遺跡（アミ部）と発掘地点（太線）（1：10,000）

2 発掘調査の期間・体制

遺跡名 宮平遺跡

所在地 長野県北佐久郡御代田町大字豊昇字宮平1724～3他19筆

発掘期間 昭和56年11月26日～昭和57年1月5日

整理期間 昭和57年5月4日～昭和57年10月30日

昭和58年8月1日～昭和58年8月31日

昭和59年2月1日～昭和59年3月31日

平成11年4月1日～平成12年3月31日

3 発掘調査の体制

事務局（現在）

教育長 吉田末廣

教育次長 堀籠泰久

社会・同和教育係長 内堀豊彦

社会・同和教育係 萩原浩 小山岳夫 堤 隆 鈴木洋子

調査団（昭和56年当時）

団長 永峯光一

調査担当 永峯光一

調査主任 林 幸彦（佐久市教育委員会）

調査員 工藤（森泉）かよ子、大井今朝太、森泉定勝、井上行雄、荻原範仁、前原豊、小島純一、新井真博、小坂井孝修、川島雅人（発掘調査）

鳥居亮、小山岳夫、白倉盛男、本橋恵美子（遺物整理）

調査補助員 飯島篤、三石宗一、橋詰武子、茂木智里、堤 隆（発掘調査）

文化財審議委員 尾台卓一、大井豊、桜井為吉、大沢俊雄、小林五郎、柳沢恒三郎、内山俊雄、山本宣夫、堀籠源（発掘調査）

協力者 豊昇区の皆さん、広戸区の皆さん（発掘調査）

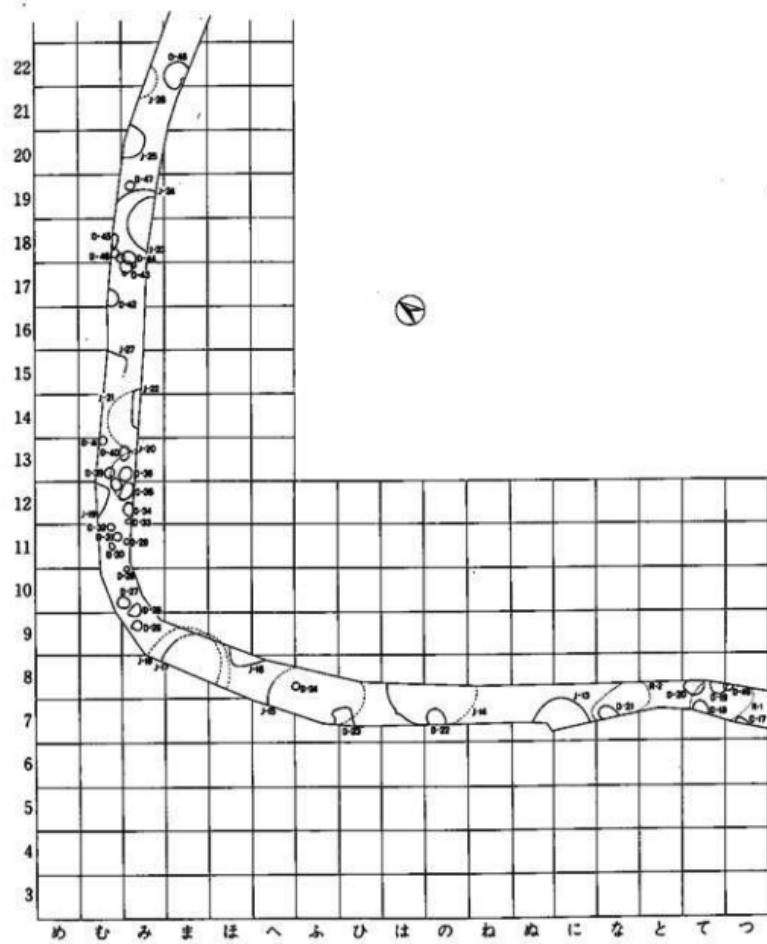
並木ことみ、丸山勝子、掛川裕次、篠原浩江、井出紹枝、市来和子、田中智恵子

桜井昌子、篠原良枝、小須田明美、飯島広子、矢田陽子、三石伸之、柳沢操、

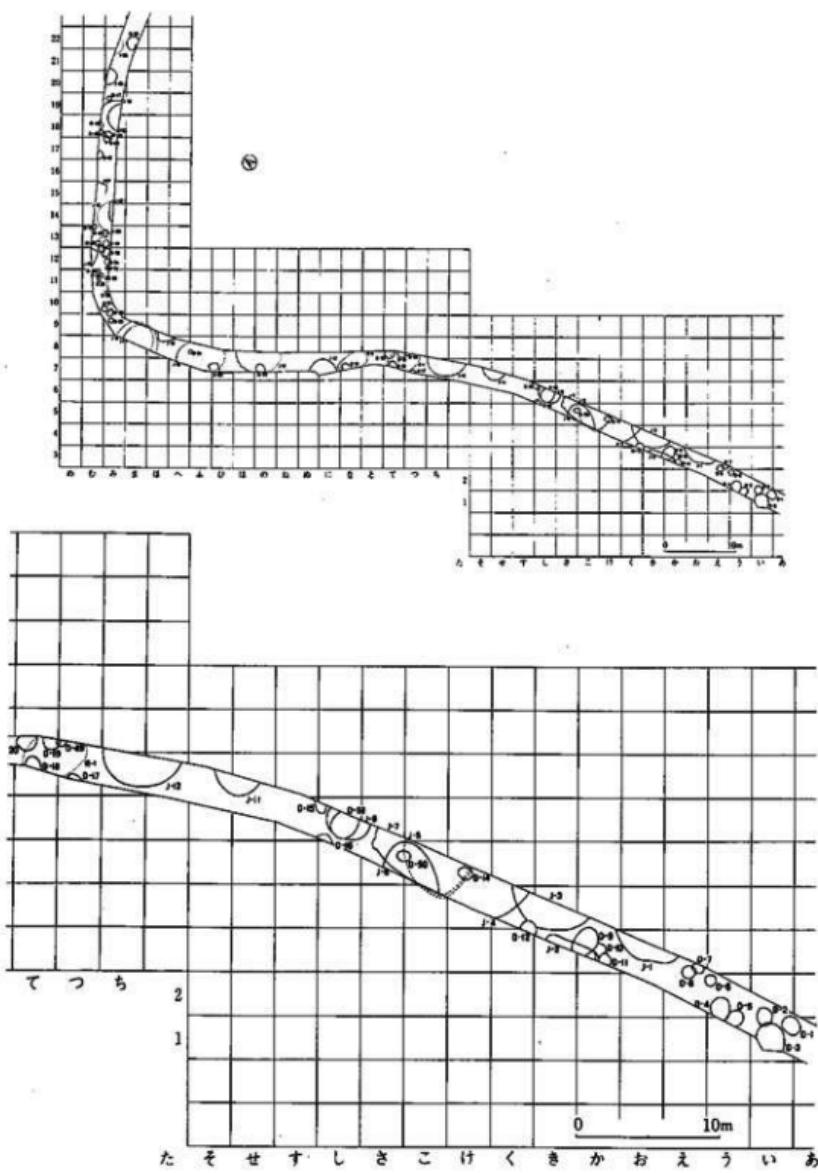
細田徹、木内三千男、市川和彦、志摩聰、市川ことえ、相沢理加、井出英俊、

桐山敦、市川康行、滝沢次郎、吉田ゆかり、神部妙子、佐々木宗昭、伴野有希子、

高瀬武男、中込輝子、神藏梓子、砂連尾恵美子（遺物整理）



第1図(b) 宮平遺跡全体図 (1:400)



第1図(c) 宮平遺跡全体図(上=1:800, 下=1:400)

II 遺跡の環境

御代田町豊昇地区を西流する湯川は両岸を大きく浸食し、浅間山麓の火山灰土壌地帯特有といわれる「田切り地形」を形成している。その東岸には、湯川との比高50m・標高800mを測る平坦な台地が広がっている。この台地は、東方に位置する森泉山（1135m）山麓の末端にあたり、南北200m、東西100mの範囲に及ぶ。この台地一帯が宮平遺跡（26）である。

宮平遺跡は、明治12年（1879）の伍賀村誌にも記載されているように、古くから出土遺物の豊富さで人々に知られていた。日本における旧石器文化の存在をいち早く説いていたN.G.マンローは、軽井沢滞在中の昭和5年（1930）に本遺跡を訪れている。

昭和6年（1931）、北佐久郡下における考古学的調査が八幡一郎氏によって行われた際には、敷石遺構と多くの耳飾が発見された（八幡 1934）。戦後は、昭和42年（1967）に、農業構造改善事業によって露呈した縄文時代後期の敷石住居址1軒を、上原邦一氏が調査している（上原 1968）。昭和53年（1978）には、農道舗装工事に先立つ確認調査がなされている。

宮平遺跡の周辺の遺跡を概観してみよう。（第2図）。まず最初にあげられるのは、同じ湯川水系で本遺跡の北東に位置する軽井沢町茂沢南石堂遺跡であろう。茂沢南石堂は8次にわたる調査がなされており、数多くの遺構・遺物が検出されたが、わけても縄文時代中期後半から後期にかけての敷石住居址や石棺墓・土器などは、本遺跡との関連性において重要である。

茂沢よりやや下がった湯川の西岸には、御代田町追分道添遺跡（35）、草越南畠遺跡（34）、追分西畠遺跡（36）と縄文時代中・後期を主体とする遺跡が続いている。草越南畠遺跡は昭和53年（1978）に佐久考古学会員らによって発掘調査されている（大井・他 1978）。湯川は宮平遺跡の眼下を過ぎると蛇行しながらも西流するが、豊昇を経て面替の部落に入ると、その南岸に再び縄文時代中・後期の遺跡の集中がみられる。小谷ヶ沢遺跡（24）、面替遺跡（23）、下屋敷遺跡（21）、北屋敷遺跡（22）がそれである。また、これらの遺跡群と湯川をはさんだ対岸には、縄文時代後期の住居址1軒が検出された池尻遺跡が存在している（38）。

以上に述べたように、宮平を含む一帯にみられる数多くの遺跡から、八風山西北麓の湯川に臨む地帯は、縄文時代中・後期の人々の主な生活の舞台であったことがわかる。

一方、これと対峙する浅間山南麓にも、焼町土器を出土した川原田遺跡（70）や、敷石住居のある滝沢遺跡（6）などにみるように、縄文時代の人々の生活が展開していたようである。

なお、町の北東部は追分火砕流（A.D.1108年）によって遺跡の存在が確認されていない。



第2図 御代田町内の遺跡分布 (1 : 50,000)

第1表 御代田町遺跡一覧表

番号	種別	時代				遺跡名	所在地	発掘歴	
		縦文	弥生	古墳	奈平			清一	滅全
1						西荒神	御代田町塩野	○	○
2						東荒神	御代田町塩野	○	○
3						西城西	御代田町塩野	○	○
4						城東	御代田町塩野	○	○
5						大沼	御代田町塩野	○	○
6						城之瀬	御代田町塩野	○	○
7						城之瀬	御代田町塩野	○	○
8						城之瀬	御代田町塩野	○	○
9						城之瀬	御代田町塩野	○	○
10						城之瀬	御代田町塩野	○	○
11						城之瀬	御代田町塩野	○	○
12						城之瀬	御代田町塩野	○	○
13						城之瀬	御代田町塩野	○	○
14						城之瀬	御代田町塩野	○	○
15						城之瀬	御代田町塩野	○	○
16						城之瀬	御代田町塩野	○	○
17						城之瀬	御代田町塩野	○	○
18						城之瀬	御代田町塩野	○	○
19						城之瀬	御代田町馬瀬口	○	○
20						城之瀬	御代田町馬瀬口	○	○
21						城之瀬	御代田町上高	○	○
22						城之瀬	御代田町面曾	○	○
23						城之瀬	御代田町面曾	○	○
24						城之瀬	御代田町面曾	○	○
25						城之瀬	御代田町豊井	○	○
26						城之瀬	御代田町豊井	○	○
27						城之瀬	御代田町塩野	○	○
28						城之瀬	御代田町児玉	○	○
29						城之瀬	御代田町塩野	○	○
30						城之瀬	御代田町塩野	○	○
31						城之瀬	御代田町塩野	○	○
32						城之瀬	御代田町塩野	○	○
33						城之瀬	御代田町塩野	○	○
34						城之瀬	御代田町草原	○	○
35						城之瀬	御代田町草原	○	○
36						城之瀬	御代田町草原	○	○
37						城之瀬	御代田町草原	○	○
38						城之瀬	御代田町草原	○	○
39						城之瀬	御代田町草原	○	○
40						城之瀬	御代田町草原	○	○
41						城之瀬	御代田町草原	○	○
42						城之瀬	御代田町草原	○	○
43						城之瀬	御代田町草原	○	○
44						城之瀬	御代田町草原	○	○
45						城之瀬	御代田町草原	○	○
46						城之瀬	御代田町草原	○	○
47						城之瀬	御代田町草原	○	○
48						城之瀬	御代田町草原	○	○
49						城之瀬	御代田町草原	○	○
50						城之瀬	御代田町草原	○	○
51						城之瀬	御代田町草原	○	○
52						城之瀬	御代田町草原	○	○
53						城之瀬	御代田町草原	○	○
54						城之瀬	御代田町草原	○	○
55						城之瀬	御代田町草原	○	○
56						城之瀬	御代田町草原	○	○
57						城之瀬	御代田町草原	○	○
58						城之瀬	御代田町草原	○	○
59						城之瀬	御代田町草原	○	○
60						城之瀬	御代田町草原	○	○
61						城之瀬	御代田町草原	○	○
62						城之瀬	御代田町草原	○	○
63						城之瀬	御代田町草原	○	○
64						城之瀬	御代田町草原	○	○
65						城之瀬	御代田町草原	○	○
66						城之瀬	御代田町草原	○	○
67						城之瀬	御代田町草原	○	○
68						城之瀬	御代田町草原	○	○
69						城之瀬	御代田町草原	○	○
70						城之瀬	御代田町草原	○	○
71						城之瀬	御代田町草原	○	○
72						城之瀬	御代田町草原	○	○
73						城之瀬	御代田町草原	○	○
74						城之瀬	御代田町草原	○	○
75						城之瀬	御代田町草原	○	○
76						城之瀬	御代田町草原	○	○
77						城之瀬	御代田町草原	所在不明	○

ドクトル・マンローと宮平遺跡

浅間山麓の古代史の扉は、軽井沢サナトリウムの英国人医師であり考古・人類学者のN.G.マンロー博士によって開かれた。マンローが亡くなる2年前の昭和15年軽井沢で撮影されたポートレートは、丸眼鏡の奥から理知的な瞳をのぞかせるマンローの人となりをよく伝えている。

マンローは1863年にスコットランドで生まれ、明治24年に来日したのち、横浜・軽井沢・北海道二富谷での医療活動を続け、そのかたわら昭和17年79歳で亡くなるまで、日本考古学やアイヌの人々の人類学的研究を続け不滅の業績を残した。明治38年に帰化して日本名を満郎と書いたが、日本語はあまりたんのうにはならなかったようである。

マンローが軽井沢を訪れるようになったのは、大正初期のことらしい。大正元年にマンローは豊昇宮平遺跡を調査し、「茂沢付近の遺跡地名表」を『人類学雑誌』に発表している。当初マンローは軽井沢に避暑に来たにすぎなかったが、縁あって大正13年には軽井沢サナトリウムの院長に就任し、昭和3年までその職にあった。

当時マンローを軽井沢サナトリウムに訪問した人物には、キリスト信徒である内村鑑三がいる。また、土井晩翠は結核患者としてマンローの治療を受けている。堀辰雄の『美しい村』に登場するレノルズ博士もマンローがモデルとなつたともいわれている。このほかAINシェタイン博士やヘレン・ケラーなど世界の歴史上に残る人物も日本でマンローと会見している。こうした一流の人物を引きつける魅力をマンローは十分に備えていた。マンローは研究面ではロックフェラー財団や岩波書店の岩波茂雄氏より研究費の助成を受けていた。

太平洋戦争中は、いくら帰化したとはいえマンローは外国人であったため特高警察の監視下におかれ、スパイ容疑を着せられて殴る蹴るの暴行を受けるという苦い経験をしたことがあった。一方、マンローは生涯において4度の結婚を経験しているが、最後の夫人であった日本人のチヨ・マンローは、戦後の昭和29年、69歳になるまで軽井沢サナトリウムに婦長として勤務している。

豊昇の大井源寿氏は幼いころ、馬に乗った背の高い外国人が家に来て、当時はめずらしかったビスケットなどをもらった記憶があるのだという。その人がマンローで、大井家所蔵の宮平遺跡出土の耳飾り



第3図 マンロー博士（昭和15年・軽井沢）

を見て、ぜひ欲しいと言い、当時の200円で売ってくれないかと大井氏の父に懇願したそうだが、父はしばらくお堂にいって考えをまとめ、やはりだめだと返事をしたという逸話が残っている。その耳飾りが第4図に載せたもので、見事な装飾の施された直径7cmの優品である。

マンローは度々宮平遺跡を訪れ、当時宮平を発掘中の考古学者八幡一郎（東大講師）とも歓談している。またマンローは軽井沢茂沢南石堂遺跡の踏査などもしばしば行っている。マンローが集めた古代コレクションは膨大な数に及ぶが、軽井沢にあったものは関東大震災の難を逃れて残った。現在京都の同

志社大学には、マンローが神奈川県早川などで発掘した旧石器とされた石器が展示されている。

マンローは明治41年『プレヒストリック・ジャパン』（＝『先史時代の日本』）という700頁に及ぶ英語の大著を著し、先史時代の日本文化についての大きな研究業績を残した。この本はイギリスでも出版され、日本の先史文化が西洋にも紹介されることになった。特筆されるべきは、この本の中で、日本に縄文以前の文化＝旧石器文化が存在することがいち早く説かれたことである。しかし日本旧石器時代の存在の証明は、その約50年後の昭和24年、群馬県岩宿遺跡の発見まで待たねばならなかった。

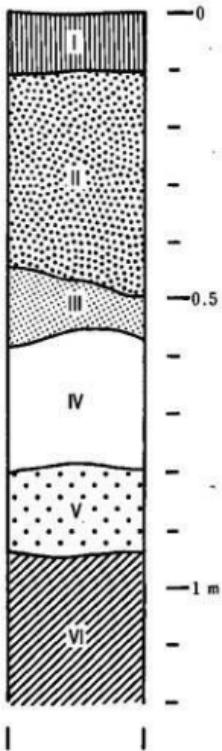
一方、人類学者としてのマンローは、アイヌ文化への造詣が深く、英文で『アイヌーその信仰と儀礼』という優れた民族誌を出版したり、『熊祭り』（イオマンテ）の記録映像なども残している。とはいえマンローは、よそ者の人類学者が現地に来て、民族資料だけをさらっていくというような野蛮な調査者ではなかった。マンローは北海道二風谷のコタンに居を構え、結核をはじめとする病気に手の施しようがなかったアイヌの人々を無料診察で支え、その傍ら民族の文化を記録するという仕事を成し遂げたのである。したがってその財政基盤は夏季の軽井沢での出張診療による収入が支えていた。

ただ残念なことに『熊祭り』のフィルムは、戦時に特高警察によって没収され、6巻をズタズタに切り裂かれ、今日ではそのダイジェスト版しか残されていない。この残りのフィルムが返ってきたとき、マンローはただ一言「ファシストめ！」と吐き捨てるように言ったという。



第4図 宮平遺跡の耳飾り 径約7cm
(大井源寿氏蔵)

III 層序



宮平遺跡における基本層序は第5図に示した。その内容は以下の通りである。

- I層 黒色土層 耕作土。15~20cm前後の堆積をみせる表土。
- II層 暗灰色土層 粒子の粗い火山灰層。台地全体を覆っているものと思われるが、均等な堆積状況を示さず、厚い部分で50cm薄い部分で10cm前後を測る。
- III層 黒色土層 本層は、天仁元年（A.D.1108）の浅間山噴火によるテフラ（As-B）と考えられ、重要な鍵層である。
- IV層 黄褐色土層 粒子の細かいやや粘性のある層。20~30cm前後の厚さを測るが、本層の堆積のみられない地点もある。径2~5cm前後の軽石を多量に含む。
- V層 茶褐色土層 バミスを含む層。V層より明るい。
- VI層 黄色土層 黄色土ブロックを多く含む漸移層。縄文時代の遺構の一部は本層より構築されている。
- VI層 黄色土層 地山であるローム層。遺構の確認面もある。

第5図 宮平遺跡の基本層序

なお、第5図の模式図は12号敷石住居付近の土層堆積状況である。

IV 遺構と遺物

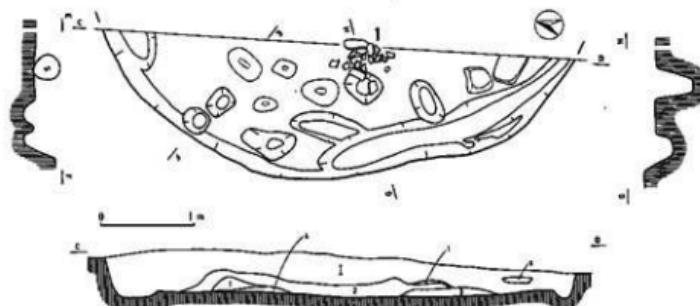
宮平遺跡において検出された遺構は、縄文時代中期後半から後期にかけての竪穴式住居址27軒（うち7軒は敷石住居址）・土坑46基・土坑墓1基・石棺墓4基・砾群2基である。これらの遺構とそこから出土した遺物について、以下順を追って説明を加える。

I 住居址

(1) J-1号住居址

遺構（第6図、図版1）

J-1号住居址は、調査区の南端おー3グリッドを中心として検出された。そのプランの大部分は調査区外である東側へ逃げてしまっている。住居址の形態は円形を呈するもので、壁際には周溝が巡っている。住居址内には、人頭大からそれ以上の大きさをもつ環6個が配されたいた。覆土は、I層はプラマナリーな自然堆積土であるが、1・2・3層は人為的な埋土と考えられる。遺物は、その中央部において（第6図1）ほぼ関係に復元可能な唐草文系の深鉢の破片1個体分



1. 黒褐色土層 バミスを含む
1. 黒褐色土層 炭化物を含む
2. 暗黄褐色土層 ローム粒子を多量に含み、やや粘性を有する。
3. 淡褐色土層
4. 黒色土層

第6図 J-1号住居址実測図 (1:60)

が検出された。

遺物（第7～9図、図版25・26・60）

1は唐草文系土器で、ヘラ状工具による沈線を施した後に隆帯で渦巻きのモチーフを描く。口唇部に2単位の把手をもっていたようである。2は浅鉢で、口縁から胴部の大形破片である。棒状工具により楕円や渦巻き文を描く。加曾利E2式土器である。3は、口縁から胴部上半の大形破片である。口縁部では棒状工具で渦巻き文を中心に弧状に沈線文を施し、胴部は横位に隆帯で区画されている。曾利II式土器である。4から10は佐久系土器あるいは唐草文系土器であろう。綾杉文上に並行沈線文あるいは隆帯が施されている。11は加曾利E3式土器の口縁部破片である。

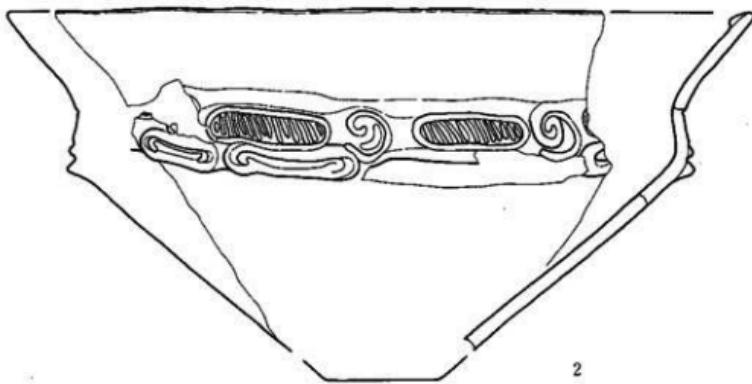
12は赤彩のなされた土偶の足部、12・14は打製石斧、15は磨石である。

時期

本住居址の所産期は、縄文時代中期後半加曾利E2式期と考えられる。



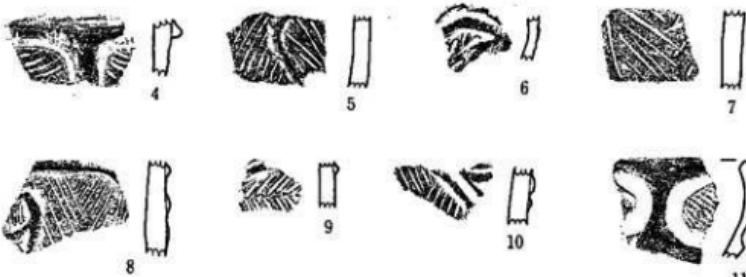
第7図 J-1号住居址出土土器 (1:4)



2



3



第8図 J-1号住居址出土土器 (1:4)

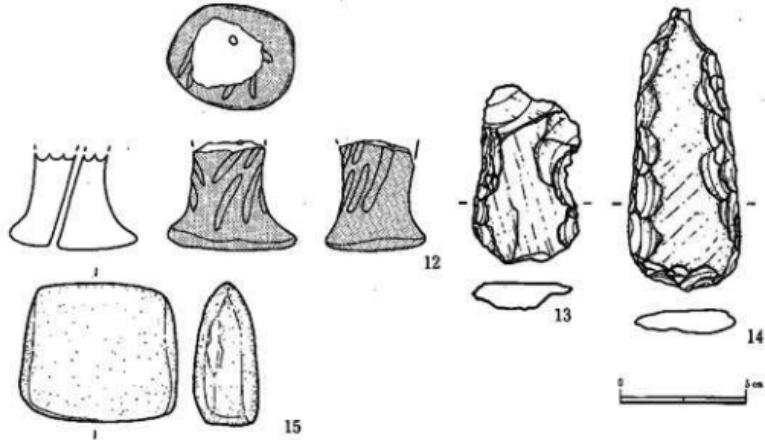
第2表 J-1号住居址出土遺物一覧表(土器)

種類番号	器種	部位	法番	器形および文様	胎土	色調		焼成	注記	備考
						外面	内面			
1	深鉢	口縁 —胴下	35 (42) (10)	沈線文、縦帯文	白色粒子	にじい橙色 5YR6/4	にじい褐色 5YR6/4	通常	No.12	
2	浅鉢	口縁 —胴下	53 (25.6) (8)	沈線文	角陶石	にじい黄褐色 10YR7/4	浅黃褐色 10YR8/4	通常	No.1.5.6.7. 8.9.12	
3	深鉢	口縁 —胴下		沈線文、縦帯文	白色粒子	浅黃色 2.5Y7/3	浅黃色 2.5Y7/4	通常	No.4.10 お-36a.9	
4	深鉢	胴上		沈線文、縦帯文	白色粒子	にじい黄褐色 10YR6/4	にじい黄色 2.5Y6/4	通常	No.1	
5	深鉢	胴上		沈線文、縦帯文	角陶石	褐色 7.5YR6/6	明黄褐色 10YR6/6	通常	No.9	
6	深鉢	胴上		沈線文、縦帯文		浅黃褐色 10YR8/4	浅黃褐色 10YR8/3	通常		
7	深鉢	胴上		綾衫文		褐色 7.5YR7/6	浅黃褐色 10YR8/3	通常	No.12	
8	深鉢	胴上		綾衫文、縦帯文	角陶石	黒褐色 10YR3/1	褐色 10YR4/6	通常		
9	深鉢	胴		沈線文、縦帯文	白色粒子	にじい褐色 7.5YR6/3	褐色 10YR4/4	通常	No.12	
10	深鉢	胴上		沈線文、縦帯文	角陶石	にじい赤褐色 5YR5/4	にじい黄褐色 10YR7/3	通常		
11	深鉢	口縁		綾文(RL)、沈線文	角陶石	にじい黄褐色 10YR6/4	灰黃褐色 10YR6/2	良好		

第3表 J-1号住居址出土遺物一覧表<土偶・石器>

種類番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	種類番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
12	土偶	土製	37	35	44	36	足部、赤彩	14	打製石斧	頁岩 II	148	57	16	179.8	
13	打製石斧	頁岩 II	81	59	17	102		15	磨石	安山岩	74	82	35	303.8	

(単位mm, g)



第9図 J-1号住居址出土遺物 (12=1:2, 13~15=1:3)

(2) J-2号住居址

遺構 (第10図、図版1)

J-2号住居跡は、か・き-3グリッドにかけて検出された。そのプランの大半は西側の調査区外に逃げているが、隅丸方形の住居であることが察せられる。住居の南半分は、D-9・10・11号土坑を破壊して構築されている。本住居址の東壁側の中央部には二個の礫が配され、ピットがみられた。

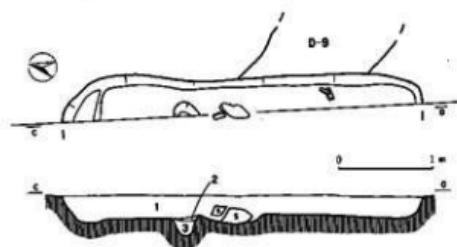
遺物 (第11・12図、図版1)

1は勝坂式土器の胴部破片である。2から4は唐草文系土器ないし佐久系土器であろう。

石器は5～7の打製石斧3本がある。

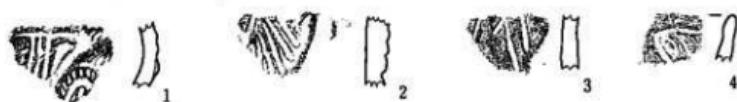
時期

本住居址からの出土遺物はほんのわずかで、縄文時代中期後半であることは理解できるものの、細かな段階をとらえられるような土器は認められなかった。したがって本住居址の所産期は、縄文中期後葉と大枠でとらえておこう。



1. 黒褐色土層 バミス、カーボンを若干含む
2. 粗質褐色土層 ローム粒子を多く含む
3. 暗褐色土層

第10図 J-2号住居址実測図 (1:60)



第11図 J-2号住居址出土土器 (1:4)

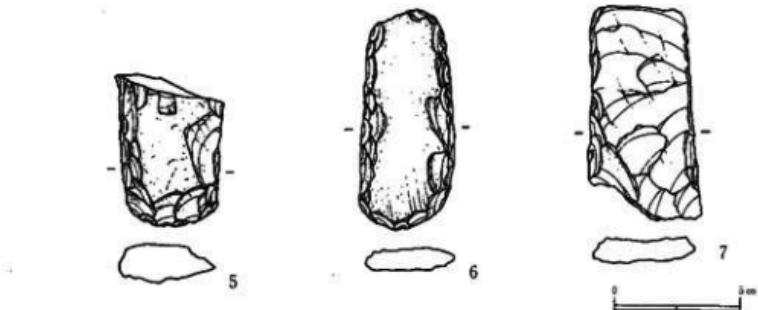
第4表 J-2号住居址出土遺物一覧表(土器)

種類 番号	器種	部位	文様	器形および文様	粘土	色調		焼成	註記	備考
						外面	内面			
1	深鉢	胴上	沈線文、陽帯に刻目	白色粒子	にふい黄褐色 10YR5/3	にふい黄褐色 10YR4/3	通常	覆土		
2	深鉢	胴上	沈線文、陰帯文	白色粒子	灰褐色 5YR5/2	にふい褐色 5YR6/4	通常	覆土		
3	深鉢	胴上	沈線文	白色粒子	灰色 5YR6/6	にふい褐色 5YR6/4	通常	覆土		
4	深鉢	口縁	沈線文		にふい黄褐色 10YR7/4	にふい黄褐色 10YR7/4	通常	覆土		

第5表 J-2号住居址出土遺物一覧表(石器)

種類 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	種類 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
5	打製石斧	真岩 II	79	51	20	126.6		7	打製石斧	真岩 II	110	57	16	125	
6	打製石斧	真岩 II	115	49	13	119.9									

(単位mm、g)



第12図 J-2号住居址出土石器 (1:3)

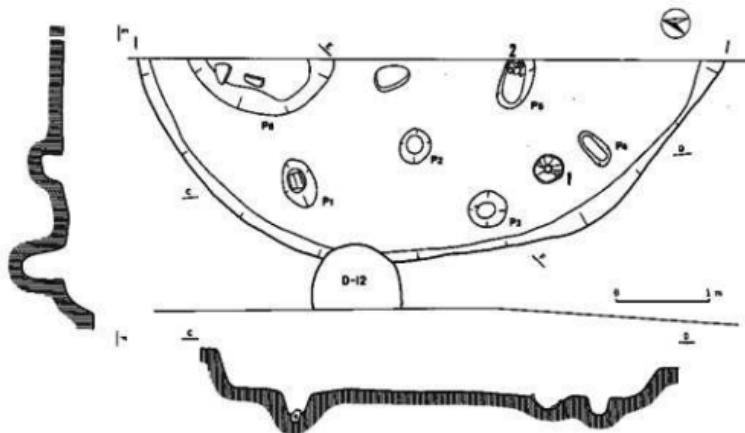
(3) J-3号住居址

遺構 (第13図、図版2)

J-3住居址は、き-4グリッドにかけて検出された。住居址の半分以上は東側の調査区外に逃げてしまっているが、円形のプランを呈するものと思われる。本住居址は現段階においてはP₁～P₅ピット6個を伴うが、P₆は規模から考えて貯蔵穴かとも考えられる。周溝は特に認められなかった。また、本住居址の壁の一部はD-12号土坑によって破壊されている。遺物は、本住居址の壁際から底部の切り取られた無文の浅鉢が床面に埋められていた状態で出土した(第14図)。P₅からは、口縁部に渦巻つなぎ文のみられる加曾利E式の深鉢が出土している。曾利系の土器破片もみられるようである。

遺物 (第14～16図、図版26～28)

3・12・15・17は曾利式土器で、3・12は曾利I式、16・17は曾利II式土器であろう。16は頭



第13図 J-3号住居址実測図 (1:60)

部に隆帯を施し、棒状工具でなぞっている。17は頸部に細い隆帯が貼り付けられている。18と21は、縄文文の上に腕骨状に隆帯がつけられている。18から22まで唐草文系ないし佐久系土器に相当する。

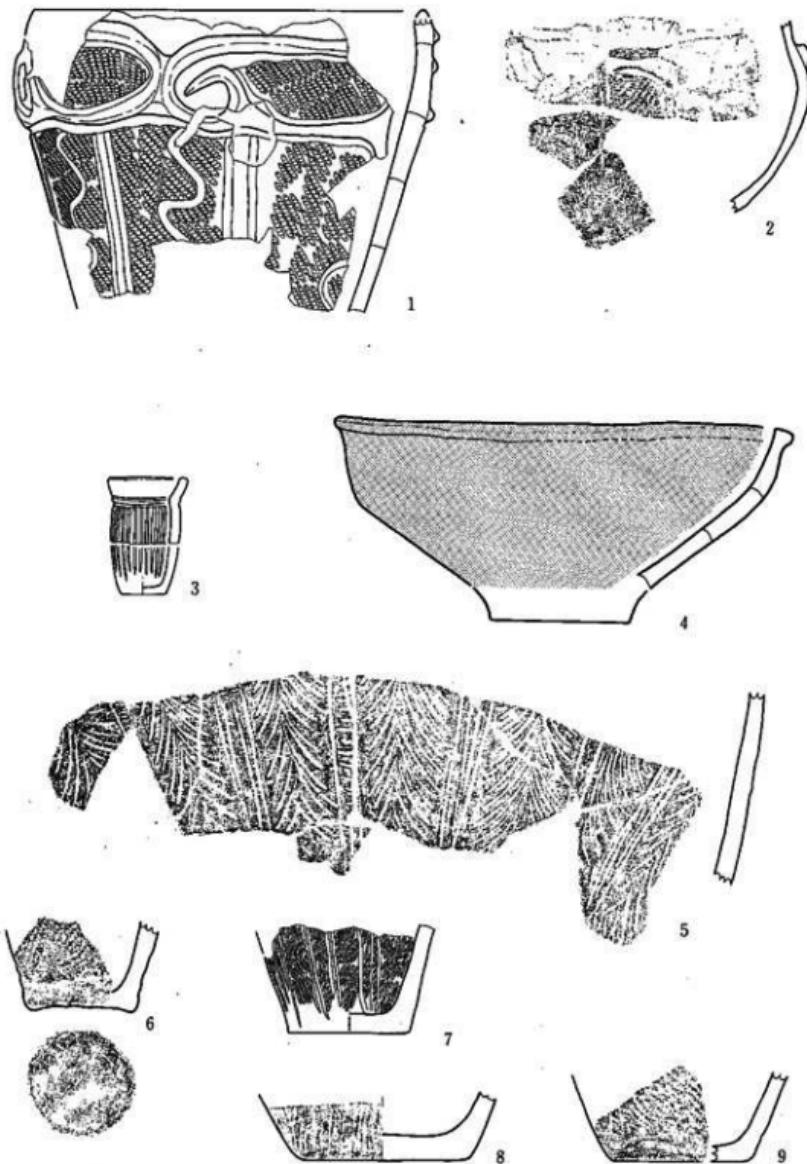
4は加曾利E 2式土器に伴う浅鉢で、内面に赤色塗彩がみられる。23はR L縄文上に棒状工具で、横位あるいは蛇行沈線文が施される。加曾利E 2式に相当しよう。14は隆帯を貼付した後、あまり調整を加えていない点から加曾利E 2式的な特徴を残している。

1・2・7・9・24・26から28は加曾利E 3式土器である。1と26・27は、縄文を施した後に並行沈線文をつけ縄文を擦り消しているが、7と24は縄文を磨り消している点から加曾利E 3式土器でも古手である。27はキャリバー形が崩れたような形で、口縁文様帶をもち、胸部にH状モチーフをもつものであろう。2は、両耳壺の腹部破片で、逆U字の沈線文をもち、27とともに加曾利E 3式でも新しい。29は逆U字沈線文をもち、胴部では縄文を擦り消している点やR L縄文を用いている点で古く、30や31はヘラ状工具で沈線を施し、縄文を転がしていることから新しく考えられるが、ともに加曾利E 4式に含めたい。

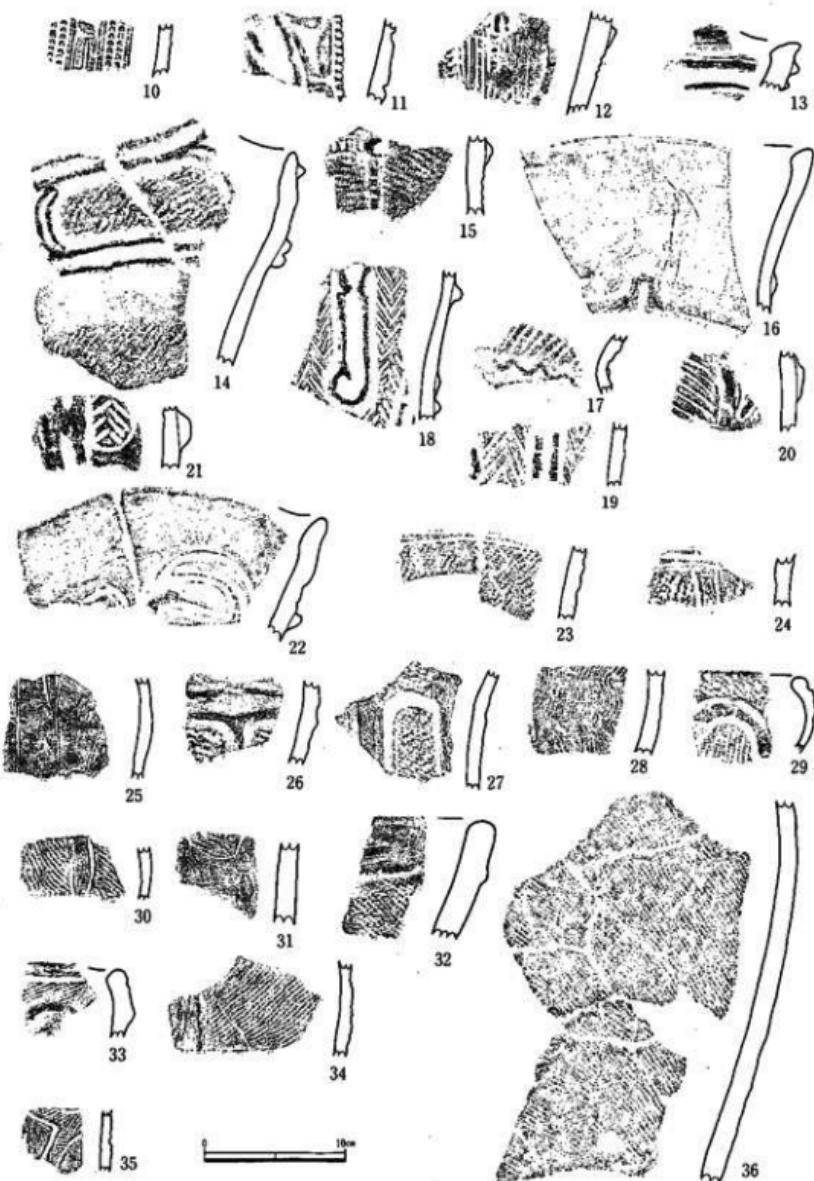
石器には、石鏃(37・38)・石錐(39)・打製石斧(40~43)がある。

時期

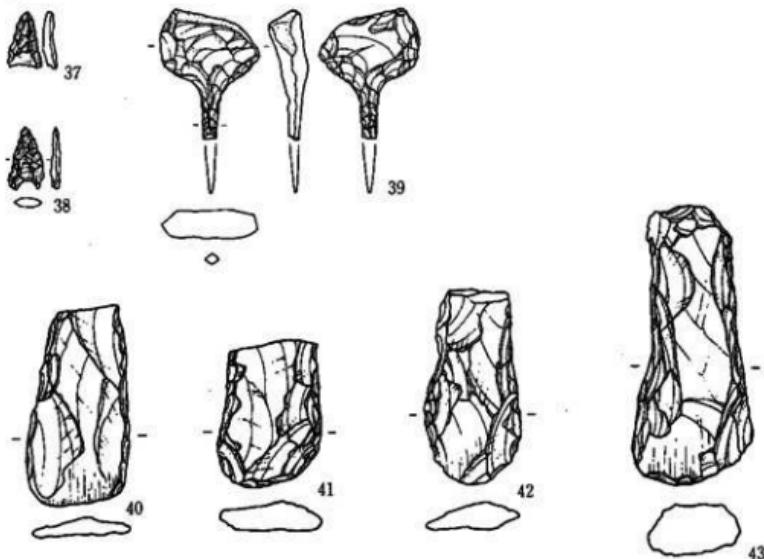
本住居址の所産期は、縄文時代中期後半加曾利E 3式期と考えられる。



第14图 J-3号住居址出土土器 (1:4)



第15圖 J-3號住居址出土土器 (1:4)



第16図 J-3号住居址出土石器 (37~39=1:2, 40~43=1:3)

第6表 J-3号住居址出土遺物一覧表<石器>

種類 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	種類 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
37	石 鋸	グラス質山砂岩	19	11	3	0.7		41	打製石斧	グラス質山砂岩	72	53	16	91	
38	石 鋸	黒曜石	20	11	2	0.6		42	打製石斧	真岩 I	103	50	14	87.8	
39	石 鋸	ナート	42	35	10	13		43	打製石斧	真岩 II	147	63	27	216.8	
40	打製石斧	真岩 II	100	54	12	83.6									(単位mm, g)

第7表 J-3号住居址出土遺物一覧表<土器>

種類 番号	器種	部位	法量	器形および文様	胎土	色調		焼成	註記	備考
						外面	内面			
1	深鉢	口縁 ～胴下	28 (20.5) (20.5)	縹文(RL)、隱縹文、沈縹文	黒雲母	に上い褐色	明赤褐色 5YR5/6	通常	No48	
2	壺	胴 上～下		縹文(RL)、隱縹文、沈縹文	黒雲母	明赤褐色 5YR5/6	暗赤褐色 5YR5/3	通常	セクション ベルト	
3	深鉢	口縁 ～底		沈縹文	白色粒子	褐色 5YR4/1	褐色 5YR4/1	良好	Nヘキ	ミニチュア
4	浅鉢	口縁 ～胴下	32 (13.5) (9.5)	無文	白色粒子	に上い黄褐色 10YR7/3	灰青褐色 10YR6/2	良好	No49	
5	深鉢	胴下		縹文	黒雲母	に上い褐色 5YR6/4	橙色 5YR6/6	通常	No25.33.46 き4	
6	深鉢	胴下 ～底	7.5	縹文(RL)	白色粒子	に上い赤褐色 2.5YR5/4	灰褐色 5YR5/2	通常	セクション ベルト	

第8表 J-3号住居出土遺物一覧表〈土器〉

件名 番号	器種	部位	法長	器形および文様	胎土	色調		地成	註記	備考
						外面	内面			
7	深鉢	胴下 ～底	— 8.5	純文 (RL)、沈縞文	風化岩片	によい褐色 5YR6/4	灰褐色 5YR5/2	通常	No37.42	
8	深鉢	胴下 ～底	— 12	無文？	黒雲母	褐色 5YR6/6	によい褐色 5YR7/3	通常	No35	
9	深鉢	胴下 ～底	— 6	純文 (RL)、沈縞文	黒雲母	褐色 5YR6/6	灰褐色 7.5YR4/2	通常		
10	深鉢	胴下		沈縞文、爪彫文	白色粒子	灰褐色 5YR4/2	黒褐色 5YR2/1	通常	板土	
11	深鉢	胴下		沈縞文、縁帶上に刻目、三叉文	黒雲母	によい赤褐色 2.5YR5/4	によい赤褐色 2.5YR4/3	良好	(D-10)	
12	深鉢	胴上		沈縞文、縁帶上に刻目	風化岩片	灰褐色 5YR4/2	によい赤褐色 5YR4/3	通常	板土	
13	深鉢	口縁		純文 (一)、陰縞文	風化岩片	によい赤褐色 5YR4/3	によい赤褐色 5YR4/3	通常	No18	
14	深鉢	口縁		純文 (RL)、陰縞文	黒雲母	暗赤褐色 5YR3/2	暗赤褐色 5YR3/4	通常	No3.	
15	深鉢	胴上		純文 (RL)、陰縞文		灰褐色 5YR5/2	灰褐色 5YR5/2	通常		
16	深鉢	口縁		陰縞文、沈縞文	白色粒子	暗褐色 10YR3/3	によい黄褐色 10YR4/3	通常	No43	
17	深鉢	胴上		沈縞文、陰縞文	白色粒子	灰黃褐色 10YR5/2	によい黄褐色 10YR7/4	通常		
18	深鉢	胴下		絞杉文、陰縞文		によい褐色 5YR6/4	暗赤褐色 5YR3/2	通常	No30	
19	深鉢	胴下		絞杉文、陰縞文	白色粒子	明赤褐色 5YR5/6	灰褐色 5YR4/2	通常	No 2	
20	深鉢	胴上		沈縞文	風化岩片	褐色 5YR6/6	によい赤褐色 5YR5/4	通常	No23	
21	深鉢	胴上		沈縞文、陰縞文	黒雲母多量	によい赤褐色 2.5YR5/4	暗赤褐色 5YR3/2	通常	No26	
22	深鉢	胴上		沈縞文	白色粒子	によい褐色 7.5YR5/4	明赤褐色 5YR5/6	通常	P.3	
23	深鉢	胴上		純文 (RL)、沈縞文	黒雲母	によい赤褐色 5YR6/4	灰褐色 5YR4/2	通常	板土	
24	深鉢	胴上		純文 (RL)、沈縞文		暗灰色 2.5YR3/1	によい赤褐色 2.5YR4/6	通常	No 6	
25	深鉢	胴上		沈縞文		によい褐色 5YR6/4	によい褐色 5YR6/3	通常	西へキ	
26	深鉢	胴上		純文 (RL?)、沈縞文、陰縞文		によい黄褐色 10YR6/4	によい黄褐色 10YR7/3	通常		
27	深鉢	胴下		純文 (RLR)、沈縞文	白色粒子	によい褐色 7.5YR5/3	によい黄褐色 10YR7/3	通常	板土	
28	深鉢	胴下		条縞文		によい褐色 5YR6/4	によい黄褐色 10YR7/3	通常	西へキ	
29	深鉢	口縁		純文 (RL)、逆U字沈縞文	白色粒子	灰褐色 5YR4/2	によい赤褐色 5YR4/3	通常	セクション ベルト	
30	深鉢	胴上		純文 (LR)、沈縞文	黒雲母	墨褐色 5YR3/1	暗赤褐色 5YR3/3	通常	D-10	

第9表 J-3号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

辨別 番号	器種	部位	法量	器形および文様	胎土	色調		焼成	註記	備考
						外面	内面			
31	深鉢	胴上		縄文(LR)、沈線文	白色粒子	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい褐色 7.5YR7/3	通常	(D-10)	
32	深鉢	口縁		縄文(LR)、縦條起文	白色粒子	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/3	良好	No38	
33	深鉢	口縁		縄文(LR)、縦條起文 沈線文	白色粒子	にぶい赤褐色 5YR8/4	灰褐色 5YR4/2	良好		
34	深鉢	胴上		縄文(LR)、縦條起文	白色粒子	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR6/3	良好	西ヘキ	
35	深鉢	胴上		縄文(LR)、沈線文	白色粒子	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR7/3	通常	覆土	
36	深鉢	胴上		縄文(LR)	風化岩片	にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい黄褐色 10YR7/4	通常	No33	

(4) J-4号住居址

遺構(第17図)

J-4号住居址の検出された、く・け・こ・さ・-4・5グリッド付近は、縄文時代中期後葉の住居5軒が著しく重複する地点で、その前後関係の把握は困難を極めた。この地区において重複する住居址は、J-4・J-5・J-6・J-7・J-8のそれぞれである。これらについて、セクションやプラン確認などによって判断された切り合い関係より、住居址の新旧関係は古いものより順に、 $J-4 \rightarrow J-8 \rightarrow J-7 \rightarrow J-6 \rightarrow J-5$ となる。また、その南側はJ-3にも切られている。したがって、本住居址はJ-8と並んで、これらの住居址の中で最も古いものということになる。ただし、本住居址とJ-8との新旧関係は不明である。J-4のプランは、そうした激しい切り合いのため、わずかにその南壁のプランと、ピットが6個($P_1 \sim P_6$)が検出されたにすぎなかった。

遺物(第18~23図、図版28~31・60・63・64)

1から4・24から36は加曾利E 3式土器である。1は、胴部下半から口縁にかけてほぼ直線的に開く器形で、地文が沈線文であることから唐草文系土器あるいは佐久系土器の影響がみられる。文様構成には加曾利E 3式土器にみられる特徴がある。同様に、3も両耳壺であるが、地文が縄文ではなく沈線文であることから、在地の影響をうけたものか。2は、口縁部と胴部に円形刺突文のある隆帯が巡らされている。4と24・25・27・29・32・33は4単位の波状口縁をもつ土器で、胴部に磨り消し縄文が施されている。

6と7は釣手土器の破片で、同一個体である。8は浅鉢形土器で、加曾利E 2式土器に伴うものであろうか。

9から20・23は唐草文系土器ないし佐久系土器であろう。16は第7図1と同じ特徴をもつもの

であろう。20は、佐久系土器にみられる鱗文がみられる。10と11は加曾利E 3式土器のような文様構成を持つ可能性がある土器で、綾杉文を地文とし並行沈線文が施される。

21は曾利III式土器の胴部破片で沈線文上に隆帯が貼られ刻目が施される。

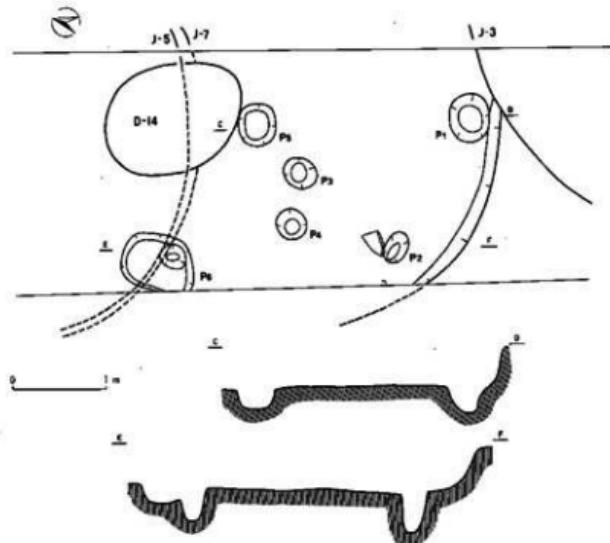
36は口縁部文様帶をもつ両耳壺の胴部破片で、隆帯は幅があるが微隆起文につながるものであろう。加曾利E 3式でも新しい。

37から61まで加曾利E 4式土器である。このうち、37から45はヘラもしくは幅の狭い棒状工具で沈線文を施し、LR縄文が付されている。45は波状口縁をもち、微隆起文が口縁部にみられる。46から61は微隆起文が施される土器で、器形も胴部から口縁部にかけて直線的に開くものが多いが、52と58は胴部中頃で、括れをもつ器形である。61も胴部に括れをもつ器形である可能性があり、微隆起文による渦巻き文がみられる。

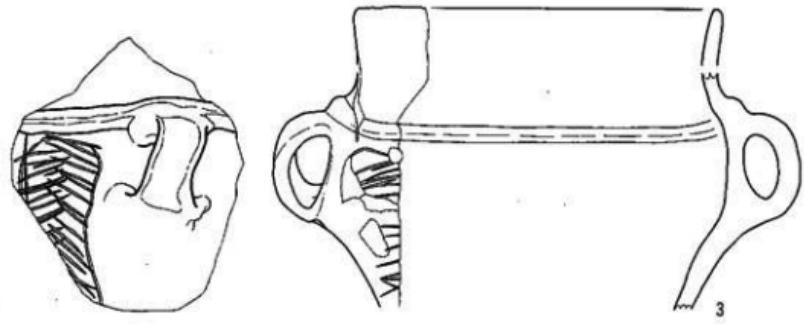
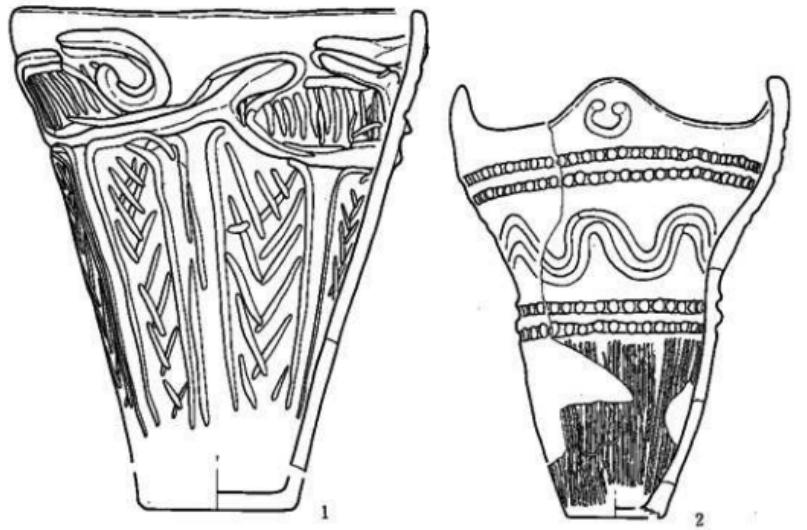
石器には、石鎌(62~64)・石錐(65)・楔形石器(66)・打製石斧(67~71)・軽石皿状製品(72)・多孔石(73)がある。

時期

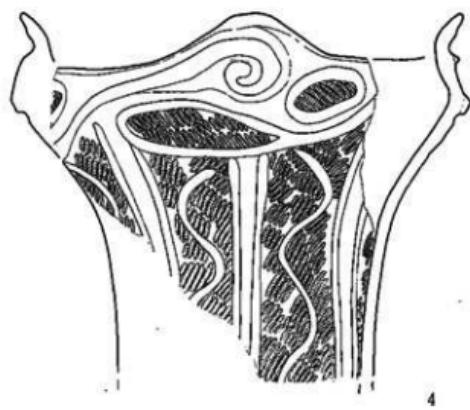
本住居址の所産期は、縄文時代中期後葉加曾利E 3式期と考えられる。



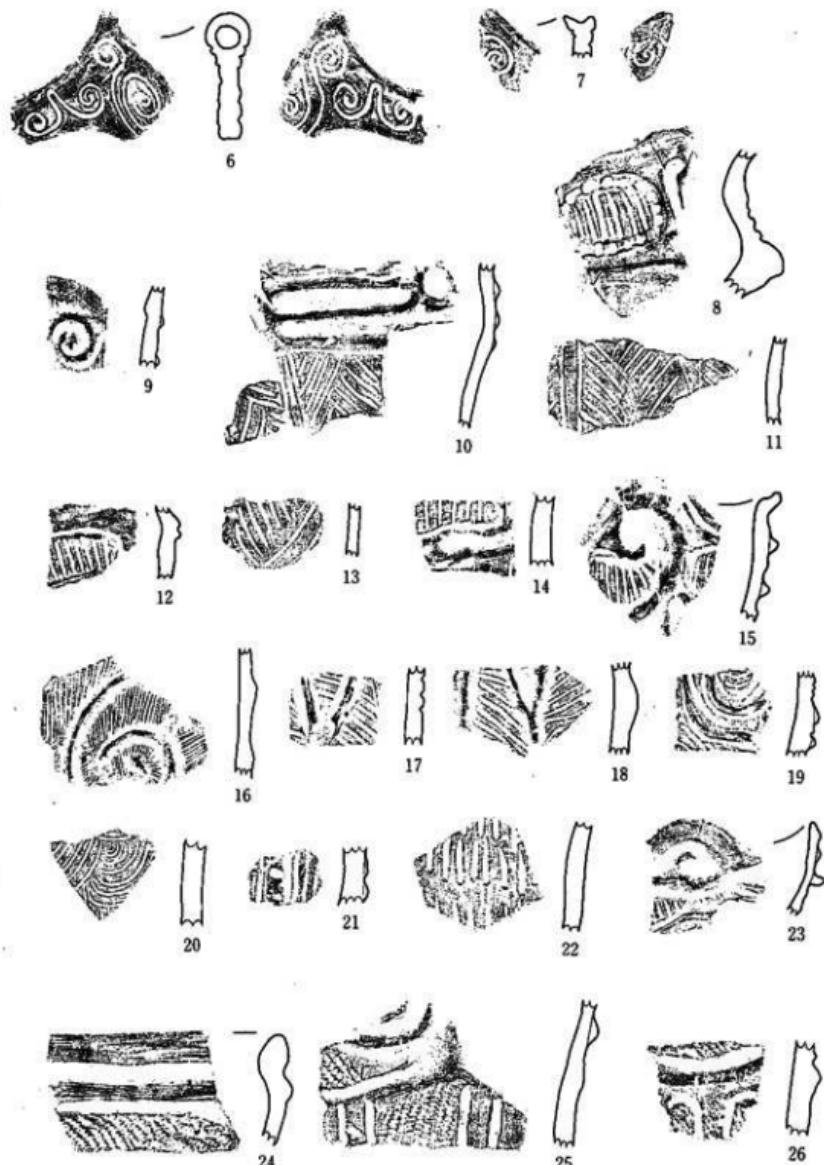
第17図 J-4号住居址実測図 (1:60)



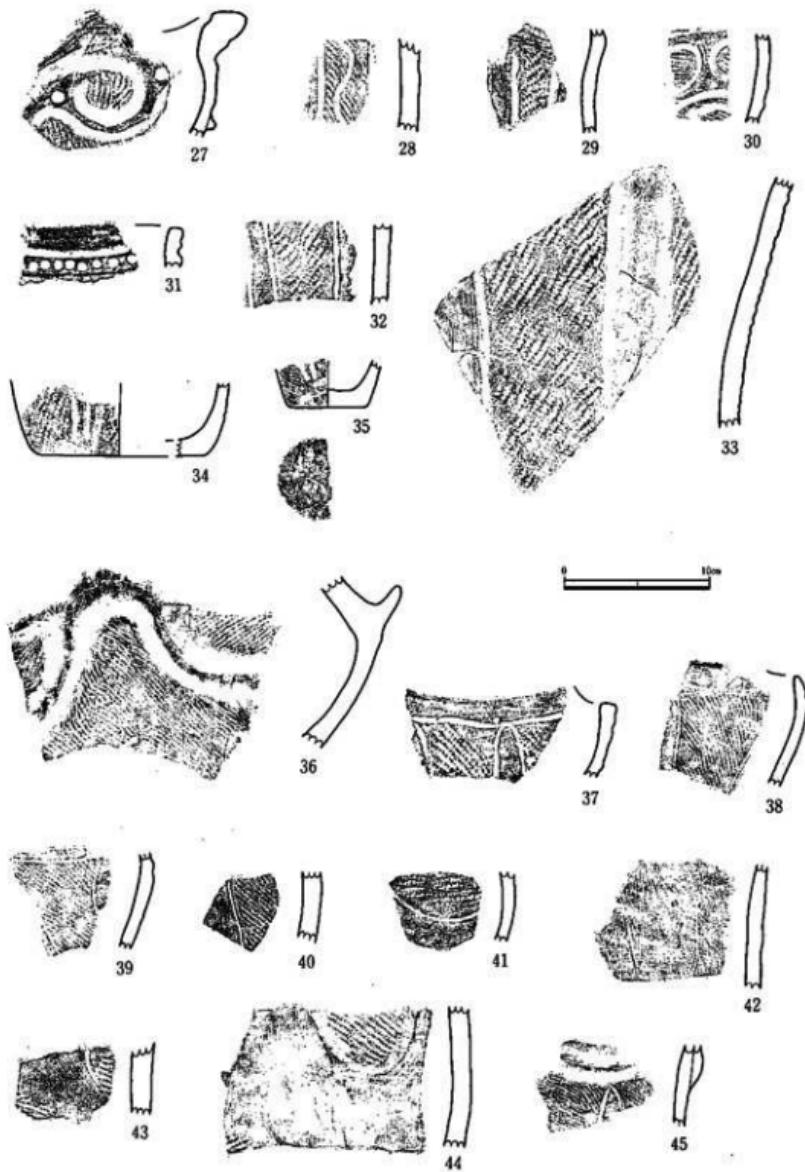
第18図 J-4号住居址出土土器 (1:4)



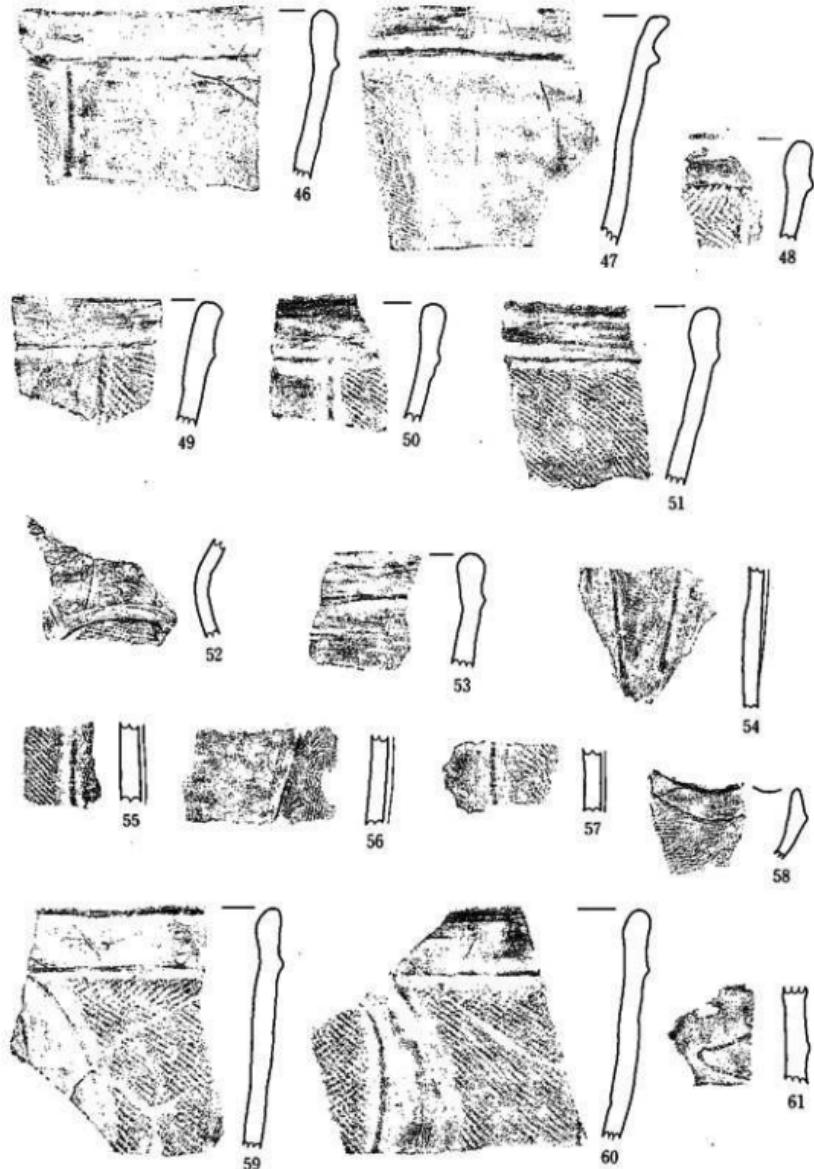
第19圖 J-4号住居址出土土器 (1:4)



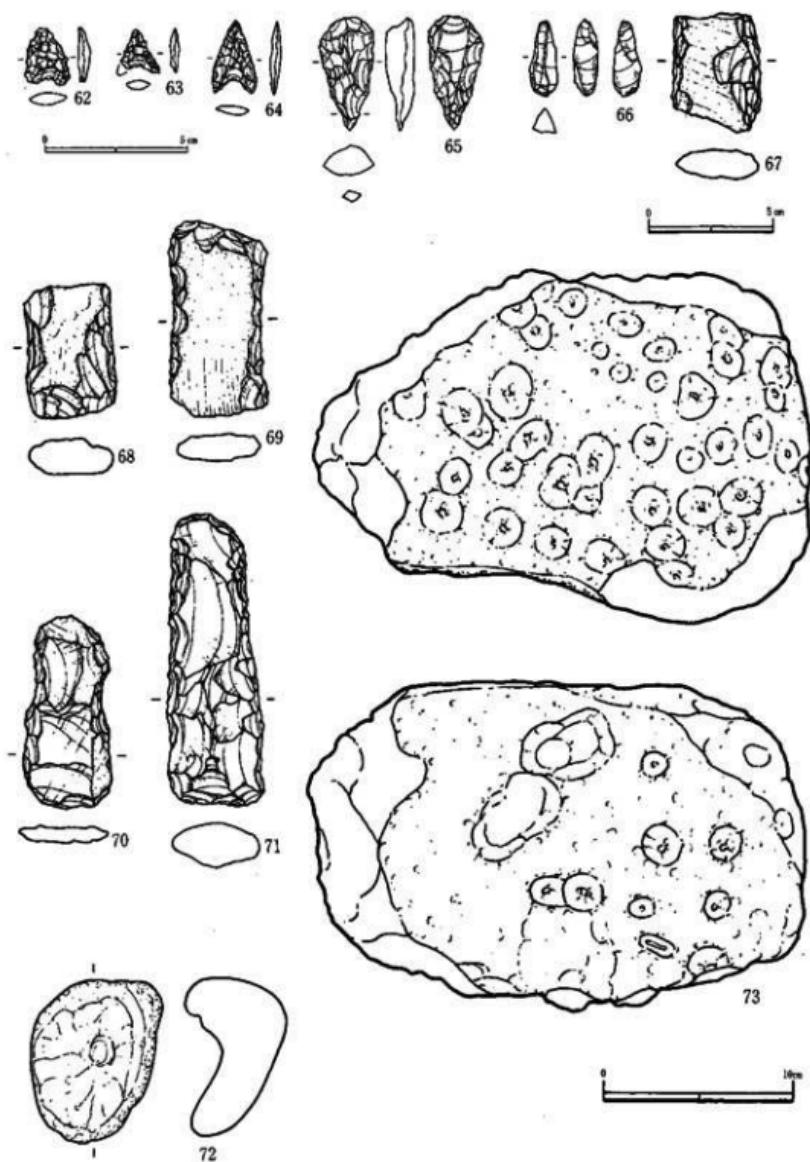
第20図 J-4号住居址出土土器 (1:4)



第21圖 J-4號住居址出土土器 (1:4)



第22圖 J-4號住居址出土土器 (1 : 4)



第23図 J-4号住居址出土石器 (62~66=1:2, 67~73=1:3)

第10表 J-4号住居址出土遺物一覧表(土器)

件名 番号	器種	部位	法量	器形および文様	胎土	色調		焼成	註記	備考
						外面	内面			
1 深鉢	口縁 ～胴下	29 (34.5) (11)	絞杉文、沈緑文			にぶい橙色 5YR6/4	にぶい黄褐色 10YR7/3	通常	No298	
2 深鉢	口縁 ～胴下	23.5 (30.5) (7)	糸紋文、沈緑文、円形刺突 文	白色粒子		にぶい赤褐色 2.5YR5/4	にぶい赤褐色 2.5YR5/4	良好	No24.209.26	
3 鉢	口縁 ～胴下	26 —	絞杉文、隆起横文	風化岩石		にぶい橙色 5YR6/4	にぶい橙色 5YR6/4	通常	No15.18	
4 深鉢	口縁 ～胴下		純文(RL)、沈緑文	角閃石		にぶい赤褐色 5YR5/4	橙色 5YR6/6	通常	No212	
6 純手土器	—		渦巻文	黒苔母		にぶい黄褐色 10YR5/3	にぶい黄褐色 10YR4/3	通常	No219	7と同一個体
7 純手土器	—		渦巻文	黒苔母		黒褐色 10YR3/1	黒褐色 10YR3/1	通常	南	6と同一個体
8 洗鉢?	胴上		沈緑文	黒苔母		灰褐色 7.5YR6/2	にぶい褐色 7.5YR6/3	良好	No217	
9 深鉢	口縁		隆帯文	白色粒子		黒褐色 7.5YR3/2	灰褐色 7.5YR4/2	通常	No18	
10 深鉢	胴上		絞杉文、隆帯文			にぶい黄褐色 10YR6/4	にぶい黄褐色 10YR7/2	通常	No218	
11 深鉢	胴上		絞杉文	角閃石		にぶい橙色 7.5YR6/4	にぶい黄褐色 10YR7/2	通常	No218	
12 深鉢	胴上		沈緑文			にぶい橙色 7.5YR7/4	にぶい橙色 5YR6/4	通常	S	
13 深鉢	胴上		沈緑文	角閃石		にぶい赤褐色 5YR5/4	にぶい赤褐色 5YR5/3	通常	S	
14 深鉢	胴上		沈緑文	角閃石		にぶい褐色 7.5YR6/3	にぶい褐色 7.5YR5/3	通常		
15 深鉢	口縁		沈緑文、隆帯文	白色粒子		にぶい橙色 5YR6/4	暗赤褐色 5YR3/3	通常		
16 深鉢	胴上		沈緑文、隆帯文	角閃石		にぶい赤褐色 5YR5/4	にぶい褐色 5YR6/3	通常		
17 深鉢	胴上		沈緑文、隆帯文	角閃石		にぶい褐色 7.5YR5/4	にぶい褐色 7.5YR5/4	通常		
18 深鉢	胴上		沈緑文、隆帯文	角閃石		にぶい赤褐色 5YR5/3	にぶい赤褐色 5YR5/3	通常		
19 深鉢	胴上		沈緑文、隆帯文	角閃石		灰褐色 10YR6/2	にぶい黄褐色 10YR6/3	通常		
20 深鉢	胴上		沈緑文	角閃石		灰褐色 10YR6/2	灰褐色 5YR4/1	通常		
21 深鉢	胴上		沈緑文、隆帯上に刻目	白色粒子		にぶい赤褐色 5YR5/4	にぶい赤褐色 5YR5/4	通常	S	
22 深鉢	胴上		レ点文	角閃石		にぶい橙色 7.5YR7/3	にぶい黄褐色 10YR6/3	通常	南	
23 深鉢	胴上		レ点文、隆帯文	白色粒子		にぶい橙色 5YR6/4	灰褐色 7.5YR4/2	通常		
24 深鉢	口縁		純文(RL)、隆帯文	角閃石		にぶい黄褐色 10YR6/3	にぶい黄褐色 10YR7/3	良好	No297	
25 深鉢	胴上		純文(RL)、隆帯文	白色粒子		にぶい橙色 7.5YR6/4	暗色 7.5YR7/6	通常	No.5	

第II表 J-4号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

持因 番号	器種	部位	法量	器形および文様	胎土	色調		焼成	註記	備考
						外面	内面			
26	深鉢	胴		縦文(RL)、陰線文	風化岩片	にぼい褐色 5YR6/3	にぼい赤褐色 5YR5/4	不良		
27	深鉢	胴		縦文(RL)、陰線文、円形刺突文	角 間 石	にぼい褐色 5YR6/3	にぼい赤褐色 5YR5/3	良好	南	
28	深鉢	胴		縦文(RL)、沈線文	角 間 石	にぼい褐色 5YR6/4	にぼい赤褐色 5YR5/3	通常	南	
29	深鉢	胴		縦文(RL)、沈線文	角 間 石	褐灰色 5YR4/1	黒褐色 5YR2/1	通常		
30	深鉢	胴 下		縦文(RL)、沈線文	白色粒子	にぼい褐色 7.5YR6/3	灰褐色 7.5YR6/2	良好	南	
31	深鉢	胴 上		沈線文、円形刺突文	黒 雪 母	にぼい黄褐色 10YR7/3	にぼい褐色 7.5YR5/3	通常	S	
32	深鉢	胴 下		縦文(RL)、沈線文	白色粒子	灰褐色 7.5YR5/2	明褐色 7.5YR7/2	通常	南	
33	深鉢	口 線		縦文(RL)、沈線文	角 間 石	褐色 5YR6/6	褐色 7.5YR6/6	通常	南	
34	深鉢	胴 下底 ~ 9		縦文(RL)、沈線文	角 間 石	灰褐色 7.5YR5/2	灰褐色 7.5YR5/2	通常	南	
35	深鉢	胴 下底 ~ 5.5		縦文(RL)、沈線文	白色粒子	にぼい赤褐色 2.5YR5/4	にぼい赤褐色 2.5YR4/3	通常	No.26	
36	盃	胴 下底		縦文(RL)、陰線文	角 間 石	にぼい褐色 7.5YR6/4	にぼい褐色 7.5YR6/4	通常	No.15	
37	深鉢	口 線		縦文(LR)、沈線文	角 間 石	灰黃褐色 10YR5/2	灰黃褐色 10YR6/2	通常	No.17	
38	深鉢	口 線		縦文(LR)、沈線文	角 間 石	にぼい赤褐色 5YR5/3	にぼい褐色 7.5YR5/3	通常	No.2	
39	深鉢	胴 上		縦文(LR)、沈線文	白色粒子	にぼい褐色 5YR6/4	灰褐色 5YR4/2	通常	No.8	
40	深鉢	胴 上		縦文(LR)、沈線文	角 間 石	にぼい黄褐色 10YR6/3	にぼい黄褐色 10YR6/3	良好		
41	深鉢	胴 上		縦文(LR)、沈線文	角 間 石	灰褐色 5YR4/2	灰褐色 5YR4/2	通常	南	
42	深鉢	胴 上		沈線文	白色粒子	にぼい褐色 5YR6/3	にぼい褐色 7.5YR6/3	通常		
43	深鉢	胴 上		縦文LR、沈線文	角 間 石	にぼい褐色 5YR6/4	にぼい褐色 5YR6/4	通常	S	
44	深鉢	胴 上		縦文LR、沈線文	角 間 石	にぼい褐色 7.5YR7/3	褐色 5YR6/6	通常	No.20	
45	深鉢	胴 上		縦文LR、沈線文、陰帶文	角 間 石	にぼい褐色 5YR6/4	にぼい黄褐色 10YR6/3	通常		
46	深鉢	口 線		縦文(LR)、微隆起文	角 間 石	にぼい黄褐色 10YR7/3	にぼい黄褐色 10YR7/4	良好	No.6	
47	深鉢	口 線		縦文(LR)、微隆起文、沈線文	角 間 石	にぼい黄褐色 10YR6/3	にぼい黄褐色 10YR6/3	良好	南	
48	深鉢	口 線		縦文(LR)、微隆起文	角 間 石	にぼい褐色 7.5YR5/3	灰褐色 7.5YR4/2	通常		
49	深鉢	口 線		縦文(LR)、微隆起文	風化岩片	にぼい赤褐色 5YR5/3	にぼい褐色 5YR6/4	良好	南	

第12表 J-4号住居出土遺物一覧表〈土器〉

博物館番号	器種	部位	法量	器形および文様	胎土	色調		焼成	記述	備考
						外面	内面			
50	深鉢	口縁		縄文 (LR)、微隆起文	角閃石	にぼい褐色 7.5YR5/3	灰褐色 7.5YR4/3	良好		
51	深鉢	口縁		縄文 (LR)、微隆起文	角閃石	にぼい黄褐色 10YR6/4	にぼい黄褐色 10YR6/4	良好	No.15	
52	深鉢	胴上		縄文 (LR)、微隆起文	風化岩石	にぼい橙色 7.5YR6/4	灰黃褐色 10YR5/2	通常	南	
53	深鉢	口縁		縄文 (LR)、微隆起文	風化岩石	にぼい黄褐色 10YR6/4	にぼい黄褐色 10YR4/3	良好	S	
54	深鉢	胴下		縄文 (LR)、微隆起文	角閃石	にぼい橙色 5YR6/4	にぼい褐色 7.5YR5/4	通常	No.24	
55	深鉢	胴下		縄文 (LR)、微隆起文	角閃石	にぼい黄褐色 10YR5/3	にぼい褐色 7.5YR5/3	通常	No.15	
56	深鉢	胴上		縄文 (LR)、微隆起文	角閃石	にぼい橙色 5YR6/3	にぼい褐色 5YR6/3	通常		
57	深鉢	胴上		縄文 (LR)、微隆起文	白色粒子	明赤褐色 2.5YR5/6	にぼい黄褐色 10YR6/3	通常		
58	深鉢	口縁		縄文 (LR)、微隆起文	黒雲母	にぼい赤褐色 5YR5/3	にぼい赤褐色 5YR5/3	通常		
59	深鉢	口縁		縄文 (LR)、微隆起文	角閃石	褐色 7.5YR6/6	にぼい黄褐色 10YR7/3	通常	No.3.21	
60	深鉢	口縁		縄文 (LR)、微隆起文	角閃石	にぼい橙色 5YR6/4	にぼい褐色 5YR6/4	通常	No.20.23	
61	深鉢	胴上		微隆起文	角閃石	褐色 7.5YR6/6	にぼい褐色 7.5YR6/3	通常	南	

第13表 J-4号住居出土遺物一覧表〈石器〉

博物館番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	博物館番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
62	石鋸	黒曜石	18	15	4	0.9		68	打製石斧	頁岩 II	68	46	19	88.9	
63	石鋸	黒曜石	13	12	3	0.4		69	打製石斧	頁岩 II	101	50	14	121.2	
64	石鋸	黒曜石	22	14	3	0.9		70	打製石斧	頁岩 I	102	46	11	64.1	
65	石鋸	チャート	37	18	10	7		71	打製石斧	頁岩 II	155	50	23	207.3	
66	複形石器	黒曜石	25	8	7	1.7		72	圓状製品	鵝石	87	67	55	70.2	
67	打製石斧	頁岩 II	62	46	16	65.9		73	多孔石	安山岩	171	260	181	10400	

(単位mm, g)

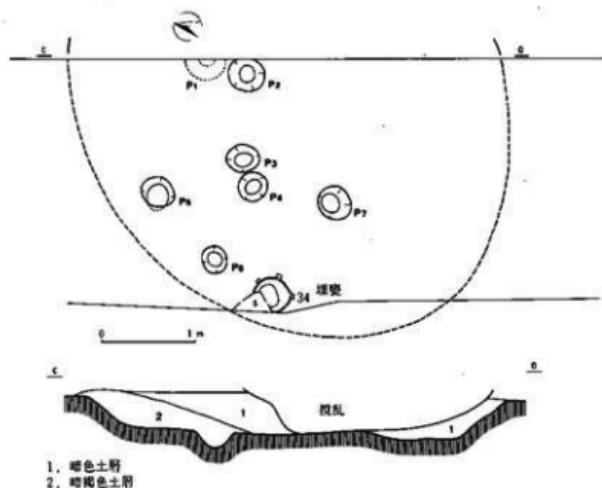
(5) J-5号住居址

遺構（第24図、図版2）

J-5号住居址は、J-4の項で示したように、(古) J-4 > J-8 > J-7 > J-6 > J-5(新)という新旧関係の中で把握されるもので、これらの中では最も新しい住居址と考えられる。その床面も、J-4、J-8の床面より20cm前後上に設けられている。本住居址のプランは明確にとるのは難しかったが、円形あるいは椭円形のプランを想定できようか。本住居址に付随するピットは、一応P₁～P₇としたが、特にP₂～P₇の確認面はJ-5の床面より下のローム層面であり、本住居址に伴うものであるかどうか明確でない。本住居址からは、その西壁付近と考えられる場所より埋甕(34)が検出された。この埋甕は、下半部の切断された加曾利E式の深体で、倒置され、石蓋がなされていた。埋甕の上面と、本住居址の床面のレベルは一致し、他にこのレベル床面をもつ住居址が存在しないため、この埋甕は本住居址に伴うものとしてとらえてよい。

遺物（第25・26図、図版32・60～64）

1と3・13から15は両耳壺であろう。13と14は隆起線文で、14は椭円区画内に縄文を充填させ、胴部には条線文が施されている。11も胴部上半分あるいは口縁部に縄文が、胴部以下は条線文がみられる。15は橋状把手で、L R縄文が付されている。1も同様に把手にL R縄文がみられる。11と13・34は加曾利E 3式土器、14と15は加曾利E 4式土器であろう。3は、地文に縄文と沈線文が交互に施される土器で、口縁部と胴部が区画される部分に隆帯が巡り刺突がつけられている。



第24図 J-5号住居址実測図 (1:60)

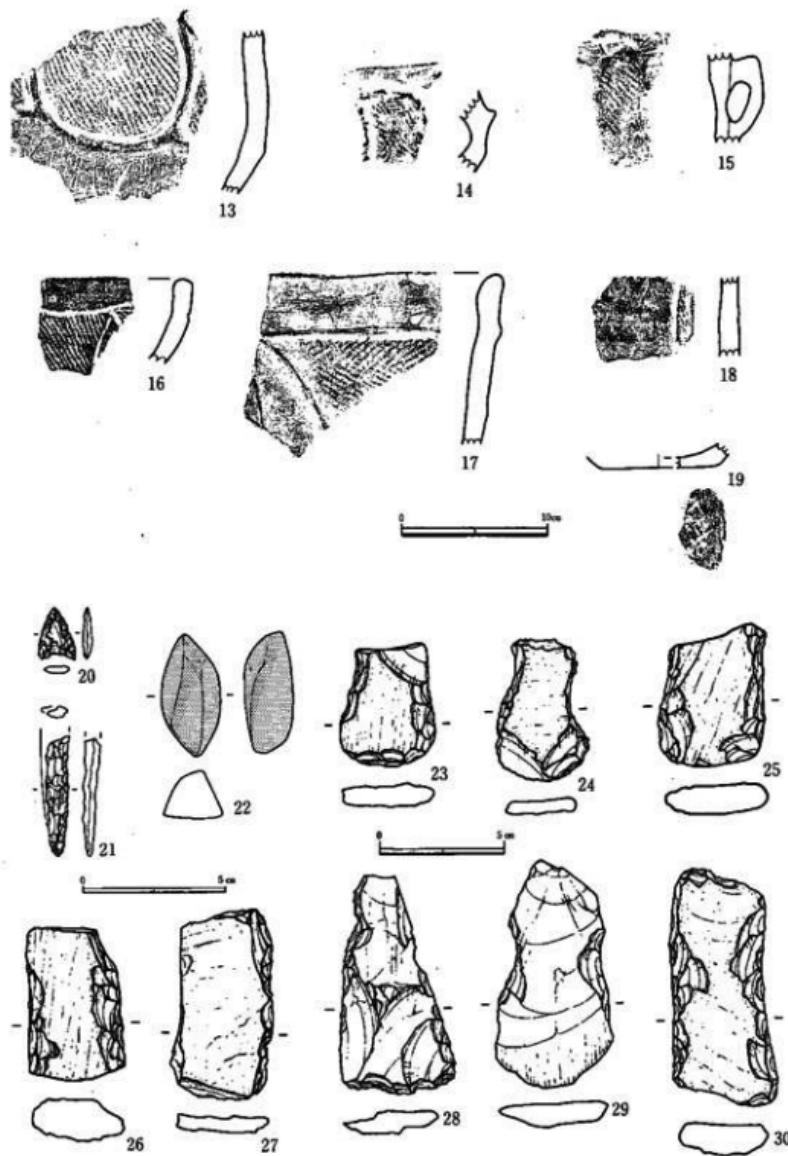
5・7・8には、蘇手文がみられる。7と8はRL縄文が地文となっている。いずれも加曾利E式土器である。石器には、石鎌(20)・石錐(21)・打製石斧(23~31)・石皿(32・33)がある。

時期

本住居址の所産期は、2・3・34の土器より縄文時代中期後半加曾利E3式期と考えられる。



第25図 J-5号住居址出土土器 (1:4)



第26図 J-5号住居址出土遺物（土器1：4・石器20~22=1：2, 23~30=1：3）

第14表 J-5号住居址出土遺物一覧表(土器)

種類 番号	器種	部位	法盤	器形および文様	胎土	色調		焼成	註記	備考
						外面	内面			
1	壺	胴上	-	縦文(RL)、微隆起文	角閃石	にじい褐色 7.5YR6/3	にじい黄褐色 10YR7/3	通常	EWトレ	把手
2	深鉢	胴下 底 10.5	-	縦移文、微隆起文	角閃石	にじい褐色 7.5YR6/4	にじい黄褐色 7.5YR7/3	通常	No.4, 5, 7 3層	
3	盃	胴下 底 (23) - -	(23)	縦文(RL)、沈縦文、隆帶上 に割目	風化岩石片	にじい褐色 7.5YR6/4	にじい黄褐色 10YR6/3	通常	西	
4	深鉢	胴上	-	沈縦文	角閃石	灰黃褐色 10YR6/2	灰黃褐色 10YR6/2	通常		
5	深鉢	胴上	-	沈縦文	風化岩石片	灰黃褐色 10YR6/2	にじい黄褐色 10YR6/3	通常	3層	
6	深鉢	胴上	-	縦文(RL)、隆縦文	風化岩石片	にじい褐色 7.5YR6/3	灰黃褐色 10YR6/2	良好		
7	深鉢	口縁	-	縦文(RL)、隆縦文、沈縦文	角閃石	にじい褐色 7.5YR6/3	にじい黄褐色 10YR6/3	良好		
8	深鉢	口縁	-	縦文(RL)、隆縦文、沈縦文	黑雲母	にじい褐色 7.5YR6/4	灰褐色 7.5YR4/2	通常	南区	
9	深鉢	胴上	-	縦文(RL)、沈縦文	風化岩石片	にじい褐色 5YR6/4	にじい黄褐色 10YR6/3	通常		
10	深鉢	胴下	-	縦文(LR?)、沈縦文	角閃石	褐色 5YR4/1	にじい褐色 5YR6/3	通常	南区	
11	深鉢	胴上	-	縦文(RL)、条縦文、隆縦文	風化岩石片	灰褐色 7.5YR6/2	にじい黄褐色 10YR7/3	通常		
12	深鉢	口縁	-	-	角閃石	にじい褐色 10YR7/3	にじい黄褐色 10YR7/4	良好	南区	
13	深鉢	胴上	-	縦文(RL)、条縦文、隆縦文	角閃石	にじい褐色 10YR6/3	にじい黄褐色 10YR6/3	通常		
14	壺	胴上	-	縦文(LR)、微隆起文	角閃石	にじい褐色 7.5YR7/3	灰褐色 7.5YR6/2	通常	EWトレ	
15	壺	胴上	-	縦文(LR)、微隆起文	風化岩石片	にじい褐色 7.5YR6/4	にじい黄褐色 7.5YR6/3	通常	EWトレ	把手
16	深鉢	口縁	-	縦文(LR)、沈縦文	角閃石	にじい褐色 7.5YR5/3	にじい褐色 7.5YR5/4	通常		
17	深鉢	口縁	-	縦文(LR)、微隆起文	角閃石	にじい褐色 10YR6/3	にじい黄褐色 10YR7/3	良好	No.20	
18	深鉢	胴上	-	縦文(LR)、微隆起文	風化岩石片	にじい褐色 5YR5/3	にじい褐色 7.5YR5/3	通常	EWトレ	
34	深鉢	口縁 -胴上 38.0 -	2	縦文(RL)、沈縦文	-	にじい褐色 10YR7/3	にじい黄褐色 10YR7/3	通常	No.206	

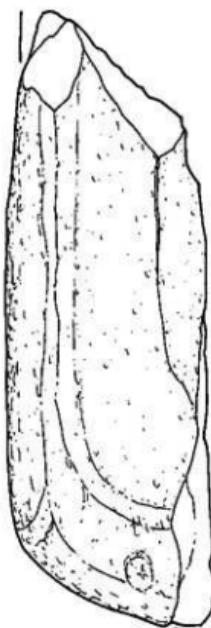
第15表 J-5号住居址出土遺物一覧表(石器)

種類 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	種類 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
20	石錐	黒曜石	16	13	2	0.4		27	打製石斧	真岩 II	100	50	9	79.8	
21	石錐	硬質頁岩	42	8	4	1.2		28	打製石斧	真岩 II	116	59	12	71.6	
22	石製品	粘板岩	40	20	16	17.9	金剛石磨削不規則	29	打製石斧	真岩 I	118	61	14	127.7	
23	打製石斧	真岩 II	62	51	13	59.9		30	打製石斧	真岩 II	125	53	18	176.1	
24	打製石斧	真岩 II	75	50	8	34.6		31	打製石斧	真岩 II	139	61	12	147.1	
25	打製石斧	真岩 II	72	56	16	109.5		32	石頭	綠泥片岩	316	102	70	3100	
26	打製石斧	真岩 II	79	50	24	157		33	石頭	綠泥片岩	125	44	26	240.7	

(単位mm, g)



31



32



33



34

第27図 J-5号住居址出土土器・石器 (1:4, 1:3)

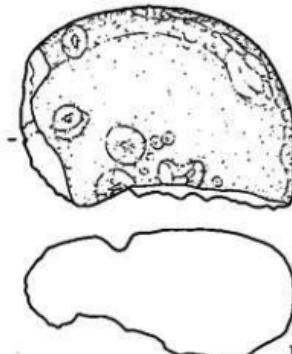
(6) J - 6 号住居址

遺構と遺物（第28・29図、図版63）

J - 6 号住居址は、J - 5・J - 7・J - 8 と絡んで存在すると考えられる住居址であるが、そのプランを把握することはでき得なかった。その存在は、J - 7 の上層にみられるローム層の貼り床と、その貼り床とほぼ同じレベルにみられた埋甕より想定した。石器には、くぼみ石（2）がある。

時期

本住居址の所産期は、縄文時代中期後葉と考えられる。

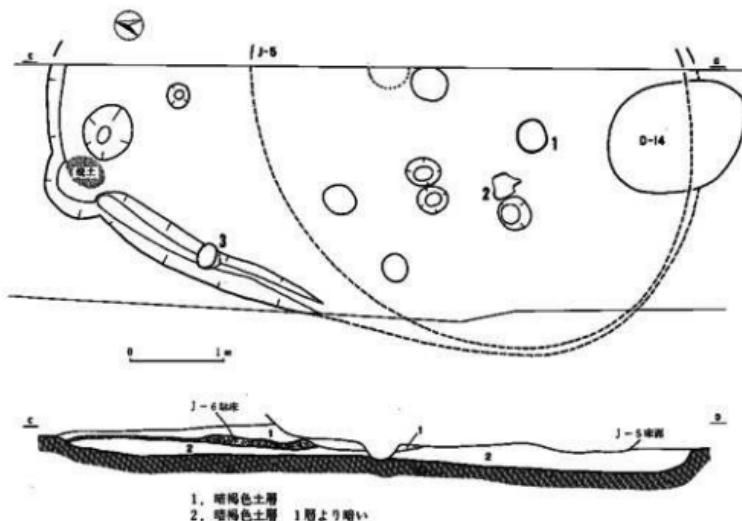


第28図 J - 6 号住居址出土石器（1 : 3）

第16表 J - 6 号住居址出土遺物一覧表<石器>

辨証 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	凹 石	安山岩	97	143	75	1296.6	

（単位mm、g）



第29図 J - 6 号住居址実測図（1 : 60）

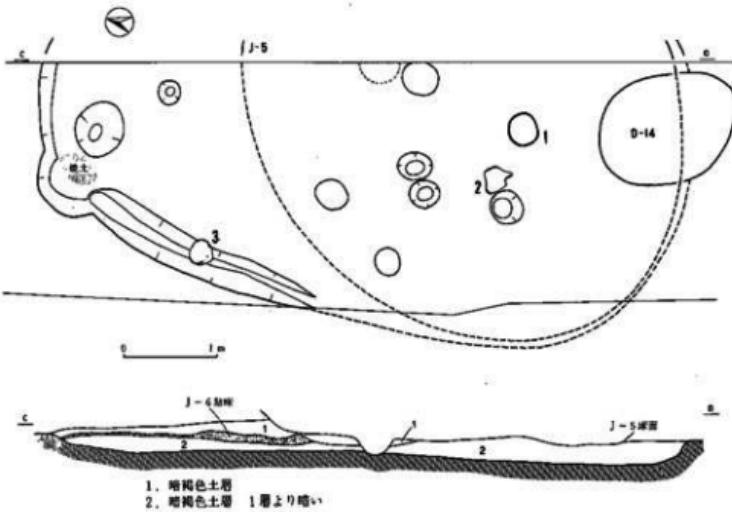
(7) J-7号住居址

遺構 (第30図、図版4)

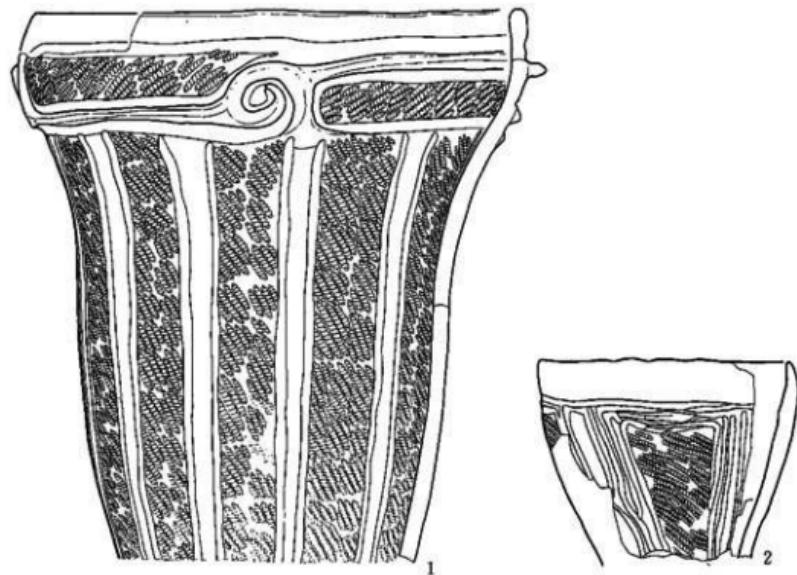
J-7号住居址は、(古) J-8 \rightarrow J-7 \rightarrow J-6 \rightarrow J-5 (新) の新旧関係の中でとらえられるものである。そのプランは、隅丸方形あるいは橢円形を呈するものと考えられ、長軸6.7m前後を測るものと思われる。本住居址の壁を巡って一部には周溝が認められる。ピットは、床面において確認できたものを一応図示したが、本住居址に付随するものがどうか明らかでない。なお、本住居址の西北コーナーは突出しており、焼土が確かめられたが、本住居址に伴わない土坑が存在していた可能性も残る。また、南壁の一部はD-14によって破壊されていたものと思われる。遺物は、底部の切り取られた加曾利E式の深鉢が埋甕として(第10図1)、また、加曾利E式の深鉢の破片がピット付近より検出された(同図2)。

遺物 (第31・32図、図版33・61・62)

1と2・8から15から17・19は加曾利E 3式土器である。1と9・10から12は口縁部文様帶に橢円区画と渦巻き文をもち、胴部に磨消繩文が付される。13から15は両耳壺の胴部破片であろう。13は隆起線文で口縁部と胴部が区画され、逆U字状沈線文にLR繩文が充填されていることから加曾利E 4式土器に含まれよう。16と17は同一個体の胴部破片で、半截竹管を押し引きながら刺突する爪形文のような刺突文が施され、胴部下半分では逆U字状のモチーフ内に繩文が施され蘇手文がつけられている。18は鉢形土器の口縁部破片で、加曾利E 3式の新しい段階から加曾



第30図 J-7号住居址実測図 (1:60)



第31図 J-7号住居址出土土器 (1:4)

第17表 J-7号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

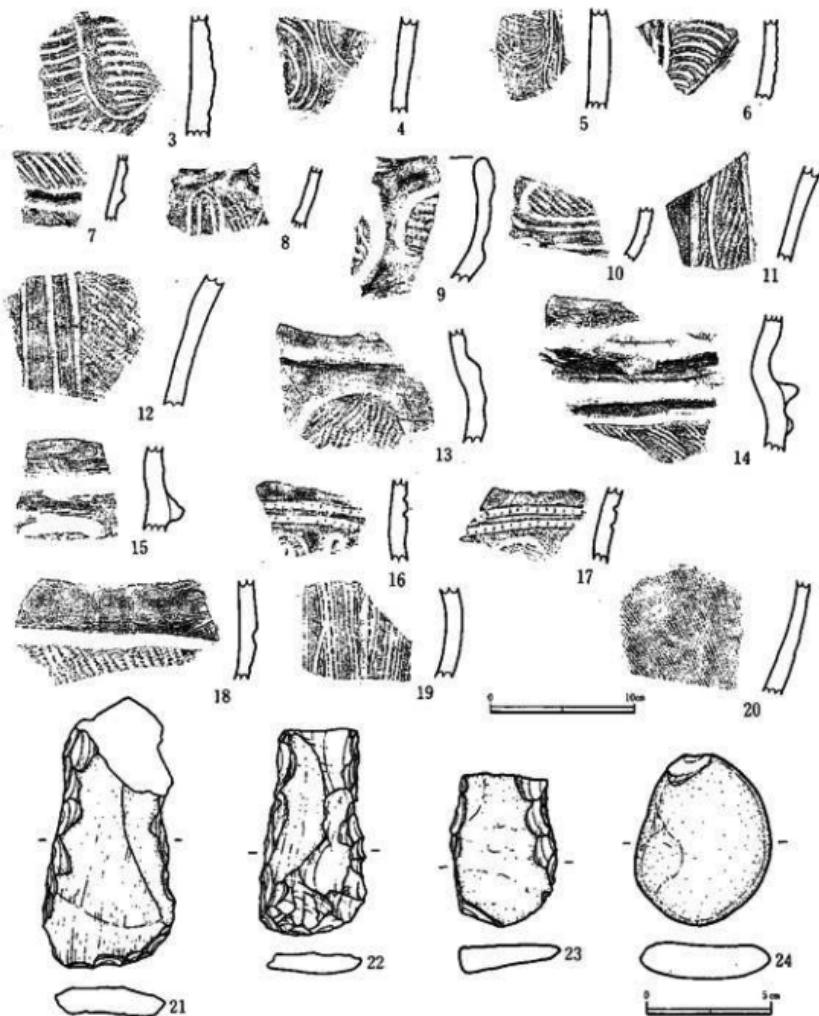
擇固 番号	器種	部位	法量	器形および文様	胎土	色調		焼成	註記	備考
						外面	内面			
1	深鉢	口縁 ～胴下	34.5 (38) (21)	绳文(RL)、陰線文、沈縞文	黒雲母	にぶい褐色 SYR6/4	にぶい褐色 SYR6/3	通常		
2	深鉢	口縁 ～胴下	18 (13.5) (10.5)	绳文(RL)、沈縞文	角閃石	褐色 SYR6/6	にぶい褐色 SYR6/4	通常	No.1、2炉	
3	深鉢	胴上		沈縞文	角閃石	にぶい褐色 7.SYR6/3	灰褐色 7.SYR5/2	通常		
4	深鉢	胴上		沈縞文	角閃石	明赤褐色 SYR5/6	にぶい黄褐色 SYR6/4	通常	(D)	
5	深鉢	胴上		沈縞文	角閃石	にぶい褐色 7.SYR6/4	にぶい黄褐色 10YR6/3	通常	(D)	
6	深鉢	胴上		沈縞文	角閃石	灰黃褐色 10YR6/2	灰褐色 10YR5/2	通常		
7	深鉢	胴上		沈縞文、陰帶文	角閃石	にぶい赤褐色 2.SYR4/4	灰赤色 2.SYR4/2	通常	(D)	
8	深鉢	胴上		绳文(LR)?、沈縞文、陰帶文	風化岩片	褐灰色 7.SYR4/1	黒褐色 7.SYR3/1	通常	炉	
9	深鉢	口縁		绳文(RL)、沈縞文	角閃石	にぶい褐色 7.SYR6/3	にぶい褐色 7.SYR6/4	良好	炉	

利E 4式にみられる。

石器には、打製石斧（21～23）・磨石（24）がある。

時期

本住居址の所産期は、縄文時代中期後半加曾利E 3式期と考えられる。



第32図 J-7号住居址出土遺物（土器=1:4・石器=1:3）

第18表 J-7号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

辨別 番号	器種	部位	法量	器形および文様	胎土	色調		焼成	註記	備考
						外面	内面			
10	深鉢	胴上		縄文(RL)、沈縁文	角閃石	にぼい褐色 7.5YR7/4	灰青褐色 10YR5/2	通常	炉	
11	深鉢	胴上		縄文(RL)、沈縁文	角閃石	明赤褐色 5YR5/8	にぼい褐色 7.5YR6/3	通常	炉	
12	深鉢	胴上		縄文(RL)、沈縁文	角閃石	にぼい褐色 7.5YR6/4	にぼい黄褐色 10YR6/3	通常	炉	
13	壺	胴上		縄文(RL)、沈縁文、撫摩起文	角閃石	灰褐色 7.5YR5/2	にぼい褐色 7.5YR5/3	良好	(D)	
14	壺	胴上		縄文(LR)、陰文、陰文	風化岩片	にぼい褐色 5YR6/4	にぼい褐色 5YR6/4	良好	No102	
15	壺	胴上		縄文、陰文、陰文	風化岩片	にぼい褐色 7.5YR5/4	にぼい褐色 7.5YR5/3	良好	(D)	
16	深鉢	胴上		縄文、沈縁文、利突文	角閃石	灰褐色 7.5YR5/2	灰褐色 7.5YR4/1	良好		17と同一個体
17	深鉢	胴上		縄文、沈縁文、利突文	角閃石	灰褐色 7.5YR4/2	灰青褐色 10YR4/2	良好		16と同一個体
18	鉢	胴上		縄文(RL)、沈縁文	角閃石	にぼい褐色 7.5YR6/4	灰褐色 7.5YR5/2	通常	炉	
19	深鉢	胴上		朱縁文	角閃石	灰褐色 7.5YR5/2	灰褐色 5YR4/2	良好		
20	深鉢	胴上		朱縁文	角閃石	にぼい褐色 5YR6/4	にぼい褐色 7.5YR5/3	良好	(D)	

第19表 J-7号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

辨別 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	辨別 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
21	打製石斧	真岩 II	144	69	14	190.6		23	打製石斧	真岩 II	80	54	13	90.1	
22	打製石斧	真岩 II	106	55	12	99.1		24	磨石	安山岩	90	69	21	167.9	

(単位mm, g)

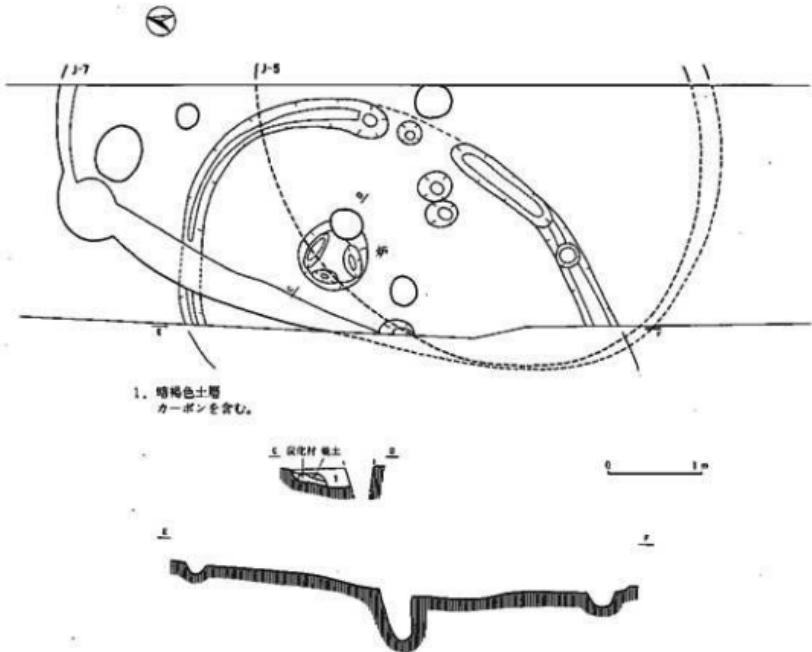
(8) J-8号住居址

遺構(第33図、図版3)

J-8号住居址は、く・け・こ・さー4・5グリッド付近にみられるJ-4~J-8号住居址の中で、J-4と並んで古いものである。そのプランの大半は調査区外の南側へ延びているが、およそ梢円形をとるものと考えられる。本住居址の壁は、すでにJ-7によって破壊されてしまっているが、住居址をほぼ全周すると思われる周溝が残存していた。また、炉は、住居址の北半の中央部より検出された。この炉は、ほぼ円形のプランを呈する掘り込みで、かつては石組みを伴っていたことがその掘り方によって理解できる。この炉の石組いはJ-7が構築される際に取り外され廃棄されたものと思われる。炉の一部はJ-5のピットによても破壊されている。炉の覆土中には炭化材と焼土がみられた。

時期

本住居址は、共伴遺物の抽出が困難で、その所産期については縄文時代中期後葉としてしかい



第33図 J-8号住居址実測図 (1:60)

い得ない。しかし、少なくとも本住居址を切るJ-7の時間（加曾利E3式期）より先行するものとしてとらえることができよう。

(9) J-9号住居址

造構（第34図、図版4）

J-9号住居址は、J-6グリッドにかけて検出された敷石住居址である。平面プランは径3m程度の円形を呈すると考えられるもので、その一部は未調査区である東側へ逃れるものの、敷石は住居全面になされているものと考えられる。住居の中心より若干外れたところに方形を呈する石開い炉が存在し（第12図1）、壁際には埋甕がなされている（同図2）。壁外には、本住居址に付随すると考えられるピットがいくつか認められる。

敷石に用いられている鉄平石（輝石安山岩）の原産地としては、東部町赤津・蓼科疊石・佐久町板石山などがあげられる（白倉盛男氏の御教示による）。本住居址に敷かれている鉄平石の大き

さは、長軸が50~70cm前後のもので均一性がうかがえる。おそらくその大きさについては、石材入手の段階で選択がなされ、その後不都合な場合は分割されたのであろう。

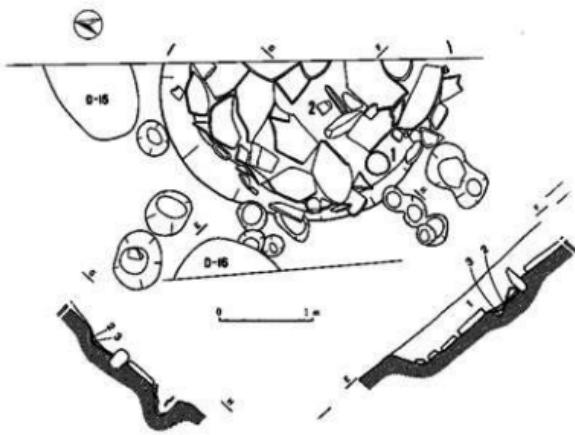
本住居址の炉は、2個の鉄平石に囲われているものであるが、当初は石材で四方を囲われた炉であったのかもしれない。炉のセクションにおいては、2層に焼土がみられ、3層には灰の堆積がみられた。いずれも若干の骨片を含んでいるものであった。

埋甕（第35図1）は、住居の南の壁際に存在するが、本遺跡の他の埋甕とは異なり、底部もしくは胴下半部の切断されていないものであった。沈線によって区画されたモチーフ内を中心にLR縄文が施される縄文時代中期終末の加曾利E4式土器である。

遺物（第35・36図、図版34・61・63）

1と3・15・17・18は加曾利E4式土器で、17と18は微隆起文をもつ土器である。1は口縁部に微隆起文をもち、胴部では沈線文で、区画されたモチーフ内に無節縄文が施されている。2は壺形の土器で、沈線文の上に逆U字文が施されている。把手をもつ可能性がある。2とネガとポジとの関係が19であるが、19は口縁部破片で深鉢のようである。18は、瓢箪形を呈する土器であろうか。20は加曾利E4式土器から称名寺式土器に伴う深鉢で、横位の沈線文の下にLR縄文が縦につけられている。

石器には、打製石斧（21・22）・多孔石（23）・用途不明の軽石製品（24）がある。

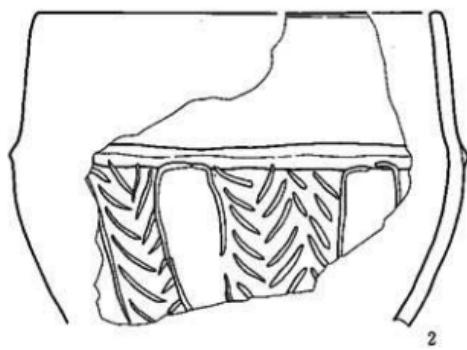


1. 白色土層
2. 白色土層(焼土層) しまりなく骨片を含む。
3. 灰色土層(灰層) 骨片を含む。

第34図 J-9号住居址実測図 (1:60)



1

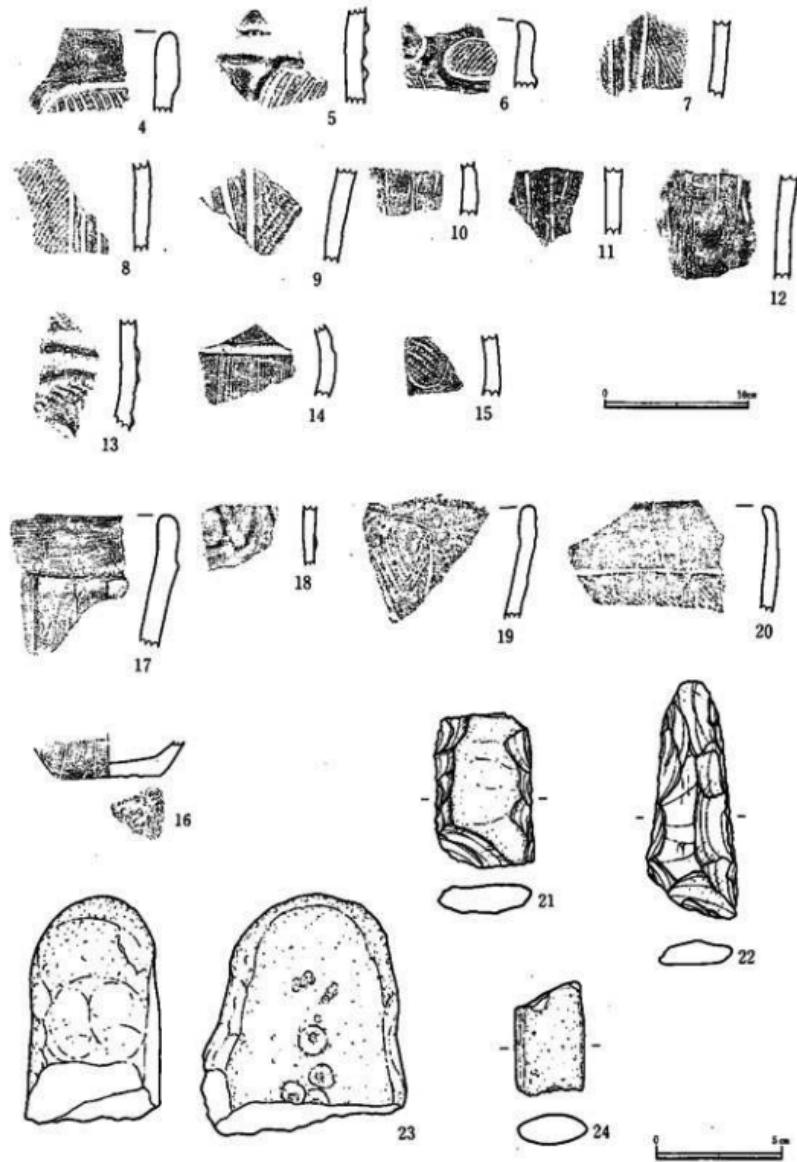


2



3

第35圖 J-9號住居址出土土器 (1:4)



第36図 J-9号住居址出土土器(1:4)・石器(1:3)

第20表 J-9号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

件番 番号	器種	部位	法量	器形および文様	胎土	色調		焼成	註記	備考
						外面	内面			
1	深鉢	口縁 ～底	30 30 7	縄文(L)、沈線文、微隆起文	黑雲母	灰褐色 2.5YR4/2	灰褐色 5YR5/2	通常	No.1	
2	盤	口縁 ～側上	(28.5) 二 二	縫衫文、隆起縞文	黑雲母	にぶい褐色 5YR6/4	にぶい褐色 7.5YR6/3	通常		
3	深鉢	胴下		縄文(LR)、沈線文	風化岩石片	灰褐色 7.5YR5/2	灰褐色 7.5YR4/2	良好	炉	
4	深鉢	口縁		沈線文	角閃石	にぶい褐色 7.5YR5/3	にぶい褐色 7.5YR5/3	通常		
5	深鉢	胴上		沈線文、陸帯文	風化岩石片	にぶい褐色 7.5YR6/4	にぶい褐色 7.5YR7/4	通常		
6	深鉢	口縁		縄文(RL)、縫衫文、沈線文	風化岩石片	明褐色 7.5YR7/2	にぶい黄褐色 10YR7/2	通常		
7	深鉢	胴下		縄文(RL)、沈線文	角閃石	にぶい褐色 7.5YR7/4	にぶい褐色 7.5YR6/3	通常		
8	深鉢	胴下		縄文(RL)、沈線文	風化岩石片	にぶい褐色 7.5YR6/4	にぶい褐色 7.5YR6/4	通常		
9	深鉢	胴下		縄文(RL)、沈線文	角閃石	灰褐色 7.5YR5/2	にぶい赤褐色 5YR5/3	通常		
10	深鉢	胴下		縄文(RL)、沈線文	角閃石	明褐色 7.5YR7/2	にぶい褐色 7.5YR6/3	通常		
11	深鉢	胴下		沈線文	白色粒子	にぶい褐色 7.5YR6/3	にぶい褐色 7.5YR5/3	通常		
12	深鉢	胴下		沈線文	角閃石	にぶい赤褐色 5YR5/3	にぶい赤褐色 5YR5/3	通常		
13	深鉢	胴上		縄文(RL)、陸起縞文	黑雲母	にぶい赤褐色 5YR5/3	にぶい赤褐色 5YR5/3	良好		
14	鉢	胴上		条線文、沈線文	白色粒子	にぶい褐色 5YR6/4	にぶい褐色 5YR5/3	通常	P-1	
15	深鉢	胴上		縄文(LR)、沈線文		にぶい褐色 5YR6/4	にぶい褐色 5YR6/3	良好		
16	一底鉢	縦代縫			白色粒子	にぶい黄褐色 10YR6/3	灰黃褐色 10YR6/2	通常	(む-12)	
17	深鉢	口縁		微隆起文		にぶい赤褐色 2.5YR5/4	灰褐色 5YR5/2	良好		
18	深鉢	胴上		微隆起文	白色粒子	にぶい赤褐色 5YR5/3	にぶい赤褐色 5YR5/3	通常		頭單形
19	深鉢	口縁		縫衫文	黑雲母	灰褐色 7.5YR4/2	にぶい褐色 7.5YR5/3	通常	炉	
20	深鉢	口縁		縄文(L)?	白色粒子	灰褐色 5YR4/2	にぶい赤褐色 5YR5/4	通常	(む-12)	

第21表 J-9号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

件番 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	
							件番 番号	器種
21	打製石斧	頁岩 II	82	50	16	112.5		
22	打製石斧	頁岩 I	126	46	13	87.3		
							23	多孔石
								安山岩
							127	110
							67	1328.1
							24	鈴石製品
								鈴石
							57	36
							16	17.3
								用途不明

(単位mm, g)

時期

本住居址の所産期は、縄文時代中期後半加曾利E 4式期と考えられる。

(10) J-10号住居址

遺構

J-10号住居址は、J-9号住居址の北側す一6グリッドに存在したと考えられるものである。プランは全く確認できず、わずかな貼り床よりその存在を想定した。

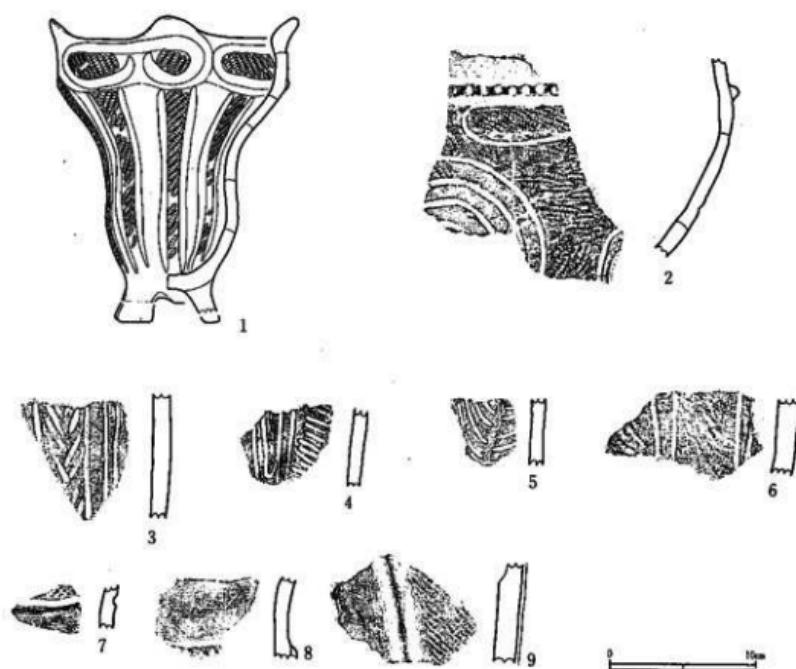
遺物（第37・38図、図版35・64）

1と6は加曾利E3式土器で脚部に磨消繩文をもつ。1は、口縁部の渦巻き文が内側に向いており、通常渦巻き文と楕円区画が組み合わさっていることを考えると珍しく、脚部を持つ点でも稀な土器といえよう。7と9は加曾利E4式土器で、9は微隆起文が付されている。

3から5は佐久系土器もしくは加曾利E3式土器であろう。

時期

本住居址の所産期は、縄文時代中期後葉加曾利E3式期と考えられる。



第37図 J-10号住居址出土土器（1：4）

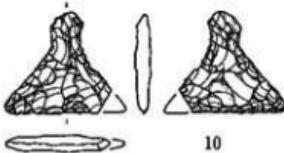
第22表 J-10号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

発掘番号	器種	部位	法量	器形および文様	胎土	色調		地底	注記	備考
						外面	内面			
1	深鉢	口縁 ～底	17 (21) (7)	縄文(RL)、沈縄文	白色粒子	明赤褐色 2.5YR5/6	にぶい黄褐色 5YR6/4	通常	No.1	台付
2	盃	胴上		縄文(RL)、沈縄文、隆苔上に刻目	白色粒子	にぶい黄褐色 10YR6/3	にぶい黄褐色 10YR7/3	通常	No.1 No.1付近	
3	深鉢	胴下		稜形文		灰白色 10YR6/1	灰白色 10YR6/2	通常		
4	深鉢	胴下		稜形文	無	にぶい褐色 7.5YR5/3	灰褐色 7.5YR5/2	通常		
5	深鉢	胴上		沈縄文	風化岩石	にぶい褐色 7.5YR5/3	灰褐色 7.5YR5/2	通常		
6	深鉢	胴下		縄文(RL)、沈縄文	白色粒子	にぶい赤褐色 2.5YR4/4	にぶい赤褐色 2.5YR5/4	通常		
7	深鉢	胴上		縄文(RL)、沈縄文	角閃石	灰褐色 5YR4/2	灰褐色 5YR4/2	通常		
8	盃?	胴上		隆苔上に刻目	角閃石	にぶい褐色 7.5YR7/4	にぶい黄褐色 10YR7/4	通常	No.1付近	
9	深鉢	胴上		縄文(LR)、横縞起文	角閃石	にぶい褐色 7.5YR6/3	にぶい黄褐色 10YR6/3	良好		

第23表 J-10号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

発掘番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
10	石器	チャート	34	31	5	5.2	

(単位mm、g)



10

(II) J-11号住居址

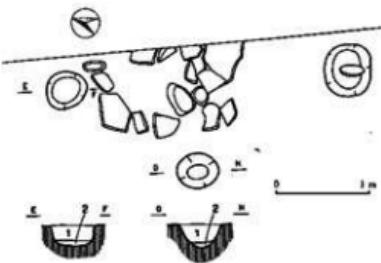
遺構(第39図、図版3)

第38図 J-10号住居址出土石器(1:2)

J-11号住居址は、セ-7グリッドにおいて確認された敷石を伴う住居址である。ピット3個と敷石の一部が確認されたにすぎず、その範囲も線引きできなかった。敷石には、他の住居址と同様に鉄平石が用いられている。

時期

共伴する遺物が明確でないためその所産期は判断し難いが、敷石という性格を踏まえたうえで僅かな出土遺物より類推すると、縄文時代中期後葉でもより新しい段階に位置付けられる可能性も残る。

1. 褐色土層
2. 黒色土層 カーボンを含む、ややしまりあり。

第39図 J-11号住居址実測図(1:60)

(12) J-12号住居址

遺構 (第40図、図版5)

J-12号住居址は、ちー7グリッドにかけて検出された敷石住居址である。鉄平石の敷きつめられた住居の半分が検出されたが、そのプランとしてはa・bの二者が考えられる。炉は住居址の中心よりやや西に設けられており、周囲を4つの石で囲ったもので、後に甕の底部が埋められている。炉の内径は、長辺42cm・短辺35cm、炉の上面から埋甕の底面までは約20cmを測る。炉のセクションを観察すると、焼土がみられるのは埋甕より下位の2層である。したがってこの甕は炉の機能が停止した後に埋められたものと考えられる。

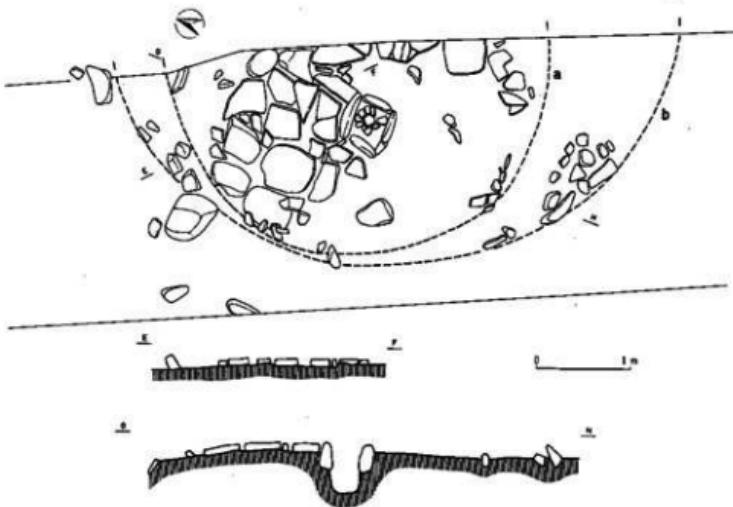
遺物 (第41・43図、図版35・64)

1から6まで加曾利E3式土器に相当する。6はH状モチーフをもつ胴部破片である。

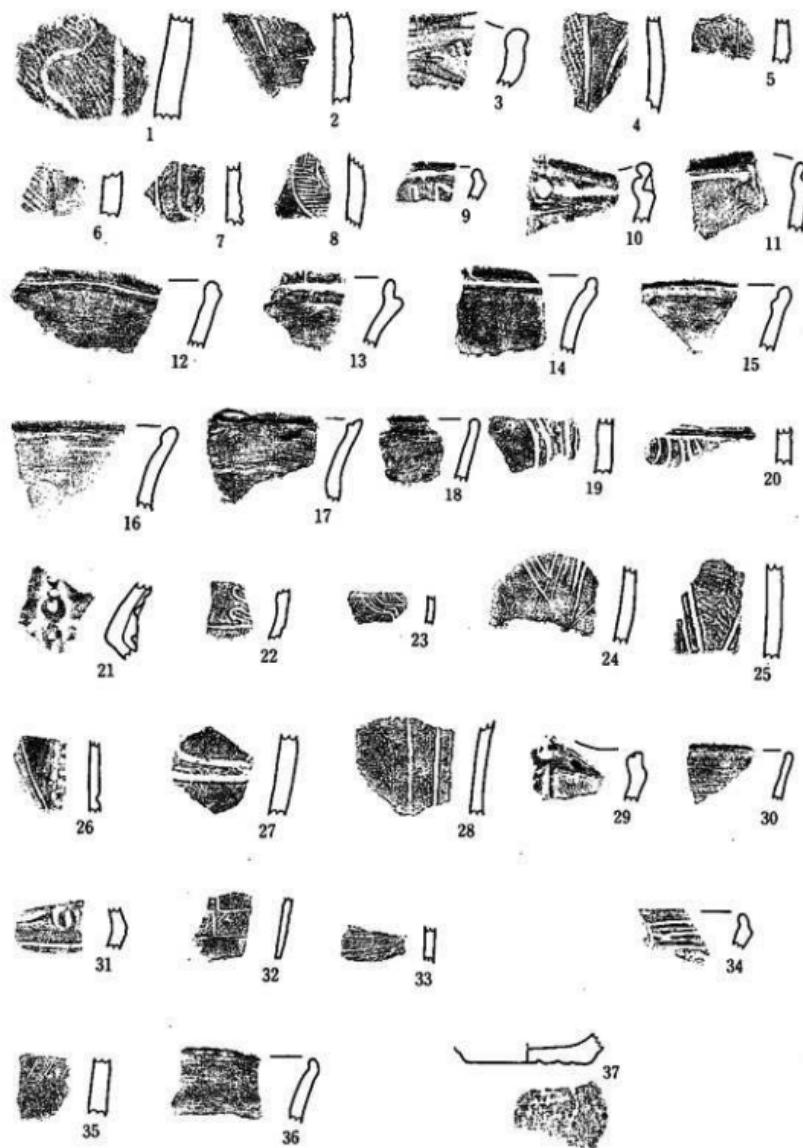
7は微隆起文の加曾利E4式土器である。

8は称名寺式土器である。9から11・23・24・25・28は胴部から口縁部にかけてほぼ直線的に開く器形で、他は胴部に括れをもつものであろう。前者には、9や24・28のように地文をもたないものと11や25のように縄文を地文とする土器がある。いづれも堀之内1式土器であろう。

石器には、石錐(38)がある。



第40図 J-12号住居址実測図 (1:60)



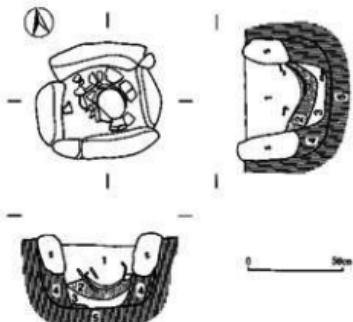
第41図 J-12号住居址出土土器 (1 : 4)

時期

本住居址の所産期は、炉内より検出された土器により、縄文時代後期壺之内式期と考えられる。



第43図 J-12号住居址出土石器 (1:2)



第24表 J-12号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

番号	種類	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
38	石 繩	グラス質岩 色:紫褐色	15	16	3	0.7	

(単位mm, g)

1. 黒色土層
2. 褐褐色土層 (焼土層)
3. 黑褐色土層
4. 黑色土層
5. ローム層 (地山)

第42図 J-12号住居址炉実測図 (1:30)

第25表 J-12号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

番号	種類	部位	法量	器形および文様	胎土	色調		焼成	註記	備考
						外面	内面			
1	深鉢	胴上		縄文 (RL)、沈縄文	角閃石	にぼい褐色 7.5YR6/3	にぼい黄褐色 10YR6/3	通常	(た・ち-7)	
2	深鉢	胴下		沈縄文	角閃石	灰褐色 7.5YR4/2	にぼい黄褐色 10YR6/3	通常	南	
3	深鉢	口縁		縄文 (RL)、疊縄文	角閃石	にぼい褐色 7.5YR6/4	にぼい黄褐色 10YR7/3	通常	(た・ち-7)	
4	深鉢	胴上		縄文 (RL)、沈縄文	風化岩石片	にぼい褐色 7.5YR6/4	にぼい黄褐色 10YR7/3	通常	炉 No 1	
5	深鉢	胴下		縄文 (RL)、沈縄文	角閃石	にぼい褐色 7.5YR6/3	にぼい褐色 7.5YR5/3	通常	(た・ち-7)	
6	深鉢	胴		縄文 (LR)、微隆起文	角閃石	にぼい褐色 7.5YR6/3	灰褐色 7.5YR5/2	通常	炉 No 1	
7	深鉢	胴上		縄文 (LR)、沈縄文		にぼい褐色 5YR6/4	にぼい赤褐色 5YR5/4	良好	炉東	
8	深鉢	胴上		縄文 (LR)、沈縄文		灰褐色 7.5YR5/2	にぼい褐色 7.5YR6/4	通常	(た・ち-7)	
9	深鉢	口縁		沈縄文	角閃石	にぼい黄褐色 10YR6/3	にぼい黄褐色 10YR6/4	通常	(た・ち-7)	
10	深鉢	口縁		沈縄文、円形刻突文	白色粒子	明赤褐色 5YR5/6	明赤褐色 5YR5/6	通常	炉	
11	深鉢	口縁		縄文 (LR)、沈縄文、円形刻突文	白色粒子	にぼい黄褐色 10YR7/2	にぼい黄褐色 10YR6/3	通常	(た・ち-7)	
12	深鉢	口縁		沈縄文	白色粒子	にぼい黄褐色 10YR6/4	にぼい黄褐色 10YR6/4	通常	(た・ち-7)	
13	深鉢	口縁		沈縄文		にぼい黄褐色 10YR6/3	にぼい黄褐色 10YR7/3	通常		

第26表 J-12号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

件目 番号	器種	部位	法番	器形および文様	胎土	色調		焼成	註記	備考
						外面	内面			
14	深鉢	口縁		沈縞文	角閃石	にぼい黄褐色 10YR5/3	にぼい黄褐色 10YR6/4	良好	鐵石	
15	深鉢	口縁		沈縞文		にぼい橙色 7.5YR6/4	にぼい褐色 7.5YR5/3	通常	炉	1
16	深鉢	口縁		-	角閃石	明赤褐色 5YR5/6	にぼい褐色 7.5YR5/3	良好		
17	深鉢	口縁		口唇部に沈縞文	角閃石	にぼい褐色 7.5YR5/3	灰黃褐色 10YR5/2	通常	炉	1
18	深鉢	口縁		-		にぼい赤褐色 5YR4/4	明赤褐色 5YR3/2	通常	南	
19	深鉢	胴上		沈縞文	角閃石	にぼい黄褐色 10YR7/3	にぼい黄褐色 10YR6/3	通常	南	
20	深鉢	胴上		沈縞文	白色粒子	にぼい橙色 7.5YR6/4	にぼい褐色 7.5YR6/3	通常	炉	
21	深鉢	胴上		円形貼突文	角閃石	にぼい黄褐色 10YR7/3	にぼい黄褐色 10YR5/3	通常	炉床面	
22	深鉢	胴下		縞文(LR)、沈縞文	角閃石	灰褐色 5YR5/2	にぼい赤褐色 5YR5/3	通常	炉	
23	深鉢	胴下		沈縞文	角閃石	にぼい黄褐色 10YR5/3	にぼい黄褐色 10YR6/3	通常		
24	深鉢	胴下		沈縞文	白色粒子	にぼい黄褐色 10YR6/3	純灰色 10YR4/1	通常		
25	深鉢	胴下		縞文(LR)、沈縞文	白色粒子	黒褐色 10YR3/1	墨色 10YR2/1	良好	(た・ち-7)	
26	深鉢	胴下		沈縞文、陸寄上に刻目	墨苔母	黒褐色 10YR4/1	灰黃褐色 10YR5/2	通常		
27	深鉢	胴下		沈縞文		にぼい黄褐色 10YR6/3	にぼい黄褐色 10YR6/3	通常	鐵石	
28	深鉢	胴下		沈縞文	風化岩片	黒褐色 10YR3/2	にぼい褐色 7.5YR5/4	通常	炉	
29	深鉢	口縁		円形貼付文、陸寄文	白色粒子	にぼい褐色 7.5YR5/3	にぼい褐色 7.5YR5/4	通常	(た・ち-7)	
30	深鉢	口縁		縞文(LR)、沈縞文		にぼい褐色 7.5YR6/4	灰褐色 7.5YR4/2	良好	炉	
31	深鉢	胴上		縞文(LR)、沈縞文	白色粒子	にぼい褐色 7.5YR5/3	灰褐色 7.5YR4/2	良好	南	
32	深鉢	胴上		縞文(LR)、沈縞文		灰黃褐色 10YR5/2	にぼい黄褐色 10YR6/4	良好	南	
33	深鉢	胴上		縞文(LR)、沈縞文		灰黃褐色 10YR5/2	にぼい褐色 7.5YR5/3	通常	炉	
34	深鉢	口縁		沈縞文		灰黃褐色 10YR4/2	灰黃褐色 10YR4/2	通常	(た・ち-7)	
35	深鉢	胴下		沈縞文	白色粒子	にぼい褐色 7.5YR5/3	灰褐色 7.5YR4/2	通常	(た・ち-7)	
36	深鉢	口縁		-	角閃石	灰黃褐色 10YR5/2	灰黃褐色 10YR5/2	通常	南	
37	-	底		網代底	風化岩片	にぼい黄褐色 10YR5/3	にぼい黄褐色 10YR6/3	通常	(た・ち-7)	

(13) J-13号住居址

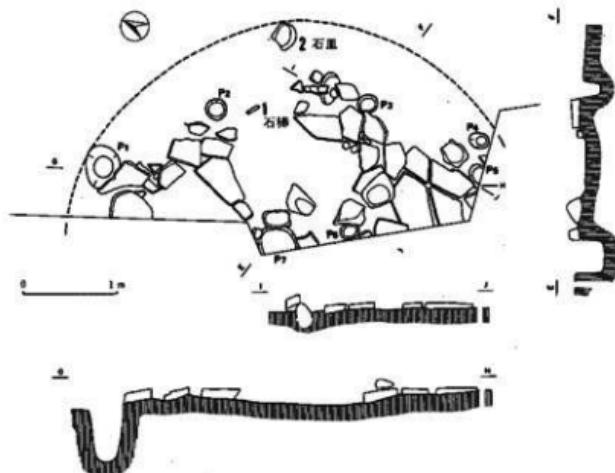
造構と遺物（第44・45図、図版6・36・62・67）

J-13号住居址は、にー7グリッドより検出された敷石住居址である。鉄平石の敷かれたもので、そのプランの半分は調査区外に逃げるが、円形を呈する住居址であると考えられる。本住居址に付随すると考えられるピットはP₁～P₇である。

本住居址よりは、磨製石斧（2）・石皿（3）・石棒（4・5）が検出された。共伴する土器は抽出しえなかつた。

時期

本住居址は、現段階では共伴する土器が明らかでなく所産期は決定し難いが、縄文時代後期壺之内式期ととらえて大過なかろう。



第44図 J-13号住居址実測図 (1:60)

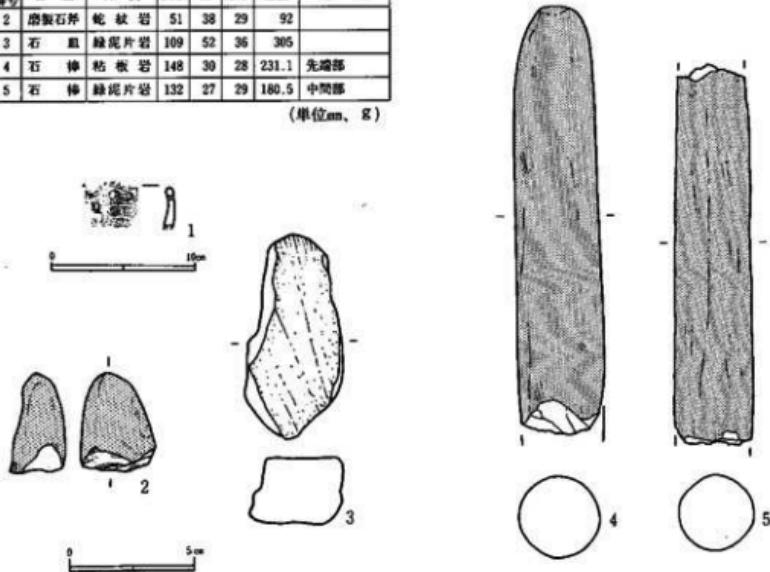
第27表 J-13号住居址出土遺物一覧表(土器)

件番 番号	器種	部位	法量	器形および文様	粘土	色調		焼成	註記	備考
						外面	内面			
1	漆器	口縁		網文(LR)、沈線文、貼付文	風化岩片	にぼい褐色 7.5YRS/3	にぼい褐色 7.5YRS/3	通常	P-I	穿孔

第28表 J-13号住居址出土遺物一覧表(石器)

件番 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
2	磨製石斧	乾紋岩	51	38	29	92	
3	石刀	綠泥片岩	109	52	36	365	
4	石錐	粘板岩	148	30	28	231.1	先端部
5	石棒	綠泥片岩	132	27	29	180.5	中間部

(単位mm, g)



第45図 J-13号住居址出土土器(1:4)・石器(2・3=1:3)・石棒(4・5=1:2)

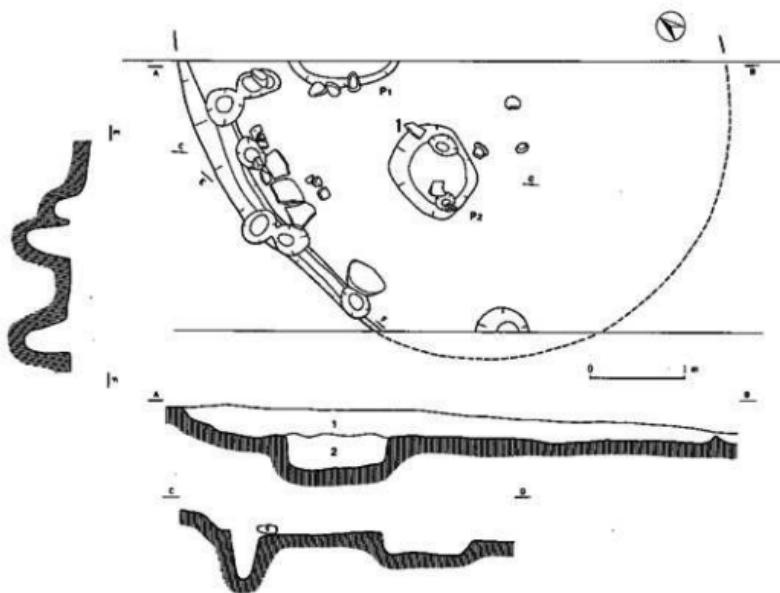
(14) J-14号住居址

遺構(第46図、図版6)

J-14号住居址は、の・はー7・8グリッドにかけて検出された住居址である。確認できたのは、住居の北西の壁際の一部分で、鉄平石による若干の敷石もみられる。壁に沿って周溝とピットがみられる。P₁・P₂は、本住居址に伴うものかどうか判然としないが、伴なうとすれば貯蔵穴などの機能を考えられようか。また、本住居址の一部には、D-22号土坑がかかるが、両者の新旧関係は明らかでない。

遺物(第47~49図、図版36・37・61・62・64)

1・2・20・23・24は称名寺式土器である。1と2は同一個体で、胴部に大きな渦巻きのモチ



1. 黒褐色土器 直径1cm~6cmのバミスを多く含む、粘性多少あり。
2. 茶褐色土器 直径1cm~6cmのバミスを多少含む、炭化物混。

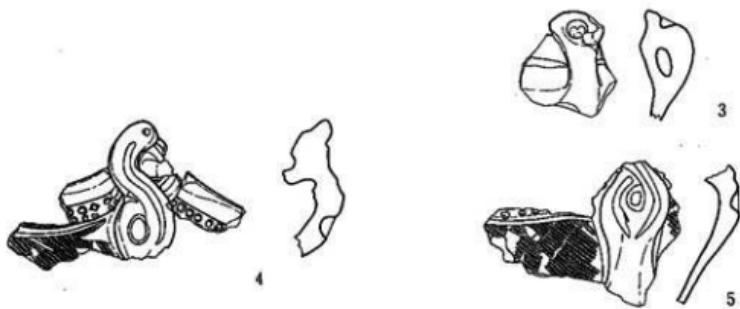
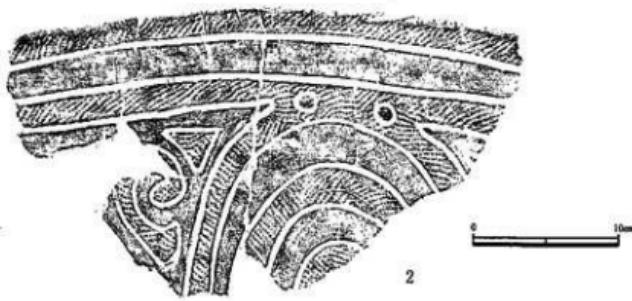
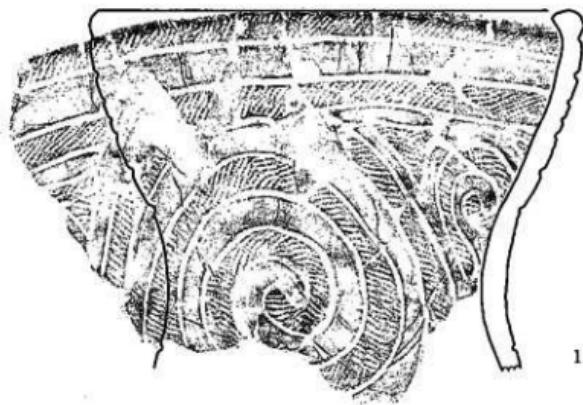
第46図 J-14号住居址実測図 (1:60)

一つをもち、その上部中央に円が描かれている。竹管を刺突していない点は独特といえよう。4・5・21・22は加曾利E4式土器の口縁あるいは胴部破片であろうか。4・5・21は、口縁部に円形の刺突文が施され、胴部におそらく鋸歯状のモチーフが描かれ、縄文が充填される土器であろう。把手は4や5のようにもつ場合もある。17と18は微隆起文が施される加曾利E4式土器である。19は曾利V式土器にみられる雨滴のような刺突文が区画内にされているのであろうか。沈線文にヘラのような工具を用いていることから中期末葉に含まれるものであろう。

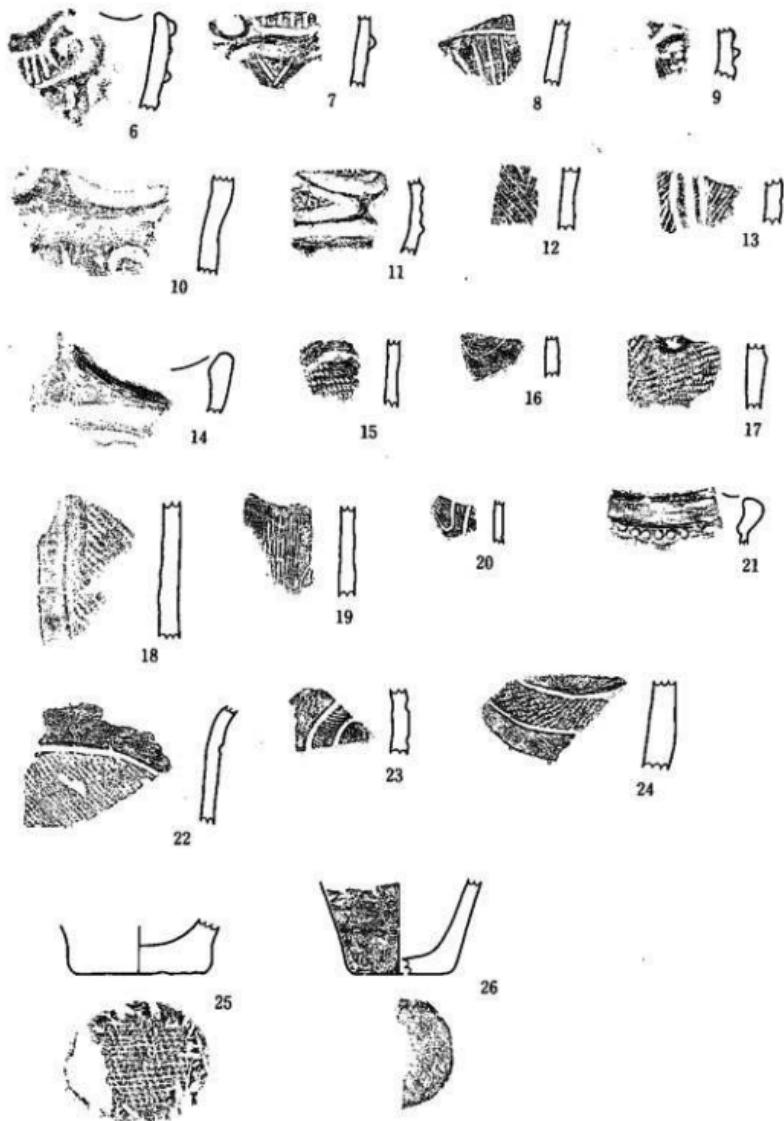
6から8・9・13は唐草文系ないし佐久系土器であろう。10・11・14・15は加曾利E3式土器であろう。

26は後期前半の精製土器の胴部から底部にかけての土器で、底面に網代痕がみられる。25は、網代痕の底部破片である。

石器には、石鎌(27)・削器(28)・打製石斧(29)・磨石(30)・くぼみ石(31)・石皿(32)がある。



第47図 J-14号住居址出土土器 (1:4)



第48図 J-14号住居址出土土器 (1:4)

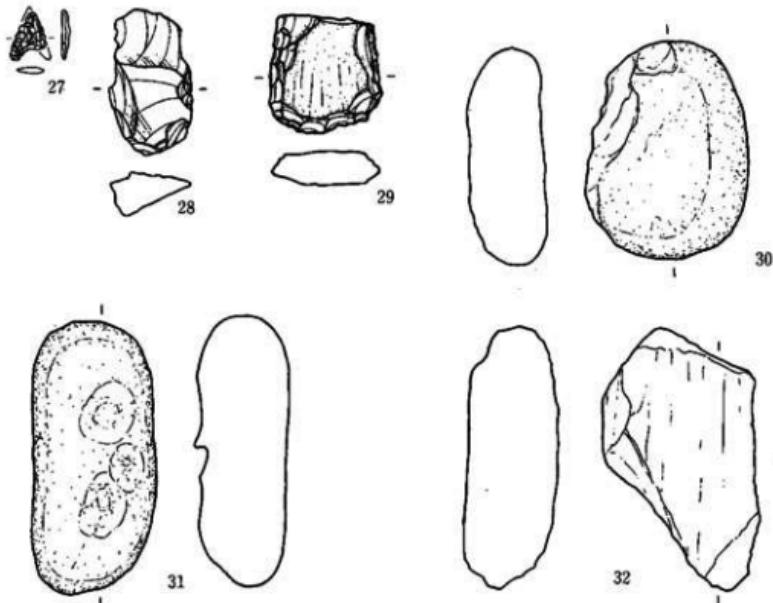
第29表 J-14号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

辨別番号	器種	部位	法量	器形および文様	胎土	色調		焼成	註記	備考
						外面	内面			
1	深鉢	口縁	34 (27) (25.5)	縹文 (LR)、沈線文	角閃石 SYR6/4	にぼい橙色 SYR6/4	にぼい橙色 SYR6/4	通常	No.1 は-8	2と同一個体
2	深鉢	口縁		縹文 (LR)、沈線文	角閃石 SYR6/4	にぼい橙色 SYR6/3	にぼい橙色 SYR6/3	通常	No.1 は-8	1と同一個体
3	深鉢	把手			角閃石 7.5YR6/4	にぼい橙色 7.5YR6/4	にぼい橙色 7.5YR6/4	通常		
4	深鉢	把手 口縁		縹文 (LR)、円形刺突文、沈線文	白色粒子 10YR6/2	灰黄褐色 10YR6/2	灰黄褐色 10YR6/2	通常	P-7	5と同一個体
5	深鉢	把手 口縁		縹文 (LR)、円形刺突文、沈線文	白色粒子 10YR7/3	にぼい黄褐色 10YR7/3	にぼい黄褐色 10YR7/2	通常	P-7	4と同一個体
6	深鉢	口縁		沈線文、階帶文	白色粒子 7.5YR6/4	にぼい橙色 7.5YR6/4	にぼい褐色 7.5YR5/4	通常	No.1	
7	深鉢	胴上		沈線文、階帶文	黒器母 SYR6/4	にぼい橙色 SYR6/4	にぼい褐色 SYR6/4	通常	P-7	
8	深鉢	胴上		沈線文	角閃石 2.5YR5/4	にぼい赤褐色 2.5YR5/4	にぼい褐色 2.5YR5/4	通常		
9	深鉢	胴上		沈線文、階帶文	黒器母 SYR6/4	にぼい橙色 SYR6/4	灰褐色 SYR4/2	通常		越町
10	深鉢	胴上		沈線文、階帶文	黒器母 7.5YR6/6	橙色 7.5YR6/6	橙色 7.5YR6/6	通常	No.19	
11	深鉢	胴上		縹文 (RL)、階帶文	角閃石 7.5YR6/3	にぼい褐色 7.5YR6/3	にぼい褐色 7.5YR5/4	通常	No.14	
12	深鉢	胴上		沈線文	角閃石 7.5YR6/4	にぼい褐色 7.5YR6/4	にぼい黃褐色 10YR7/3	通常	P-6	
13	深鉢	胴上		沈線文、階帶文	角閃石 7.5YR4/2	灰褐色 7.5YR4/2	にぼい赤褐色 5YR5/4	通常		
14	深鉢	胴上		階帶文	白色粒子 7.5YR7/4	にぼい褐色 7.5YR7/4	にぼい褐色 7.5YR7/4	通常	No.10	
15	深鉢	胴上		縹文 (RL)、沈線文	白色粒子 7.5YR6/3	にぼい褐色 7.5YR6/3	にぼい褐色 7.5YR5/4	通常	No.1	
16	深鉢	胴		沈線文	白色粒子 7.5YR6/4	にぼい褐色 7.5YR6/4	にぼい黃褐色 10YR6/3	通常		
17	深鉢	胴上		縹文 (LR)、微隆起文	風化岩片 7.5YR5/3	にぼい褐色 7.5YR5/3	にぼい赤褐色 2.5YR5/4	通常		
18	深鉢	胴上		縹文 (LR)、微隆起文	角閃石 7.5YR5/3	にぼい褐色 7.5YR5/3	灰褐色 7.5YR5/2	通常	No.1	
19	深鉢	胴上		沈線文、レ点文	角閃石 SYR6/4	にぼい褐色 SYR6/4	にぼい褐色 7.5YR6/4	通常	No.1	
20	深鉢	胴上		縹文、沈線文	風化岩片 7.5YR4/2	灰褐色 7.5YR4/2	にぼい褐色 7.5YR5/3	通常		
21	深鉢	口縁		円形刺突文	角閃石 10YR6/2	灰黃褐色 10YR6/2	にぼい黃褐色 10YR7/2	通常	P-7	
22	深鉢	胴上		縹文 (LR)、沈線文	風化岩片 10YR7/3	にぼい黃褐色 10YR7/3	にぼい黃褐色 10YR7/2	通常	P-7	
23	深鉢	胴上		縹文 (LR)、沈線文	白色粒子 7.5YR6/4	にぼい褐色 7.5YR6/4	灰褐色 7.5YR5/2	通常		
24	深鉢	胴上		縹文 (LR)、沈線文	風化岩片 SYR6/3	にぼい褐色 SYR6/3	にぼい褐色 7.5YR6/4	通常		
25	深鉢	底部		網代底	角閃石 SYR5/4	にぼい赤褐色 SYR5/4	にぼい黃褐色 10YR6/3	通常		
26	深鉢	底下底		網代底	白色粒子 7.5YR6/4	にぼい褐色 7.5YR6/4	にぼい黃褐色 10YR6/3	通常	No.15	

第30表 J-14号住居址出土遺物一覧表<石器>

種類 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
27	石 鋸	熱 岩	16	11	3	0.3	
28	削 砥	珪質頁岩	77	43	22	69.3	
29	打製石斧	真 岩 II	60	58	19	106.3	
30	磨 石	流紋岩	114	84	49	525.2	
31	磨 石	安山岩	145	65	49	720.2	
32	石 盆	綠泥片岩	135	82	46	678.2	

(単位mm, g)



第49図 J-14号住居址出土石器 (27=1:2, 28~32=1:3)

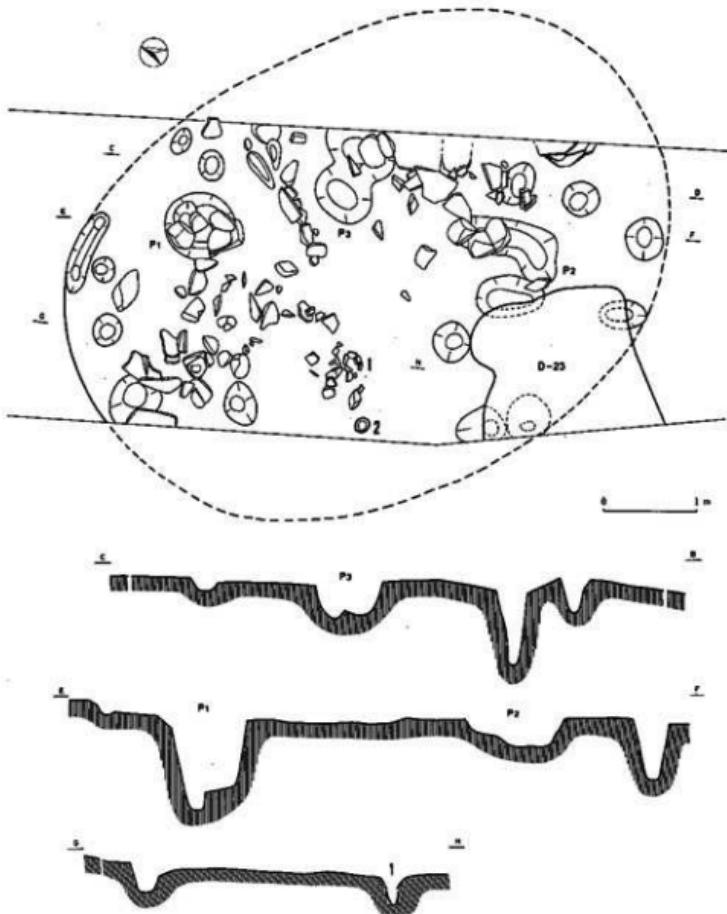
時期

本住居址の所産期は、縄文時代後期初頭称名寺式期と考えられる。

(15) J-15号住居址

遺構 (第50図、図版7)

J-15号住居址は、ふ7-8グリッドにかけて検出された。検出時には住居址の範囲には礫が散在しており、また、鉄平石の敷石も認められたため、敷石住居であることが判断された。そのプランは判然としないが、北側に周溝を伴うプランの一部が確認され、また住居址の壁に沿うと



第50図 J-15号住居址実測図 (1 : 60)

考えられるピットの配列性から、円形あるいは楕円形のプランが想定できた。なお、本住居址はその南側において、D-23号土坑と重複するが、両者の前後関係は明らかでない。また、P₁は、本址に伴うピット（貯蔵穴など）として確認したが、あるいは別の遺構である可能性も考えられる。本址において炉は検出されなかった。

第31表 J-15号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

辨別 番号	部 種	部 位	法量	器形および文様	粉 土	色 調		焼成	註 記	備 考
						外 面	内 面			
1	深 鉢	口 縁 ～ 底	28 32.5 6.5	縄文(LR)、沈線文、隆帯上 に割目	白色粒子	橙色 7.5YR7/6	橙色 7.5YR6/6	通常	(16土No1)	
2	深 鉢	口 縁 ～ 肩上		縄文(LR)、沈線文	角 凹 石	灰青褐色 10YR5/2	にほい黄褐色 10YR6/3	通常	(16土S)	
3	深 鉢	肩 上 ～ 肩下		縄文(LR)、沈線文、隆帯上 に割目	白色粒子	黑色 10YR2/1	黑色 10YR2/1	通常	上-7.8北 (16土S)	
4	深 鉢	肩 下	16 — —	縄文(LR)、沈線文	角 凹 石	明赤褐色 2.5YR5/6	にほい黄褐色 10YR7/4	良好	No1(16土)	
5	深 鉢	口 縁		縄文(LR)、沈線文、隆帯上 に割目	角 凹 石	にほい赤褐色 5YR5/3	にほい赤褐色 5YR4/3	良好	(16土)	
6	深 鉢	肩 上		縄文(LR)、微隆起文	角 凹 石	にほい黄褐色 10YR6/4	にほい黄褐色 10YR6/3	通常	N(18土)	
7	深 鉢	肩 上		沈線文、微隆起文	角 凹 石	灰青褐色 10YR5/2	黑褐色 10YR3/1	良好	(17土)	
8	深 鉢	肩 上		縄文(LR)、沈線文	角 凹 石	にほい赤褐色 2.5YR5/3	暗赤褐色 5YR3/2	通常		
9	深 鉢	口 縁		微隆起文	角 凹 石	にほい褐色 7.5YR7/3	にほい黄褐色 10YR6/3	良好		

遺物は、第18図1の位置より、縄文時代後期壠之内1式に比定できる深鉢の完形が、床面に埋められた状態で検出された。この土器の内面は、剥落が激しく、何らかの貯蔵などを思わせる。遺物（第51～53図、図版37～39・62・64・68）

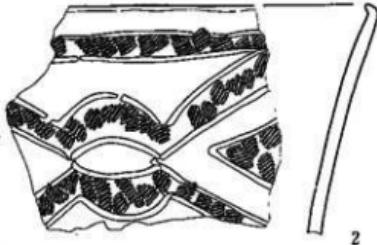
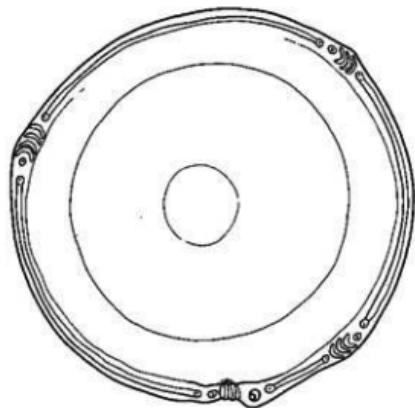
1と4は胴部で括れる器形の壠之内1式土器である。1は口唇部に沈線と円形刺突文が施され、口縁部に円形に孔が穿たれ、口縁から胴部にかけて隆帯を垂下させ、胴部の括れ部に隆帯を巡らせ刺突を加えている。括れ部から胴部下半にかけて沈線文を施した後に、LR縄文を付している。比較的大きい割には器厚が薄く精巧なつくりである。2と3は、精製土器の口縁部破片で、胴部から口縁部にむけてラッパ形に開く器形で、口唇部が内側に屈曲する特徴をもつ。壠之内2式に比定されようか。胴部に括れをもつ土器は他に、10から12・15・16であろう。括れをもたない深鉢土器は14・17から19から21で、いずれも縄文を地文にもたないようである。13は口縁部がラッパ状に開く器形で、口縁部に8字状の貼付文をもつ壠之内2式であろうか。

22と23は粗製土器で、前者は口唇部に刺突が、後者は口唇部に沈線文と器面全体に縄文が施されたもの。

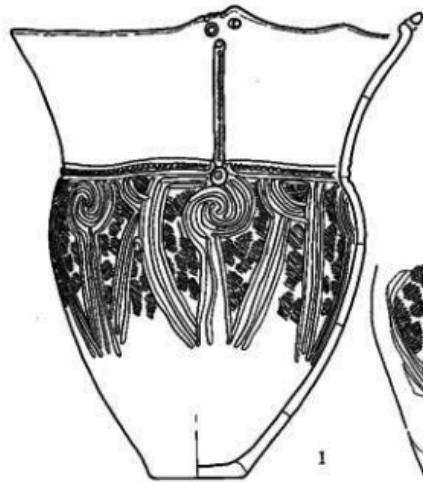
このほか、土製円盤（26・27）・石鎌（28）・磨製石斧（29）が出土している。

時期

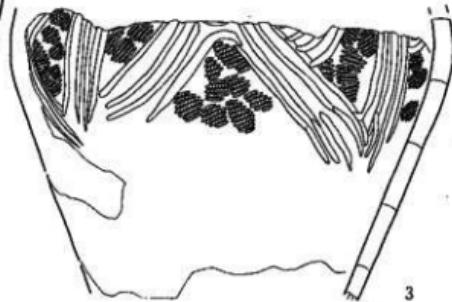
本住居址の所産期は、前述した深鉢より縄文時代後期壠之内1式期と考えられる。



2



1



3

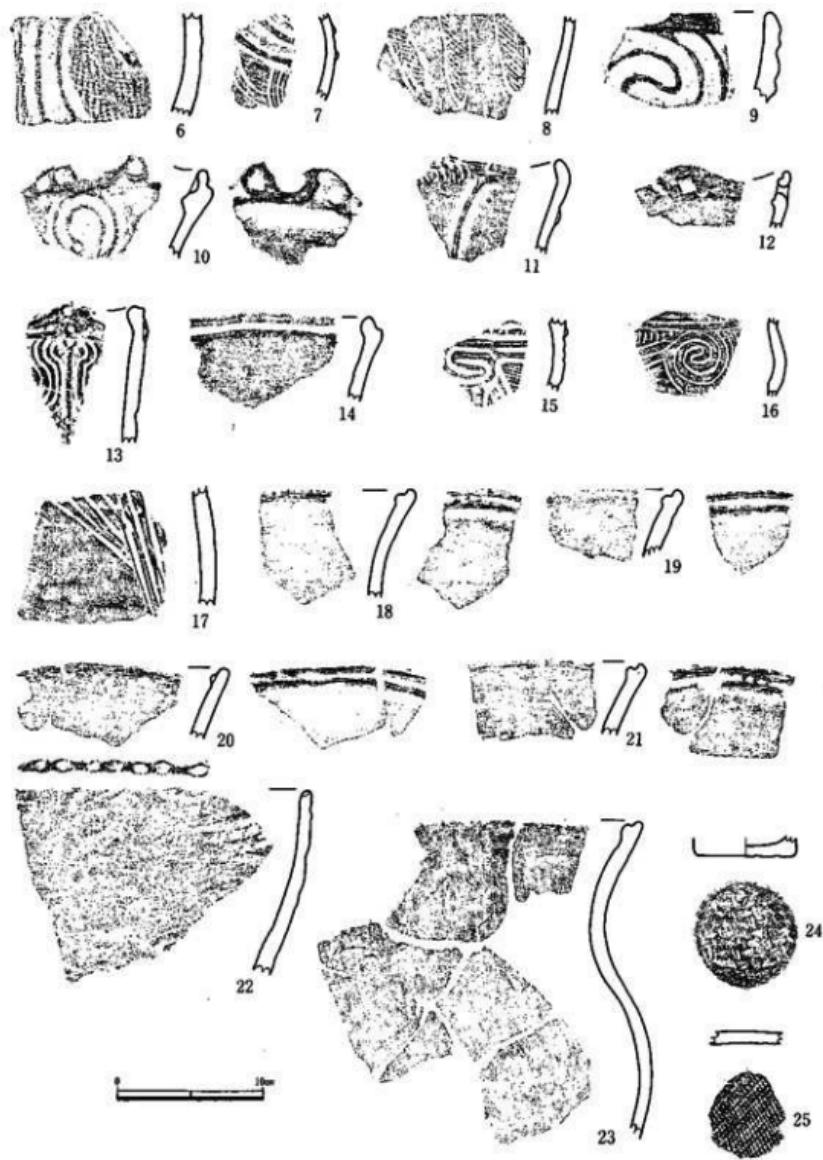


4



5

第51図 J-15号住居址出土土器 (1:4)



第52圖 J-15號住居址出土土器 (1 : 4)

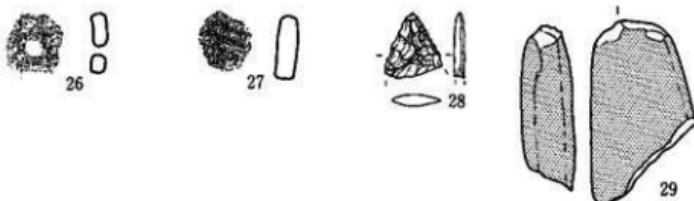
第32表 J-15号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

神田 番号	器種	部位	法量	器形および文様	胎土	色調		成成	註記	備考
						外 面	内 面			
10	深鉢	口縁		円形刺突文、隆帯文	角閃石	にぶい黄褐色 10YR7/2	灰褐色 7.5YR5/2	通常		
11	深鉢	口縁		円形刺突文、沈線文、隆帯文	角閃石	褐色 7.5YR4/1	褐色 7.5YR4/1	通常	(16±S)	
12	深鉢	口縁			角閃石	明赤褐色 2.5YR5/6	褐色 5YR6/6	通常		穿孔
13	深鉢	口縁		沈線文、円形刺突文、隆帯文上に刻目	角閃石	にぶい褐色 5YR6/4	灰褐色 7.5YR4/2	通常		
14	深鉢	口縁		沈線文	角閃石	にぶい黄褐色 10YR7/3	にぶい黄褐色 10YR6/4	通常		
15	深鉢	肩上		網文(LR)、沈線文	角閃石	にぶい褐色 5YR6/4	にぶい褐色 7.5YR5/3	良好	(16±S)	
16	深鉢	肩上		沈線文	角閃石	にぶい褐色 7.5YR6/4	にぶい褐色 7.5YR5/4	良好		
17	深鉢	肩上		沈線文	風化岩片	にぶい褐色 7.5YR7/4	にぶい褐色 7.5YR7/3	通常		
18	深鉢	口縁		沈線文	角閃石	にぶい褐色 7.5YR6/3	にぶい黄褐色 10YR6/3	良好	No 1 (16±)	
19	深鉢	口縁		沈線文	角閃石	褐色 5YR6/6	にぶい褐色 7.5YR6/4	良好	S(16±)	
20	深鉢	口縁		沈線文	角閃石	にぶい褐色 7.5YR6/4	にぶい褐色 7.5YR6/4	良好	II層 (16±)	
21	深鉢	口縁		沈線文	角閃石	にぶい褐色 7.5YR7/3	にぶい褐色 7.5YR6/4	良好	No 1 (16±)	
22	深鉢	口縁		網文?、口唇部に刻目	多量の 粗 石	にぶい黄褐色 10YR6/4	にぶい黄褐色 10YR6/4	通常		
23	深鉢	口縁 ~肩下		網文(LR)、口唇部に沈線文	角閃石	にぶい褐色 7.5YR6/4	褐色 5YR6/6	通常	No 1 (16±)	
24	深鉢	底	— — 7	網代底	白色粒子	にぶい黄褐色 10YR6/4	にぶい赤褐色 2.5YR5/4	通常	No 7 (16±)	
25	深鉢	底		網代底	角閃石	にぶい褐色 7.5YR6/3	褐色 10YR4/1	通常	S(16±)	

第33表 J-15号住居址出土遺物一覧表<土製品・石器>

神田 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	神田 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
26	土製円盤	土	製	33	31	8	9.6	28	石鏡	ガラス質 色灰山灰	21	19	4	1.6	
27	土製円盤	土	製	34	29	10	13.1	29	磨製石斧	蛇紋岩	96	56	29	225.4	

(単位mm、g)



第53図 J-15号住居址出土遺物 (28=1:2, 26, 27, 29=1:3)

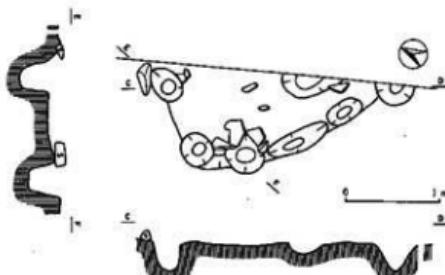
(16) J-16号住居址

遺構と遺物 (第54・55図、図版8・39)

J-16号住居址は、ほ-8グリッドにおいて、そのコーナーの一部が確認されたのみで、その大半は調査区外である東側へ延びている。住居のプランは、あるいは隅丸方形をとるのかもしれない。本住居址の壁をめぐっては6個のピットが検出された。また、鉄平石が検出されているため、鐵石住居址である可能性も残る。

時期

さて、本住居址より検出された遺物はわずかで、しかも共伴遺物の抽出が困難であるため、その所産期は確定できない。しかし、他の住居址などから類推して、その所産期は縄文時代中期終末から後期初頭に位置付けることが妥当かと考えられる。



第54図 J-16号住居址実測図 (1:60)



第55図 J-16号住居址出土土器 (1:4)

第34表 J-16号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

井戸番号	器種	部位	法量	器形および文様	胎土	色調		焼成	註記	備考
						外面	内面			
1	深鉢	脚上		縄文 (LR)、沈縫文	角閃石	にじい褐色 7.5YR5/4	灰黄褐色 10YR4/2	通常		
2	深鉢	脚上		縄文 (LR)、沈縫文	角閃石	にじい褐色 5YR5/4	にじい橙色 5YR6/3	通常		
3	深鉢	脚上		縄文 (LR)、沈縫文	多量の胎粒	明褐灰色 7.5YR7/2	淡黄褐色 10YR8/3	通常		
4	深鉢	脚上		縄文 (RL)?、彌縫文	白色粒子	にじい黄褐色 10YR7/4	にじい黄褐色 10YR7/4	通常		
5	深鉢	脚上		縄文 (LR)、沈縫文	角閃石	にじい黄褐色 10YR7/3	にじい褐色 7.5YR6/3	通常		

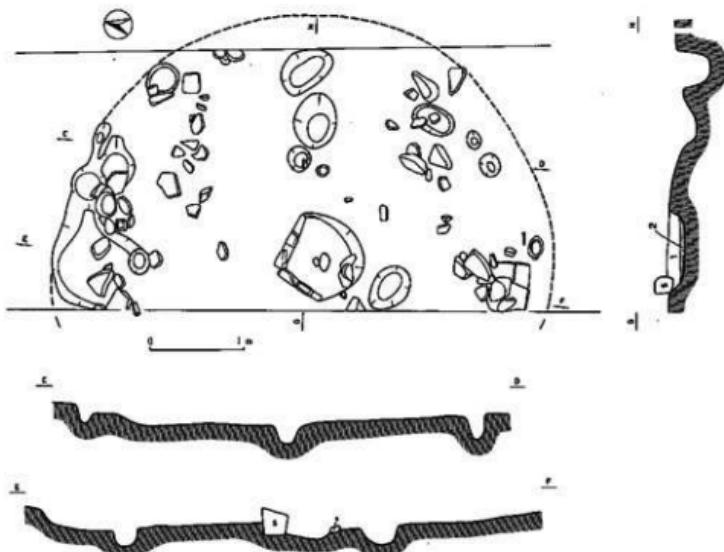
(17) J-17号住居址

遺構 (第56図、図版8・9)

J-17号住居址は、まー9グリッドにかけて検出されたもので、後述するJ-18号住居址を破壊して構築されており、その一部においては鉄平石の敷石を伴う。住居址の平面プランは、その壁に沿うと考えられるピットの配列性より、円形もしくは椭円形と考えられるが、その半分は調査区外である西側へ逃れてしまっている。本址の中心部よりは、方形の炉が確認された。この炉は、その二辺が扁平な石材によって囲われたもので、炉内の覆土2層には焼土の堆積がみられた。

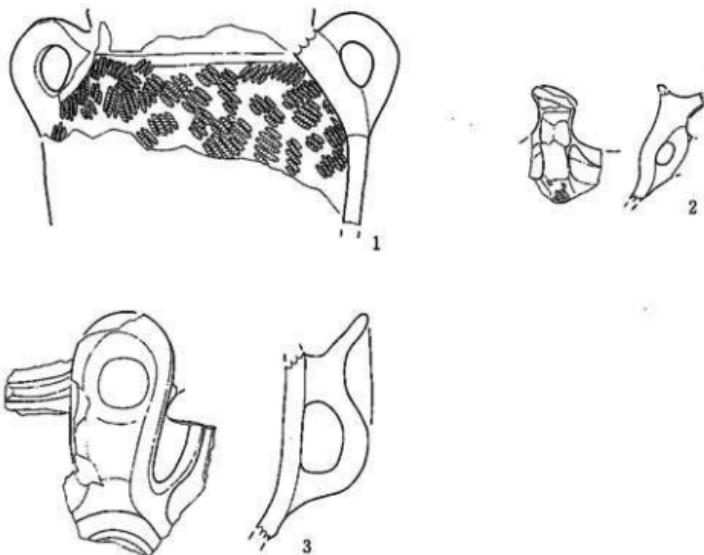
遺物 (第57~59図、図版39・40・61・64・68)

1は加曾利E4式土器の両耳壺である。口縁部文様帶が狭く、把手がせりあがった器形を呈する。胴部にはLR綱文が施されるだけである。16も同じ把手の片である。加曾利E4式土器に相当する土器は他に、8・11から15・17から19である。14は胴部に鋸歯状のモチーフをもつ土器で、LR綱文が充填される。14を除くこの他の土器は、口縁部や胴部に微隆起文をもつものであ



1. 茶褐色土器 ローム粒子多量層、炭化物・炭土粒子微量層。
2. 赤褐色土器 (燒土層)

第56図 J-17号住居址実測図 (1:60)



第57図 J-17号住居址出土土器 (1 : 4)

る。8と12は同一個体であり、胴部にヘラ状工具による沈線文が施されるものの、器形は微隆起文の土器によくみられる胴部から口縁部にかけて直線的に開く形状を呈している。17と18は同一個体で瓢箪形である可能性が考えられる。18の表面に赤色塗彩が残されている。20と21は称名寺式土器である。20は第47図1・2の土器のようにJ字状というより渦巻きのモチーフであるようである。21は地文にレ点文をもつ数少ない称名寺II式土器であろう。なお、9は隆帯の幅が広く、微隆起文というより隆起線文に近い。微隆起文出現前の加曾利E3式土器の新しい段階のものと捉えることができよう。

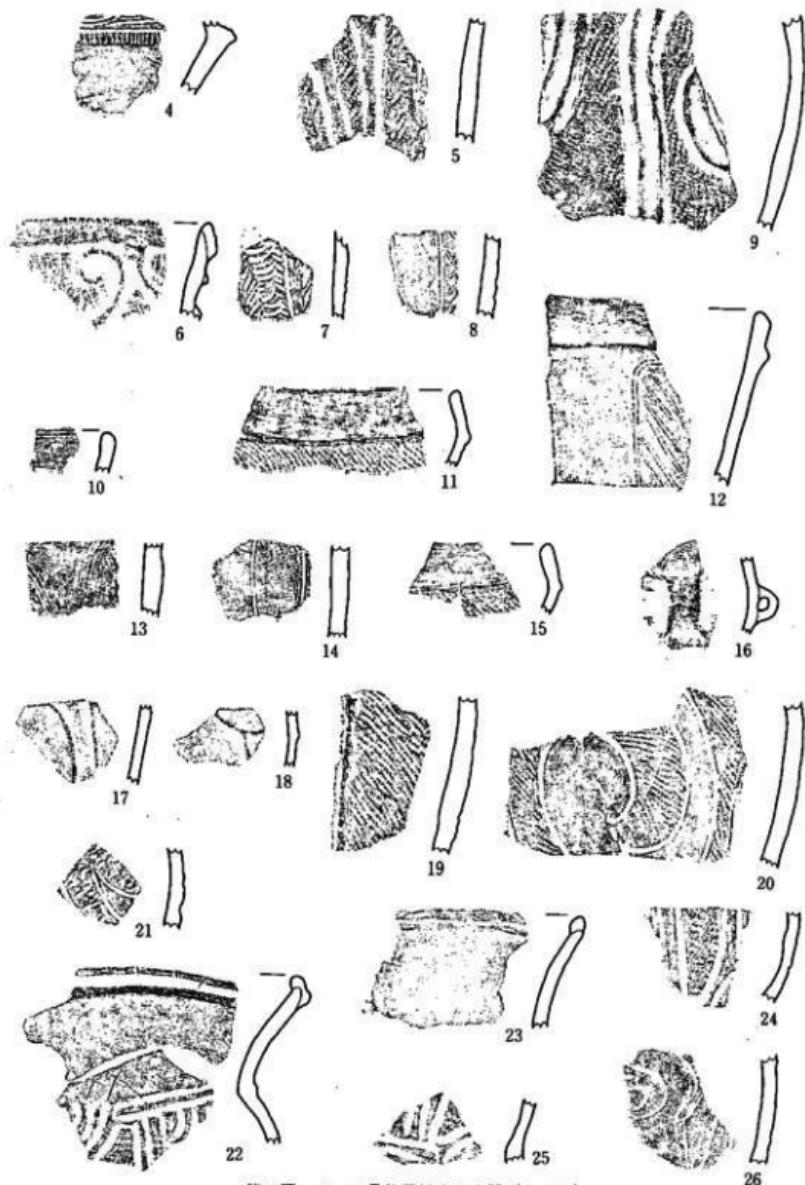
22から26は堀之内1式土器である。22は胴部が屈曲している土器で繩文を付した後に沈線文を施す。24も胴部の膨らみから同じような器形を呈するものであろう。

27は横位にヘラ状工具で綾杉文が施される曾谷式土器の胴部上半破片であろう。31から30まで底面に網代痕が残されている。29は後期前半の精製土器の底部であろうか。

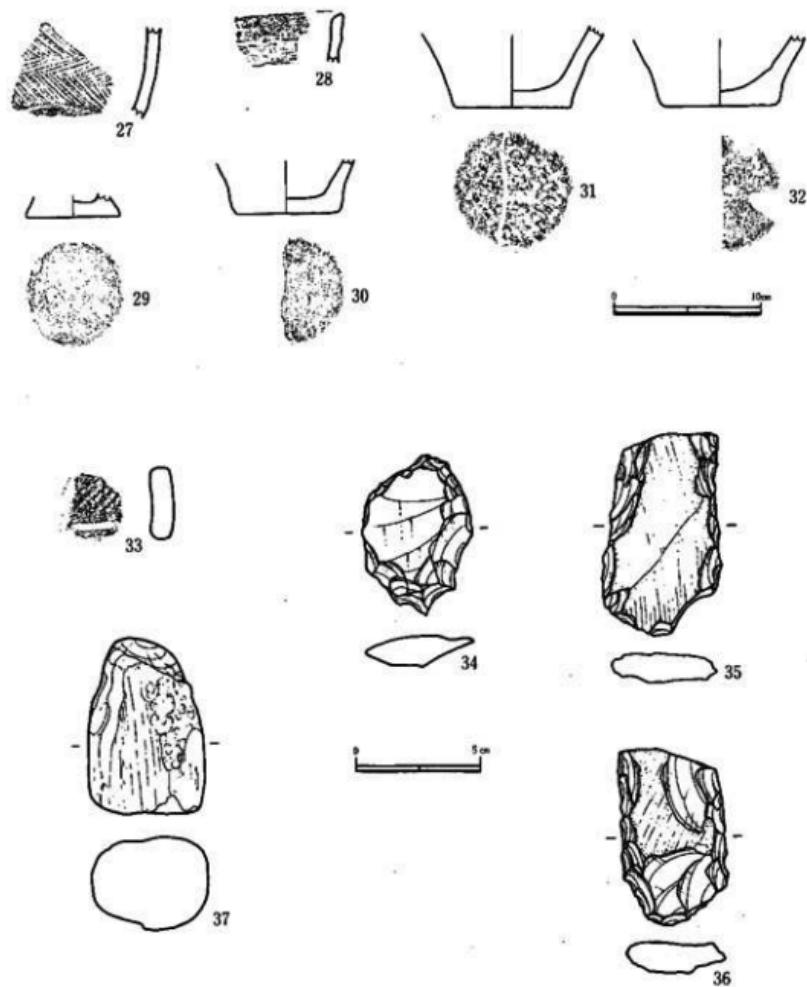
土製円盤(33)が出土したほか、石器には削器(34)・打製石斧(35・36)・石棒?(37)がある。

時期

本住居は、埋設された両耳壺(1)より加曾利E4期に位置付けられる。



第58圖 J-17號住居址出土土器 (1 : 4)



第59図 J-17号住居址出土土器 (1:4)・円盤・石器 (1:3)

第35表 J-17号住居址出土遺物一覧表<土製品・石器>

件名	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	件名	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
33	土製円盤	土 製	37	38	12	18.3		36	打製石斧	頁岩 II	94	53	16	117.1	
34	削 砕	グラス質陶	86	58	16	69.2		37	石棒(?)	綠泥片岩	93	62	48	360.2	
35	打製石斧	頁岩 II	108	63	16	151.7									(単位mm、g)

第36表 J-17号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

辨別番号	器種	部位	法量	器形および文様	胎土	色調		焼成	註記	備考
						外面	内面			
1	盞	口縁 -胴下		縄文 (LR)	風化岩片	にぼい米褐色 2.5YR4/3	明赤褐色 5YR3/2	通常	No.21	把手付
2	深鉢	把手		縄文 (-)	角閃石	にぼい褐色 7.5YR6/3	にぼい黄褐色 10YR6/4	通常		
3	盞 ?	把手		沈縄文	角閃石	にぼい褐色 5YR6/4	にぼい褐色 7.5YR6/4	通常	No.6	
4	深鉢	胴下		沈縄文、陸帯文	角閃石	にぼい褐色 7.5YR6/4	灰黄褐色 10YR5/2	良好	南	
5	深鉢	胴下		縄文 (RL)、沈縄文	角閃石	にぼい赤褐色 2.5YR5/3	にぼい褐色 7.5YR5/3	通常		
6	深鉢	胴下		沈縄文、陸帯文	角閃石	にぼい褐色 7.5YR5/4	にぼい褐色 7.5YR5/4	通常	No.1	
7	深鉢	胴上		沈縄文	角閃石	にぼい黄褐色 10YR5/3	灰黄褐色 10YR5/2	通常		
8	深鉢	胴上		沈縄文	角閃石	灰褐色 5YR4/2	にぼい褐色 7.5YR5/3	通常	南	
9	深鉢	胴上		縄文 (RL)、微隆起文	角閃石	にぼい褐色 7.5YR6/4	にぼい黄褐色 10YR7/3	通常	No.9	
10	深鉢	口縁		条縄文	角閃石	にぼい赤褐色 2.5YR5/4	灰褐色 5YR4/2	通常		
11	深鉢	口縁		縄文 (LR)、微隆起文	角閃石	にぼい褐色 7.5YR5/4	黑褐色 7.5YR3/1	通常		
12	深鉢	口縁		沈縄文、微隆起文	風化岩片	にぼい褐色 7.5YR6/4	にぼい褐色 7.5YR5/3	通常	南	
13	深鉢	胴下		縄文 (LR)、条縄文	角閃石	にぼい褐色 7.5YR6/4	にぼい褐色 7.5YR6/4	通常		
14	深鉢	胴下		縄文 (LR)、沈縄文	角閃石	にぼい赤褐色 2.5YR5/4	にぼい褐色 7.5YR5/3	通常		
15	深鉢	口縁		縄文 (LR)、微隆起文	角閃石	にぼい褐色 7.5YR6/4	にぼい赤褐色 5YR4/3	通常	南	
16	盞	把手		微隆起文	黒雲母	にぼい黄褐色 10YR2/3	灰黄褐色 10YR4/2	通常		
17	-	胴上		微隆起文	角閃石	淡黄色 2.5Y7/3	黑褐色 2.5Y3/1	良好	No.14	18と同一個体?
18	-	胴上		微隆起文	白色粒子	淡黃褐色 10YR8/3	にぼい黄褐色 10YR7/3	良好	南	17と同一個体?
19	深鉢	胴上		縄文 (LR)、微隆起文	風化岩片	にぼい褐色 7.5YR6/4	にぼい褐色 7.5YR7/4	通常		
20	深鉢	胴上		縄文 (LR)、沈縄文	角閃石	にぼい褐色 7.5YR5/3	にぼい黄褐色 10YR6/3	通常		
21	深鉢	胴上		レ点文、沈縄文	角閃石	黒褐色 10YR3/1	黑褐色 10YR2/3	良好		
22	深鉢	口縁		縄文 (LR)、沈縄文	黒雲母	灰黄褐色 10YR5/2	灰黄褐色 10YR4/2	通常	P-11	
23	深鉢	口縁		沈縄文	角閃石	淡黄色 2.5Y7/3	にぼい黄褐色 10YR7/4	通常		
24	深鉢	胴下		縄文 (LR)、沈縄文	角閃石	灰褐色 7.5YR4/2	黑褐色 7.5YR3/1	通常	P-11	

第37表 J-17号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

擇固 番号	器種	部位	法番	器形および文様	胎土	色調		焼成	註記	備考
						外面	内面			
25	深鉢	胴下		縄文(LR)、沈縄文	風化岩片	褐灰色 7.5YR4/1	黒褐色 10YR3/1	良好	P-11	
26	深鉢	胴下		縄文(LR)、沈縄文	風化岩片	にぼい橙色 7.5YR6/4	明褐色 7.5YR5/6	通常	伊	
27	深鉢	胴下		沈縄文	角閃石	灰褐色 7.5YR4/2	黒褐色 7.5YR3/1	良好		
28	深鉢	口縁		縄文(R)	風化岩片	灰褐色 7.5YR5/2	黒褐色 7.5YR3/1	良好		
29	深鉢	底	— 6.5	網代痕	黒雲母	にぼい黄褐色 10YR6/3	灰黄褐色 10YR5/2	通常	P-1	
30	深鉢	胴下 —底	— 7.5	網代痕	角閃石	にぼい赤褐色 2.5YR5/4	赤褐色 2.5YR2/1	通常		
31	深鉢	胴下 —底	— 8	網代痕	風化岩片	にぼい橙色 7.5YR6/4	にぼい黄褐色 10YR7/3	通常	No.8南	
32	深鉢	胴下 —底	— 8	網代痕	風化岩片	にぼい橙色 5YR6/4	にぼい黄褐色 10YR5/3	通常		

(18) J-18号住居址

遺構(第60図、図版9)

J-18号住居址は、みー9グリッドにかけて検出された。その大部分は、H-17号住居址の構築時に破壊されており、わずかに北壁の一部が残っていたにすぎない。また本住居址に伴う炉の下部がH-17号住居址の床面下に残っていた。本址に伴うと考えられるピットは、P₁～P₄であるが、このうちP₁～P₄住居の壁に沿って配置されているものと考えられる。また、P₄からは周溝も若干延びている。

遺物は、第21図1の位置より深鉢の底部が検出されたが、総じて本住居址に共伴すると考えられるものはわずかであった。

遺物(第61図、図版40・61)

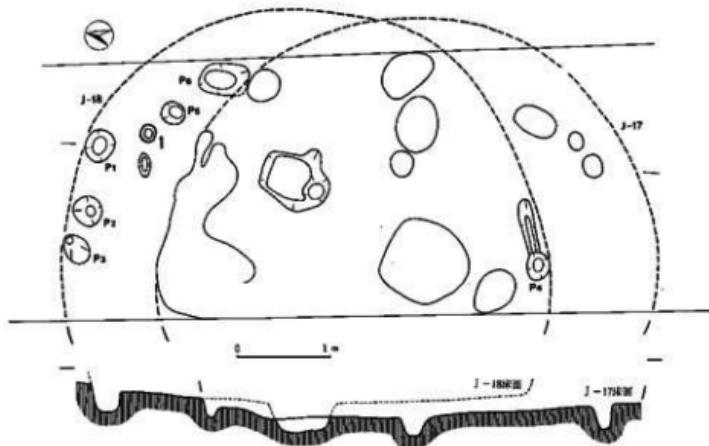
1は佐久系土器の破片であろうか。3と4は加曾利E3式土器の胴部上半分と口縁部近くの部分である。5は称名寺式土器の小破片、7はLR縄文を縦位に転がされた土器で、中期末葉から後期初頭にかけてみられるものであろう。

6は堀之内1式土器の口縁部破片である。

石器には、打製石斧(8)がある。

時期

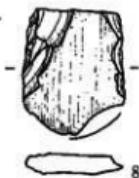
その所産期については、漠然と縄文時代中期後半としかいいようがないが、少なくとも本址を切るJ-17号住居址の所産期(加曾利E4期)より前出するものとしてとらえられることは確かであろう。



第60図 J-18号住居址実測図 (1:60)



第61図 J-18号住居址出土土器 (1:4)・石器 (1:3)



第38表 J-18号住居址出土遺物一覧表<石器>

序号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
8	打製石斧	頁岩	II	65	53	12	60.8

(単位mm、g)

第39表 J-18号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

辨別 番号	器種	部位	法量	器形および文様	胎土	色調		焼成	註記	備考
						外面	内面			
1	深鉢	縁上	—	沈線文	角閃石	に近い褐色 5YR6/4	に近い褐色 7.5YR6/4	通常		
2	深鉢	口縁	—	—	角閃石	に近い黄褐色 10YR7/3	に近い黄褐色 10YR7/3	良好		
3	深鉢	縁上	—	隆線文	角閃石	暗赤褐色 5YR3/2	灰褐色 5YR5/2	通常		
4	深鉢	縁下	—	縞文(RL)、沈線文	角閃石	に近い褐色 7.5YR6/3	に近い黄褐色 10YR7/3	通常		
5	深鉢	縁上	—	縞文(LR)、沈線文	風化岩片	に近い黄褐色 10YR7/3	灰褐色 10YR6/2	通常		
6	深鉢	口縁	—	沈線文	角閃石	に近い褐色 7.5YR6/4	に近い褐色 7.5YR7/4	良好		
7	深鉢	口縁	—	縞文(LR)	白色粒子	に近い黄褐色 10YR7/3	に近い褐色 7.5YR5/3	良好		

(19) J-19号住居址

遺構と遺物（第62図、図版10）

J-19号住居址は、む-12グリッドにおいてわずかにそのコーナーが検出されたにすぎない。そのプランは、コーナーより察すると隅丸方形を呈するものかと考えられる。

時期

伴出遺物がないためその所産期は確定できないが、おそらく縄文時代中・後期に属するものであろう。

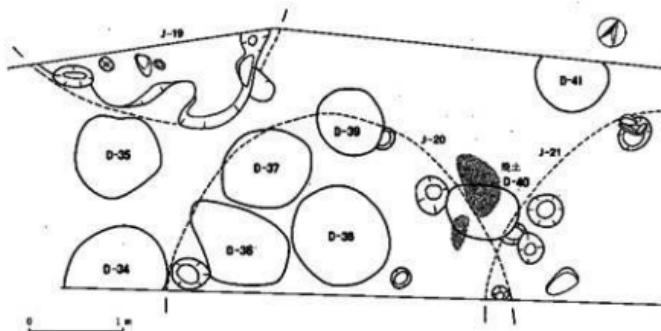
(20) J-20号住居址

遺構と遺物（第62図、図版10）

J-20号住居址は、み・む-12・13グリッドにかけて存在すると考えられる住居址である。その近辺にはJ-20と重複してD-36～D-40号土坑が存在しており、したがってJ-20のプランを正確につかむことはできなかった。なお、その付近に存在するピットのいくつかは本住居址に付随するものと考えられる。本住居址とD-36～D-40号土坑の新旧関係については把握できなかつた。

時期

本住居址の所産期は、わずかな出土遺物より縄文時代中期後葉と考えられる。



第62図 J-19・J-20・J-21号住居址実測図 (1:60)

(2) J-21号住居址

遺構 (第62図、図版10)

J-21号住居址は、みむー14グリッドにかけて存在すると考えられるもので、壁に沿うと考えられる柱穴の配列性より、そのプランを想定することができた。本住居跡は、J-22号住居址と重複するが、両者の新旧関係は明らかでない。

遺物 (第63・64図、図版41・61・64)

1から15は加曾利E4式土器に相当する。1・2・12はヘラ状工具によって胴部では鋸歯状のモチーフ内にLR縄文が充填されたものであろう。12は口縁部に微隆起文をもち、頸部に屈曲した器形を呈するものであろう。13から15は口縁部に円形刺突文をもつもので、口唇部の形状から14を除く土器は、称名寺式と考えられる。3・5・6・8は口縁部に微隆起文をもつ土器で、9から11が胴部破片である。3は第58図12と同じような土器で、ヘラ状工具で胴部に沈線文が描かれる。

16から19・21・22は称名寺式土器であろう。

16はJ字モチーフの外側に縄文が施されるようで、円形刺突文も口縁部にみられる。

20・24から26は堀之内1式土器であろう。20は隆带上に沈線文と円形刺突文がみられる。

28から31は沈線によって横位の綾杉文がみられる同一個体と考えられるもの。曾谷式土器の口縁部と胴部上半であろう。28は口唇部に刻目が施されている。

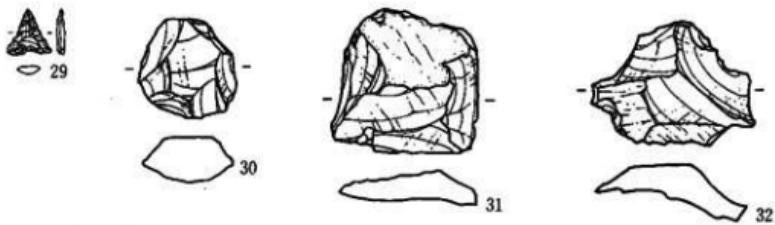
石器には、石鎌(29)・剝片(30~32)・打製石斧(33)がある。

時期

本住居址は、加曾利E4期の所産と考えておこう。



第63图 J-21号住居址出土土器 (1:4)



第64図 J-21号住居址出土石器 (29=1:2, 30-33=1:3)

第40表 J-21号住居址出土遺物一覧表<石器>

押出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	
							外面	内面
29	石 細	基岩石	15	15	3	0.4		
30	石 片	ガラス質晶 色透明	52	52	27	85.8		
31	刺 片	色透明 基岩石	77	78	18	121.9		
32	刺 片	硬質頁岩	64	84	21	96		
33	打製石斧	頁岩	65	66	19	108.8		

(単位mm, g)

第41表 J-21号住居址出土遺物一覧表<土器>

押出番号	器種	部位	法量	器形および文様	胎土	色調		焼成	註記	備考
						外面	内面			
1	深鉢	口縁		縹文(LR)、沈縋文	風化岩石片	に近い黄褐色 10YR7/3	に近い黄褐色 10YR7/3	通常		
2	深鉢	胴下		縹文(LR)、沈縋文	角閃石	に近い橙色 7.5YR7/3	に近い橙色 7.5YR7/4	通常		
3	深鉢	口縁		沈縋文、微隆起文	角閃石	に近い黄褐色 10YR7/3	に近い橙色 7.5YR7/3	通常		
4	深鉢	口縁		微隆起文	白色粒子	に近い橙色 7.5YR7/4	に近い橙色 7.5YR6/4	通常		
5	深鉢	口縁		縹文(LR)、微隆起文	風化岩石片	に近い黄褐色 10YR7/3	に近い橙色 7.5YR7/4	通常		
6	深鉢	口縁		縹文(LR)、微隆起文	白色粒子	に近い黄褐色 10YR7/3	に近い黄褐色 10YR7/3	通常		
7	深鉢	口縁		縹文(LR)、微隆起文	白色粒子	に近い橙色 5YR6/4	に近い橙色 5YR6/4	通常		
8	深鉢	口縁		微隆起文	風化岩石片	に近い橙色 5YR5/4	に近い褐色 7.5YR5/3	通常		
9	深鉢	胴上		縹文(LR)、微隆起文	風化岩石片	に近い橙色 7.5YR7/4	に近い橙色 7.5YR6/4	通常		
10	深鉢	胴上		縹文(LR)、微隆起文	風化岩石片	に近い橙色 5YR7/4	に近い橙色 5YR7/4	通常		
11	深鉢	胴上		縹文(LR)、微隆起文	角閃石	に近い橙色 7.5YR6/4	褐色 5YR6/6	通常		
12	深鉢	口縁		縹文(LR)、微隆起文	角閃石	灰褐色 7.5YR4/2	に近い褐色 7.5YR5/4	通常		

第42表 J-21号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

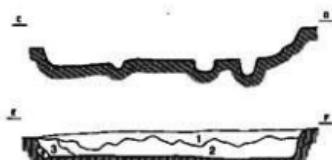
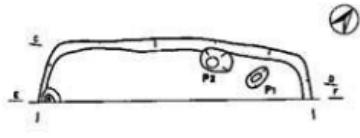
井田 番号	器種	部位	法面	器形および文様	胎土	色調		焼成	註記	備考
						外面	内面			
13	深鉢	口縁		円形刺突文	風化岩片	にぼい黄褐色 10YR7/3	にぼい黄褐色 10YR7/4	通常		
14	深鉢	口縁?		沈線文、円形刺突文	角閃石	にぼい黄褐色 10YR7/3	にぼい黄褐色 5YR6/4	通常		
15	深鉢	口縁		沈線文、円形刺突文	角閃石	にぼい褐色 7.5YR6/4	にぼい黄褐色 10YR6/4	通常		
16	深鉢	口縁		縹文(LR)、沈線文、円形刺突文	角閃石	にぼい黄褐色 10YR7/4	灰黄褐色 10YR5/2	通常		
17	深鉢	胴上		縹文(LR)、沈線文	角閃石	にぼい黄褐色 10YR6/4	にぼい黄褐色 10YR6/4	通常		
18	深鉢	胴上		縹文(LR)、沈線文	角閃石	にぼい褐色 7.5YR5/3	にぼい黄褐色 10YR7/4	通常		
19	深鉢	胴上		縹文(LR)、沈線文	角閃石	灰褐色 7.5YR5/2	灰褐色 7.5YR4/2	良好		
20	深鉢	胴上		貼付文	角閃石	浅黄褐色 10YR8/3	にぼい黄褐色 10YR7/3	通常		
21	深鉢	胴上		縹文(LR)、沈線文		灰黄褐色 10YR5/2	にぼい黄褐色 10YR7/3	通常		
22	深鉢	胴上		縹文(LR)、沈線文		にぼい褐色 7.5YR5/3	灰黄褐色 10YR6/2	良好		
23	深鉢	胴上		縹文(LR)、微隆起文?	角閃石	にぼい褐色 7.5YR6/4	にぼい黄褐色 10YR7/3	良好		
24	深鉢	口縁		沈線文、円形貼付文	角閃石	にぼい黄褐色 10YR7/4	にぼい黄褐色 10YR7/4	通常		
25	深鉢	口縁		沈線文、円形刺突文	風化岩片	にぼい黄褐色 10YR7/4	にぼい黄褐色 10YR7/4	通常		
26	深鉢	口縁		円形刺突文?	風化岩片	にぼい黄褐色 10YR7/4	にぼい黄褐色 10YR7/4	通常		
27	—	底		網代質	風化岩片	にぼい黄褐色 10YR7/4	にぼい黄褐色 10YR7/4	通常		
28	深鉢	胴上		沈線文	角閃石	にぼい褐色 7.5YR6/4	にぼい褐色 7.5YR5/3	通常		

(22) J-22号住居址

遺構と遺物(第65・66図、図版11・61・64)

J-22号住居址は、み・む-14グリッドにおいて、J-21号住居址と重複して検出された。前述したように、J-21とJ-22の新旧関係は明らかでない。本住居址は、北壁付近の一部が検出されたにすぎず、大半は調査区外である南側へ逃れるが、そのプランはおおよそ隅丸方形を呈するものであることが理解できる。

さて、本住居より検出された遺物はごくわずかであるが、石器には、石錐(1)・打製石斧(2)がある。



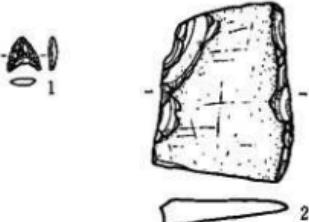
1. 黒色土層 粘性なくバサバサしている。バミスを含む。
2. 暗色土層 粘性なくバサバサしている。バミスを含む。
3. 褐色土層 ローム層のブロック状堆積。

第65図 J-22号住居址実測図 (1:60)

第46表 J-22号住居址出土遺物一覧表<石器>

序号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	石鏸	黒曜石	11	10	13	0.2	
2	打削石斧	頁岩	92	71	13	131.5	

(単位mm, g)



第66図 J-22号住居址出土石器
(1=1:2, 2=1:3)

時期

本住居址の所産期は、縄文時代中期後葉とみておこう。

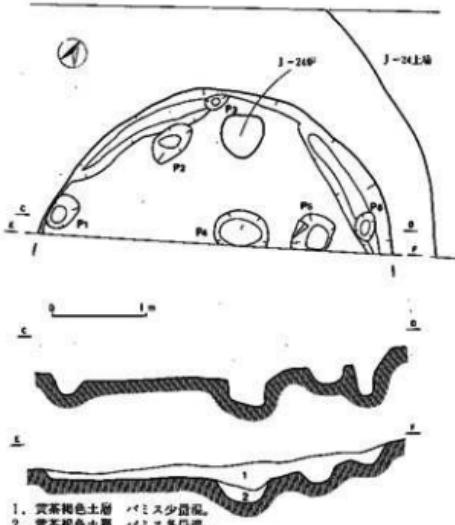
(23) J-23号住居址

造構と遺物（第67図、図版11）

J-23号住居址は、みー18グリッドにかけて検出されたもので、その上部はJ-24号住居址構築に破壊されている。本住居址はその半分が南側の調査区外に逃がれるが、残った部分よりほぼ円形を呈する住居であることが察せられる。住居址の壁際には周溝やピットも認められるが、炉は検出できなかった。おそらく調査区外に存在するのであろう。

時期

J-23に共伴する遺物は、現段階で



第67図 J-23号住居址 (1:60)

は抽出できず、したがってその所産期も確定し難いが、縄文時代中期後葉から後期にかけてのものとみて大過なかろう。

(24) J-24号住居址

遺構 (第68図、図版12)

J-24号住居址は、みー19グリッドにかけて検出されたもので、J-23を破壊して構築されていた。本住居址において確認されたのは、東壁と炉で、西壁やピットなどを検出することはできなかった。炉は、7つの河原石（安山岩）により丸く囲われたもので、その内法は30cm×20cm前後と測定した。炉の覆土においては炭化物粒子や炭化材がみられた。

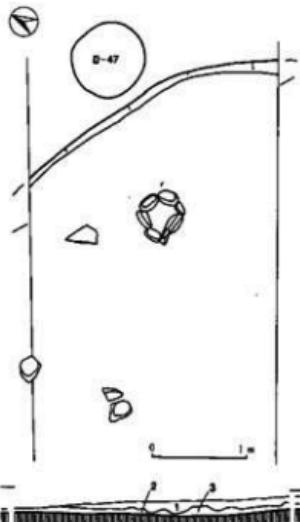
本住居址より出土した遺物は、縄文時代中期後半に属するものである。したがってその所産期も縄文中期後半と考えられるが、より詳細な時期については遺物の検討を経た後に触れたい。

遺物 (第70・71図、図版41・42・61・63)

1・3・5・12から17は加曾利E3式土器である。1と13から17は磨消縄文が施され、13と14は並行沈線文の間に蕨手文が描かれている。1もおそらく縄文の上に蕨手文が施されているであろう。16は地文が条線文であるが、口縁部文様帶に楕円区画や渦巻き文が施される土器の一部であろう。4・6・7・11は唐草文系あるいは佐久系土器であろう。9と10は、先の加曾利E3式土器の文様構成をとる可能性も考えられる。

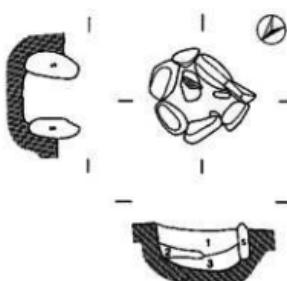
19は堀之内1式土器で、LR縄文に蛇行沈線文が描かれている。

石器では、打製石斧 (20~26) が数多く検出されているほか、叩き石 (27) がある。



1. 緑色土層 粒子細かく粘性なし、バミスを含む。
2. 錆色土層 粒子細かく粘性なし、バミスを含む。
3. 黒色土層 粒子細かく粘性なし、バミスを含む。

第68図 J-24号住居址 (1:60)



1. 緑色土層 カーボン粒子を含み、バサバサしている。
2. ロームブロック
3. 錆褐色土層 しまりがなく、バサバサしている。

第69図 J-24号住居址炉実測図 (1:30)



第70図 J-24号住居址出土土器 (1:4)

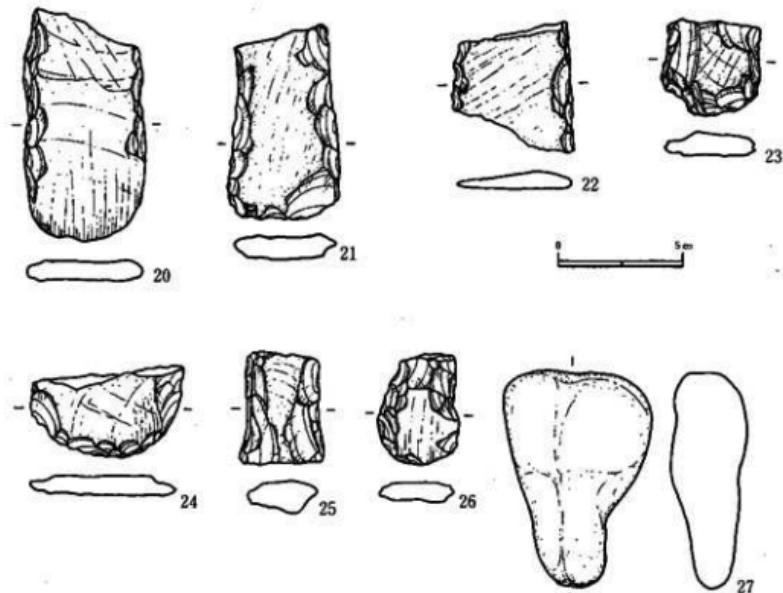
第44表 J-24号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

件番号	器種	部位	法量	器形および文様	胎土	色調		焼成	注記	備考
						外面	内面			
1	深鉢	脚下 ～底	— ?	縹文 (RL)、沈縞文	角閃石	明赤褐色 5YR5/6	に近い赤褐色 5YR4/3	通常	No14r-38	
2	深鉢	把手	?		角閃石	に近い黄褐色 10YR7/4	に近い褐色 7.5YR7/4	通常		穿孔
3	深鉢	口縁 ～脚下		縹文 (RL)、横縞文	黒雲母	明赤褐色 5YR5/6	に近い褐色 7.5YR5/3	通常	No3	
4	深鉢	口縁		沈縞文、陰帶文	角閃石	に近い褐色 7.5YR6/4	に近い黄褐色 10YR6/3	通常	No16, 22	
5	深鉢	口縁		沈縞文、陰帶文	角閃石	褐色 7.5YR4/3	に近い黄褐色 10YR6/4	通常	No13	
6	深鉢	口縁		沈縞文、陰帶文	角閃石	に近い褐色 7.5YR5/3	に近い褐色 7.5YR5/3	通常	No13	
7	深鉢	口縁		沈縞文、陰帶文	白色粒子	に近い赤褐色 5YR5/4	に近い褐色 7.5YR6/4	通常	No3, 6, 14	
8	深鉢	口縁		沈縞文	白色粒子	に近い黄褐色 10YR6/4	に近い黄褐色 10YR6/3	通常	No10	
9	深鉢	脚下		縦縞文	角閃石	に近い黄褐色 10YR7/4	に近い黄褐色 10YR6/3	通常	No17	
10	深鉢	脚下		縦縞文	角閃石	に近い褐色 7.5YR6/4	に近い黄褐色 10YR6/3	通常	No16	
11	深鉢	脚下		沈縞文	角閃石	に近い褐色 7.5YR5/3	に近い褐色 7.5YR5/3	通常		
12	深鉢	脚上		縦縞文	角閃石	に近い褐色 7.5YR5/3	に近い褐色 7.5YR5/3	通常		
13	深鉢	口縁		縹文 (RL)、沈縞文	角閃石	に近い黄褐色 10YR5/3	に近い黄褐色 10YR5/3	通常	No3	
14	深鉢	口縁		縹文 (RL)、沈縞文	角閃石	に近い赤褐色 5YR5/4	に近い褐色 7.5YR5/3	通常	No18	
15	深鉢	脚下 ～底	— 8	縹文 (RL)、沈縞文	白色粒子	褐色 SYR6/6	に近い黄褐色 10YR7/3	通常	No5	
16	深鉢	脚上		条縞文、沈縞文	角閃石	に近い黄褐色 10YR7/3	に近い黄褐色 10YR6/4	通常	No9	
17	深鉢	脚上		縹文 (RL)、沈縞文	角閃石	に近い褐色 7.5YR5/4	黒褐色 7.5YR3/1	良好		
18	深鉢	脚上		縹文 (RL)、沈縞文	角閃石	に近い褐色 7.5YR6/4	に近い褐色 7.5YR6/4	通常		
19	深鉢	脚上		縹文 (LR)、沈縞文	角閃石	明褐色 7.5YR5/6	赤褐色 2.5YR4/6	通常	No20	

第45表 J-24号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

件番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考	件番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
20	打製石斧	頁岩 II	119	64	13	140.4		24	打製石斧	頁岩 II	46	81	12	59.7	
21	打製石斧	頁岩 II	101	59	16	136.1		25	打製石斧	頁岩 II	59	44	18	67.2	
22	打製石斧	頁岩 II	68	61	9	46.9		26	打製石斧	頁岩 I	58	43	15	41.4	
23	打製石斧	頁岩 II	48	50	12	47.6		27	叩石	安山岩	111	77	39	311.6	

(単位mm, g)



第71図 J-24号住居址出土石器 (1:3)

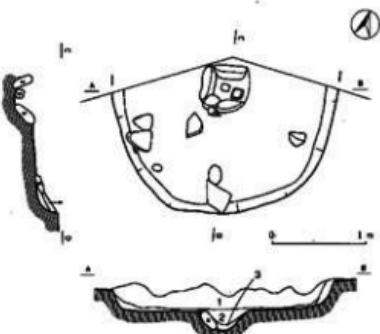
時期

本住居址の所産期は、縄文時代中期後半
加曾利E3式期と考えられよう。

(25) J-25号住居址

遺構 (第72図、図版13)

J-25号住居址は、みー20グリッドにおいて検出された。住居址の約半分が検出されたのみで、その半分は調査区外である北側に逃れるが、円形のプランを呈するものであることが理解でき、他と比べて小形であることがいえる。炉は、住居中央において検出された。河原石と角礫が四方に配された石囲い炉であるが、その東辺の角礫は



1. 黒色土層 駆子細かく粘性無し。
2. 黒色土層 燐土、カーボンを含む。
3. 晴黒色土層 若干のカーボンを含む。

第72図 J-25号住居址実測図 (1:60)



第73図 J-25号住居址出土土器 (1:4)

炉内に崩落していた。炉の覆土中には、若干のカーボンと焼土がみられた。住居の床面はフラットな状態を呈し、堅く締まっていた。住居址内には鐵平石が若干みられた。なお本住居址に付随すると考えられるピットは検出されなかった。

遺物（第73図、図版42）

1から7はから唐草文系か佐久系土器であろう。1は大形の把手部分に渦巻き文を施し、沈線を充填させている。9は加曾利E3式土器の胴部破片である。

10から13は同一個体で、ヘラ状工具で蛇行する沈線が描かれている粗悪な土器である。

時期

本住居址の所産期は、縄文時代中期後葉加曾利E3式期と考えられよう。

第46表 J-25号住居址出土遺物一覧表(土器)

探査番号	器種	部位	法量	器形および文様	胎土	色調		焼成	註記	備考
						外面	内面			
1	深鉢	口縁		沈線文、縦帯文	角閃石	にぼい褐色 7.5YR5/4	にぼい褐色 7.5YR6/4	通常	No.3	
2	深鉢	腹上		沈線文、縦帯文	角閃石	にぼい黄褐色 10YR7/3	淡黄色 2.5YR8/3	通常		
3	深鉢	口縁		沈線文、縦帯文	角閃石	明赤褐色 2.5YR5/6	にぼい褐色 5YR6/6	通常		
4	深鉢	腹上		沈線文	角閃石	にぼい黄褐色 10YR7/4	にぼい黄褐色 10YR7/3	通常	I層	
5	深鉢	腹上		沈線文、縦帯文	角閃石	にぼい赤褐色 5YR5/3	明赤褐色 5YR6/6	通常	No.5	
6	深鉢	腹上		沈線文、縦帯文	風化岩片	にぼい褐色 7.5YR6/4	明赤褐色 2.5YR5/6	通常	No.11	
7	深鉢	腹上		沈線文、縦帯文	角閃石	暗赤灰色 2.5YR3/1	にぼい赤褐色 2.5YR4/4	通常		
8	深鉢	腹下		沈線文	角閃石	褐色 7.5YR7/6	にぼい黄褐色 10YR5/3	通常	I層	
9	深鉢	腹下		縞文(RL)、沈線文	角閃石	にぼい褐色 7.5YR6/4	灰黃褐色 10YR5/2	通常	No.4	
10	深鉢	腹		沈線文	風化岩片	にぼい褐色 7.5YR5/3	にぼい褐色 7.5YR6/4	通常		11.12.13と同一個体
11	深鉢	腹		沈線文	風化岩片	褐色 5YR6/6	褐色 5YR6/6	不良		10.12.13と同一個体
12	深鉢	腹		沈線文	風化岩片	にぼい褐色 7.5YR6/3	にぼい褐色 7.5YR6/4	通常	No.12	10.11.12と同一個体
13	深鉢	腹		沈線文	風化岩片	褐色 7.5YR6/6	褐色 7.5YR6/6	通常	No.4-13 J-26	10.11.12と同一個体

(26) J-26号住居址

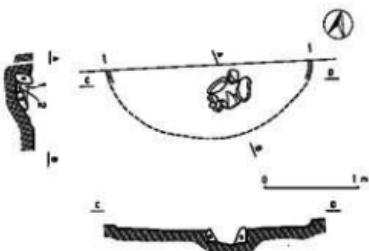
遺構と遺物(第74-75図、図版14・42・62)

J-26号住居址は、みー22グリッドにおいて検出された。遺構は、東壁及び西壁の一部と炉が検出されたにすぎないが、J-25と同様小形円形の住居址であることが推察された。炉は、河原石による石囲い炉で、内法は25cm×15cm程度となっている。

遺物は、縄文時代中期後半の土器片がわずかに3片と、打製石斧1点(3)検出されたにすぎない。

時期

本住居址の所産期は、縄文時代中期後葉とみておこう。



1. 暗色土層 粘性なくバサバサしている。
2. 明褐色土層 硫土、カーボンを含み、粘性なくバサバサしている。

第74図 J-26号住居址実測図(1:60)

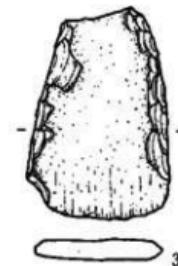
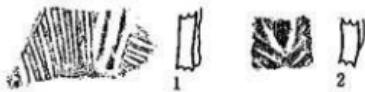
第47表 J-26号住居址出土遺物一覧表〈土器〉

種類 番号	器種	部位	文様	胎土	色調		焼成	註記	備考
					外 面	内 面			
1	深 鉢	脚 下	沈線文、藤蔓文	白色粒子	灰褐色 7.5YR4/2	にほい褐色 7.5YR5/4	通常		
2	深 鉢	脚 下	沈線文	白色粒子	にほい黄褐色 10YR4/2	にほい黄褐色 10YR6/4	通常	伊	

第48表 J-26号住居址出土遺物一覧表〈石器〉

種類 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
3	打製石斧	頁岩	HII	110	74	12	128

(単位mm、g)



第75図 J-26号住居址出土土器(1:4)・石器(1:3)

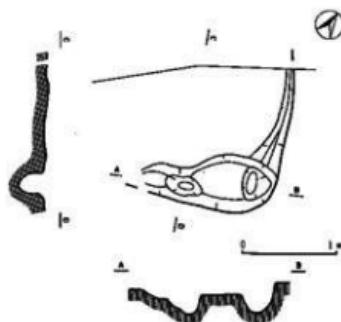
(27) J-27号住居址

遺構と遺物(第76図)

J-27号住居址は、むしろ15グリッドにおいてわずかにそのコーナーと周溝の一部が検出されたにすぎない。コーナーより察すると、その形態は隅丸方形をとるものと考えられる。

時期

本住居址に共伴する遺物はなく、したがって所産期も不明と言わざるを得ない。



第76図 J-27号住居址実測図(1:60)

2 土 坑

宮平遺跡において土坑等は、52基が検出された。本遺跡には、縄文中後期以外の造構・遺物は確認されていないので、遺物の伴わない土坑も基本的には、縄文中後期の所産とみてよい。

(1) D-1～D-5号土坑 (第82図、図版15)

D-1号土坑からD-5号土坑は、あ・い・う-1・2グリッドより検出された。

D-1は、方形に近い円形を呈するもので、その断面は扁平な台形状を呈する。出土遺物は、縄文時代中期の土器片30点前後である。

D-2は、不整円形を呈する土坑で、その一部はD-3と重複するが、両者の新旧関係は明らかでない。出土遺物はほとんどなく、所産期も不明である。

D-3は、北側においてD-2と接し、南側は調査区外へ延びるが、そのプランはほぼ椭円形を呈するものと考えられる。遺物は、縄文時代中期後半と考えられる土器片が数多くみられるため、ほぼその頃の遺構と考えられよう。

D-4は、ほぼ円形を呈する土坑で、その断面は扁平な台形状を呈している。一部は、D-5と接するが、両者の新旧関係は不明である。遺物は第86図4がある。

D-5は、D-4に接して検出された円形を呈する土坑である。出土遺物には、縄文時代中期後半加曾利E式と、後期加曾利B1式の二者がみられ、いずれが本土坑に共伴するのかはわからない。なお、掘り方より、D-4とD-5の接点にもう1基土坑が存在する可能性がある。

(2) D-6・D-7・D-8号土坑 (第82図)

D-6・D-7・D-8号土坑は、う・え-2・3グリッドにかけて検出された。

D-6は、径1m前後のほぼ円形を呈し、断面は扁平なカマボコ状を呈する土坑である。縄文時代中期の土器片が数点出土している以外遺物はみられない。

D-7は、円形を呈すると考えられるもので、D-8と重複するが、両者の新旧関係はとらえられなかった。断面は浅いすり鉢状を呈する。出土遺物はない。

D-8は、角のとれた方形を呈する土坑で、ピット1個を伴う。出土遺物はみられない。

(3) D-9・D-10・D-11号土坑 (第82図、図版15)

D-9・D-10・D-11号土坑は、か-3グリッドにおいて重複して検出された三者の新旧関係は、古い順からD-9・D-11→D-10となり、さらに近接するJ-2号住居址は、D-10

よりも新しいものと考えられる。

D-9は、J-2とJ-10に破壊され、その一部を失っているが、その形態は不整橢円形をとるものと考えられる。土坑内には、鉄平石がみられたほか、加曾利E2式と考えられる土器片(8)が検出されたが、本遺構に伴うものかどうか明らかでない。

D-10は、D-9及びD-11を切るもので、ピットを1個伴う。

D-11は、その一部はD-10に破壊され一方は調査区外へと逃がれるもので、断面は台形状を呈する。D-11内からは、14の土器が検出された。14は胴部から口縁部にかけてほぼ直線的に開く器形で、口縁部に渦巻き文と橢円区画内に沈線文が充填され、胴部では沈線文でU字状のモチーフや渦巻き文や蕨手文がみられる。加曾利E3式古段階併行の土器で、本土坑の所産期も同時期と考えてよいであろう。

(4) D-12・D-13・D-14号土坑 (図版15)

D-12号土坑は、く-4グリッドにかけて検出されたもので、その半分は調査区外へ逃がれるが、プランはほぼ円形を呈するものと考えられる。

D-13は、欠番。

D-14号土坑は、け-5グリッドにかけて検出された上面に礫を伴う円形の土坑である。D-14は、J-7(加曾利E3期)を破壊して構築され、J-5(加曾利E3式期)に切られている。J-7・J-5ともに加曾利E3期併行の住居址で、それらの間に位置する本土坑もまた加曾利E3期併行と考えられよう。

(5) D-15・D-16号土坑 (第83図、図版15)

D-15号土坑は、し-6グリッドにおいて検出された。橢円形を呈すると考えられるプランの約半分が検出されたが、その上部には礫がみられた。断面は、角のとれた凸状を呈する。出土遺物は、佐久系の土器(15・17)が検出されている。加曾利E3式期と考えられる。

D-16号土坑は、し-5グリッドにおいて円形あるいは橢円形を呈すると考えられるプランの半分が検出された。その断面はカマボコ状を呈し、一部にはテラスをもつものであった。出土遺物は、加曾利E式の土器片が数点みられたにすぎず、所産期は不明。

(6) D-22・D-23・D-24号土坑 (第83図、図版16)

D-22号土坑は、の-7グリッドにおいて検出された。角のとれた方形プランを呈し、その断面形は浅いすり鉢状を呈するものと考えられる。なお、本土坑はJ-14号住居址(縄文中期終末～後期初頭)のピットに切られており、したがって所産期もそれ以前と考えられる。

D-23号土坑は、ひ・ふー7グリッドにおいて検出された土坑で、J-15号住居址と重複するが、両者の新旧関係は明らかでない。そのプランは半分が検出されたにすぎないが不整形を呈し、断面は浅いすり鉢状を呈する。その上部には鉄平石がみられたが、これはJ-15に關わる數石の一部であろう。遺物は、縄文時代中期後半と後期初頭の土器片が数多く検出されており、所産期もほぼその頃と考えられる。

D-24号土坑は、ふー8グリッド、J-15号住居址内において検出された土坑である。J-15との切り合い関係は不明解で、あるいはJ-15の貯蔵穴である可能性も残る。形態は、ほぼ円形を呈し、断面は下場までストンと落ちた状態を呈している。本土坑の上部には疊数点がみられるが、これはJ-15に伴うものなのかもしれない。

(7) D-25・D-26・D-27号土坑 (第83図、図版16)

D-25・D-26・D-27号土坑は、みー9・10グリッドにかけて検出された。

いずれも不整形を呈する土坑で、1個ないし2個の柱穴を伴っており、一連のものとも推察される。出土遺物は全くみられず、所産期は明らかでない。

(8) D-28~D-40号土坑 (第84図、図版16)

D-28~D-40号土坑は、み・むー11・12・13グリッドにかけて集中する。

D-28~D-33は、円形あるいは横円形を呈する小形のもので、断面はカマボコ状あるいは浅いすり鉢状を呈するものがほとんどといえる。これらは、土坑というよりピットと呼称するほうがふさわしいかもしれない。

D-34・D-35は、径1m前後を測る不整円形の土坑で、その断面はカマボコ状を呈する。D-34からは、76の曾谷式土器、77の4単位の把手をもつ三十稻場式の浅鉢形土器が出土している。

D-36は、不整横円形を呈するもので、断面はすり鉢状を呈する。遺物は、縄文時代中期後葉の土器片が数点みられるにすぎない。

D-37は、ほぼ円形のプランを有する土坑で、断面は台形状を呈する。土坑内には疊がみられ、縄文時代中期末葉から後期初頭の土器片が検出された。

D-38は、径1m前後の円形のプランをもつ土坑で、断面はカマボコ状を呈する。

D-39は、径70cm前後の円形プランを呈する土坑で、断面はカマボコ状となっている。覆土中には若干のカーボンが認められた。遺物は検出されなかった。

D-40は、長軸80cm・短軸60cmを測る横円形の土坑で、その断面はカマボコ状を呈する。本土坑の上面には焼土が認められたが、本址に伴うものかどうかは不明である。遺物は検出されなかつた。

なお、D-36～D-40は、J-20号住居址と重複するが、両者の新旧関係は不明である。

(9) D-41号土坑 (第84図、図版16)

D-41号土坑は、む-13グリッドにおいて検出された。そのプランの一部は調査区外に逃がれるが、径70cmを測る円形をとり、断面形は下ぶくれの袋状を呈し、深さ60cmを測る。本土坑内からは、礫とともに深鉢1個体(96)が検出された。96は、口縁に微隆起文が横走する中期末葉から後期初頭の土器で、本土坑の所産もその時期とみてよいであろう。

(10) D-42号土坑 (第84図、図版16)

D-42号土坑は、む-17グリッドにおいてそのプランの半分が確認された。断面はカマボコ状を呈し、深さ約90cmを測るものである。覆土は、7層によって形成されるが、その中には焼土の堆積もみられた。遺物は、加曾利E3式土器などが出土した。

(11) D-43～D-46号土坑 (第85図、図版17)

D-43～D-46号土坑は、み-18グリッドにかけて検出された。

D-43号土坑は、不整形の土坑でその断面は台形状を呈するものである。一部がD-44と重複するが、両者の新旧関係は不明である。

D-44は、D-43と重複する土坑で、そのプランは不整円形をとり断面は盤状を呈するものである。

D-45号土坑は、D-46号土坑を切って存在するもので、そのプランの一部が検出されたにすぎない。上部には、礫2点がみられ、遺物は縄文中期後葉の土器片2点が検出された。

D-46号土坑は、D-45に切られる土坑であるが、そのプランの一部検出にとどまった。出土遺物は、縄文時代中期後葉の土器数片である。

(12) D-47号土坑 (第85図)

D-47号土坑は、み-19グリッドにおいて検出された。そのプランはほぼ円形で、断面は半円状を呈する。出土遺物はない。

3 炉を伴う土坑

(1) D-48号土坑 (第85図、図版17)

D-48号土坑は、ま-22グリッドにおいて検出された。本址は石囲い炉を伴い、規模的にも隣

接するJ-26号住居址とはほぼ同等であるが、そのプランはあまり整わらず、床面と考えられるフラットな面も一部のみで、他は凸凹の激しいものであった。したがってこれを、日常の居住を伴う「住居址」とは考えず、土坑として把握することにした。

D-48は、ハート形の崩れたようなプランを呈するもので、その北半分には三日月状にフラットな面がみられ、南半分は凸凹が激しくなっている。炉は北半分のフラットな面において構築されたもので、河原石2個と鉄平石2個によって方形に囲われている。炉の覆土においては、焼土、炭化物等は認められなかった。

出土遺物には、加曾利E3式土器があり、土坑の帰属時期を示している。

4 灰及び骨片を伴う土坑

(1) D-50号土坑 (第85図、図版18)

D-50号土坑は、さ-5グリッドにおいて検出された。そのプランは、長軸1.7m短軸1.3mを測る楕円形をとり、断面形は深さ20cm前後を測る盤状を呈している。覆土は2層によって形成されるが、ことに第2層は埋土と考えられる。第1層は、黒褐色土層で炭化物・灰を含む層である。この1層中からは大量の骨片が検出された(図版18)。第2層は灰層で、多量の炭化物を含む層である。その上部には骨片の分布がみられた。このようなセクションの状況から推察すると、本土坑においては、まず灰が大量に廃棄され、続いて骨及び骨片が廃棄されたものと考えられる。

本土坑及び後述するD-52号土坑から検出された骨は、一部には焼けているものもみられたが、そのほとんどは被熱していないものである。これらの骨はすべて獣骨であろうと推測され、宮崎重雄氏の同定によるとその中には、シカ・イノシシ・クマ・カエル等の骨がみられるようである。

以上を勘案すると、本址の性格が“ゴミ捨て場”であったことが理解できる。灰は炉の使用等に伴なって廃棄されたものであり、獣骨はその肉が食された後の残物であろう。本址より検出された骨の個々をより細かく同定すれば、当該期における動物性食料摂取の実態がより明確なものとなってくると思われる。

さて、本土坑からは石鎚の他、堀之内1式の土器片が検出された。なお、後述するD-52も本土坑と同様な性格をもつものであり、その出土遺物が双方とも堀之内1式であることからも、両者は共存していたものと考えられる。

(2) D-52号土坑 (第85図、図版19)

D-52号土坑は、し-5グリッドにおいて検出された。そのプランは楕円形を呈するものと思われるが、約半分が調査区外へ逃がれてしまっていた。断面形は、総体的には深さ60cm前後を測

る逆台形状を呈し、底面においてはピット 2 個が認められた。

D-52の覆土は 7 層から成り立っている。第 1 層は灰層である。第 2 層は、灰はみられないが骨片を含む層である。第 3 層は骨片を多量に含む層で、第 4 層は骨片を含み灰をごく少量伴う層である。5 層は灰を多量に含む層で、6 層は灰層、7 層は不明である。また、遺物は覆土全体に及んで分布するが、特に第 4 層に集中する傾向がうかがえる。骨は、第 2 層から 5 層にかけて分布するが、特に 3 層・4 層に集中するようである。このセクションより、本遺構の覆土の堆積の経緯を追ってみると、まず 7 層が埋められた後、灰である 6 層・5 層が埋められ、4 層の埋土とともに土器片と骨片が廃棄される。3 層にあっては骨が主となり、2 層においても廃棄された骨がみられる。1 層は再び灰の廃棄によって形成されていることがとらえられる。

本址にみられる骨も、D-50 と同様獸骨で、その肉が食された後廃棄されたものであろう。その種類については今後詳細な同定が必要となる。

さて、本址から検出された遺物には、多量の土器片とともに、土偶の胸部・磨製石斧（第113図2）・打製石斧（3）がみられた。また 5 層直上において無文の無頸壺が検出され（第49図133、図版19）、ほぼ完形に復元された。これは、おそらく破損のため廃棄されたものであろう。

さて、本遺構は多量に検出された土器片により、壠之内 1 式期と考えられよう。そして、その性格の近縁性より、本土坑と D-50 とは共存関係にあったものとしてとらえることができる。

5 土 坑 墓

(I) D-19号土坑墓（第79図、図版20）

D-19号土坑墓は、て-8 グリッドにおいて検出された。プランは角のとれた方形を呈するものと考えられるが、その半分は調査区外へ逃がれてしまっている。また、その南側は、D-49に切られている。南北の断面をみると、北側にテラスをもつ階段状となっていて、その深さは 50cm 前後を測る。このテラスには、鉄平石 1 個が置かれその上に深鉢が伏された状態で出土した（図版20）。深鉢の中には骨片がみられた。この骨片は未同定であるが、このような出土状況を考えると、この骨が埋葬された人骨であろうことが推測される。しかし、深さ 16cm 最大径 21cm を測るこの深鉢においては、到底人骨は納めきれず、ましてや人体の一部も納まるものではない。したがって、本址は洗骨の一部を納めた再葬墓と考えられよう。なお骨は、鉢内にみられるのみで、土坑の覆土からは検出されなかった。また、本址に伴う副葬品等は検出されなかった。

さて、本土坑から検出された深鉢（第90図59、図版45・59）は、朝顔形の形態をとる薄手のもので、口辺部及び胴部に沈線の格子がみられる土器である。型式的には、加曾利 B 2 式もしくは B 3 式ととらえられよう。

6 石棺墓

(I) D-17・D-18・D-20・D-21号石棺墓 (第77図、図版21・22)

D-17は、つ-7グリッドにおいてそのコーナーが検出された。森泉山産と考えられる扁平な石材(安原石とも呼ばれる。敷石住居の敷石とは異なり、やや厚手で角がとれている。)を、連立したもので、調査区外において一周する方形の石囲いとなるものと思われる。その底面においては敷石は認められなかった。なお、遺物はみられなかった。

D-18号石棺墓は、D-17の北側において検出された。D-17と同様方形の石囲いになるものと思われるが、その東部は調査区外へ逃がれていた。石列は、その南辺においては若干乱れていた。底面における敷石等はみられず、遺物は認められなかった。

D-20号石棺墓は、D-18の東北側に位置するものであるが、他の三者のように密な石組みとはなっていない。あるいは後世においてその石材の一部が抜き取られた可能性も残る。出土遺物は認められなかった。

D-21号石棺墓は、前三者とは若干距離をおいた、な-7グリッドにおいて検出された。石棺墓のコーナーの一部が検出されたのみで、その大半は調査区外である西側へ逃がれていた。本址においては石列は二重に巡らされていたものと考えられる。本石囲い内からは、磨石1点と凹石1点が検出された。

さて、今回の宮平遺跡の調査によって、4基の石棺墓が確認されたわけであるが、これらは隣接して存在すること、主軸方向がほぼ北を指し一致すること、同様な構造をもつことなどにより、同一時期の所産と考えられる。しかし、その所産期を示す遺物を検出することはできなかった。ところで、本遺跡のある湯川水系の上流に位置する軽井沢町茂沢南石窓遺跡からは、本例の同様の石棺墓が検出されている(第1地点配石遺構域1号遺構)。この石棺墓は本例と比べると整然としたもので、その所産期は棺内に伏せられた深鉢の型式より縄文時代後期加曾利B式期に比定されるようである。本遺跡における石棺墓もこのような例から類推して、縄文時代後期の所産とみて大過あるまい。

7 磨 群

(I) R-1号礫群 (第80図、図版23)

R-1号礫群は、つ-て-7・8グリッドより検出された礫の集中分布である。礫は、隣接する森泉山にみられる安山岩のようである。

礫群内には、石皿（第45図1）・多孔石（同図2）がみられたほか、翡翠の垂飾（第118図1）等が検出された。石皿・多孔石は別として、垂飾は本礫群に伴うものかどうか不明である。

ところで、本礫群と軸を一にして、石棺墓D-17・D-18・D-20が存在しており、これらが本礫群と同様森泉山起源の石材を用いていることを考えると、両者は無関係ではないように思われる。

したがって、本礫群は三基の石棺墓に付随するものと考えることができる。その所期も、縄文時代後期として位置付けられようか。

(2) R-2号礫群（第81図、図版23）

R-2号礫群は、な-7・8グリッドより検出された。その礫は、R-1と同様森泉山起源の安山岩である。

礫群内からは、凹石・磨石が検出された。

本礫群は、R-1と同様石棺墓D-21と重複して存在しており、これに付隨するものとしてとらえることができよう。所産期は、縄文時代後期と考えられようか。

8 土坑等出土の遺物

(I) 土坑出土の土器（第86~95図）

第86図1は沈線文上に細い隆帯が貼り付けられている中期初頭の土器であろう。

6は佐久系土器の口縁部であろうか。渦巻きのモチーフの下に沈線文が施されている。7は、把手に円形の孔が穿たれ、胴部の沈線文の間にLR縄文が施される精製土器で、器面全体が黒く光沢があり、磨かれている精巧なつくりである。加曾利B1式土器であろう。

8は浅鉢の口縁から胴部にかけての破片である。隆線文による渦巻き文と楕円区画が施され、円形刺突文が付けられている。加曾利E2式土器であろう。9から11は、唐草文系土器あるいは、佐久系土器の胴部破片であろう。

第87図14は胴部から口縁部にかけてほぼ直線的に開く器形で、口縁部に渦巻き文と楕円区画内に沈線文が充填され、胴部では沈線文でU字状のモチーフや渦巻き文や蕨手文がみられる。胴部の文様構成は独特で、多くは15や17のような綾杉文を地文とし、並行沈線文が垂下する。15・17は佐久系土器の口縁から胴部にかけての破片である。15はやや波状を呈する口縁である。16は加曾利E3式でも新しい段階で、口縁部文様帶を失った土器である。波状口縁をもち、逆U字状沈線文で縄文が磨り消され、蕨手文が描かれている。19は橋状把手である。

第88図20・21は、佐久系土器か沈線文を地文にもつ加曾利E3式土器である。22から27は加曾

利E 3式土器で、23と24は縄文に蕨手文がみられる。28から48まで加曾利E 4式土器である。28・31から33はヘラ状工具で細い沈線文を施し、LR縄文が付されている。34から36・38・40から48は微隆起文である。34は波状口縁をもち、やや幅広の微隆起文であるが、LR縄文を地文にもつ。41から43は同一個体で、4単位の波状口縁をもち微隆起文を施した後にLR縄文が充填されている。49は帯縄文と括弧状沈線文のある加曾利B 1式土器の精製土器である。第89図56は称名寺式土器の古手の口縁から胴部にかけての大形破片で、棒状工具による沈線文が施され、LR縄文が充填され、口縁部に微隆起文が巡っている。57は加曾利E 4式土器の胴部の大形破片で、ヘラ状工具による鋸歯状モチーフ内にLR縄文が充填されている。

第90図58は口縁部が屈曲する器形で、矢羽状沈線文が施される。加曾利B 2式土器に特有な弧線文がみられないことから加曾利B 2式の土器以降であろうか。

第90図59は底部から胴部にかけてやや窄まるが、胴部に膨らみをもって「く」の字屈曲し、口縁部では大きく広がる器形を呈する。口縁部や胴部の文様帶は横位沈線文で区画されている。口唇部には刻目がみられる。この器形は加曾利B 2式にみられる特徴であるが、文様帶の構成から加曾利B 3式あるいは曾谷式土器まで新しくなるか。

60は称名寺式土器であろう。縄文が施される位置が逆転しているようである。61は加曾利E 4式の微隆起文土器である。62は沈線文を地文とし隆帶がつけられる唐草文系あるいは佐久系土器であろうか。

64は称名寺式土器で無文部分が広い。モチーフ内にRL縄文が充填されている。66・68は堀之内1式土器であろう。66は口縁部上端に隆帶が巡り、刻目が施されている。65と70は加曾利B 1式土器の精製土器である。70は帯縄文上に括弧状沈線文が施され、裏面にも沈線文がみられる。69はヘラ状工具で沈線文が描かれ、縄文が充填されている。器形が朝顔形の堀之内2式土器であろう。71は堀之内2式土器の口縁部破片で、口唇部に沈線文と裏面上端にも沈線文と円形刺突文がみられる。表面の垂下する隆帶上に刻目が施されている。67は黒く器面調整が入念になされている土器で、棒状工具による沈線文が施される、安行3c式であろうか。

72は両耳壺の胴部破片で、逆U字沈線文の区画内に綾杉文がみられる。加曾利E 3式土器である。

74は渦巻き文のモチーフ内にペン先状の尖った工具で円形刺突文が施されている。称名寺式土器であろうか。

第91図76は4単位の把手をもち胴部中頃で括れる器形である。文様は口縁から括れ部まで、胴部下半は無文である。口縁部には窓枠状の沈線文と刻目がみられ、胴部上半から横位沈線文で区画された括れ部までは、棒状工具によって鋸歯状に沈線が描かれている。器形や口縁の文様などから曾谷式土器であろう。77から82は中期末葉から後期初頭の土器である。77は4単位の把手

をもつ浅鉢形土器で、胴部に沈線文が縱横に施されている。三十稻場式土器であろう。78から82は加曾利E 4式土器で、いずれもヘラ状あるいは幅が狭い棒状工具で沈線文を描いた後に、LR縄文を施している。81と82は口縁部に微隆起文がみられる。83と85は壇之内1式土器の口縁である。83は口唇部と口縁部に各々円形と8字状の貼付文が付けられ、棒状工具による刺突文が施されている。口縁が屈曲した器形である。口唇部内面にスス状の黒色付着物が残されている。84は胴部上半から口縁部が開く器形で、ヘラ状工具で斜条線文が施されている。上端に刺突文がみられる。加曾利B 2式土器に相当しようか。85は波状口縁をもつ土器で、横位沈線文とそれに沿って刻目がみられる。

86は胴部上半の破片で、ヘラ状工具による斜条線文がみられる。加曾利B 2期以降のものであろう。87はLR縄文が縦位に付けられている土器で、中期末葉から後期初頭のものである。88は底面に網代痕がみられる。

90から92は加曾利E 3式土器で、90と91は縄文に沈線文が施される。92は棒状工具による条線文である。93と94は壇之内式土器である。95は網代痕が底面に残る胴部下半から底部にかけての土器である。

第92図96から99は微隆起文が付される加曾利E 4式土器である。96は口縁に微隆起文が横走りする土器で、胴部は無文である。97と98は微隆起文が付けられた後に、LR縄文が施されている。100・101は称名寺式土器である。100はJ字文の外側にLR縄文がみられる。

第93図103は胴部から底部にかけての土器で、条線文上に棒状工具によって綾杉文が描かれている。106・107は綾杉文をつけた後に隆帶文が施されている。103・106・107は唐草文系あるいは佐久系土器であろう。7は加曾利E 3式土器の口縁部近くの破片である。110は網代痕が残される土器で、2本どりで編まれており、1目巻き1目超えであろう。

111と112は佐久系土器であろうか。111は沈線文に隆帶が付けられ刻目が施されている。112は渦巻き文がみられる口縁近くの破片である。

113は口縁部に横位沈線文がみられる鉢形土器で、LR縄文が縦と横に施されている。114は幅が狭い棒状工具で沈線を施した後に、LR縄文が付けられている。116はヘラ状工具で細かい斜条線文がみられる。後期後半に位置付けられようか。

第94図117から119・122は加曾利E 3式土器の口縁部破片である。いずれも波状口縁で、波頂部に渦巻き文がみられる。123は加曾利E 3式土器の胴部破片である。120と121は棒状工具による沈線が斜めや縦に施されている。佐久系土器であろうか。124は壇之内式土器の胴部下半の土器である。

125から131まで同一個体である。胴部上半で括れをもち口縁部が広がる器形である。口縁部には棒状工具で横位沈線文、胴部には渦巻き文あるいは斜沈線文が描かれている。壇之内1式土器

である。

第95図133は口が窄まり、胴部に幾分肩をもつ壺形土器である。無文である。後期であろうが、型式は不明である。134は注口土器の破片で、後期前半のものであろうか。135は沈線文でU字状に区画された内にR L 繩文が施されている、加曾利E 3式土器である。136は波状口縁のちようど波頂部の破片で、渦巻き文が描かれている佐久系土器であろうか。137と138は微隆起文が施される加曾利E 4式土器である。137は微隆起文の下にL R 繩文が施されている。140と141は称名寺式土器である。140は口縁部で、口唇部が薄くつくられている。より後出的な要素であろうか。ヘラ状工具で描かれたモチーフ内にL R 繩文が充填されている。143は加曾利B 1式土器の精製土器であろう。ヘラ状工具で捻ったようなモチーフの中にL R 繩文が付けられている。139・143と144・146は壺之内1式土器の口縁部である。145はヘラ状工具による斜条線文がみられる土器で、加曾利B 2式以降に位置付けられようか。146は口唇部に粘土紐を捻ったような形状で、口唇部と上端に円形刺突文がみられる。また、口唇部にタール状の黒色付着物が残されている。

147と148は沈線文の地文に隆帯が付けられる、唐草文系ないし佐久系土器であろうか。

(2) 土坑の石器と土製品

第113図149～151は、石鎌である。152は石核、153～155は打製石斧、156は磨製石斧、157は砥石、158は土製円盤である。このうち153～158は、D-52号土坑の出土品である。

9 グリッド出土の遺物

(I) グリッド出土の土器 (第96～110図)

中期から後期まで、時期ごとに大きく5つに分けて説明することにする。

第Ⅰ群：中期中葉の土器群 (第98図1～5)

1は、眼鏡状の把手にさらに円形の穴にある大きな把手が付けられている。4と5は同一個体で、沈線文上の隆帯に刻目が付けられている。

第Ⅱ群：中期後葉の土器群 (第98・99図6～27)

6は口縁部破片で、円筒形の器形を呈する。棒状工具による沈線で横円区画や渦巻き文が付けられる土器である。8は隆帯でおそらく渦巻き文が描かれ、棒状工具で綾杉文が付けられているのであろうか。唐草文系土器に含まれようか。10から16は同一個体で、垂下する沈線文の間に綾杉文が施される。この沈線文は末端でU字状になっている。曾利III式土器であろう。

17と18は同一個体で、U字状の沈線文の中に繩文が施されている。R L 繩文を付けた後に沈線文が施される。19は口縁部破片で、隆帯文によって横円区画がつくられた中に繩文がみられる。

隆帯が貼り付けられたままで隆線化していないため、加曾利E 3式土器の古手と考えたい。20はR L繩文上に並行沈線文が垂下する胴部下半の土器で、加曾利E 2式であろう。21は口縁部に渦巻き文と椭円区画をもち、頭部では無文帯が広くとられ胴部との境には円形刺突文が巡る土器である。22は胴部上半の破片で、横位沈線文の間に円形刺突文が巡り、胴部に逆U字状沈線文と無文部分に蕨手文が施されている。23は櫛状工具による条線文を地文とする土器で、並行沈線文は3本である。17・18・21から23は加曾利E 3土器でも新しく考えられる。24から26は鉢形土器である。25と24は同じようなもので、口縁部に横位沈線文が巡り、胴部は櫛状工具による条線文が施される。26は口縁部に横位沈線文がみられるだけの無文の土器である。これらは、加曾利E 3式土器の新しい段階に伴うが、条線文の土器は加曾利E 4式期まで残るようである。27は幅広の隆起線文で渦巻きなどのモチーフが施される土器で加曾利E 3式土器に含まれよう。ただし、繩文がR Lではあるものの、隆起線文の後に付けられていることから、より新しく考えられる。

第三群：中期末葉～後期初頭の土器群（第96・97・99～103図101～03・28～65・67～73）

01と02は櫛状把手をもつ両耳壺である。Aは口縁部と胴部を微隆起文で区画し、中央に突起を作出し、ヘラ状工具による逆U字沈線文を施している。繩文はモチーフの外に施され、上部では横位に転がしている。02も微隆起文で口縁部と胴部を区画し、中央に円形などのモチーフを描く。胴部ではヘラ状工具によって鋸歯状に沈線文が描かれている。03は口縁部に把手を二つもつ土器である。器面調整によって口縁部と胴部が分けられ、わずかに段状の高まりが作出されている。ヘラ状工具によって上半に渦巻き文、下半に逆U字沈線文が描かれている。いずれも加曾利E 4式土器である。

28・30・35から37は口縁部に微隆起文をもつ土器で、波状口縁や突起あるいは把手をもつものが多いようである。28と31・33はヘラ状工具による沈線文の鋸歯状などのモチーフ内にL R繩文が充填されているのに対し、30と32・34・35・37・38は外側に繩文が付けられている。34は把手が欠損している土器で、口縁部に沿った沈線文の直下にはL R繩文を縦横に転がすことにより羽状の効果を出している。また、胴部のモチーフは鋸歯状ないしはU字であるかもしれない。36は口縁部の微隆起文に円形貼付文がみられる土器で、加曾利E 4式土器特有の口縁部に膨らみをもち胴部で括れる器形とは違い、沈線文が施される土器ではあるが、微隆起文が付けられる円筒形を呈するものであろう。37は口縁部近くの破片で、波状口縁の頂部に把手をもっているようである。L R繩文が微隆起文直下から縦位に付けられている。38は逆C字文のモチーフをもつ土器で、条線文が地文であるのは珍しい。39は鉢形土器で、口縁に器面の横位調整によってつくられた微隆起文の直下にL R繩文を縦に施している。繩文を縦方向に転がされていくことと、胴部下半に無文を多く残す点は後にまでみられる特徴である。40から43・45・47は把手で、口縁部に微隆起文をもつ土器である。40は口縁頂部に横向きに把手が付けられ、胴部の把手と連結する形のよう

ある。把手の部分には縄文がつけられている。41と42は波状口縁の頂部に把手をもち、胴部に沈線文が施されるもの。口縁部では微隆起文が付けられている。45も同じような把手で、波頂部が欠損している。43は口縁部に突起をもち、口縁部に微隆起文が施される。沈線文で描かれたモチーフ内に縄文が充填されている。47は注口土器と把手が連結したもの。口縁部の微隆起文上に無節縄文Rが付けられている。

48から58は口縁部や胴部に微隆起文が施される土器である。器形が円筒形を呈するのは、48・49・51から54で、胴部に括れをもつものは50・56で、57と58は瓢箪形である可能性がある。48・49は波頂部に突起をもつ土器で、この部分にハート形のようなモチーフが付けられている。縄文は口縁部では斜めや縱に付けられているが、胴部では縱に付けられている。49と50は胴部に微隆起文を付けた後にLR縄文が施されている。51・53・54は口縁部に微隆起文が施されるだけの無文土器である。57と58は器厚が薄く、緻密な胎土である。57はちょうど括れ部の破片である。58は表面に赤色塗彩が施されている。

59から65・67・68は称名寺式土器である。59は棒状工具による沈線文にRL縄文を転がしている。60はJ字ないし7字文区画内にLR縄文を施している。65は波状口縁の頂部に把手をもつようであり、口縁から胴部上半が大きく膨らむ器形を呈する。口縁部に微隆起文が施され、波頂部を中心としてJ字文が描かれているようである。67と68は口縁部が外側に屈曲する器形である。横位沈線文が屈曲部に巡り、胴部に溝巻き文のモチーフが描かれているようで、縄文が施される部分が逆の関係にあるようである。

69は把手を欠損した口縁部破片である。71は波状口縁の頂部を欠損した口縁部である。口縁部に巡らされた隆帶上に刺突文がみられる。

70は刺突文が施された把手をもつ口縁部でやや内湾している。棒状工具で粗い刺突がなされている。73は緻密な胎土で、太い棒状工具で刺突が施されている。70・72・73は三十幅場式土器に相当する。

第IV群；後期前半の土器群（第102～108図66・74～102・106・107・158～160・171）

74から77・79は胴部上半分で括れをもつ深鉢土器の口縁部破片である。口縁部や口唇部に沈線文が施される。74は小波状を呈する口縁部で、裏面に円形刺突文がみられる。76は裏面に段をもつ形態で、沈線文と円形刺突文がみられる。これらと同じく胴部あるいは口縁部に括れをもつものは66・81・82・84・89・92であろう。81は括れ部に円形貼付文と直下にC字状の隆帶が付けられている。82は屈曲部分が口縁部に近く無文帯が狭い。棒状工具で沈線文が描かれ縄文が付けられている。88も屈曲部分が口縁部近くで、貼付されたC字状のモチーフの下に円形貼付文が付けられている。84は括れ部に8字状の貼付文が付けられ、胴部ではLR縄文上に沈線文や豚鼻状の刺突文が付けられている。78・86と90・91・94は括れの少ない器形で、口縁部や口唇部をもつも

のが多い。78と86はL R 縄文上に沈線文が施される。94は口縁部に2条の横位沈線文が施され、胴部にも沈線文が描かれる。器面に赤色塗彩が残されている。これらはいずれも壠之内1式に相当する。

壠之内2式は、98から100であろう。98は底部から口縁部にかけて朝顔形に広がる器形で精製土器である。口縁部の隆帯上に刻目が入れられる。胴部の文様はヘラ状工具を用いて沈線文が施され縄文が付けられている。99もヘラ状沈線文で、幾何学文などのモチーフを描きL R 縄文を施す。

158・159・160・171は壠之内式期注口土器である。159は沈線の三角形のモチーフにL R 縄文が付けられている、胴部上半の破片で、壠之内2式に比定されよう。171は把手部分で、棒状工具による円形刺突文と沈線文が施されている。壠之内1式であろうか。

第V群：後期後半の土器群（第104～110図103～128・134～198）

103から110・119は、加曾利B 1式土器の精製土器である。103は口縁部では横に刻み目のある隆帯文が巡り、貼付文が付けられ、帯縄文が施されている。裏面にも沈線文がみられる。104は帯縄文が施され、口縁部の裏にも2本と4本の沈線文が横走する。口唇部には刻目がみられる。105は口縁部に突起をもつ土器で、この部分に8字状貼付文がみられ、横走りする刻目をもつ隆帯文と連結している。隆帯文の下には帯縄文がみられる。106と107ともに黒く磨きによる器面調整がなされている。106は裏面の口唇部近くに横位沈線文が、表面に細い棒状工具による沈線文に縄文が施される。107は沈線文の間にL R 縄文が施されている。110は3本単位の沈線文が6本施され、裏面では2本の沈線文が施される。口唇では小突起が付けられ、刻目が施される。108は口唇部に豚鼻状の貼付文が口唇部に付けられ、細い棒状工具で横位に沈線文と入り組み状の文様が描かれている。109も横位沈線文の間に似たような文様がみられる。119は3単位の波状をもつ口縁部破片で、帯縄文が施され、裏面の口縁上端に3条の太い沈線文がみられる。122・123・125・126・127は括弧形の文様が帯縄文上に付けられている。126は胴部にやや膨らみをもつ器形であることから鉢形であろうか。153と154は帯縄文に沈線で、縦に区切りが付けられた文様をもつ。153は胴部に膨らみをもち、鉢形になる可能性がある。149は口縁部に把手をもつ土器で、大形化した部分には円形貼付文が三つみられ、口縁部の横位沈線文の間に刻目が施されている。126を除く、いずれも加曾利B 1式に比定される。126は加曾利B 2に含まれようか。

111・112・114から116・118は口縁部に弧線文をもつ土器で、いずれも内湾した口縁部器形である。特に、112と115は算盤玉のように屈曲した口縁部を呈する。111・112・114・115は弧線文の間に円形刺突文が付けられL R 縄文が充填されている。115は上端にさらに横位沈線文が巡っている。118は弧線文の間に括弧文が描かれている。加曾利B 2式であろう。

148は口唇部に刻目と豚鼻状の把手をもち、口縁部以下に細かい沈線文がみられる。151は裏面に「の」字状の沈線文が施される浅鉢であろう。口唇部に把手と刻目をもつ土器はほかには142で

ある。口唇部の内側に沈線文があり、表面には文様がみられない点が148とは異なる。加曾利B 1式に含まれようか。

157は浅鉢土器で、口唇部が厚く平らな形状をもち、内面に棒状工具による横位沈線文と縦に区切りが付けられたようなモチーフをもつ。横位沈線文には縄文がみられるようである。胎土は緻密で、器面調整が入念にされている。加曾利B 1式に含まれようか。

161から169は加曾利B式期の注口土器であろう。161から164は同一個体で、横位沈線文と刻目と「の」字状沈線文と縄沈線文による入り組み文が施される。167は横位沈線文の間に刻目と「の」字状沈線文と直下に円形刺突文と細沈線文がみられる。168は2本の沈線で縦を絡ませたようなモチーフが描かれている。これらの注口土器は、加曾利B 1式であろう。なお、縄のようなモチーフは117の精製土器にもみられる。胴部下半から底部にかけての土器で、同じようなモチーフをもつことから加曾利B 1式であろう。

137は注口土器の口縁から胴部の破片で、横位沈線文の間に細かな矢羽の文様が施され、棒状工具による「の」字状沈線文がみられる。加曾利B 1式に含まれようか。

136は三つの孔を把手にもつ浅鉢である。孔はちょうど指が入りそうな大きさである。把手上端には渦巻きが描かれている。口縁はやや折り返し気味の形態で、沈線文や円形刺突文がみられ、表面では横位沈線文の間に細かな斜条線文が施されている。特異な器形ではあるが、表面の文様から加曾利B 2式期以降に位置付けられようか。

156は口唇部に細かな刻目が施され、横位沈線文が口縁部上端の内外面に付けられ、刻目が加えられている。内面には横位に棒状工具による円形刺突文と短い斜条線文がみられる。胴部上半が外に屈曲する器形をもつものと考えられる。器面全体に磨きによる調整が入念になされており、精巧にできている。加曾利B 2式土器であろうか。

134・138から141・143・144は粗製土器で、胴部の文様が無文あるいは条線文である。138と139は同一個体で、口縁部に細い隆帯を付けた後に2条の円形刺突文が施されている。胎土は緻密である。141・143・144は口縁に縦線文が貼り付けられている。143は細かい条線文がみられる。144は口縁部の無文帯が広い。

176・178から188は矢羽状沈線文が施される土器である。ただし、185は精製深鉢形土器で、口縁部と胴部上端に帶縄文が巡り、胴部には縄文の上に細かな矢羽状沈線文が加えられている。185を除いて加曾利B 2式以降の時期であろう。176は口唇部に円形の孔がある把手をもつ土器で、口縁に刻目と棒状工具による矢羽状沈線文がみられる。把手の形状から加曾利B 3式であろうか。

177は波状口縁をもち、波頂部に突起と直下に梢円形に隆帯が付けられ、その両側に円形貼付文がみられる。口縁部以下には細かな矢羽状に条線文が施されている。加曾利B 3式であろう。178は口唇部に刻目があり、口縁部上端に矢羽状沈線文が付けられている。口縁部が外に「く」の字に

屈曲する器形である。180も矢羽状沈線文の上端に刺突がみられる。188は鉢形あるいは浅鉢形であろうか。棒状工具で、横位あるいは矢羽状に沈線を施した後に、口縁部上端と口縁部に刺突文が施されている。172から175は波状口縁の頂部に突起あるいは刻目がみられる土器である。172は内湾した口縁部に棒状工具による沈線文があり、波頂部には表には縦に、裏側にはV字状の沈線がみられる。173は同じような口縁部の沈線文と突起部分には2本の沈線文が巡っている。174は細い沈線文が口縁に沿って2条施されている。175は口縁部の屈曲が強く、「く」の字に内湾している。太い棒状工具で、口縁の形に沿って3本沈線文が施され、胴部には横位沈線文がみられる。巡っている。いずれも曾谷式に相当しようか。120は隆帶文が横位沈線文の上に付けられている。128も波状口縁をもつもので、口縁に沿った太い沈線文に隆帶が縦に付けられている。これらも曾谷式土器であろうか。146は内湾した口縁部に窓状のモチーフが描かれている。147も口縁部に窓状の沈線文をもつ土器で、モチーフ内に円形刺突文がみられる。器面が粗い。146と147も曾谷式土器に相当しよう。

129から133はいずれも口縁部破片である。棒状工具による横位沈線文がみられる。129と130は沈線文の間に刻目が施されている。131と132は口唇部近くにL・R・繩文が施される。

193は無文の浅鉢で器面調整が粗雑である。底面に網代痕が残される。1目潜り2目超え、左1目送りであろう。

蓋状土製品（第110図199）

加曾利E4式土器に伴ってよくみられ、直径10cm程度の無文のものである。表から孔が空けられている。

大洞B式土器（第110図200）

200は入組み三叉文をもつ繩文晚期初頭の大洞B式土器である。

(2) グリッドの石器と土製品

第114図200～206は石鎌、207は石錐、208～214は打製石斧、215・216は磨製石斧、217は砥石である。

(3) 黒曜石原石と石核

第115図1～4はチ-7グリッドの黒曜石キャッシュから検出された黒曜石原石（1～3）と石核（4）である。1は星ヶ塔産との産地同定結果が報告されている（後述報告参照）。第116図5・6はワ-7グリッド、7・8はヒ-8グリッドの黒曜石キャッシュから検出された黒曜石原石である。いずれも外観上は八ヶ岳の黒曜石とは全く異なり、和田岬周辺の黒曜石と考えられる。

(4) 石棒

第119図1は、頭部に彫刻を施した石棒（もしくは石劍）である。

(5) 土製円盤

第119図1～17はグリッド出土の土製円盤である。

(6) 土偶・顔面把手

第117図1～4は土偶である。1は両腕と両足を欠き、眉がつりあがり丸く口を開けた表情をし、豊満な胸部をもつ。2は両腕と両足と顔面の一部を欠き、丸く口を開けた表情をする。3・4は土偶の胴部で、3には細かな刻みがある。5は目・鼻腔・逆三角口をもつ顔面把手で、加曾利E3もしくはE4の深鉢に、顔面部分が内側を向いて付けられたものと考えられる。

(7) 垂飾と耳飾

第118図1は翡翠の垂飾である。2～11は耳飾で、2・3・5・10・11は装飾をもたないシンプルなもので、4・6～9は刻みをもつ耳飾である。

10 宮平遺跡発見の土器

(1) 発見の経過

宮平遺跡の調査終了後、筆者大井源寿の所有地で宮平城の東にあたる字宮平1717番地の畑で、良好な資料が発見され、ここで紹介する。この畑は、かつては桑畑であったが、昭和37年に野菜畑となってしまった。野菜畑となってからは、大型トラクターによる耕作により、土の流出が目立つようになった。またトラクターの刃に敷石らしきものが感じられることも時々あった。

平成5年11月、たまたまこの畑でニンジンやゴボウを掘っていると、石が表土から30cmくらいの所に顔を出しているのに気づいた。さらにその脇には大型の甕らしきものが二つ並んで確認できた。

できればそのまま埋め戻したかったが、大型トラクターによる破壊の可能性が大きいと考えられたので、掘り出し、保管することとした。

以下、御代田町教育委員会小山岳夫氏・長野県埋蔵文化財センター締田弘美氏のご教示に基づき、発見遺物について説明する。

(2) 資料No.1 (第111図)

1は、口径41.9cm、器高64cm、底径14cmの規模をもつ大型の深鉢形土器である。無文帯の頸部から有文の口縁部までは内湾気味にゆるく開き、口唇部内面は唐草文系土器群に特徴的な突出がみられる。胴部は中位上方で軽く張り、平底の底部へと収縮する。

文様は無文の頸部を介して口縁部と胴部にくまなく施される。口縁部は先端が渦巻状になる2本一对の貼り付け隆帯を連弧状に8等分間隔で巡らし、その上に沈線による横円文を区画する。横円文内には密な縦位沈線が充填されている。

胴部は頸部との境に2本一对の隆線を巡らし、そこから10等分間隔で縦位の隆帯を底部近くまで垂下させて文様帯を区画している。垂下隆帯は横円区画をもつ部分と直線的に垂下させる部分を交互に組み合わせている。口縁部の連弧文の中央部には唐草文系的な2本一对の渦巻隆帯を組み合わせて横円状に仕上げた区画を上位に配し、以下は3本一对の隆帯を直線的に垂下させている。一方、連弧文の両端に配される直線的に垂下する隆帯は2本一对である。

垂下隆帯の区画内には佐久地方の特徴的文様といわれる「うろこ」状の沈線文が充填され、さらに垂下隆帯の上位は隆帯を浮き立たせるためであろうか、直下を沈線でなぞっている。

土器の器面は褐色(7.5YR4/3)、断面はにぶい褐色(7.5YR5/3)を呈し、胎土は白色粒子を多く含み角閃石を若干含む。焼成は良好である。

(3) 資料No.2 (第112図)

2は頸部以上を欠損するが、1とはほぼ同様なプロポーションと文様構成を有すると考えられる。残存高は52cm、胴部最大径38cm、底径12.2cmを測り、1よりも胴部最大径が若干下位にある。頸部との境には太い2本一对の隆帯を巡らし、そこから10等分間隔で縦位の隆帯を底部近くまで垂下させて文様帯を区画している。垂下隆帯は両端が屈曲する唐草文系土器に特徴的な腕骨状隆帯をもつ部分と直線的に垂下させる部分を交互に組み合わせることを基本とするが、1か所だけ腕骨状隆帯を3本連ねる部分もある。正面観を意識した箇所なのかもしれない。また垂下隆帯は腕骨状隆帯を持つ部分は2本、それ以外は1本を基本とする。隆帯の区画内には縦位の沈線を密に充填し、さらに3本一对の横位沈線を5か所に配し区画している。

土器の器面は褐色(7.5YR4/3)、断面はにぶい褐色(7.5YR5/4)を呈し、胎土は白色粒子を多く含み角閃石を若干含む。焼成は良好である。

(4) まとめ

以上の観察のように1・2の構成文様は各部にわたり、主として松本・伊那・諏訪地方に分布する縄文時代中期後半の唐草文系土器II段階(三上編年)に類似する要素を多くもつものの、隆

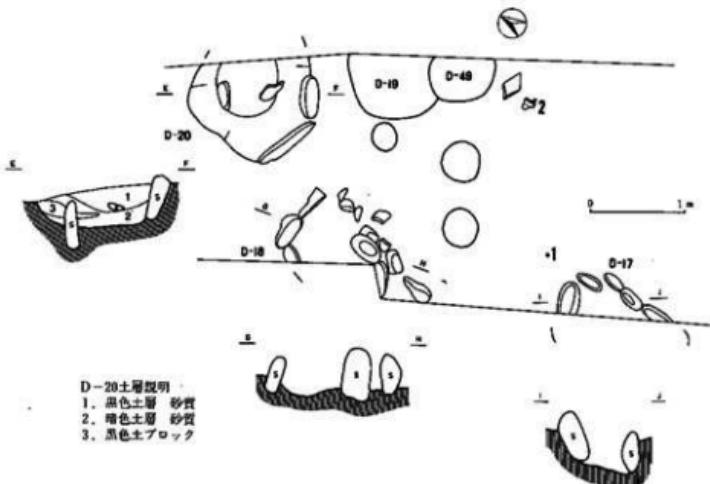
帶による直線基本の胸部文様区画は関東に分布の主体をもつ、加曾利E 2式的な要素も取り込んでいる。

また、区画内を埋める「うろこ」状の沈線文は、後続する加曾利E 3式併行段階の土器群に佐久地方では爆発的に多用されるため、佐久固有の文様といわれ、特に『佐久系土器』と仮称されている（百瀬忠幸1991）。今のところ、佐久地方では資料不足のため、出現段階の『佐久系土器』の実態が把握されていない。したがって、本資料により少なくとも加曾利E 2式併行の段階で、「うろこ」状の沈線文が多用されている事実が確認されたことは重要といえる。

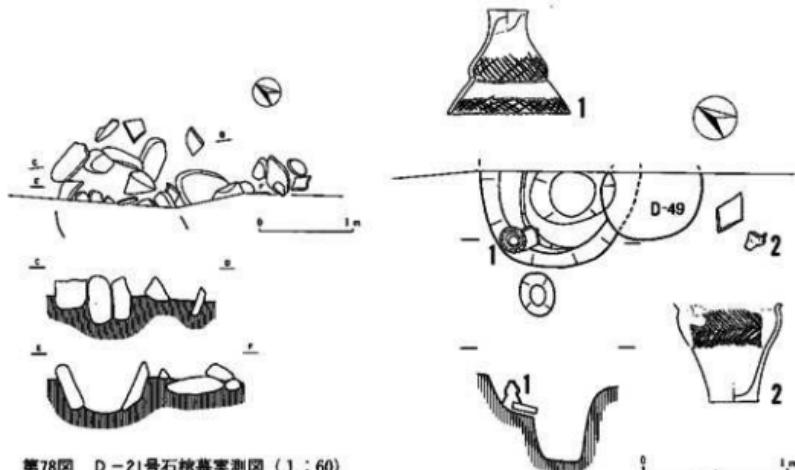
なお、本資料2点は現在筆者宅に保管してある。

引用参考文献

- 御代田町教育委員会 1983 「宮平」（発掘調査概報）
林 幸彦 1982 「宮平遺跡」（『長野県史』1-2）
前原 豊・川島雅人 1975 「北佐久郡御代田町宮平遺跡の後期縄文式土器」（『信濃』3.F27-4）
前原 豊 1978 「豊界宮平遺跡」（『佐久考古』4）
上原邦一 1968 「宮平遺跡」（『佐久教育』3）
八幡一郎 1934 「北佐久郡の考古学的調査」
群馬県企業局 1980 「三原田遺跡」住居編
神奈川考古同人会 1980・1981 「縄文時代中期後半の諸問題」（『神奈川考古』10・F11）
佐久市教育委員会 1983 「中村遺跡」
上野佳也 1983 「軽井沢町茂沢南石堂遺跡」
千曲川水系古代文化研究所 1980 『編年』
赤山容三 1982 「竪穴住居」（『縄文文化の研究』8）
山本輝久 1982 「敷石住居」（『縄文文化の研究』8）
長野県考古学会 1978 「下吹上」
中部高地縄文土器集成グループ 1979 「中部高地縄文土器集成」
百瀬忠幸 1991 「第2節 吹付遺跡」（『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』2）

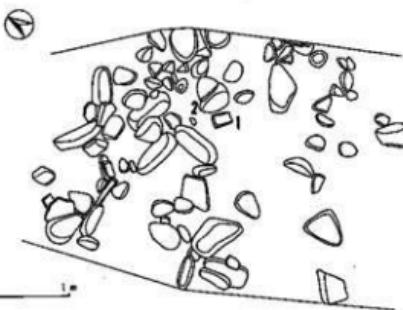


第77図 D-17・D-18・D-20号石棺墓実測図 (1:80)

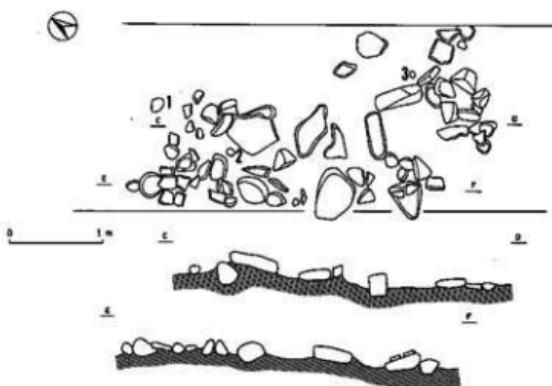


第78図 D-21号石棺墓実測図 (1:60)

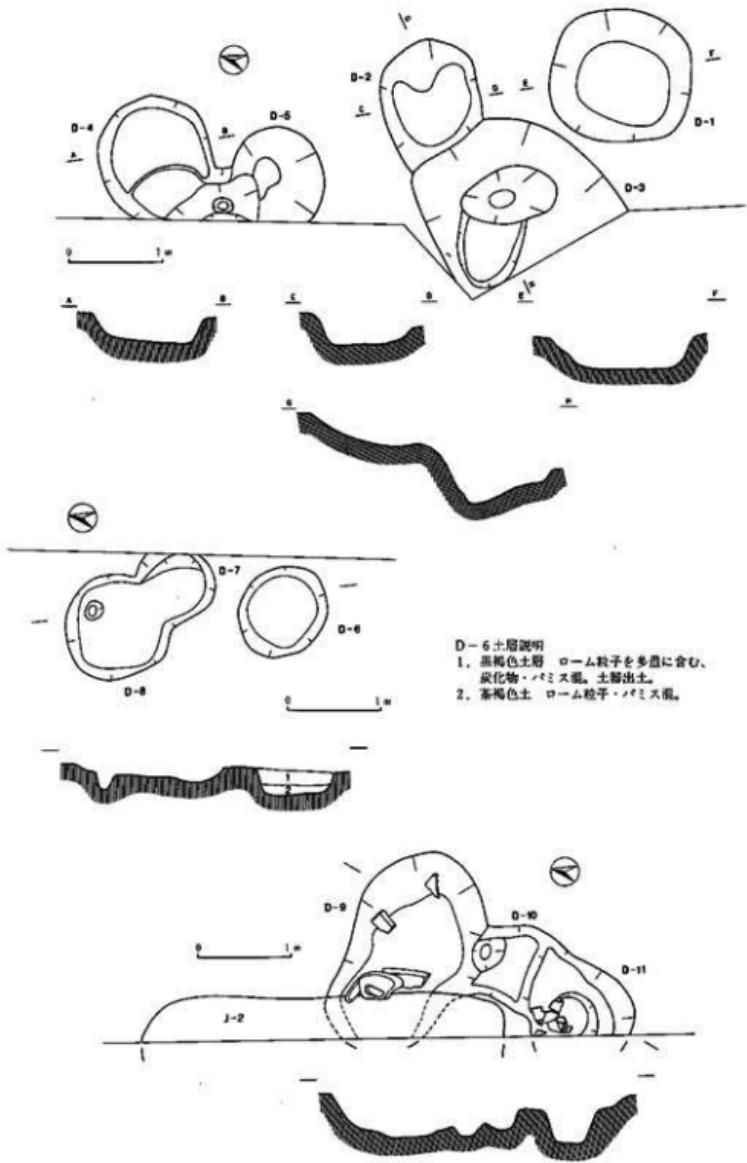
第79図 D-19号土坑墓実測図 (1:40)



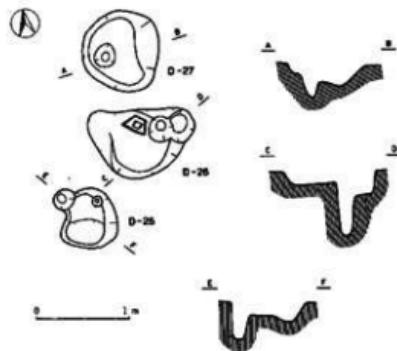
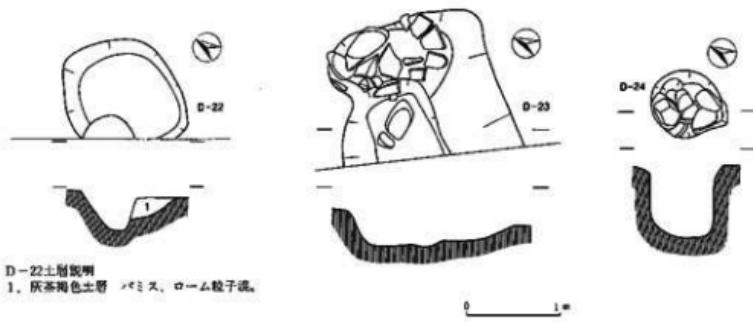
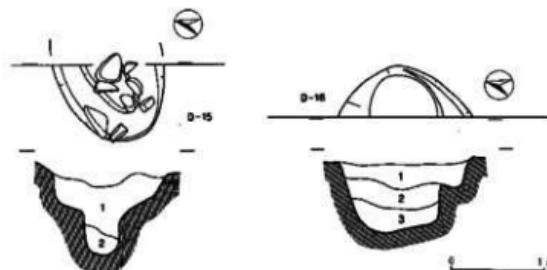
第80図 R-1号砾群実測図 (1:60)



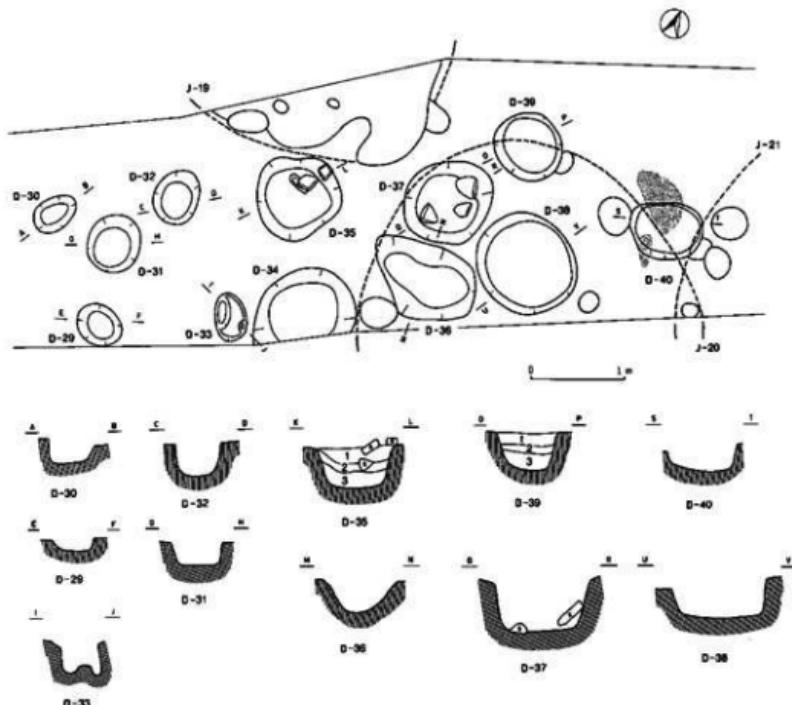
第81図 R-2号砾群実測図 (1:60)



第82図 D-1～11号土坑実測図 (1:60)

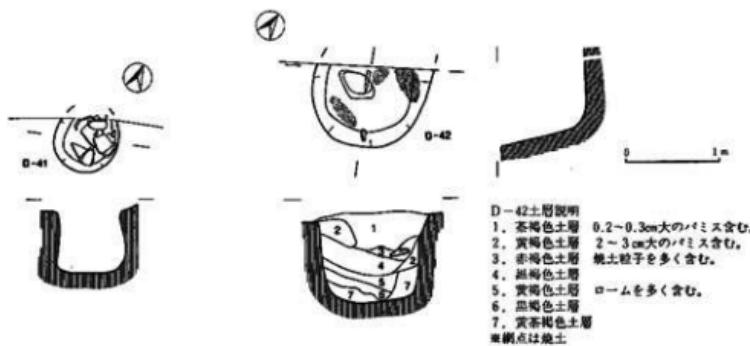


第83図 D-15~16・22~27号土坑実測図 (1:60)



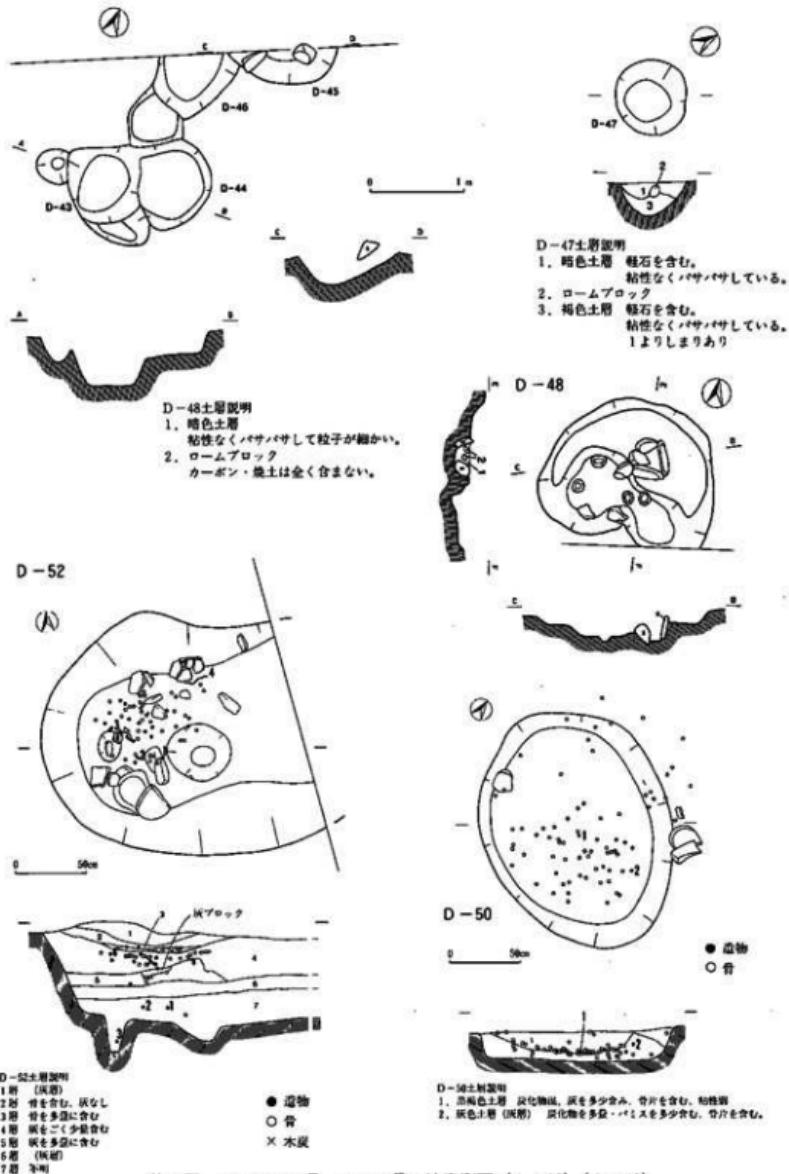
D-35土層説明
1. 黒色土層 パサパサしている。
2. 黒色土層 粘性ややあり。
3. 赤褐色土層 多量のローム粒子を含む。

D-39土層説明
1. 黒色土層
2. 黄褐色土層
3. 赤褐色土層 カーボンを含む、ローム粒子混入。



D-42土層説明
1. 杂褐色土層 0.2~0.3cm大のバニス含む。
2. 黄褐色土層 2~3cm大のバニス含む。
3. 赤褐色土層 粘土粒子を多く含む。
4. 深褐色土層
5. 黄褐色土層 ロームを多く含む。
6. 黑褐色土層
7. 黄褐色土層
※網点は施土

第84図 D-29~42号土坑実測図 (1:60)



第85図 D-43~48号, 50・52号土坑実測図 (1:60) (1:40)



D-1



D-2



D-3



D-4



D-5



D-6



D-7



D-8



D-9



D-10



D-11



D-12



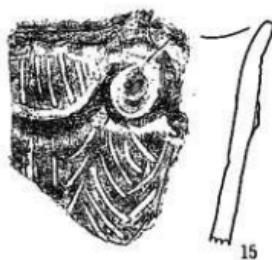
D-13

第86圖 土坑出土土器 (1 : 4)

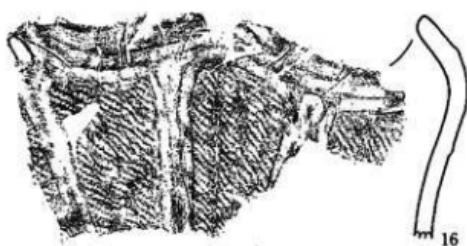


14

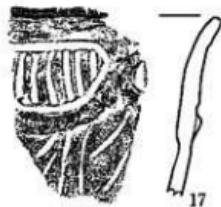
D-11



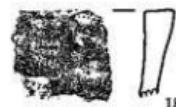
15



16



17



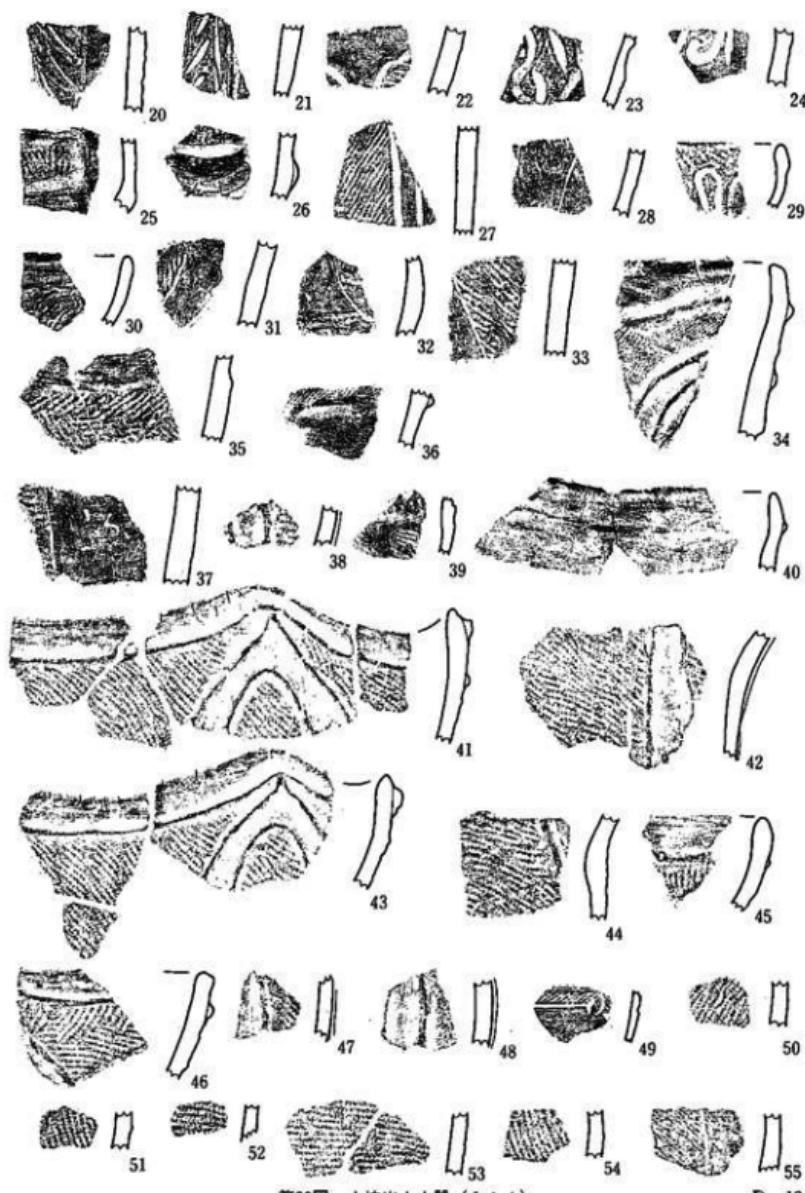
18



19

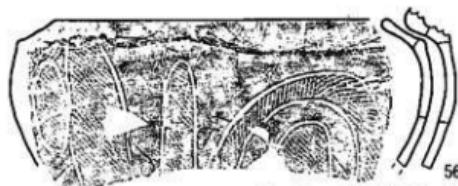
D-15

第87圖 土坑出土土器 (1 : 4)



第88図 土坑出土土器 (1 : 4)

D-12

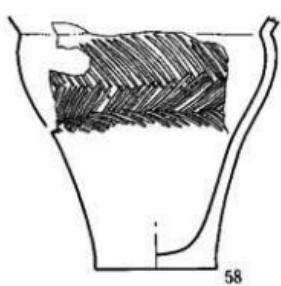


56

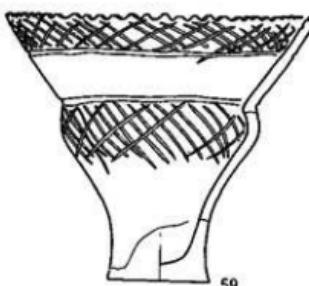
第89図 土坑出土土器 (1:4)



57



D-19南側



D-19



60



61



62

D-22



63



64



65



66



67



68



69



70



71

D-23



72



73



74



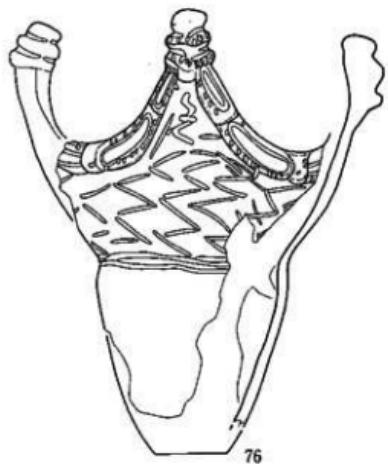
75

D-24

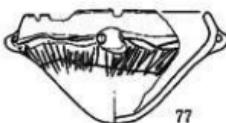


D-28

第90図 土坑出土土器 (1:4)



76



77



78



79



81



82



83



84



85

D - 34



86



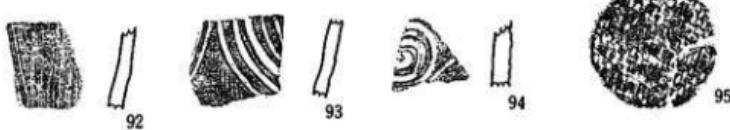
87



88

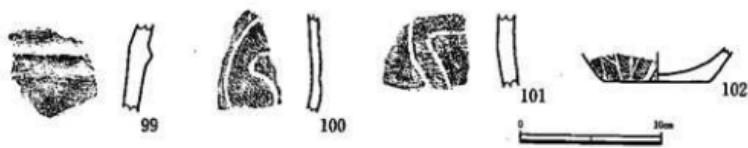
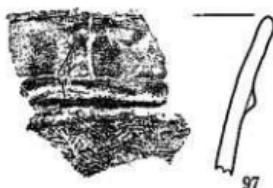
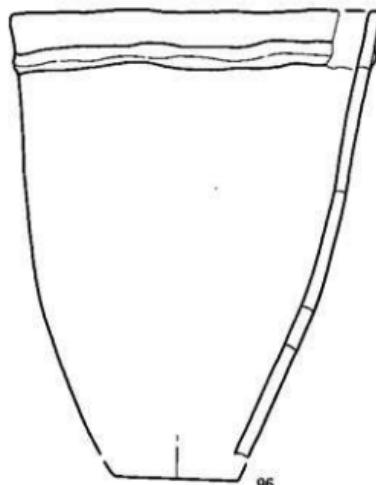
D - 37

第91図 土坑出土土器 (1:4)

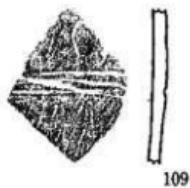
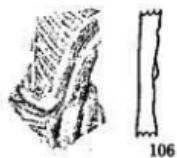
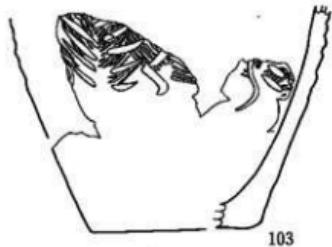


D - 38

D - 41



第92図 土坑出土土器 (1 : 4)



D-42



114

D-44

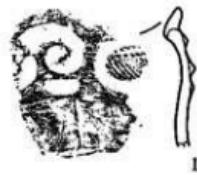


114



D-46

第93図 土坑出土土器 (1:4)



117



118



119



120



121



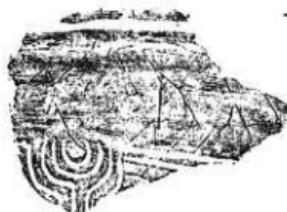
122



D-48

123

124



125



126



127



128



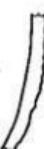
129



130

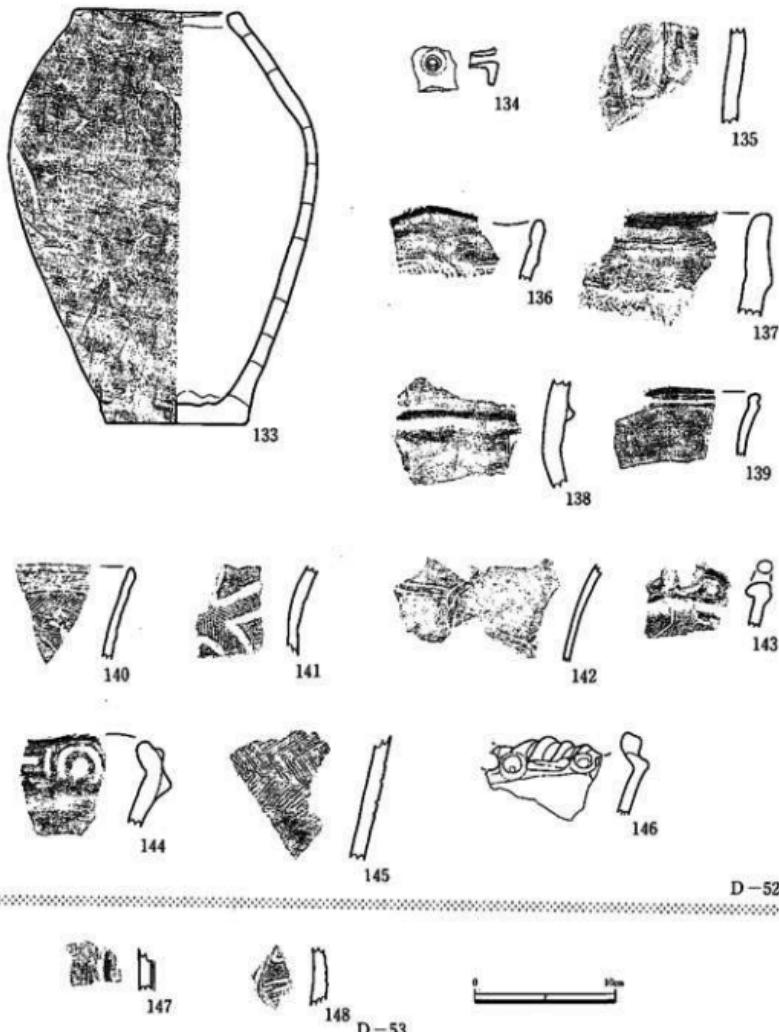


131

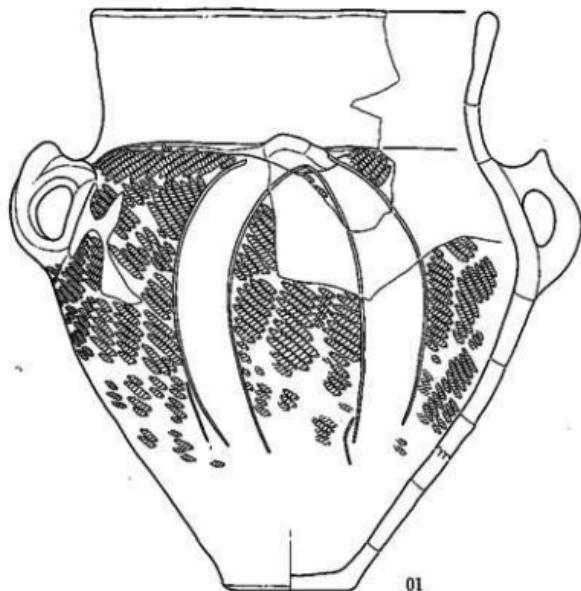


D-50

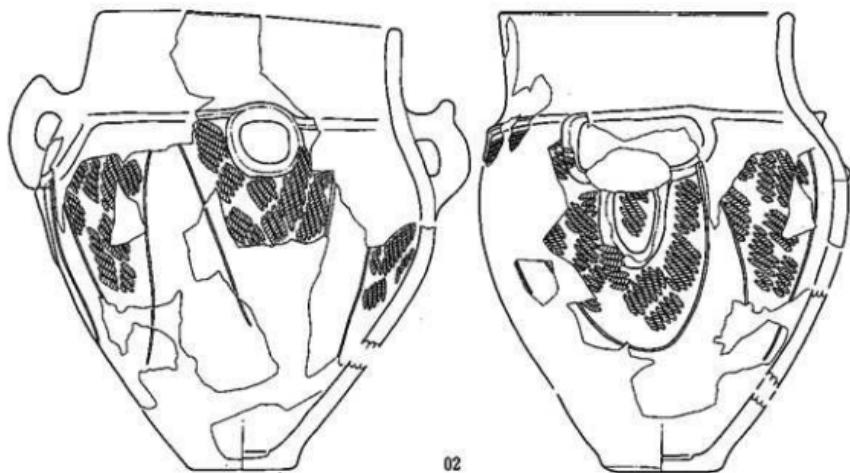
第94圖 土坑出土土器 (1 : 4)



第95図 土坑出土土器 (1 : 4)

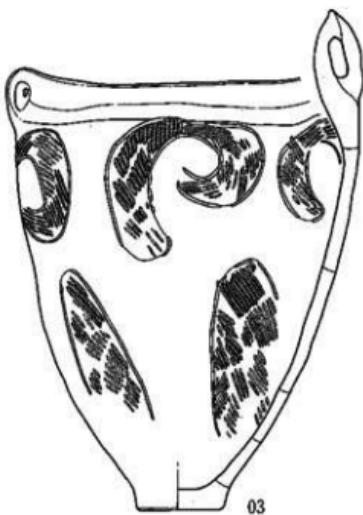


01

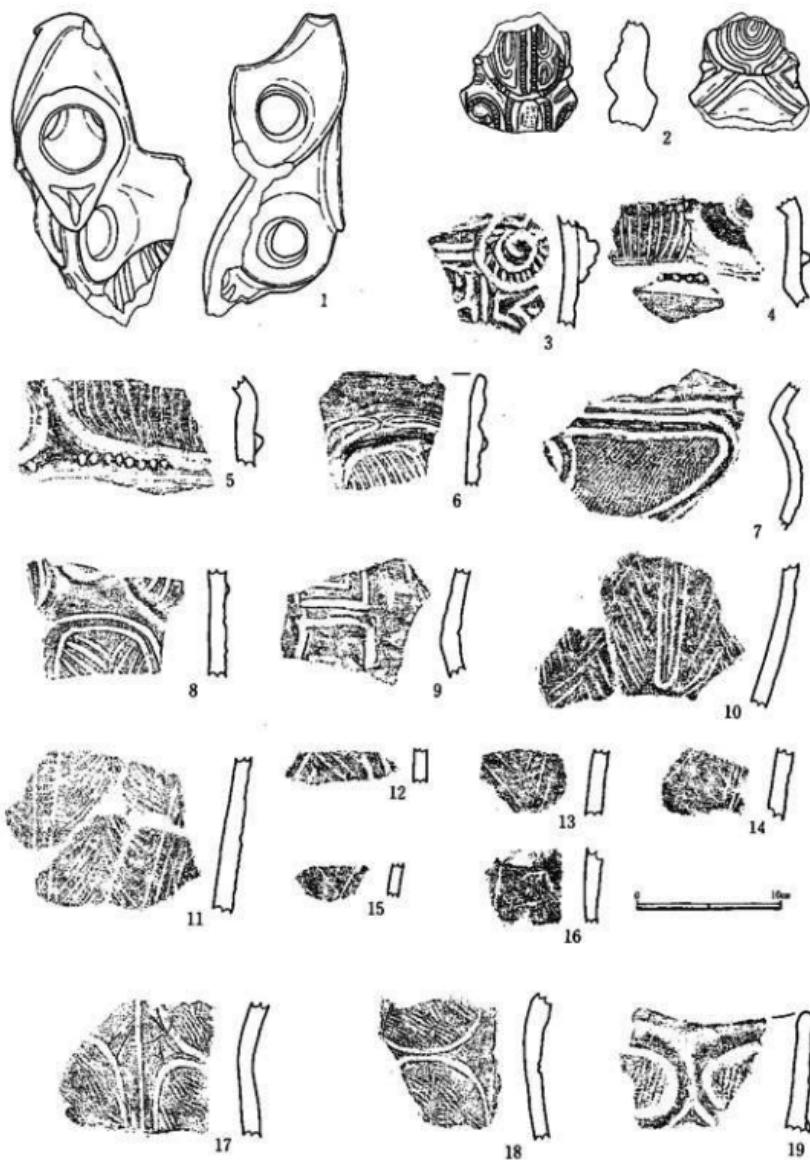


02

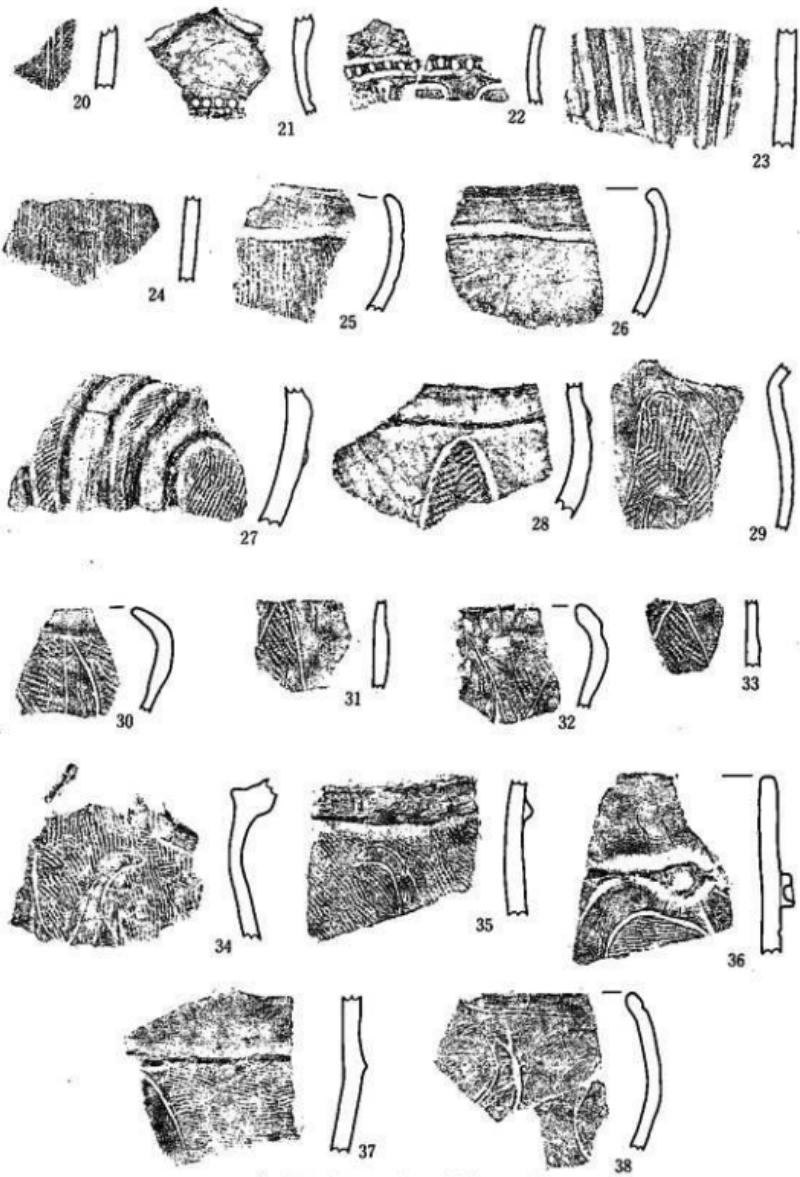
第96図 グリッド出土土器 (1 : 4)



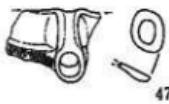
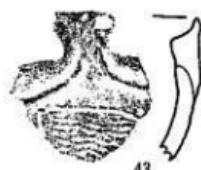
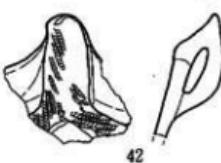
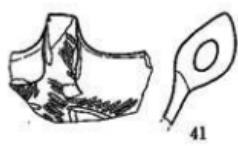
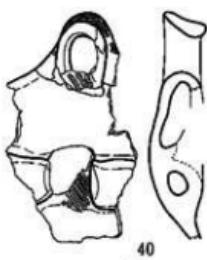
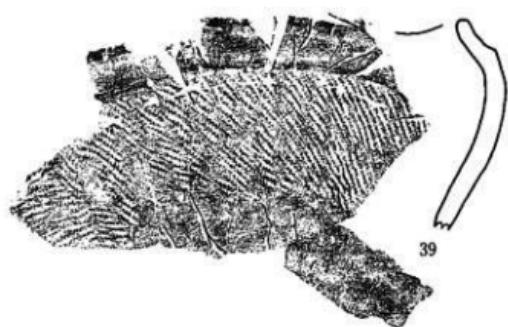
第97図 グリッド出土土器 (1 : 4)



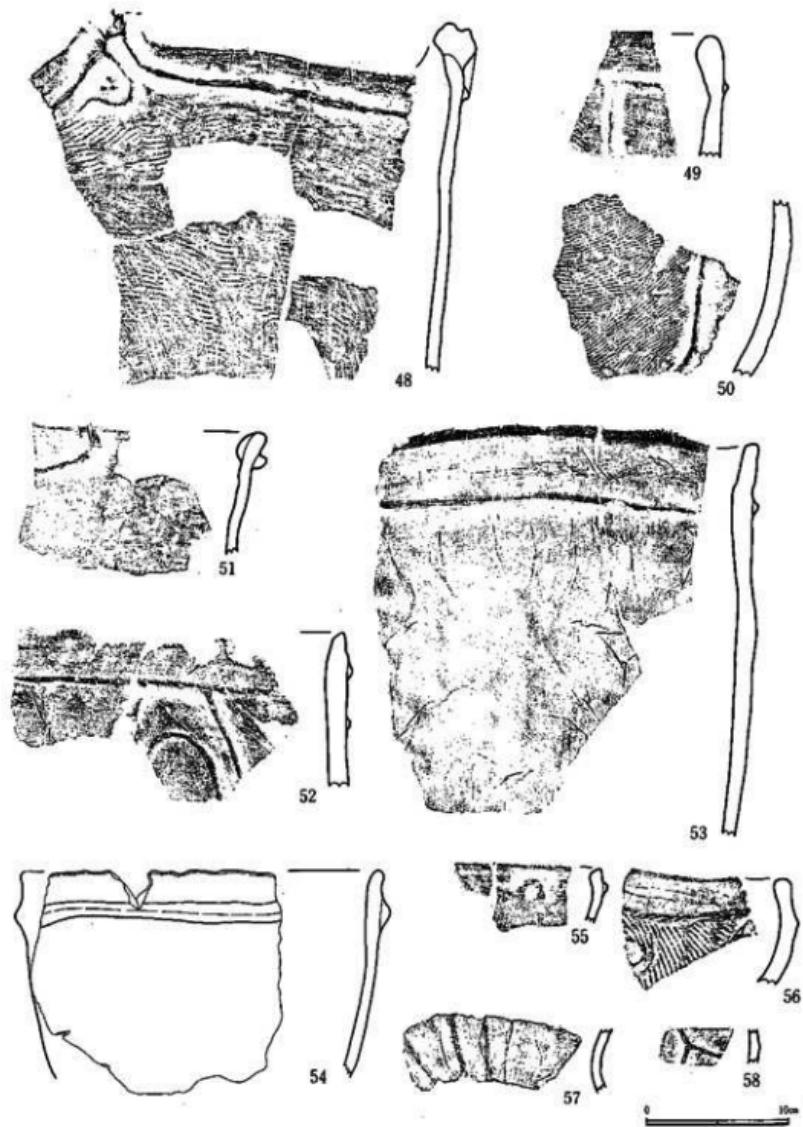
第98図 グリッド出土土器 (1 : 4)



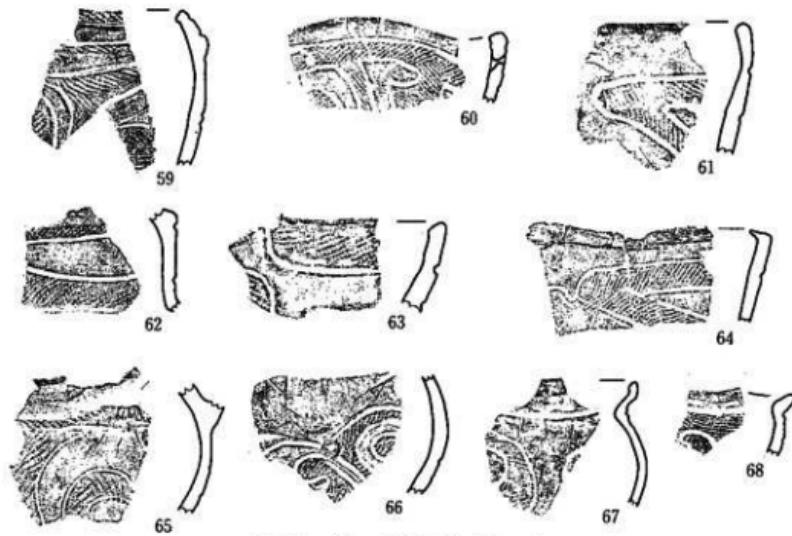
第99図 グリッド出土土器 (1 : 4)



第100図 グリッド出土土器 (1:4)



第101図 グリッド出土土器 (1 : 4)



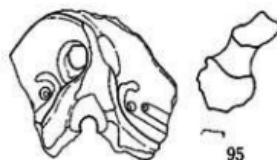
第102図 グリッド出土土器 (1 : 4)



第103図 グリッド出土土器 (1 : 4)



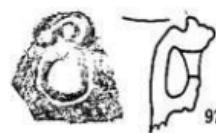
94



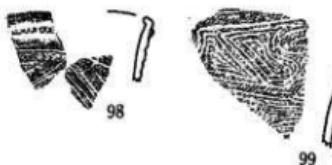
95



96



97



98

99



100

101



102



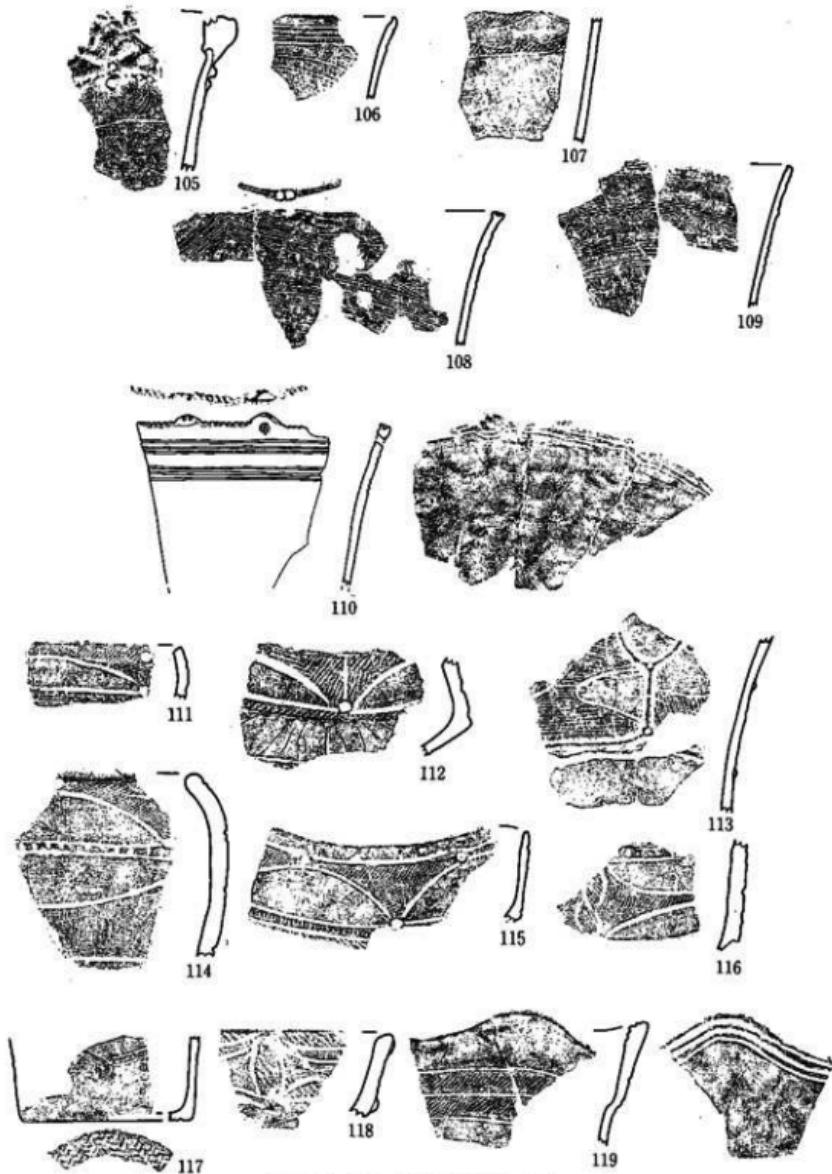
103



104

A horizontal scale bar with markings at 0 and 10cm.

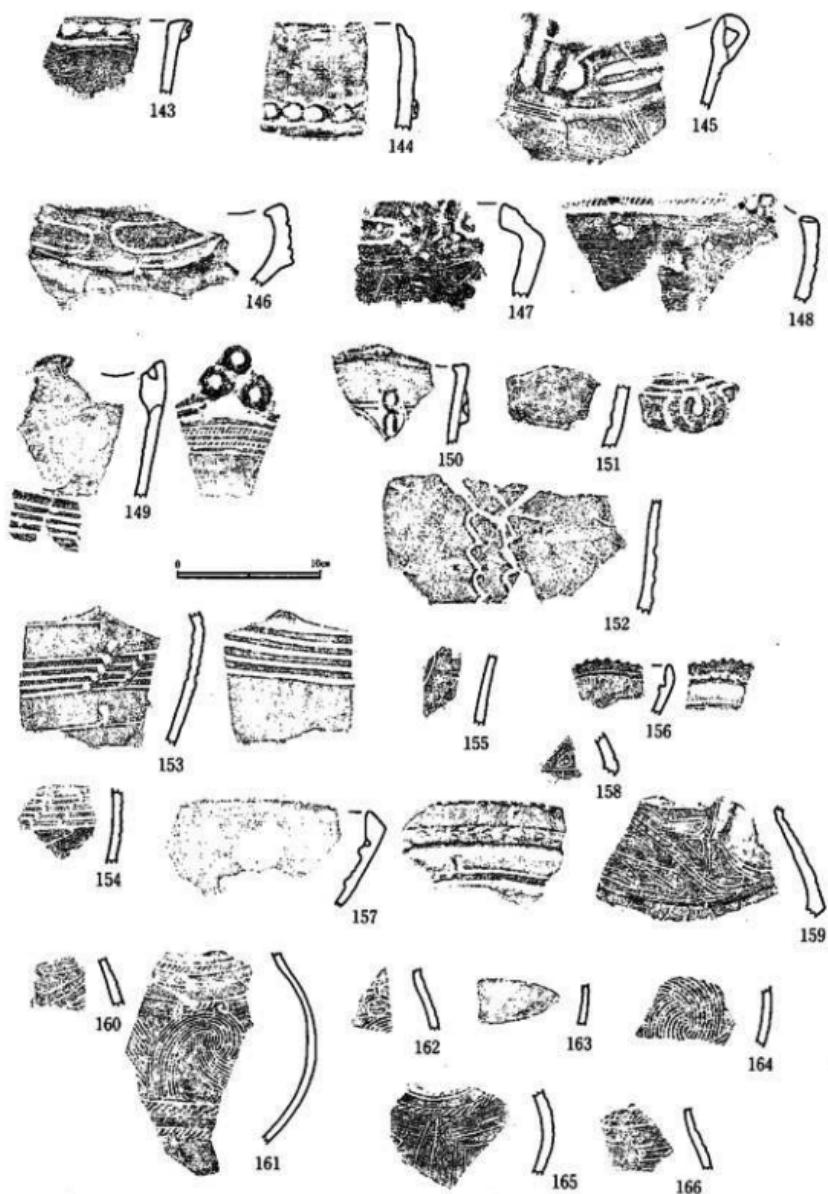
第104図 グリッド出土土器 (1 : 4)



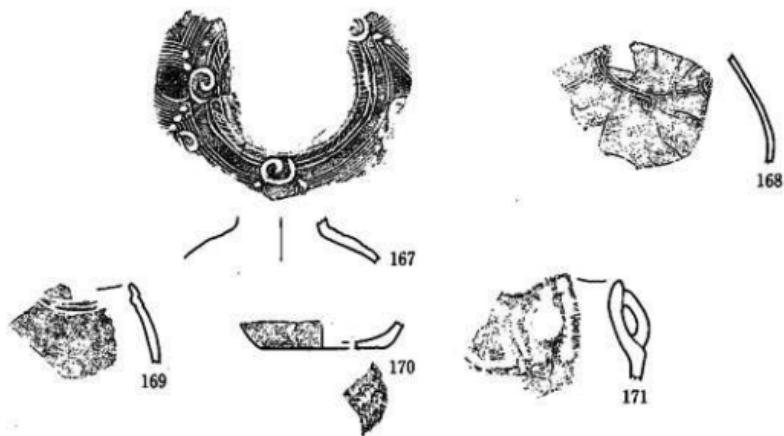
第105図 グリッド出土土器 (1:4)



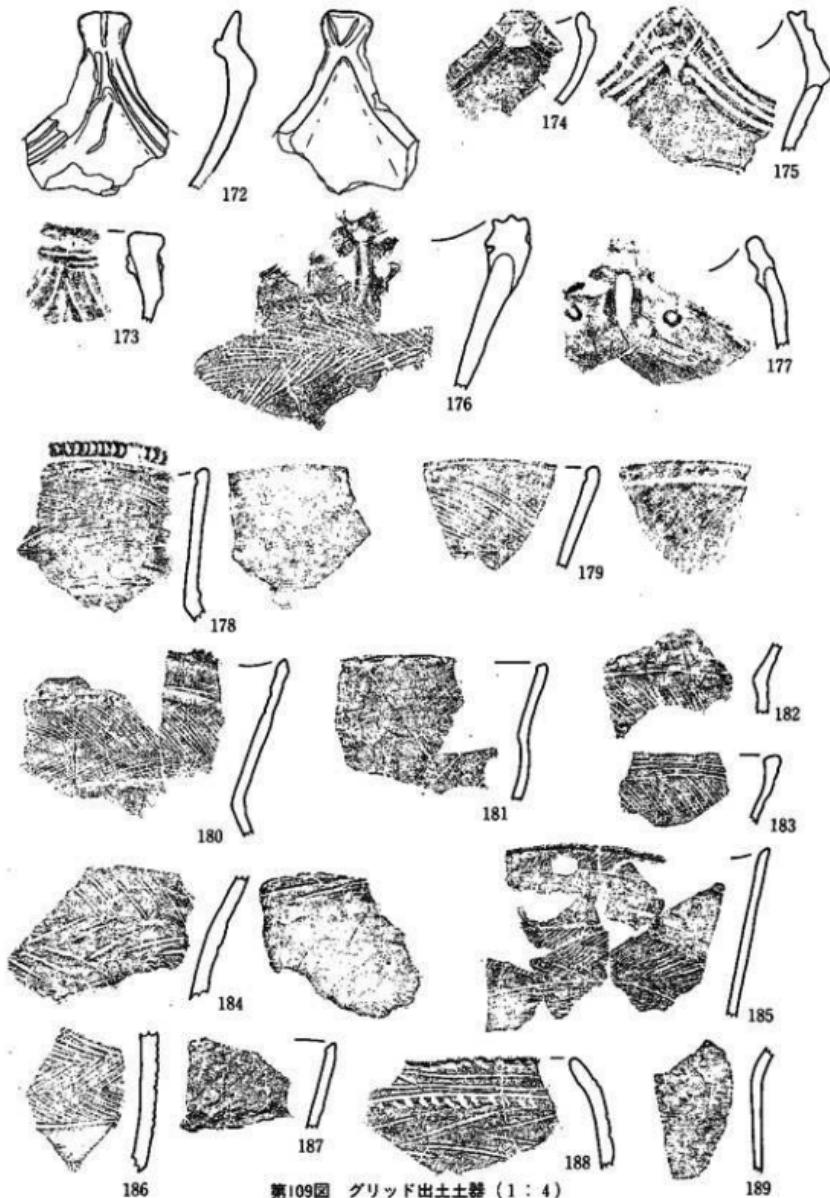
第106図 グリッド出土土器 (1:4)



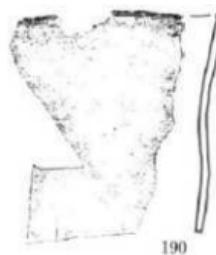
第107図 グリッド出土土器 (1 : 4)



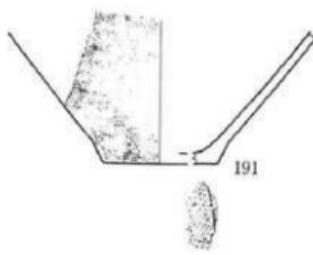
第108図 グリッド出土土器 (1 : 4)



第109図 グリッド出土土器 (1 : 4)



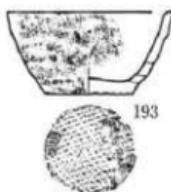
190



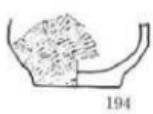
191



192



193



194



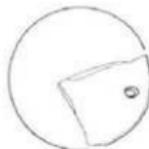
195



196



197



198

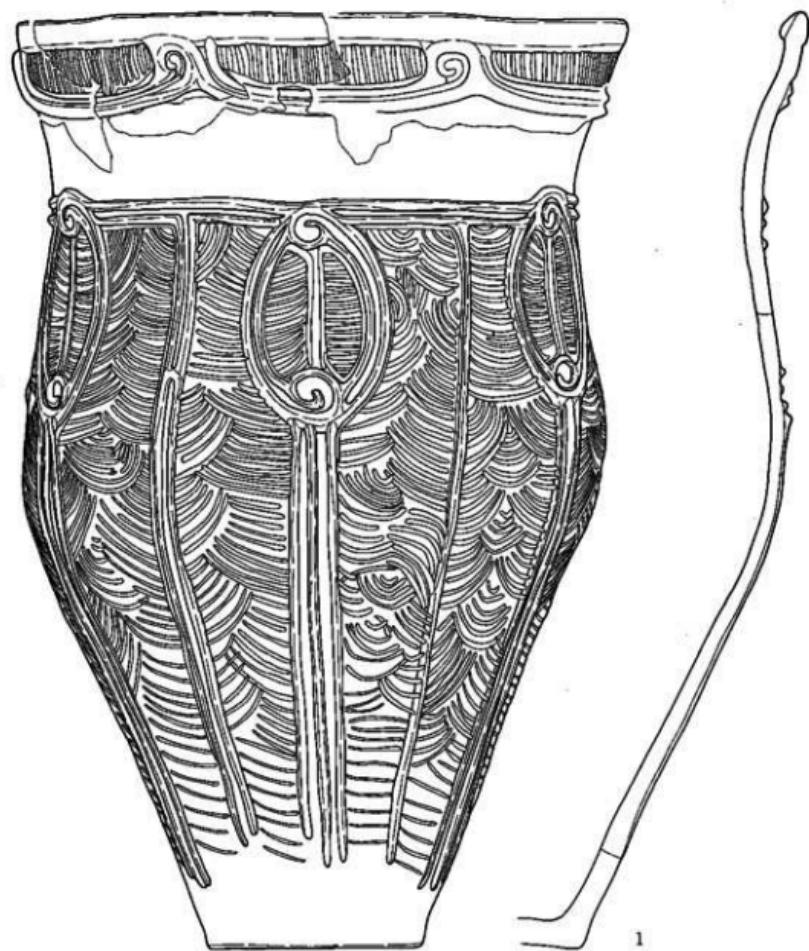


199

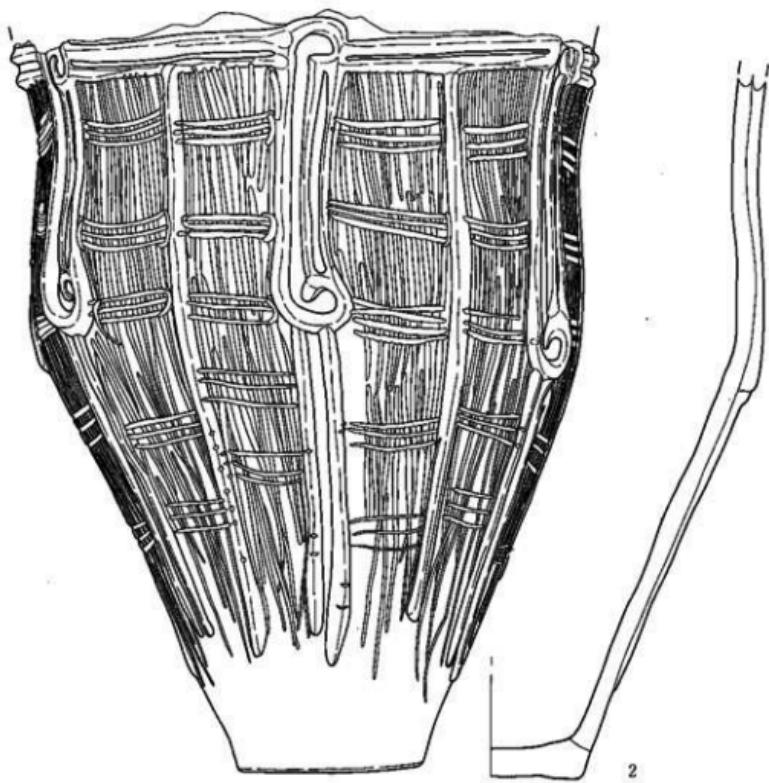


200

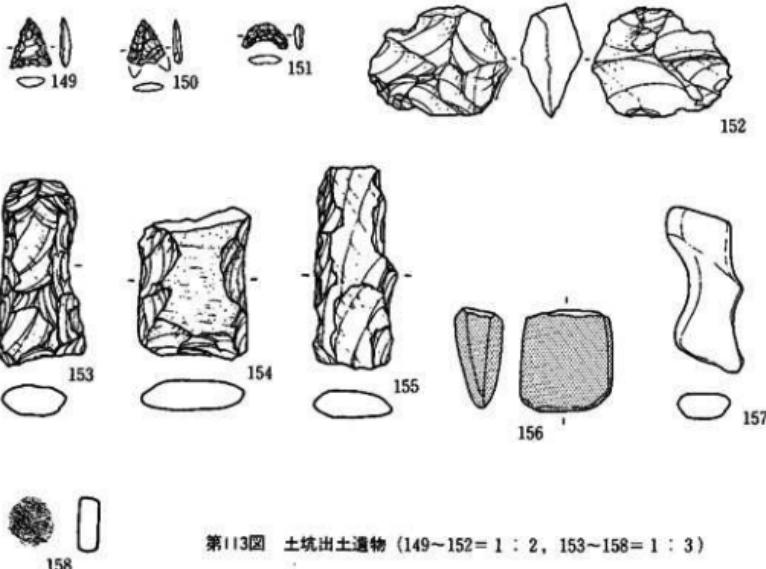
第110図 グリッド出土土器 (1:4) (200=1:1)



第111図 王出土器 (1 : 4)



第112圖 既出土器 (1 : 4)



第113図 土坑出土遺物 (149~152=1:2, 153~158=1:3)

158

第49表 土坑出土遺物一覧表<石器・土製品>

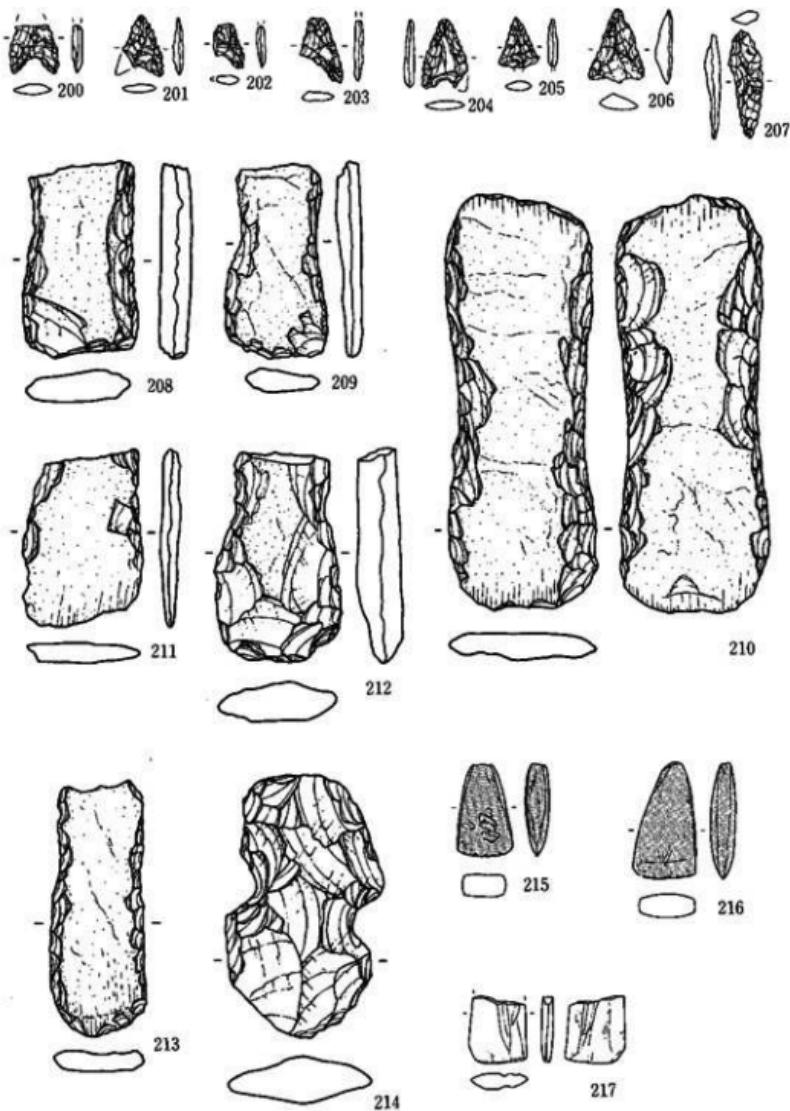
地図 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	地図 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	
149	石 織	黑曜石	15	12	3	0.6	D-5II層	154	打製石斧	頁岩	II	80	59	18	130.2	D-52Na53
150	石 織	ガラス質陶色 灰白山河	14	11	2	0.4	D-13	155	打製石斧	頁岩	II	168	42	17	110.5	D-52灰層
151	石 織	黑曜石	7	15	3	0.3	D-42Na6	156	磨製石斧	蛇紋岩	II	54	47	26	125.2	D-52Na33
152	石 織	頁 岩	25	32	19	-	D-20	157	砾 石	砂 岩	II	87	37	13	42	D-52Na29
153	打製石斧	頁岩	96	46	17	93.3	D-52Na50	158	土製円錐	土	II	27	26	10	7.8	D-52

(単位mm、g)

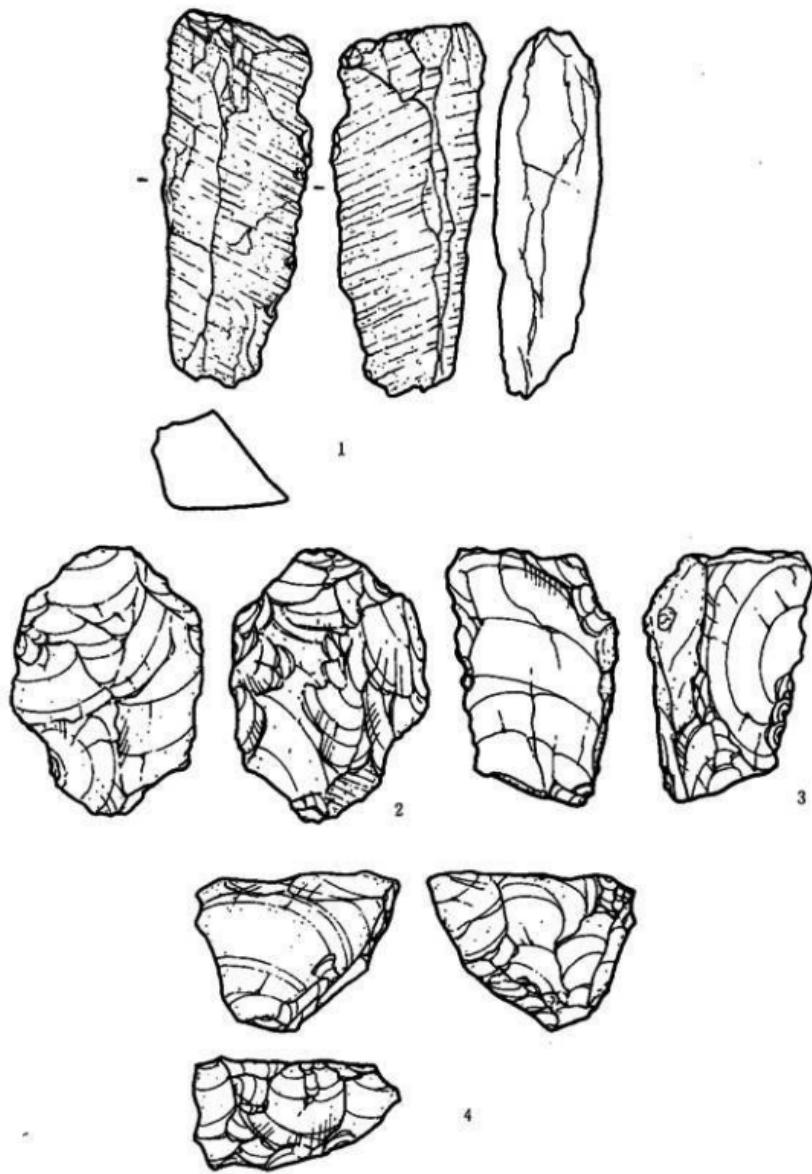
第50表 グリッド出土遺物一覧表<石器>

地図 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	地図 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	
200	石 織	黑曜石	16	16	3	0.8	C-4GII層	209	打製石斧	頁岩	II	99	53	12	74.4	I-4-5G 2層
201	石 織	黑曜石	20	14	3	0.6	C-5GII層	210	打製石斧	頁岩	II	213	80	19	451.4	3-4GII77
202	石 織	黑曜石	15	9	3	0.4	C-5GII層	211	打製石斧	頁岩	II	87	61	9	68.1	C-4GII22
203	石 織	黑曜石	21	11	3	0.7	す-BGII層	212	打製石斧	頁岩	II	108	65	29	-	す-BGIIサブレ
204	石 織	ガラス質陶 色灰山河	23	15	3	1	す-BGII3	213	打製石斧	頁岩	II	132	9	49	97.4	L-SGIV層
205	石 織	黑曜石	16	13	3	0.5	す-BGII3	214	打製石斧	頁岩	II	136	81	24	289.3	L-SG
206	石 織	ガラス質陶 色灰山河	25	19	5	1.8	す-C-15G (200B) No.1	215	磨製石斧	蛇紋岩	II	48	30	12	30.3	す-6G
207	石 織	ガラス質陶 色灰山河	35	11	6	1.8	す-C-15G (200B) No.1	216	磨製石斧	蛇紋岩	II	60	33	12	36.7	す-15G
208	打製石斧	頁岩	95	59	14	134.8	け-4-5G 2層	217	砾 石	砂 岩	II	35	31	7	9.3	け-7-8G 2層

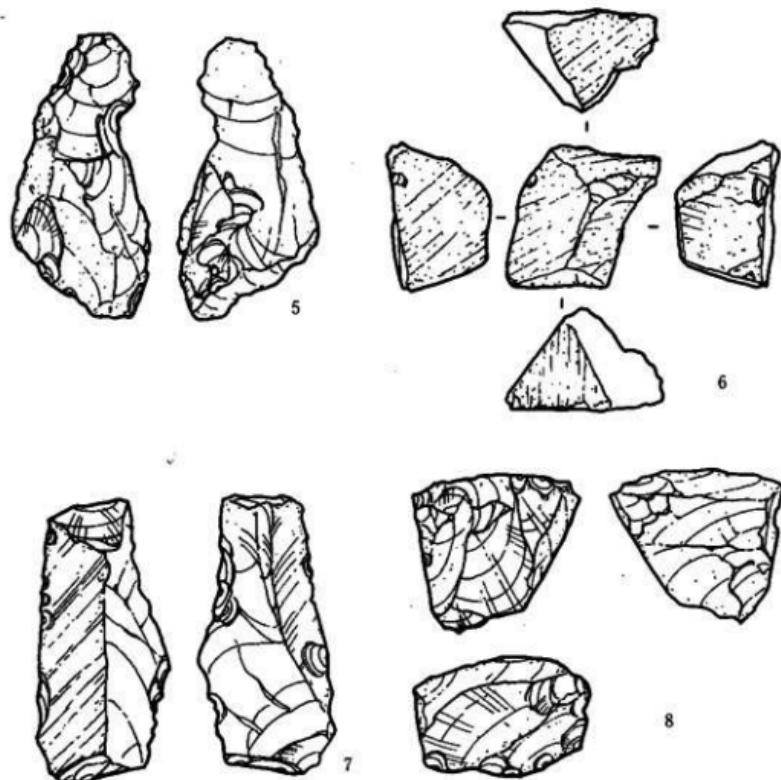
(単位mm、g)



第114図 グリッド出土石器 (200~207=1:2, 208~217=1:3)



第115図 グリッド出土石器 (1 : 2)

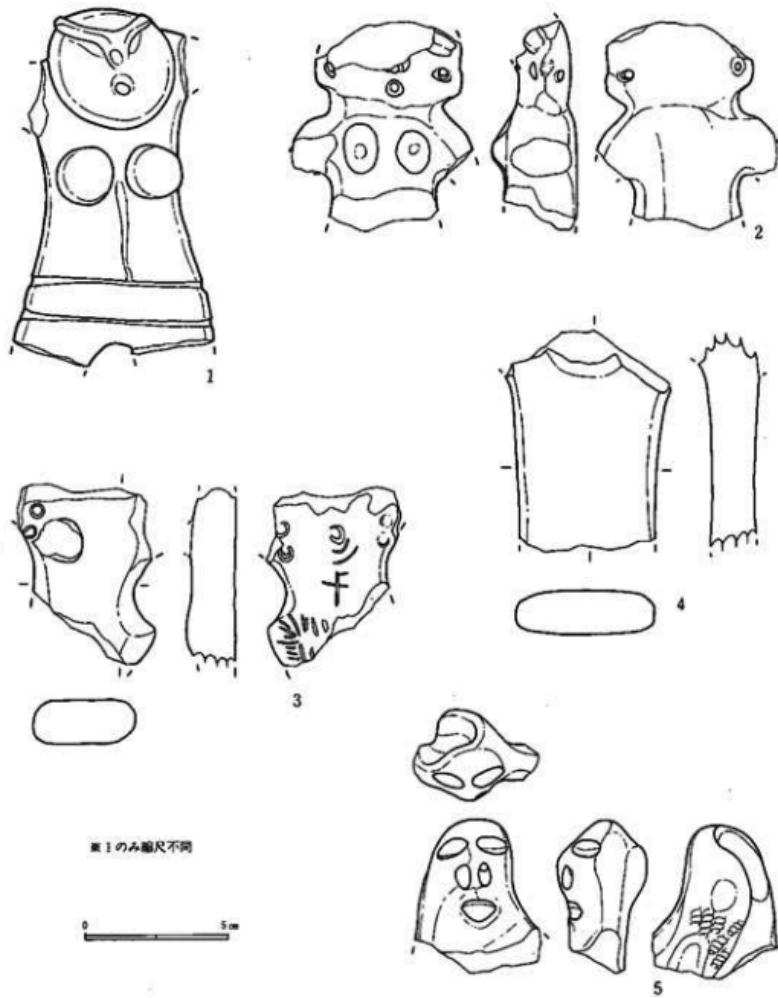


第116図 グリッド石器 (1:2)

第51表 グリッド出土遺物一覧表<石器>

件名 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	件名 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1 原 石	黑曜石	129	53	34	205	ち-7G		5 原 石	黑曜石	97	50	23	91.1	△-7G	
2 原 石	黑曜石	92	69	36	201.4	ち-7G		6 原 石	黑曜石	52	53	32	65	△-7G	
3 原 石	黑曜石	88	60	24	120.3	ち-7G		7 原 石	黑曜石	92	47	25	90.3	△-8G	
4 石 核	黑曜石	56	70	34	131.7	ち-7G		8 原 石	黑曜石	53	59	34	110.2	△-8G	

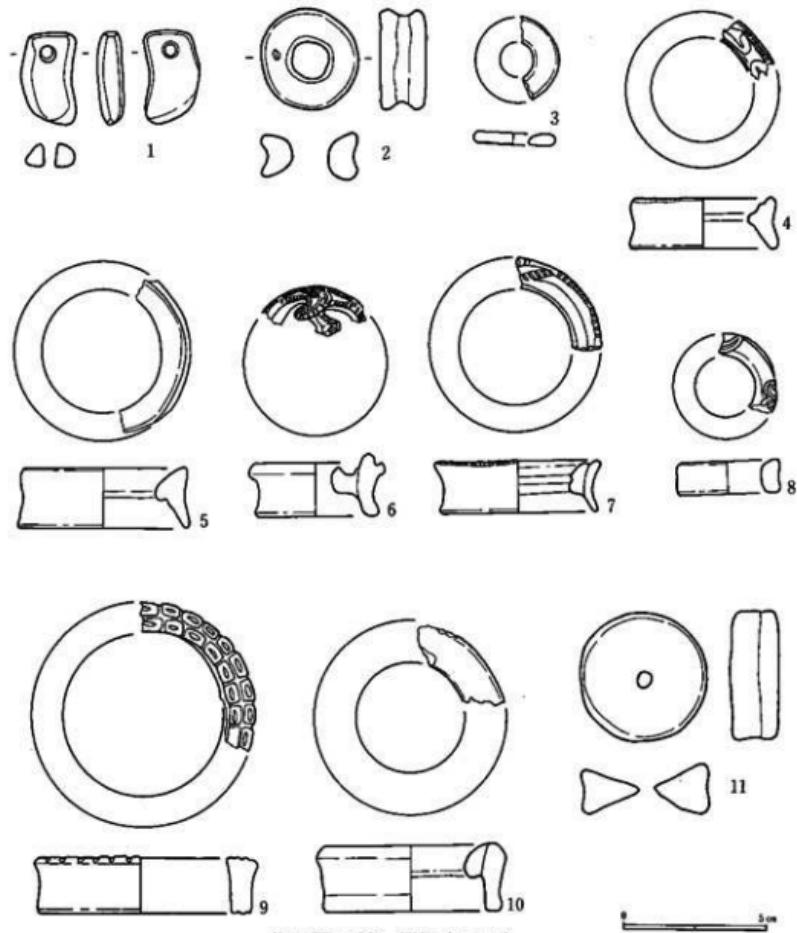
(単位mm、g)



第117図 土偶と顔面把手 (1:2)

第52表 出土遺物一覧表<土偶等>

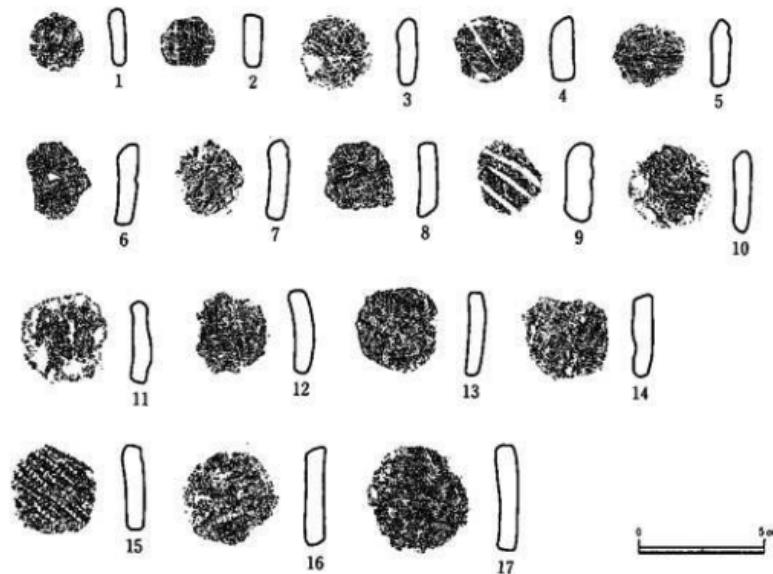
種類 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	種類 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1 土偶	土製	122	70	-	-	-	し-6G	4 土偶	土製	78	55	18	85.9	こ-5GN-12	
2 土偶	土製	70	63	27	82.4	け-4GN-15	5 顔面把手	土製	52	44	30	35.4	D-15		
3 土偶	土製	61	46	16	47.7	ぬ-7-8G								(単位mm, g)	



第118図 垂飾・耳飾り (1:2)

第53表 出土遺物一覧表<垂飾・耳飾り>

種類 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考	種類 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	垂飾	ヒスイ	31	18	8	8.9	R-1 No.2	7	耳飾り	土 製	60	61	18	26	ひ-7GII層
2	耳飾り	土 製	33	33	14	14.9	D-8No.1	8	耳飾り	土 製	35	35	12	9.5	み-10G
3	耳飾り	土 製	29	29	4	2.9	D-11	9	耳飾り	土 製	77	76	19	49.9	み-7G
4	耳飾り	土 製	54	53	18	18.7	D-20	10	耳飾り	土 製	67	68	22	48.5	み-10G
5	耳飾り	土 製	62	62	22	34	D-23	11	耳飾り	土 製	44	43	15	27.4	ひ-9G
6	耳飾り	土 製	45	45	19	17.4	セ-7GNo.4								(単位mm, g)



第54表 グリッド出土遺物一覧表<土製品・石棒>

編目 番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	備考
1	土製円盤	土	板	30	29	6	7.1 み-9G
2	土製円盤	土	製	28	30	10	10 ~-8GII層
3	土製円盤	土	製	36	33	9	10.7 つ-7G
4	土製円盤	土	製	35	37	12	20.3 つ-14G
5	土製円盤	土	製	33	39	9	12.6 つ-13G
6	土製円盤	土	製	42	35	10	15.7 つ-13G
7	土製円盤	土	製	43	40	10	16.5 つ-12G
8	土製円盤	土	製	39	39	10	14.5 12-8G
9	土製円盤	土	製	41	36	14	22.5 13-8G
10	土製円盤	土	製	44	43	9	18 な-9GNo.4
11	土製円盤	土	製	43	40	8	16.9 ~-8GII層
12	土製円盤	土	製	44	41	9	18.8 み-8, ま-9G
13	土製円盤	土	製	46	45	7	20 つ-13G
14	土製円盤	土	製	46	44	10	23.2 つ-13G
15	土製円盤	土	製	48	46	10	25.2 す-6G粘石層
16	土製円盤	土	製	52	50	9	29.5 と-7-8G
17	土製円盤	土	製	57	53	11	36.4 ま-7G
1	石棒	珪質粘板岩	86	40	30	113.5	ま-8G 1層

(単位mm, g)

第119図 土製円盤 (1:3)・石棒 (1:2)

第55表 土坑出土遺物一覧表〈土器〉

辨別番号	器種	部位	法量	器形および文様	色調		焼成	註記	備考
					外面	内面			
1	深鉢	胴下		沈縫文、縦帶上に刻目	浅黄褐色 7.5YR8/4	褐色 7.5YR4/3	通常		D-1
2	深鉢	胴上		沈縫文、縦帶上に刻目	にじい褐色 5YR7/4	褐色 5YR4/1	通常	D-1	D-3
3	深鉢	胴上		縄文?	にじい赤褐色 5YR5/3	にじい褐色 5YR7/4	通常		D-3
4	深鉢	胴上		沈縫文	褐色 5YR7/6	にじい赤褐色 5YR4/3	通常	No.3	D-4
5	深鉢	胴上		縄文?	にじい赤褐色 2.5YR5/4	暗赤褐色 2.5YR3/2	不良		D-6
6	深鉢	口縁		沈縫文、縦帶文	にじい褐色 7.5YR6/4	にじい褐色 7.5YR6/4	通常	No.10	D-5
7	深鉢	口縁		縄文(LR)、沈縫文、円形刺突文	黒褐色 10YR2/2	黒褐色 5YR2/2	良好	No.2	D-5
8	深鉢	口縁		沈縫文、円形刺突文、縦縞文	にじい赤褐色 2.5YR4/4	暗赤褐色 2.5YR3/4	良好	No.1	D-9
9	深鉢	胴上		沈縫文、縦帶文	にじい赤褐色 2.5YR4/4	明赤褐色 2.5YR5/6	通常		D-9
10	深鉢	胴上		沈縫文	にじい褐色 7.5YR6/3	黒褐色 7.5YR3/1	通常		D-9
11	深鉢	胴上		沈縫文、縦帶文	褐色 5YR7/6	黒褐色 5YR2/2	通常		D-9
12	深鉢	胴上		沈縫文	にじい褐色 5YR6/4	黒褐色 5YR2/1	通常		D-9
13	深鉢	胴上		沈縫文	にじい褐色 7.5YR7/4	にじい赤褐色 2.5YR5/4	通常		D-9
14	深鉢	口縁 ~胴下	33.5 (31) (21)	沈縫文	にじい褐色 5YR7/4	にじい黄褐色 10YR7/4	通常	No.2.10.12.14. 15.17.19	D-11
15	深鉢	口縁 ~胴上		沈縫文、縦帶文	暗赤褐色 2.5YR3/2	暗赤褐色 2.5YR3/4	通常	No.1	D-15
16	深鉢	口縁 ~胴上		縄文(LR)、沈縫文	暗赤褐色 2.5YR3/2	暗赤褐色 2.5YR3/4	通常		D-15
17	深鉢	口縁 ~胴上		沈縫文	暗赤褐色 2.5YR3/3	にじい赤褐色 2.5YR4/4	通常	No.1	D-15
18	深鉢	口縁		-	にじい褐色 5YR6/4	にじい赤褐色 2.5YR4/4	通常		D-15
19	壺	把手		縦縞文	にじい褐色 5YR6/3	灰褐色 5YR5/2	通常		D-15
20	深鉢	胴下		沈縫文	にじい褐色 7.5YR6/3	にじい褐色 7.5YR5/3	通常		D-12
21	深鉢	胴下		沈縫文	にじい黄褐色 10YR7/4	にじい黄褐色 10YR6/3	通常		D-12
22	深鉢	胴上		縄文(RL)、沈縫文	にじい褐色 7.5YR7/4	褐色 5YR6/6	通常	No.16	D-12
23	深鉢	胴上		縄文(RL)、沈縫文	にじい褐色 5YR7/4	褐色 5YR4/1	通常	No.16	D-12
24	深鉢	胴上		縄文(RL)、沈縫文	黒褐色 10YR2/3	黒褐色 10YR2/2	通常		D-12

第56表 土坑出土遺物一覧表(土器)

辨認番号	器種	部位	法量	器形および文様	色調		焼成	註記	備考
					外面	内面			
25	深鉢	胴上		縄文(RL)、陰線文	にじい黄褐色 10YR7/3	灰黄褐色 10YR5/2	通常		D-12
26	深鉢	胴上		縄文(RL)、陰線文	にじい赤褐色 2.5YR5/4	黑褐色 5YR3/1	通常		D-12
27	深鉢	胴上		縄文(RL)、沈線文	橙色 5YR6/6	にじい赤褐色 5YR5/4	通常		D-12
28	深鉢	胴上		縄文(LR)、沈線文	黒褐色 5YR2/2	にじい褐色 5YR6/4	通常		D-12
29	深鉢	口縁		縄文(RL)、沈線文	にじい褐色 7.5YR7/4	にじい褐色 7.5YR4/3	通常		D-12
30	深鉢	口縁		縄文(LR)、微隆起文	にじい褐色 7.5YR6/3	にじい褐色 7.5YR6/3	通常		D-12
31	深鉢	胴上		縄文(LR)、沈線文	暗赤褐色 5YR3/2	暗赤褐色 5YR3/2	通常		D-12
32	深鉢	胴上		縄文(LR)、沈線文	基褐色 5YR2/2	暗赤褐色 5YR3/2	通常	No.16	D-12
33	深鉢	胴上		縄文(LR)、沈線文	橙色 7.5YR7/6	にじい褐色 7.5YR6/3	通常		D-12
34	深鉢	口縁		縄文(?)、微隆起文	橙色 7.5YR7/6	橙色 7.5YR7/6	通常		D-12
35	深鉢	胴上		縄文(LR)、微隆起文	明赤褐色 2.5YR5/6	にじい橙色 5YR6/3	不良	No.12	D-12
36	深鉢	胴上		縄文(LR)、微隆起文	にじい橙色 7.5YR6/4	にじい橙色 5YR6/4	通常	No.16	D-12
37	深鉢	胴上		縄文(LR)、微隆起文	にじい赤褐色 2.5YR5/4	暗赤褐色 2.5YR3/2	不良		D-12
38	深鉢	胴上		縄文(LR)、微隆起文	灰黄褐色 10YR5/2	灰黄褐色 10YR5/2	不良		D-12
39	深鉢	胴上		縄文(LR)?、円形刻突文?	にじい黄褐色 10YR6/3	にじい黄褐色 10YR6/3	通常		D-12
40	深鉢	口縁		微隆起文	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	通常	No.15.17	D-12
41	深鉢	口縁		縄文(LR)、微隆起文	にじい赤褐色 2.5YR5/4	暗赤褐色 2.5YR3/2	通常	No.3.9.16	D-12 42.43.44 と同一個体?
42	深鉢	胴上		縄文(LR)、微隆起文	にじい赤褐色 2.5YR4/4	明赤褐色 2.5YR5/8	不良		D-12 41.43.44 と同一個体?
43	深鉢	口縁		縄文(LR)、微隆起文	にじい赤褐色 2.5YR4/3	明赤褐色 2.5YR3/2	通常	No.13.16	D-12 41.42.44 と同一個体?
44	深鉢	胴上		縄文(LR)、微隆起文	明赤褐色 2.5YR5/6	明赤褐色 2.5YR5/8	不良	<~No.90	D-12 41.42.43 と同一個体?
45	深鉢	口縁		縄文(LR)、微隆起文	にじい赤褐色 2.5YR4/4	暗赤褐色 2.5YR3/2	通常		D-12
46	深鉢	口縁		縄文(LR)、微隆起文	にじい赤褐色 2.5YR4/4	暗赤褐色 2.5YR3/2	通常	No.10	D-12
47	深鉢	胴上		縄文(LR)、微隆起文	にじい赤褐色 2.5YR4/3	暗赤褐色 2.5YR3/2	通常		D-12
48	深鉢	胴上		縄文(LR)、微隆起文	にじい赤褐色 2.5YR5/4	にじい赤褐色 2.5YR4/3	通常		D-12

第57表 土坑出土遺物一覧表〈土器〉

種別 番号	器種	部位	法量	器形および文様	色調		造成	注記	備考
					外面	内面			
49	深鉢	胴上		圓文(LR)、沈線文	に近い赤褐色 2.5YR4/3	暗赤褐色 2.5YR3/2	良好		D-12
50	深鉢	胴		圓文(LR)	に近い赤褐色 2.5YR4/3	暗赤褐色 2.5YR3/2	通常		D-12
51	深鉢	胴		圓文(LR)	暗赤褐色 2.5YR3/3	暗赤褐色 5YR3/2	通常		D-12
52	深鉢	胴		圓文(-)	に近い赤褐色 2.5YR4/3	に近い赤褐色 2.5YR5/3	通常		D-12
53	深鉢	胴		圓文(LR)	暗赤褐色 2.5YR3/2	に近い赤褐色 5YR5/3	通常	No.13	D-12
54	深鉢	胴		圓文(LR)	暗赤褐色 2.5YR3/3	暗赤褐色 2.5YR3/2	通常	No.16	D-12
55	深鉢	胴		圓文(LR)	に近い橙色 5YR7/4	に近い橙色 5YR7/4	通常		D-12
56	深鉢	口縁 ~胴上	23.5	圓文(LR)、沈線文、張座起文	に近い橙色 7.5YR6/4	周色 7.5YR4/3	通常	No.3.11.14	D-12
57	深鉢	胴上 ~下	-	圓文(LR)、沈線文	明赤褐色 2.5YR5/6	暗赤褐色 2.5YR3/4	通常	No.7.8 8-3	D-12
58	深鉢	口縁底 ~	8.5	沈線文	に近い橙色 7.5YR6/4	に近い黄褐色 10YR6/3	良好	No.1	D-18
59	深鉢	口縁底 ~	21.5 18 7	沈線文、口唇部刻目	灰褐色 5YR4/2	灰褐色 5YR4/2	良好		D-19
60	深鉢	胴上		圓文(LR)、沈線文	に近い橙色 5YR6/4	に近い赤褐色 5YR5/3	通常		D-22
61	深鉢	胴上		圓文(LR) ?、張座起文	橙色 5YR6/6	に近い橙色 5YR5/4	通常		D-22
62	深鉢	胴上		沈線文?	橙色 5YR7/6	橙色 5YR6/6	通常		D-22
63	深鉢	胴下		継衫文	に近い黄褐色 10YR7/2	明黄褐色 10YR7/6	通常		D-23
64	深鉢	胴上		圓文(LR)、沈線文	灰黃褐色 10YR4/2	橙色 7.5YR7/6	良好		D-23
65	深鉢	胴上		圓文(LR)、沈線文	に近い橙色 5YR6/4	に近い橙色 5YR6/4	通常		D-23
66	深鉢	口縁		陰茎上に刻目	に近い黄褐色 10YR7/4	に近い黄褐色 10YR6/3	通常		D-23
67	深鉢	胴上		沈線文	黒褐色 10YR3/2	黑色 10YR2/1	良好		D-23
68	深鉢	胴上		沈線文	黒褐色 10YR3/1	に近い橙色 7.5YR6/4	良好		D-23
69	深鉢	胴上		圓文(LR)、沈線文	に近い黄褐色 10YR7/4	に近い黄褐色 10YR7/3	通常		D-23
70	深鉢	口縁		圓文(LR)、沈線文	に近い黄褐色 10YR6/3	に近い橙色 5YR6/4	良好		D-23
71	鉢	口縁		沈線文、陰茎上に刻目、円形 刻文	に近い黄褐色 10YR6/4	に近い黄褐色 10YR6/4	通常		D-23
72	鉢	口縁		沈線文、陰茎文	に近い黄褐色 10YR7/4	に近い黄褐色 10YR7/4	通常		D-24
73	-	胴	-	-	に近い黄褐色 10YR5/3	浅黃褐色 10YR8/3	通常		D-24

第58表 土坑出土遺物一覧表(土器)

件目 番号	器種	部位	法量	器形および文様	色調		焼成	註記	備考
					外面	内面			
74	深体	胴上		沈縞文、円形刻突文	にじい黄橙色 10YR6/3	灰黄褐色 10YR6/2	良好		D-28
75	深体	胴下		網文(LR)	にじい黄橙色 10YR7/4	浅黄褐色 10YR8/4	通常		D-28
76	深体	口縁 ～胴下	22 30.5 5	沈縞文、腰帶上に刻目	にじい褐色 7.5YR6/4	灰褐色 7.5YR4/2	良好 No.7.みむ-15 No.16.6-12		D-34
77	体	口縁 ～底	15.5 7.5 3	条縞文、微隆起文	にじい褐色 7.5YR6/4	灰褐色 7.5YR4/2	通常 No.2		D-34 把手付
78	深体	胴下		網文(LR)、沈縞文	にじい黄橙色 10YR7/4	にじい黄橙色 10YR7/4	通常		D-34
79	深体	胴下		網文(LR)、沈縞文	にじい褐色 5YR6/3	にじい黄橙色 10YR6/3	通常		D-34
80	深体	胴下		網文(LR)、沈縞文	褐色 7.5YR7/6	褐色 7.5YR7/6	通常		D-34
81	深体	口縁		網文(LR)、沈縞文、微隆起文	にじい黄褐色 10YR7/4	にじい黄橙色 10YR7/4	通常		D-34
82	深体	口縁		網文(LR)、沈縞文、微隆起文	にじい黄褐色 10YR7/4	にじい黄橙色 10YR7/4	通常 No.5		D-34
83	浅体?	口縁		円形貼付文、刺突文	にじい褐色 7.5YR7/4	にじい褐色 7.5YR7/4	通常		D-34
84	深体	口縁		沈縞文、刺突文	灰黃褐色 10YR5/2	黑色 10YR2/1	良好 No.7 み-9		D-34
85	深体	口縁		沈縞文、刺突文	にじい褐色 5YR6/3	にじい褐色 5YR6/3	通常 No.4		D-34
86	深体	胴上		沈縞文	にじい赤褐色 5YR5/3	黑褐色 5YR2/1	通常		D-37
87	深体	胴		網文(LR)	暗赤褐色 5YR3/3	にじい褐色 5YR6/4	通常		D-37
88	?	胴下 ～底	— 5	網代底	灰黃褐色 10YR6/2	灰黃褐色 10YR6/2	通常		D-37
89	深体	胴上		沈縞文、腰帶文	褐色 5YR6/6	褐色 5YR6/6	通常		D-38
90	深体	胴上		網文(RL)、沈縞文	にじい黄橙色 10YR7/3	にじい黄褐色 10YR6/3	通常		D-38
91	深体	胴下		網文(RL)、沈縞文	明黄褐色 10YR7/6	灰黃褐色 10YR5/2	通常		D-38
92	深体	胴上		条縞文	にじい褐色 7.5YR6/3	褐色 7.5YR7/6	通常		D-38
93	深体	胴上		網文(LR)、沈縞文	褐色 7.5YR7/6	褐色 7.5YR6/6	通常		D-38
94	深体	胴上		沈縞文	褐色 7.5YR7/6	褐色 7.5YR7/6	通常		D-38
95	深体	胴下 ～底	— 9	網代底	褐色 7.5YR7/6	褐色 7.5YR7/6	通常 No.1		D-38
96	深体	口縁 ～胴下	26 (32) (9)	微隆起文	褐色 5YR6/6	にじい赤褐色 5YR5/3	通常 No.2.5.6.7.8.9		D-41
97	深体	口縁		網文(LR)、微隆起文	にじい赤褐色 5YR4/3	褐色 5YR6/6	通常 No.3		D-41
98	深体	胴上		網文(LR)、微隆起文	明赤褐色 2.5YR5/6	明赤褐色 2.5YR5/6	通常		D-41

第59表 土坑出土遺物一覧表〈土器〉

件名 番号	器種	部位	法量	器形および文様	色調		焼成	註記	備考
					外面	内面			
99	深鉢	胴上		縄文(LR)、微隆起文	明赤褐色 2.5YR5/6	明赤褐色 2.5YR5/6	通常		D-41
100	深鉢	胴上		縄文(LR)、沈縄文	暗赤褐色 5YR3/3	灰褐色 5YR5/2	通常		D-41
101	深鉢	胴上		縄文(LR)、沈縄文	よい橙色 5YR6/4	よい橙色 5YR6/4	通常		D-41
102	深鉢	胴下 底 7.5	二	縄文(LR)、沈縄文	よい橙色 7.5YR6/4	よい橙色 10YR7/3	通常		D-41
103	深鉢	胴下 底 11.5	二	条縄文、沈縄文	よい橙色 7.5YR7/4	よい橙色 7.5YR7/3	不良	No2.7.11.15. 18~26	D-42
104	深鉢	胴上		沈縄文、縦帯文	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	通常	No10	D-42
105	深鉢	口縁		沈縄文、縦帯文	よい黄褐色 10YR6/4	よい黄褐色 7.5YR5/4	通常	No8	D-42
106	深鉢	胴上		沈縄文、縦帯文	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/8	通常	No13	D-42
107	深鉢	胴上		沈縄文、縦帯文	よい赤褐色 5YR5/4	赤褐色 5YR4/6	通常	No8	D-42
108	深鉢	胴上		縄文(RL)、横縄文	よい赤褐色 5YR5/3	明赤褐色 5YR5/6	通常	No2.3	D-42
109	深鉢	胴上		縄文(LR)、沈縄文	よい赤褐色 5YR5/3	よい赤褐色 5YR5/3	通常	No9	D-42
110	深鉢	胴下 底 8.5	二	網代底	よい黄褐色 10YR7/3	よい黄褐色 10YR7/4	通常	No1	D-42
111	深鉢	胴上		沈縄文、縦帯上に刻目	よい橙色 5YR6/4	よい赤褐色 5YR5/4	通常		D-44
112	深鉢	胴上		縄文(RL)、沈縄文	赤褐色 2.5YR4/6	暗赤褐色 5YR3/2	通常		D-44
113	深鉢?	口縁		縄文(LR)、沈縄文	橙色 7.5YR7/6	よい橙色 7.5YR6/4	通常	D-45, No.1	D-46
114	深鉢	胴上		縄文(LR)、沈縄文	明赤褐色 5YR3/2	よい黄褐色 5YR6/4	通常		D-46
115	深鉢	胴上		縄文(-)、縦帯上に円形刺突文	よい橙色 5YR6/4	橙色 7.5YR7/6	通常		D-46
116	深鉢	胴上		条縄文	よい橙色 5YR6/4	よい黄褐色 10YR6/4	通常		D-46
117	深鉢	口縁 胴上		縄文(RL)、沈縄文、条縄文	よい橙色 5YR7/4	よい赤褐色 5YR5/3	良好	No.3	D-48
118	深鉢	口縁		縄文(RL)、沈縄文、条縄文	よい橙色 5YR7/4	よい赤褐色 5YR5/3	良好		D-48
119	深鉢	口縁		条縄文	よい赤褐色 5YR5/3	よい赤褐色 5YR4/3	通常	No10	D-48
120	深鉢	胴上		沈縄文	明赤褐色 2.5YR5/6	橙色 5YR6/6	不良		D-48
121	深鉢	胴下		沈縄文	暗赤褐色 5YR3/4	橙色 5YR6/6	通常	No.5	D-48
122	深鉢	胴上		縄文(RL)、沈縄文	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	不良		D-48
123	深鉢	胴下		縄文(RL)、沈縄文	よい赤褐色 5YR4/4	よい赤褐色 5YR5/4	通常		D-48

第60表 土坑出土遺物一覧表(土器)

件名番号	器種	部位	法量	器形および文様	色調		焼成	註記	備考
					外面	内面			
124	深鉢	胴 下		沈縫文	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	通常	No.2	D-48
125	深鉢	口 緑		沈縫文	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	通常		D-50
126	深鉢	口 緑		沈縫文	橙色 5YR6/6	橙色 5YR6/6	通常		D-50
127	深鉢	胴 上			橙色 5YR6/6	に近い橙色 5YR6/4	通常		D-50
128	深鉢	胴 上			橙色 5YR6/6	に近い橙色 5YR6/4	通常		D-50
129	深鉢	胴 上			橙色 5YR6/6	に近い橙色 5YR6/4	通常		D-50
130	深鉢	胴 上			に近い橙色 7.5YR6/4	に近い橙色 5YR6/4	通常		D-50
131	深鉢	胴 上			明赤褐色 2.5YR5/8	明赤褐色 2.5YR5/8	通常		D-50
132	深鉢	胴 上			橙色 5YR6/6	に近い赤褐色 5YR4/4	通常		D-50
133	盃	口 緑 ～底 12 28.5 10	無文		に近い橙色 5YR6/3	に近い赤褐色 5YR3/3	通常	No.49	D-52
134	往 口 土 器	往 口	—		に近い橙色 5YR6/3	灰褐色 5YR6/2	通常		D-52
135	深鉢	胴 上		縹文(RL)、沈縫文	に近い褐色 7.5YR5/3	灰褐色 7.5YR5/2	通常		D-52
136	深鉢	口 緑		沈縫文	に近い褐色 7.5YR6/3	に近い褐色 7.5YR6/3	良好		D-52
137	深鉢	口 緑		縹文(RL)	灰褐色 5YR4/2	に近い赤褐色 2.5YR4/4	通常		D-52
138	深鉢	胴 上		巻接起文	に近い褐色 7.5YR5/3	に近い橙色 7.5YR6/4	通常		D-52
139	深鉢	口 緑		沈縫文	に近い黄褐色 10YR6/4	に近い黄褐色 10YR7/2	良好		D-52
140	深鉢	口 緑		縹文(LR)、沈縫文	橙色 5YR6/6	に近い橙色 5YR6/3	良好		D-52
141	深鉢	胴 上		縹文(LR)、沈縫文	橙色 5YR6/6	褐灰色 5YR5/1	良好	L-6.II層	D-52
142	深鉢	胴 上		縹文(LR)、沈縫文	黒褐色 7.5YR3/2	暗褐色 7.5YR3/3	良好		D-52
143	深鉢	口 緑		沈縫文、円形刺突文	褐灰色 10YR4/1	褐灰色 10YR4/1	良好		D-52
144	深鉢	口 緑		沈縫文、円形刺突文	灰黃褐色 10YR5/2	灰黃褐色 10YR5/2	良好		D-52
145	深鉢	胴 上		沈縫文	に近い赤褐色 5YR5/3	墨褐色 5YR3/1	良好		D-52
146	深鉢	口 緑		沈縫文、円形刺突文	に近い赤褐色 2.5YR4/3	灰赤色 2.5YR4/2	良好		D-52
147	深鉢	胴		沈縫文、階帯文	明赤褐色 2.5YR5/6	に近い橙色 5YR6/3	通常		D-53
148	深鉢	胴		沈縫文?	に近い褐色 7.5YR5/4	橙色 7.5YR5/6	通常		D-53

第61表 グリッド出土遺物一覧表(土器)

擇因 番号	器種	部位	法量	基形および文様	色調		焼成	註記	備考
					外面	内面			
01	壺	口縁 ～底	28.5 40 9.5	縹文(LR)、沈縫文、微隆起文	に近い赤褐色 5YR5/4	に近い褐色 7.5YR5/4	通常	無石屑	寸-6 せ-7把手
02	壺	口縁 ～底	21.5 31.5 7.5	縹文(LR)、沈縫文、彌縫起文	に近い赤褐色 5YR4/4	に近い赤褐色 5YR4/3	通常	II層田層No.4, 51.53.57.60～ 62.64.66.73.80	け-4 把手
03	深鉢	口縁 ～底	25 34.5 6	縹文(LR)、沈縫文	に近い褐色 7.5YR5/4	に近い褐色 7.5YR5/3	通常	II層 田層	け-5 把手
1	深鉢	把手		環状、沈縫文	に近い赤褐色 2.5YR5/4	に近い褐色 7.5YR5/4	良好	無石屑	寸-6
2	深鉢	把手		沈縫文、縦帯上に刻目	に近い褐色 7.5YR6/4	に近い褐色 7.5YR6/4	良好		け-4・5
3	深鉢	胴上		沈縫文、縦帯上に刻目	明赤褐色 2.5YR5/6	に近い赤褐色 5YR5/4	通常	2層	く-4
4	深鉢	胴上		沈縫文、縦帯上に刻目	に近い褐色 5YR6/4	明赤褐色 5YR5/6	通常	No.4	く-4
5	深鉢	胴上		沈縫文、縦帯上に刻目	に近い褐色 5YR6/4	明赤褐色 5YR5/6	通常	2層、No.96	く-4
6	深鉢	口縁		沈縫文	に近い褐色 7.5YR6/3	に近い褐色 7.5YR6/4	通常	P層	寸-6
7	鉢？	胴上		縹文(RL)、沈縫文	明赤褐色 2.5YR5/6	に近い褐色 5YR6/4	通常	No.24	ル・ル-15(20往)
8	深鉢	胴上		沈縫文、縦帯文	に近い黄褐色 10YR7/4	に近い黄褐色 10YR6/3	通常	P層	寸-6
9	深鉢	胴上		沈縫文	に近い褐色 7.5YR5/3	に近い褐色 7.5YR7/4	通常		寸-9
10	深鉢	胴上		綾形文	褐色 7.5YR6/6	に近い黄褐色 10YR6/4	通常	2層	く-4 く-4
11	深鉢	胴上		綾形文	褐色 7.5YR6/6	に近い黄褐色 10YR6/4	通常	No.39 2層	く-4 く-4
12	深鉢	胴上		綾形文	褐色 5R6/6	褐色 5YR6/6	通常	No.6	く-4
13	深鉢	胴		綾形文	褐色 7.5YR6/6	に近い褐色 7.5YR5/4	通常		く-3
14	深鉢	胴		綾形文	に近い褐色 7.5YR6/4	に近い褐色 7.5YR7/4	通常		く-4
15	深鉢	胴		綾形文	に近い褐色 7.5YR6/4	に近い褐色 7.5YR5/4	通常	No.13	か-3
16	深鉢	胴		綾形文	に近い褐色 7.5YR6/4	に近い黄褐色 10YR6/3	不良		く-4
17	深鉢	胴上		縹文(RL)	に近い褐色 7.5YR6/3	に近い褐色 7.5YR5/3	通常	IV層	し-5同一個体？
18	深鉢	胴上		縹文(RL)	に近い褐色 7.5YR5/3	に近い赤褐色 5YR4/3	通常		さ-5・6 し-6同一個体？
19	深鉢	口縁		縹文(RL)、陰縫文	に近い黄褐色 10YR6/3	に近い黄褐色 10YR6/4	通常		さ-5 さ・し-6
20	深鉢	胴下		縹文(RL)、沈縫文	に近い褐色 5YR5/4	褐色 5YR4/1	通常		く-3
21	深鉢	胴上		陰縫文、円形刺突文	に近い褐色 5YR6/4	灰褐色 5YR4/2	通常	田層	く-5

第62表 グリッド出土遺物一覧表〈土器〉

井田番号	器種	部位	法量	器形および文様	色調		焼成	註記	備考
					外面	内面			
22	深鉢	胴上		縦文(RL)、沈線文、円形刺突文	褐色 5YR6/6	に近い褐色 7.5YR6/3	通常		ム-9
23	深鉢	胴下		条線文、沈線文	褐色 5YR6/6	に近い褐色 7.5YR6/3	通常		ケ-4・5
24	深鉢	胴上		条線文	褐色 5YR6/6	に近い黄褐色 10YR6/3	通常	軽石屑	サ-6
25	鉢	口縁		条線文、沈線文	に近い黄褐色 10YR7/4	に近い黄褐色 10YR7/3	通常		Eサブトレ け-5
26	鉢	口縁		沈線文	に近い赤褐色 2.5YR5/3	に近い赤褐色 5YR5/4	通常		カ-5 カ・シ-6
27	深鉢	胴上		縦文(RL)、微隆起文	に近い赤褐色 5YR5/4	に近い褐色 5YR6/4	通常	P層	サ-6
28	深鉢	胴上		縦文(LR)、微隆起文、沈線文	に近い褐色 7.5YR7/4	に近い褐色 7.5YR6/4	通常		ム-8 ム-9
29	深鉢	胴上		縦文(LR)、沈線文	に近い褐色 5YR6/4	に近い黄褐色 10YR6/4	通常	No75	ケ-4
30	深鉢	口縁		縦文(LR)、微隆起文、沈線文	に近い赤褐色 2.5YR5/4	に近い赤褐色 5YR5/4	通常	軽石屑	サ-6
31	深鉢	胴下		縦文(LR)、沈線文	に近い赤褐色 2.5YR5/4	に近い赤褐色 2.5YR5/4	通常	軽石屑	サ-6
32	深鉢	口縁		縦文(LR)、沈線文	に近い赤褐色 2.5YR5/4	に近い赤褐色 2.5YR5/4	通常	軽石屑	サ-6
33	深鉢	胴上		縦文(LR)、沈線文	に近い赤褐色 2.5YR5/3	に近い赤褐色 5YR4/3	通常	軽石屑	サ-6
34	深鉢	口縁		縦文(LR)、沈線文	に近い赤褐色 2.5YR5/4	に近い赤褐色 2.5YR5/4	通常		カ-5・6 シ-6
35	深鉢	胴上		縦文(LR)、沈線文、微隆起文	に近い赤褐色 2.5YR5/3	に近い黄褐色 10YR7/3	通常		Eサブトレ け-5
36	深鉢	口縁		縦文(LR)、沈線文、微隆起文	に近い褐色 5YR6/4	に近い褐色 7.5YR6/3	通常	No38	ケ-4
37	深鉢	口縁		縦文(LR)、沈線文、微隆起文	に近い赤褐色 5YR5/3	に近い赤褐色 5YR5/3	通常	No20	ケ-4
38	深鉢	口縁		縦文(LR)、沈線文	に近い赤褐色 5YR5/3	に近い褐色 7.5YR5/3	通常	II層	ケ-4・5
39	鉢	口縁・胴下		縦文(LR)、微隆起文	に近い赤褐色 2.5YR5/4	に近い褐色 7.5YR5/3	通常	No1付近	サ-6 ジ-10
40	深鉢	把手		縦文(LR)、微隆起文	褐色 2.5YR6/6	褐色 2.5YR6/6	通常	軽石屑	セ-7
41	深鉢	把手		縦文(LR)、微隆起文、沈線文	褐色 5YR4/1	に近い赤褐色 5YR5/3	通常	II層	サ-6
42	深鉢	把手		縦文(LR)、微隆起文、沈線文	に近い褐色 7.5YR7/4	に近い褐色 7.5YR6/4	通常	No43	ニ-5
43	深鉢	口縁		縦文(LR)、微隆起文、沈線文	に近い褐色 7.5YR6/4	に近い黄褐色 10YR6/3	通常	軽石屑	サ-6 把手付
44	深鉢	口縁		微隆起文	に近い褐色 7.5YR6/3	に近い褐色 7.5YR6/4	通常		ケ-10
45	深鉢	口縁		縦文(LR) ?, 微隆起文	に近い褐色 7.5YR7/3	に近い褐色 7.5YR7/3	通常		ケ-11 把手付

第63表 グリッド出土遺物一覧表(土器)

件目 番号	器種	部位	法量	器形および文様	色調		焼成	註記	備考
					外面	内面			
46	深鉢	口縁		縄文(LR)、微隆起文	に赤褐色 2.5YR5/4	に赤褐色 7.5YR5/3	通常	II層	す-6
47	深鉢	口縁		縄文(LR)、微隆起文	に赤褐色 5YR5/4	に赤褐色 5YR5/3	通常		Eトレ12.13.81 把手付 穿孔
48	深鉢	口縁 ~肩下		縄文(LR)、微隆起文	褐色 7.5YR4/3	に黄褐色 10YR6/4	通常	軽石層	す-6
49	深鉢	口縁		縄文(LR)、微隆起文	に赤褐色 7.5YR6/3	に赤褐色 7.5YR7/4	通常	No55	き-4
50	深鉢	肩上		縄文(LR)、微隆起文	に赤褐色 2.5YR5/4	暗赤褐色 2.5YR3/1	通常	P層	す-6
51	深鉢	口縁		微隆起文	灰褐色 7.5YR4/2	褐色 7.5YR4/3	通常		む-13
52	深鉢	口縁		微隆起文	に赤褐色 5YR5/4	に赤褐色 7.5YR5/4	通常	軽石層 P層	す-6
53	深鉢	口縁		微隆起文	明赤褐色 2.5YR5/6	に黄褐色 10YR6/3	通常	軽石層	す-せ-6・7 ぞ-6トレ
54	深鉢	口縁	25 --	微隆起文	に赤褐色 2.5YR5/4	に赤褐色 5YR5/4	通常	軽石層	す-6 す-せ-6・7
55	深鉢	口縁		円形點付文	に黄褐色 10YR6/4	に黄褐色 10YR6/3	通常		む-10
56	深鉢	口縁		縄文(LR)、微隆起文	に黄褐色 10YR7/3	に黄褐色 10YR6/3	通常	II層	む-8
57	深鉢	口縁		微隆起文	褐色 2.5YR6/6	に赤褐色 5YR5/3	通常	2層 砂層	さ-5
58	深鉢	肩上		微隆起文	に黄褐色 10YR6/3	褐色 10YR4/1	通常		む-9
59	深鉢	口縁		縄文(LR)、沈縞文	灰褐色 7.5YR4/2	に赤褐色 5YR5/4	通常		む-11
60	深鉢	口縁		縄文(LR)、沈縞文、円形刺突文	灰褐色 7.5YR4/2	灰褐色 7.5YR4/2	通常	No78	け-5
61	深鉢	口縁		縄文(LR)、沈縞文	に赤褐色 7.5YR5/4	に赤褐色 7.5YR5/4	通常	No82 II層	け-4
62	深鉢	肩上		縄文(LR)、沈縞文	灰褐色 10YR6/2	褐色 7.5YR4/1	良好		む-11
63	深鉢	口縁		縄文(LR)、沈縞文	褐色 2.5YR6/6	褐色 5YR6/6	通常	II層	む-8
64	深鉢	口縁		縄文(LR)、沈縞文	に赤褐色 7.5YR5/3	に黄褐色 10YR7/3	通常	II層	ム-7・8 ム-7
65	深鉢	口縁		縄文(LR)、沈縞文	に赤褐色 5YR5/4	に赤褐色 7.5YR5/4	通常	No54	け-4 把手付
66	深鉢	口縁		縄文(LR)、沈縞文、円形點付文	に赤褐色 5YR6/4	に赤褐色 7.5YR6/3	通常		み・む-11
67	鉢	口縁		縄文(LR)、沈縞文	に黄褐色 10YR7/4	に黄褐色 10YR7/2	通常		む-12
68	鉢 ?	口縁		縄文(LR)、沈縞文	に赤褐色 7.5YR6/4	に赤褐色 7.5YR6/3	通常		す-6 トレ
69	深鉢	把手		微隆起文	明赤褐色 2.5YR5/6	に赤褐色 2.5YR5/4	通常	No93	け-5 穿孔

第64表 グリッド出土遺物一覧表(土器)

博物館番号	器種	部位	法版	器形および文様	色調		焼成	註記	備考
					外面	内面			
70	壺	口縁		円形刺突文、微隆起文	によい黄褐色 10YR7/4	淡黄褐色 10YR8/4	通常		み-9 把手付
71	深鉢	口縁		縦帯上に円形刺突文	によい褐色 7.5YR6/4	によい褐色 7.5YR5/4	通常	No20.21	く-4
72	深鉢	胴上		沈線文、円形刺突文	によい褐色 7.5YR5/4	によい褐色 7.5YR5/4	通常	2層	す-6
73	深鉢	胴上		レ点文	によい黄褐色 10YR7/4	によい黄褐色 10YR7/4	通常	2層	す-6
74	深鉢	口縁		沈線文、円形刺突文	によい褐色 7.5YR5/3	によい褐色 7.5YR5/3	通常	口層	す-6
75	鉢	口縁		沈線文、口唇部に沈線文と円形刺突文	淡黄褐色 10YR8/3	によい黄褐色 10R7/3	通常		Eトレ12.13.81
76	深鉢	口縁		沈線文、円形刺突文	黄褐色 2.5Y4/1	淡黄色 2.5Y7/3	良好		ま-9
77	深鉢	口縁		沈線文	灰黄褐色 10YR5/2	によい黄褐色 10YR7/3	通常		ま-8 み-9
78	深鉢	口縁		網文(LR)、沈線文	によい黄褐色 10YR7/4	によい黄褐色 10YR7/4	通常		ほ-8
79	深鉢	口縁		沈線文	褐灰色 10YR5/1	によい黄褐色 10YR6/3	良好		す-6トレチ
80	深鉢	口縁		沈線文、円形刺突文	によい黄褐色 10YR6/3	灰黄褐色 10YR6/2	良好	2層	く-4
81	深鉢	胴上		縦帯文、円形貼付文	によい黄褐色 10YR7/4	によい黄褐色 10YR7/2	通常	口層	す-6
82	深鉢	口縁		網文(LR)、沈線文	灰褐色 7.5YR4/2	によい褐色 7.5YR5/4	通常	2層	す-6
83	鉢?	口縁		網文(LR)、沈線文	灰黄褐色 10YR5/2	によい黄褐色 10YR6/3	通常		み-9
84	深鉢	胴上		網文(LR)、沈線文、円形貼付文	によい黄褐色 10YR6/3	によい黄褐色 10YR5/3	良好	2層	す-6 す-せ-6
85	深鉢	口縁		網文(LR)、沈線文、円形刺突文	によい黄褐色 10YR7/4	によい黄褐色 10YR7/4	通常		み-8 ま-9
86	深鉢	口縁		網文(LR)、沈線文、円形刺突文	褐色 7.5YR6/6	褐色 5YR6/6	通常	口層	す-6
87	深鉢	口縁		沈線文、刺突文	暗灰褐色 2.5Y5/2	灰褐色 2.5Y7/2	通常		ぬ-7-8
88	深鉢	口縁		沈線文、円形貼付文	灰黄褐色 10YR6/3	灰黄褐色 10YR5/2	通常		ま-9
89	深鉢	胴上		沈線文、円形貼付文	灰安褐色 10YR4/2	によい黄褐色 10YR6/3	通常		す-6トレ
90	深鉢	胴下		沈線文、刺突文	によい褐色 7.5YR5/4	によい褐色 7.5YR5/4	通常	2層	す-6
91	深鉢	胴下		沈線文	明赤褐色 5YR5/8	明赤褐色 2.5YR5/6	通常	口層	ぬ-8
92	深鉢	胴上		網文(LR)、沈線文	灰褐色 5YR5/2	によい赤褐色 5YR5/4	通常		ぬ-7-8
93	深鉢	胴下 ~底		網文、沈線文	によい褐色 7.5YR5/3	褐灰色 7.5YR4/1	通常		さ-5

第65表 グリッド出土遺物一覧表(土器)

件番号	器種	部位	法量	器形および文様	色調		焼成	註記	備考
					外面	内面			
94	深鉢	口縁 ～胴上	18.5 — —	沈縫文	にぼい赤褐色 5YR5/4	にぼい赤褐色 5YR5/4	通常	II層	ひ-7・ふ-7・8H 水印
95	深鉢	把手		沈縫文、円形刺突文	にぼい黄褐色 10YR7/3	灰青褐色 10YR6/2	通常		ふ-7・8南 穿孔
96	深鉢	把手		沈縫文	にぼい橙色 5YR6/3	にぼい橙色 5YR6/4	通常		む-11 穿孔
97	深鉢	把手		円形刺突文	明赤褐色 2.5YR5/6	にぼい橙色 5YR6/4	良好		さ-9 ふ-8
98	深鉢	口縁 ～胴上		縹文(LR)、沈縫文、縦帶上に 刺突文	黒褐色 5YR2/1	黒褐色 7.5YR3/1	通常	II層	ふ-7・8
99	深鉢	胴上		縹文(LR)、沈縫文	黒褐色 5YR3/1	黒褐色 5YR2/1	通常	II層	す-6
100	深鉢	胴上		縹文(R)?、沈縫文	褐色 7.5YR5/1	にぼい褐色 7.5YR6/3	通常	II層	す-6
101	深鉢	口縁		円形刺突文?、刺突文	にぼい橙色 5YR5/4	にぼい赤褐色 5YR5/4	良好		す-6トレンチ 穿孔?
102	深鉢	把手		—	にぼい橙色 7.5YR6/4	にぼい橙色 7.5YR7/3	通常	No5	く-4
103	深鉢	口縁		縹文(LR)?、沈縫文、縦帶上に 割目	褐色 10YR4/1	褐色 10YR5/1	良好	No1	し-6
104	鉢	口縁 ～胴上		縹文(LR)、沈縫文、口唇部に 刻目	黒褐色 5YR3/1	黒褐色 5YR3/1	良好	No93.112.115	こ-5
105	深鉢	口縁 ～胴上		縹文(LR)、沈縫文、縦帶上に 刻目、點付文	暗赤褐色 5YR3/2	にぼい赤褐色 5YR5/4	良好	II層	こ-5 把手付
106	深鉢	口縁		縹文(LR)、沈縫文	黒褐色 7.5YR3/1	墨色 7.5YR2/1	良好	II層	さ-6
107	深鉢	胴下		縹文(LR)、沈縫文	黒色 7.5YR2/1	墨色 7.5YR2/1	良好	No19	さ-6
108	深鉢	口縁 ～胴上		沈縫文、口唇部に円形點付文	にぼい赤褐色 5YR5/4	にぼい赤褐色 5YR5/4	良好	II層	こ-5
109	深鉢	口縁 ～胴上		沈縫文	灰褐色 7.5YR4/2	灰褐色 7.5YR5/2	良好		こ-5
110	深鉢	口縁 ～胴上	13 — —	沈縫文、口唇部に刻目、円形 點付文	褐色 5YR6/6	にぼい黃褐色 7.5YR6/4	通常	II層 No17.91	こ-5
111	鉢	口縁		縹文(LR)、沈縫文、円形刺突文	灰褐色 5YR4/2	褐色 5YR4/1	良好	II層	せ-7
112	鉢	胴上		縹文(LR)、沈縫文、円形刺突文	にぼい黄褐色 10YR5/3	灰青褐色 10YR5/2	通常		む-10
113	鉢	胴上 ～下		沈縫文、縦帯文	にぼい褐色 7.5YR5/4	明赤褐色 5YR5/6	良好	II層	す-6 す-6トレンチ
114	鉢	口縁 ～胴上		縹文(LR)、沈縫文、円形刺突文	にぼい黄褐色 10YR7/3	灰褐色 7.5YR5/2	通常		衣接
115	鉢	口縁		縹文(LR)、沈縫文、円形刺突文	にぼい黄褐色 10YR7/3	灰褐色 7.5YR5/2	通常		さ-5
116	鉢	胴上		縹文(LR)、沈縫文	にぼい黄褐色 10YR6/3	にぼい黄褐色 10YR6/4	通常		み・む-11
117	鉢	胴下 ～底	— 12	沈縫文、網代紋	にぼい褐色 7.5YR6/3	黒褐色 10YR3/1	良好	2層 砂質	さ-5

第66表 グリッド出土遺物一覧表(土器)

件名 番号	器種	部位	法	器形および文様	色調		検査	註記	備考
					外面	内面			
118	鉢	口縁		網文(LR)、沈縫文	褐色 7.5YR4/3	灰褐色 7.5YR4/2	通常		む-11
119	鉢	口縁		網文(LR)、沈縫文	灰褐色 7.5YR4/2	にぼい赤褐色 5YR4/3	良好	No.46.109	こ-5
120	鉢	口縁		沈縫文、蓮葉文	墨褐色 7.5YR3/1	褐色 7.5YR4/1	通常		み-9
121	深鉢	口縁		沈縫文	墨褐色 10YR3/1	墨褐色 10YR3/1	良好	灰II層	き-5
122	深鉢	口縁		網文(LR)、沈縫文	にぼい赤褐色 5YR4/4	暗赤褐色 5YR3/3	良好		む-9 み-9
123	深鉢	柄上		網文(LR)、沈縫文、円形刺突文	黒褐色 10YR3/2	灰黃褐色 10YR4/2	良好	No.13.14	き-6
124	深鉢	口縁		網文(LR)、沈縫文、貼付文	にぼい黄褐色 10YR6/3	にぼい黄褐色 10YR6/3	通常		み-9
125	深鉢	口縁		網文(LR)、沈縫文	灰黃褐色 10YR5/2	灰褐色 7.5YR5/2	通常		む-10
126	深鉢	柄上		網文(LR)、沈縫文	墨褐色 7.5YR3/1	灰褐色 7.5YR4/2	良好	No.2	き-6 把手付
127	深鉢	柄上		沈縫文	にぼい黄褐色 10YR6/3	灰黃褐色 10YR6/2	通常		ま-9 み-8
128	深鉢	柄上		沈縫文	灰褐色 7.5YR4/2	灰褐色 7.5YR4/2	通常	No.46	く-4
129	深鉢	口縁		沈縫文	にぼい赤褐色 5YR5/4	にぼい赤褐色 5YR5/3	良好		み-10
130	深鉢	口縁		沈縫文	にぼい赤褐色 5YR4/3	灰褐色 7.5YR4/2	良好		み-8 ま-9
131	深鉢	口縁		網文(LR)、沈縫文	灰黃褐色 10YR5/2	灰黃褐色 10YR6/2	良好		み-8 ま-9
132	深鉢	口縁		網文(LR)、沈縫文	灰褐色 7.5YR4/2	灰黃褐色 10YR6/2	良好		み-8 ま-9
133	深鉢	口縁		沈縫文	墨褐色 10YR3/1	暗褐色 10YR3/1	良好		み-9
134	深鉢	口縁		口唇部に刻目	灰褐色 7.5YR4/2	にぼい赤褐色 5YR5/4	通常		ま-8
135	深鉢	口縁		網文(LR)、沈縫文	墨褐色 10YR4/1	灰黃褐色 10YR6/2	良好		ね-8
136	浅鉢	口縁 ～柄下		沈縫文	にぼい褐色 7.5YR5/3	灰黃褐色 10YR5/2	良好	No.130.131	こ-5 把手付
137	注口土器?	口縁		沈縫文	灰黃褐色 10YR4/2	にぼい赤褐色 10YR6/3	良好		ま-9 み-8
138	深鉢	口縁～柄下		絹縫文	にぼい褐色 7.5YR5/3	にぼい黄褐色 10YR6/4	通常	日層	き-5 139と同一個体
139	深鉢	口縁		絹縫文	にぼい褐色 7.5YR6/4	にぼい黄褐色 10YR6/4	通常	No.8	き-5 き-6 138と同一個体
140	深鉢	口縁		口唇部に刻目	にぼい赤褐色 5YR5/4	灰褐色 7.5YR4/2	通常		む-9 み-8・9
141	深鉢	口縁		網縫文	淡黃褐色 10YR8/3	にぼい橙色 7.5YR7/4	通常		み-9

第67表 グリッド出土遺物一覧表〈土器〉

登録番号	器種	部位	法面	器形および文様	色調		焼成	註記	備考
					外面	内面			
142	深体	口縁		口唇部に刻目	によい褐色 7.5YR6/3	によい黄褐色 10YR7/2	良好	II層No47	さ-5
143	深体	口縁		条線文、粗線文	褐色 2.5YR6/6	明赤褐色 5YR5/6	通常		す-せ-6
144	深体	口縁		条線文、細線文	褐色 7.5YR7/6	によい褐色 7.5YR6/4	通常		は-9
145	深体	口縁		沈線文	によい橙色 5YR6/4	によい褐色 7.5YR6/4	通常		む-11 把手付
146	浅鉢?	口縁		繩文 (LR)、沈線文	によい赤褐色 5YR5/4	によい赤褐色 5YR5/4	良好	II層	は-8
147	深体	口縁		沈線文	によい黄褐色 10YR7/3	によい黄褐色 10YR7/3	通常		に-7・8
148	深体	口縁		条線文、口唇部に刻目	によい黄褐色 10YR6/3	灰黃褐色 10YR5/2	通常	No14.32	け-5
149	深体	口縁		沈線文	灰褐色 7.5YR4/2	によい褐色 7.5YR5/3	良好		し-5・6 把手付
150	深体	口縁		沈線文、點付文	灰褐色 7.5YR4/2	によい褐色 7.5YR5/3	良好		む-13
151	浅鉢	胴上		沈線文	灰黃褐色 10YR5/2	によい黄褐色 10YR7/3	通常		み-10
152	浅鉢	胴上		沈線文	灰褐色 7.5YR4/2	灰黃褐色 10YR5/2	良好		む-15
153	鉢	胴上		繩文 (LR)、沈線文	灰褐色 7.5YR4/2	灰褐色 7.5YR4/1	良好		さ-5
154	鉢	胴上		繩文 (LR)、沈線文	灰褐色 7.5YR5/2	黒褐色 7.5YR3/1	良好	No37	さ-5
155	鉢	胴下		沈線文	灰黃褐色 10YR5/2	褐灰色 10YR5/1	良好		す-せ-6
156	深体	口縁		沈線文、口唇部に刻目	褐色 10YR6/1	褐色 10YR5/1	良好	灰黑	さ-5
157	浅鉢	口縁		沈線文	によい褐色 7.5YR6/3	灰褐色 7.5YR4/2	良好		む-13
158	住口 土器	胴上		繩文 (LR)、沈線文	によい赤褐色 5YR5/3	によい赤褐色 5YR5/4	通常		せ-6
159	住口 土器	胴上		繩文 (LR)、沈線文	によい橙色 5YR6/3	によい赤褐色 5YR5/3	通常	2層	す-6
160	住口 土器	胴上		繩文 (LR)、沈線文	によい橙色 5YR6/3	によい褐色 7.5YR5/3	通常		せ-6
161	住口 土器	胴上 ~下		沈線文	によい黄褐色 10YR6/3	灰黃褐色 10YR6/2	良好		ま-9 み-8
162	住口 土器	胴上		沈線文	褐色 10YR4/1	灰黃褐色 10YR6/2	良好		ま-9 み-8
163	住口 土器	胴		-	によい褐色 7.5YR6/3	褐色 7.5YR4/1	良好		ま-9 み-8
164	住口 土器	胴上		沈線文	褐色 10YR5/1	灰黃褐色 10YR4/2	良好		ま-9・み-8把手付
165	住口 土器	胴上		沈線文	によい黄褐色 10YR4/3	褐色 7.5YR4/3	良好	No23	さ-5

第68表 グリッド出土遺物一覧表(土器)

井田 番号	器種	部位	法量	器形および文様	色調		焼成	註記	備考
					外面	内面			
166	注口 土器	胴上		沈縫文	にじい黄褐色 10YR7/3	にじい黄褐色 10YR7/3	良好	No14	さ-6
167	注口 土器	胴上		沈縫文	灰黄褐色 10YR4/2	にじい黄褐色 10YR6/3	通常	No13.30	け-4 把手付
168	注口 土器	胴上 ～下		沈縫文	黒褐色 10YR3/1	黒色 10YR2/1	良好		さ-5 把手付
169	注口 土器	胴上 ～下		沈縫文	灰黄褐色 10YR4/2	褐灰色 10YR4/1	通常		み-9 把手付
170	注口 土器?	胴下 ～底		網代底	褐色 7.5YR6/6	灰褐色 7.5YR5/2	通常	No22	み-む-15(20往)
171	注口 土器	把手		沈縫文、円形刻突文	にじい黄褐色 10YR6/3	灰黄褐色 10YR6/2	通常	日唇	す-6
172	深鉢	口縁		沈縫文	灰黄褐色 10YR4/2	にじい褐色 7.5YR6/4	通常		む-11 把手付
173	深鉢	口縁		沈縫文	灰褐色 7.5YR4/2	灰褐色 7.5YR4/2	通常		み-10 把手付
174	深鉢	口縁		沈縫文	灰黄褐色 10YR6/2	にじい褐色 7.5YR6/3	通常		み-9
175	深鉢	口縁		沈縫文	灰褐色 7.5YR6/2	褐灰色 7.5YR4/1	通常		む-14
176	深鉢	口縁		沈縫文、割目文	灰褐色 5YR4/2	にじい黄褐色 10YR6/3	通常		む-11
177	深鉢	口縁		沈縫文、円形貼付文	にじい褐色 7.5YR5/3	黒褐色 10YR3/1	通常		む-11 む-13
178	深鉢	口縁		沈縫文、口唇部に割目	にじい褐色 7.5YR5/3	にじい褐色 7.5YR5/3	良好		む-13
179	深鉢	口縁		沈縫文	灰褐色 7.5YR4/2	にじい褐色 7.5YR6/3	良好		む-8
180	深鉢	口縁		沈縫文、刺突文	灰褐色 7.5YR4/2	黒褐色 7.5YR3/1	良好		む・む-11
181	深鉢	口縁		沈縫文	灰黄褐色 10YR6/2	灰黄褐色 10YR6/2	通常		む-13 む-14
182	深鉢	胴上		沈縫文	にじい褐色 7.5YR5/3	黒褐色 7.5YR3/1	良好		こ-15
183	深鉢	口縁		沈縫文	にじい赤褐色 5YR4/3	にじい赤褐色 5YR4/3	良好		む-14
184	深鉢	胴上		沈縫文	灰褐色 5YR4/2	にじい赤褐色 5YR5/4	通常		む-13
185	深鉢	口縁 ～胴上		縞文(LR)、沈縫文	黒褐色 5YR3/1	にじい赤褐色 5YR4/4	良好		み-9 み-10
186	深鉢	胴上		沈縫文	にじい褐色 7.5YR7/3	褐灰色 10YR6/1	良好		み-10
187	深鉢	胴上		沈縫文	暗赤褐色 5YR3/4	明赤褐色 5YR5/6	通常		む-10
188	深鉢	口縁		沈縫文、刺突文	灰褐色 7.5YR4/2	灰褐色 7.5YR4/2	通常		こ-5
189	深鉢?	胴上		-	にじい黄褐色 10YR6/3	にじい黄褐色 10YR7/3	通常		む-12

第69表 グリッド出土遺物一覧表(土器)

神田 番号	器種	部位	法値	器形および文様	色調		焼成	註記	備考
					外 面	内 面			
190	深鉢	口縁 ～脚下	—	—	灰褐色 7.5YR4/2	に近い黄褐色 10YR6/3	良好	No4	さ-6 こ-5
191	深鉢	脚下 ～底	— 8	網代模	灰褐色 5YR4/2	灰褐色 7.5YR4/2	良好	No30.31	さ-5
192	深鉢	口縁	—	—	に近い橙色 5YR6/3	に近い橙色 7.5YR6/4	通常		む-12
193	鉢	口縁 ～底	11.5 5.5 6	網代模	に近い橙色 2.5YR6/4	に近い赤褐色 2.5YR5/4	通常	No35	け-4
194	—	脚下 ～底	—	—	灰褐色 7.5YR4/2	灰褐色 7.5YR4/2	通常		む-12
195	?	脚	—	—	に近い褐色 7.5YR6/3	褐色 7.5YR4/1	通常	II層	さ-5
196	浅鉢	口縁 ～底	— 9	—	に近い褐色 7.5YR6/3	に近い褐色 7.5YR5/3	通常	II層	さ-5
197	深鉢	—	—	範文(RL)、沈文	灰褐色 7.5YR6/2	褐色 7.5YR5/1	通常		せ-9 み-8
198	—	口縁	—	—	に近い黄褐色 10YR7/3	に近い黄褐色 10YR7/3	通常		み-10
199	盃	—	— 6.5	—	に近い褐色 7.5YR6/3	に近い褐色 7.5YR5/3	通常		む-9 穿孔

V 理化学分析

I 宮平遺跡の黒曜石の分析

立教大学一般教育部 鈴木正男

(1) はじめに

宮平遺跡から出土した総計20点の黒曜石について、その産地を熱中性子放射化分析と判別分析によって推定し、その年代を黒曜石水和層年代測定法によって測定した。

(2) 黒曜石分析

先史時代に石器製作のための石材として運搬・交易された黒曜石は、溶岩が急冷して生じた SiO_2 に富む天然ガラスであり、その産地は限られている。

黒曜石分析は、黒曜石の産地同定と水和層年代測定からなり、運搬・交易による黒曜石の空間的移動とそれが行われた時代の、時空にわたる分析を行う。

遺跡出土黒曜石の産地同定は熱中性子放射化分析法による微量元素の測定と、その結果に基づいた判別分析によって行われる。

(3) 热中性子放射化分析

種々の核種に熱中性子を照射するとそれぞれの核種は放射化され固有のエネルギーの γ 線を放出する。放射化された核種はそれぞれ固有の半減期で壊変するから、冷却期間を調節することによって期待される核種の γ 線を検出することができる。

ここでは約10日間冷却した後、 γ 線スペクトルを3,000秒計数し、標準試料(NBS278)と比較して、サマリウム(Sm)、ウラン(U)、トリウム(Th)、ハフニウム(Hf)、スカンジウム(Sc)、鉄(Fe)、ランタン(La)の7元素の定量を行った。その結果を第1表に示した。

(4) 判別関数

関東・中部地方遺跡出土の黒曜石の産地同定のための判別関数については、すでに Suzuki & Tomura (1983) に報告した。この判別関数を日本全国34か所の産地の黒曜石について適用できる

ようにするため、のべ512点の原産地黒曜石の熱中性子による放射化分析のデータを追加し、新たな判別閾数の設定を行った。この判別閾数は近い将来公表される。

ここではその判別閾数による産地同定を行い、その結果を第1表に示した。その結果によれば、宮平遺跡の20点の黒曜石の産地の内容は、星ヶ塔産18点、八ヶ岳産1点・和田岬産1点となった。

(5) 黒曜石水和層による年代測定

黒曜石の水和層の厚さ (THL: μm) と、経過した年代 (A: a) との間には、次の関係がある。

$$A = 1000 \cdot (THL^2/k)$$

ここに、kは効果水和温度 (EHT) が一様であると見なされる地域で設定され、かつ適用される水和速度 ($\mu\text{m}^2/1000\text{a}$) である。

この値についてはすでに野川遺跡などを基準にして、次のように設定されている (Suzuki, 1973)。すなわち和田岬産7.89、星ヶ塔・八ヶ岳・男女倉産5.13、神津島産2.69、上多賀・銀治屋産0.98、畠宿産0.28である。

そして効果水和温度が異なる地域に適用する場合には、その地域の年平均気温などから推定される補正值 (Suzuki, 1973) を用いて補正する。この方法の成功した事例として八丈島湯浜遺跡の例がある (Suzuki et al., 1984)。kの補正值krは宮平遺跡-0.68である (Suzuki, 1973)。

試料の調整は、黒曜石の剥離面に直交して切り出した小片、平均約10片を、エポフォームの試料枠に入れて、エポキシ系樹脂エボフィックスと硬化剤(いずれもDenmarkのStruers社製)を容積比8:1で混合する。硬化完了後、通常の手順にしたがって、30 μm 程度の厚さの薄片に仕上げた。これを1000倍の顕微鏡で観察し、顕微鏡テレビカメラで録画し、ビデオプリンターでプリントしたものをスケールルーペで測定した。

宮平遺跡の黒曜石水和層年代は以下のとおりである。

- | | | |
|---|-----------------------------|---------------|
| ① (Nos. 21, 22, 23, 25, 26, 27, 28, 29, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 40) | | |
| 15点 | $5.05 \pm 0.08 \mu\text{m}$ | 7,300 ± 300年前 |
| ② (Nos. 24, 30, 31, 39) | | |
| 4点 | $4.24 \pm 0.13 \mu\text{m}$ | 5,200 ± 300年前 |
| ③ (No. 32) | | |
| 1点 | 7.14 μm | 9,500年前 |

ここに得られた黒曜石水和層年代は縄文時代中期後半～後期という考古学的編年と必ずしも一致しない。

第1表 宮平遺跡分析黒曜石一覧表

No	Sm	U	Th	Hf	Sc	Fe	La	产地	水和層厚	遺構番号
1	6.12	3.75	11.2	3.05	2.95	0.462	16.8	H 2	6.4	ちー7グリッド
2	6.12	3.5	11.4	3.6	3.01	0.566	17.4	H 2	6.3	ふー7グリッド
3	6.77	3.22	12.8	3.65	3.47	0.548	20	H 2	6.4	J-17号住居
4	6.26	3.23	11.6	3.76	3	0.462	18.3	H 2	5.4	J-17号住居
5	6.39	3.34	11.6	3.75	3.18	0.52	17.6	H 2	6.1	J-17号住居
6	6.52	3.46	12.1	2.73	3.2	0.527	19.3	H 2	6.5	J-17号住居炉
7	6.04	4.14	12.1	3.45	3.24	0.527	19	H 2	6.4	J-17号住居
8	5.91	3.41	11.5	2.86	3.25	0.479	17.4	H 2	6.3	J-17号住居
9	6.08	4.26	12.2	3.33	3.43	0.543	18.2	H 2	6.4	J-17号住居
10	4.44	2.51	10	3.63	2.38	0.666	27.5	YO	5.4	J-17号住居
11	6.02	4.28	12	3.34	3.13	0.534	18	H 2	5.5	J-17号住居
12	8.57	9.69	31.3	4.42	5.73	0.513	25.3	WO	9	J-17号住居
13	6.16	4.3	12.5	3.55	3.36	0.483	18.4	H 2	6.3	J-7号住居
14	5.72	4.13	11.3	3.39	3.17	0.494	17.2	H 2	6.4	J-7号住居
15	5.75	4.17	11.4	3.28	3.1	0.51	17	H 2	6.5	J-7号住居
16	5.87	3.82	11.7	3.18	3.28	0.491	18.5	H 2	6.5	J-7号住居
17	6.19	4.17	12.2	3.51	3.31	0.477	19.8	H 2	6.4	J-7号住居
18	5.45	3.66	10.8	2.71	2.95	0.456	16.2	H 2	6.3	J-7号住居
19	5.76	4	11.4	3.32	3.13	0.503	17.1	H 2	5.1	J-7号住居
20	5.62	3.46	10.9	3.18	3.15	0.483	17	H 2	6.4	J-24号住居

各元素の含有量は、鉄(Fe, %)を除いてppmである。産地記号YOは八ヶ岳産、WOは和田岬産、H 2は星ヶ塔産を示す。水和層厚は任意単位、1任意単位は0.794μmである。

引用文献

- Suzuki, M., 1973 : Chronology of prehistoric human activity in Kanto Japan-Part I. J. Fac. Sci., Univ. Tokyo, Sec. V (Anthropology), Vol.IV, 241-318.
- Suzuki, M. and Tomura, K., 1983 : Basic data for identifying the geologic Source of archaeological obsidian by activation analysis and discriminant analysis. St. Paul's Review of Science, 4, 99-110.
- Suzuki, M., Kanayama, Y., Ono, A., Tsurumaru, T., Oda, S., and Tomura, K., 1984 : Obsidian analysis : 1974-1984. St. Paul's Review of Science, 4, 131-140.

2 宮平遺跡出土の赤彩土器の分析

国立歴史民俗博物館 永 鳴 正 春

宮平遺跡からは、縄文時代中期から後期にかけての赤彩された土器が出土している。これらの資料については、顔料使用の歴史を検討する立場から、非破壊的な手法による顔料の同定分析、微小な試料を採取しての層構成あるいは膠着剤（接着剤）の調査を行った。有意義な結果が得られているので、ここにその概略を報告する。

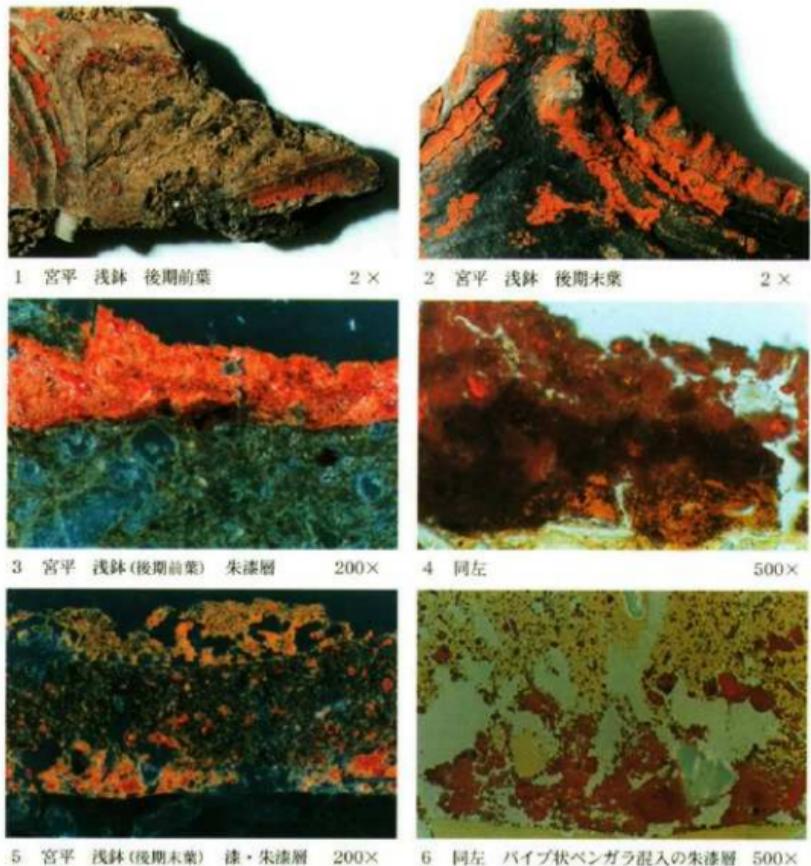
分析試料の2点の赤彩土器片の外観はともに近似しており、やや明るめの赤色を示すとともに、やや塗膜状を呈している。第1図に外観を示したが、第1図1は、むー11グリッド出土深鉢断片（縄文時代後期前葉）、第1図2は、むー11グリッド出土深鉢断片（縄文時代後期末葉）である。

両資料の赤色顔料付着部位を中心とした非破壊的な蛍光X線分析によれば、両者ともに水銀が有意に検出されているが、鉄については胎土面との差異が明瞭ではない。したがって、両資料とも朱（赤色硫化水銀）が塗彩されたものと判断される。朱については焼成前の塗装は無意味（分解消失してしまう）であるので、焼成後に何らかの接着剤を用いて塗布したことになる。

第1図3～6に、赤色塗彩部から採取した微小試料についての層断面（薄片）を示したが、これらによれば、朱は漆によって塗られていたことが判明する。朱粒の周囲を充填するようにして存在する透明性のある淡黄褐色～淡赤褐色の物質が漆である。すなわち、これらの土器には朱漆が塗布されていたのである。

第1図3・4は、後期前葉の土器片の赤彩部層断面であるが、土器の表面にはかなり粗い粒子を含む朱漆の層が1層認められる。朱粒は層中にはば均等に分散しており、朱漆塗布後、漆の硬化に至る間、比重の大きな朱の粒子が漆の層中で片寄りを生じないように配慮していたことが類推される。すなわち、朱漆としての良好な発色を確保するため、土器に朱漆を塗った後、漆が乾燥するまでの間、土器をゆっくりと回転して動かしていたことが想定できるのである。

第1図5、第1図6は、後期末葉の土器片の赤彩部層断面であるが、漆層としては3層の存在が確認できる。土器の表面にはまず漆（赤色顔料を混和していない漆、おそらくクロメ漆）が塗られ、それが乾燥した後で、次に朱漆が塗布されている。この朱漆中の朱粒は、どちらかといえばやや下方に片寄っていると思われ、混入量が若干少ないと併せ、あまり良好な発色が得られなかったものと考えられる。そのためか、その上に細かな朱を中心とした朱漆をもう1層重ね塗りしており、結果として、第1図2にみられるような良好な朱漆としての外観を示すこととなった。なお中層の朱漆層には、パイプ状ベンガラ粒子が汚れ程度に混入しており、興味がもたれる。



第1図 宮平遺跡出土赤彩資料(縄文時代)

VI 総括

I 宮平遺跡の縄文土器

(1) 概要

出土した土器は、住居跡に伴う縄文時代中期後葉から末葉が多いが、土坑出土のものでは後期後半のものが多く、遺構外の土器では後期後葉のものが多い。出土土器の現位置を記録していないため、遺物からは遺構の把握は困難で、後期後葉の住居跡などがあった可能性があるかもしれない。

中期後葉の土器では、曾利式土器と加曾利E式土器に交じって、唐草文系土器や佐久系土器がみられる。特に、加曾利E 3式土器の文様構成に沈線文の地文をもつものが目立つことが多いようである。小破片であるものは型式の判別がつかないものが多い。住居跡に伴う加曾利E 3式期から後期初頭については後に詳しく述べることにする。

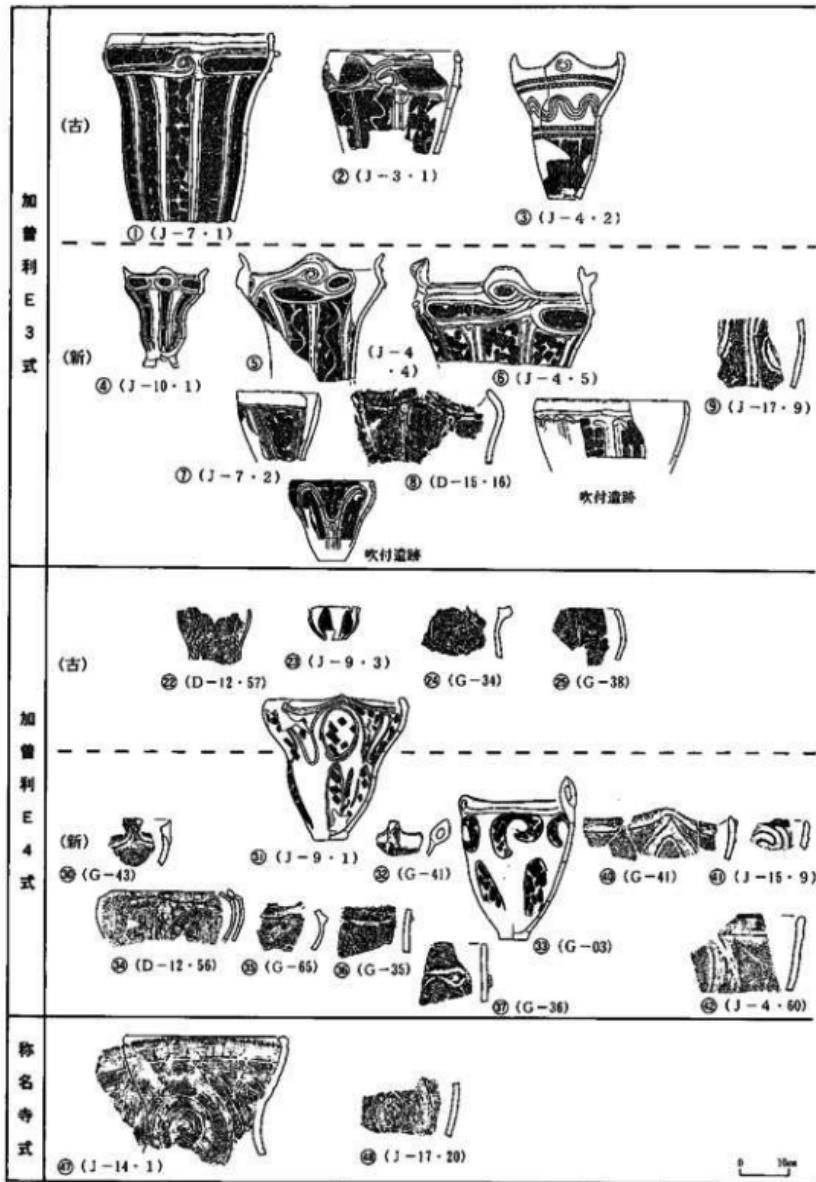
後期の土器の特徴について。壇之内式土器では、胴部が「く」の字に屈曲した器形が多く、胴部の括れが弱い深鉢形土器は少ない。この胴部が屈曲した土器は、括れがきつけられればきついほど器高が低く鉢形になるが、逆に括れが弱ければ深鉢形になる。深鉢形と鉢形、浅鉢形の識別は口径の大きさによる。つまり、鉢形土器はおおよそ口径と器高が同じ値であるもので、口径が大きいものは浅鉢になる。ただし、浅鉢は器形や文様の付け方によって、法量がわからなくてもそれとわかるものが多い。鉢形土器については特徴的な形や文様であれば判別できるものがあるが、部位によっては不明であるものが多い。つまり、壇之内式土器の胴部に括れをもつ土器、たとえば第IV章第51図15住1・3などは、器高が口径より大きいので鉢形というより深鉢形というべきであろう。滝沢遺跡でも指摘されているとおり、本遺跡においても胴部が「く」の字に括れる土器が多い特徴がある。

加曾利B式期では逆に1式期の朝顔形の精製土器が目立ち、2式期以降では矢羽状沈線文が施される土器が多い。後期の無文土器は比較的多いものの、縄文を地文とし口縁部に紐線文が巡る土器は少ないといえよう。

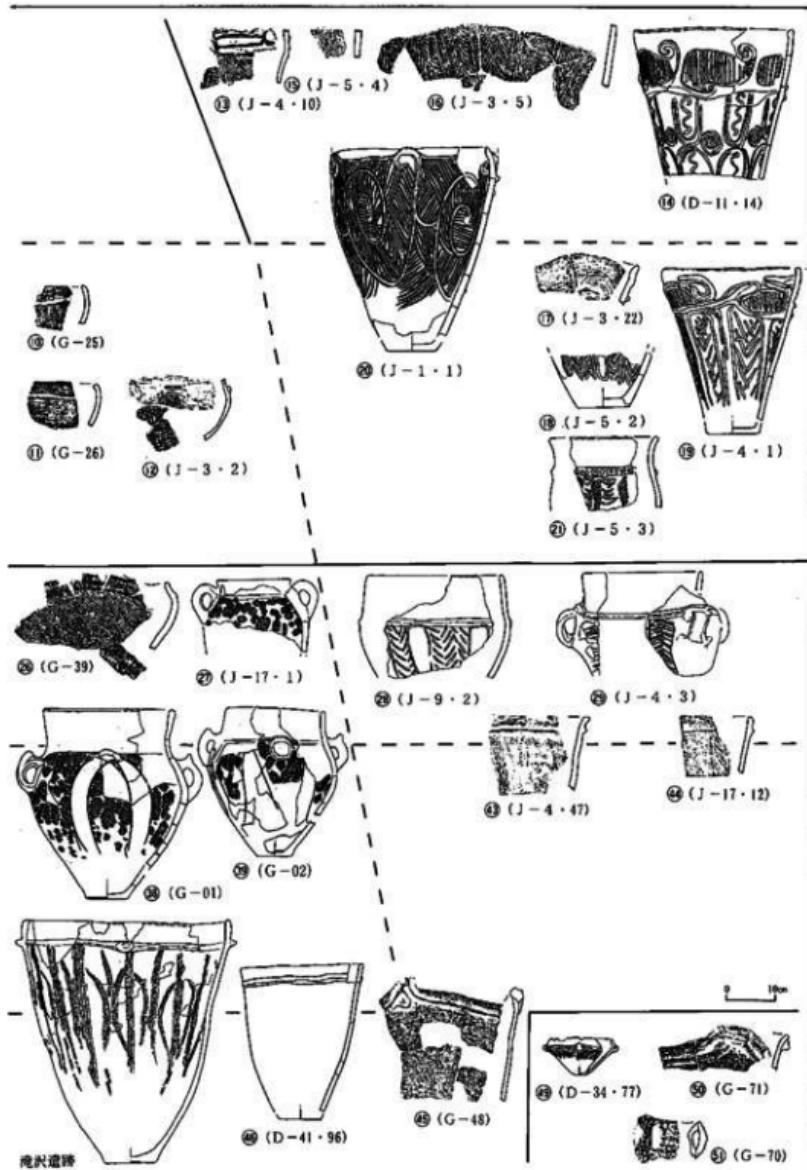
(2) 加曾利E 3式・加曾利E 4式土器について

A 段階区分

本遺跡では住居跡に伴う土器は、加曾利E 3式・加曾利E 4式土器を中心とする。そこで、こ



第1図 宮平遺跡の土器段階区分



の時期の土器編年について検討したい。

加曾利E式土器後半・加曾利E3式から中期末の土器編年については、最近遺跡の調査例が増えたことによって盛んに論じられるようになった。1979年の山内清男の『日本先史土器図譜』以降加曾利E式土器はI~IVないし1~4に分けられ、おおよその土器の新旧関係はこの流れに沿ったような方向にある。問題はどこで時期を区切るか、あるいはどこまで細分するかにあるよう思われる。神奈川考古同人会による『縄文時代中期後半の諸問題一とくに加曾利E式と曾利式土器の関係について』は土器編年を地域ごとに検討し、併行関係を見極めようとする姿勢としては高く評価されるが、結論というべき土器型式の編年では各地域による認識の違いが露呈し、混乱の一因ともなった。

筆者は、基本的には東京編年や神奈川編年により近い認識をもっているが、若干の私見を述べてみたい。

時期区分の基準となる要素は主に次の三つに集約される。

(1) 口縁部文様帶の消失。

(2) 器形の変化

(3) 文様手順の変化。擦消縄文から充填縄文へ。

これらの観点から加曾利E3式・加曾利E4式について検討することにする。

<加曾利E3式古段階>

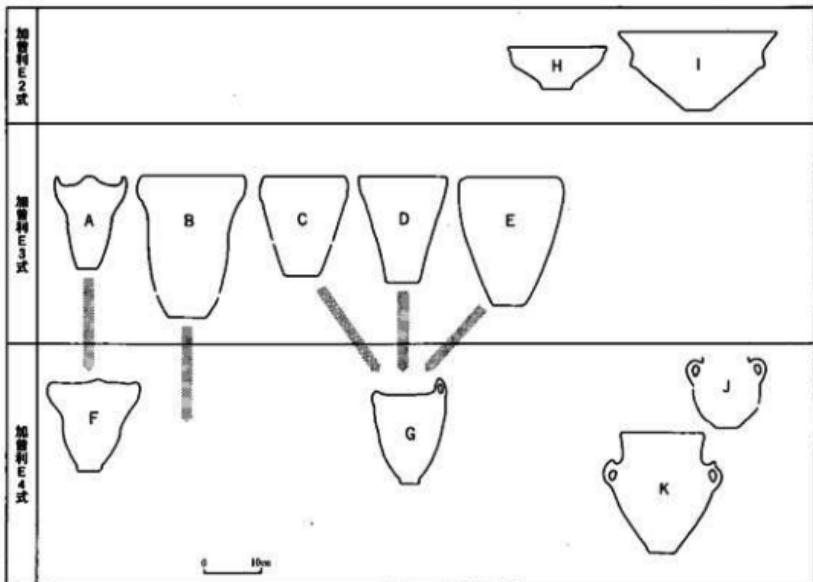
器形はキャリバー形が崩れた形で、平縁もしくは4単位の波状口縁をもつ。

口縁部文様帶では隆線文による渦巻き文と橢円区画が崩れたモチーフが施され、胴部ではR L縄文を施した後に並行沈線文が施される。第1図①・②がその典型で、地文上に蛇行沈線文が施される。前段階との大きな違いは、磨消縄文にある。また、沈線文や口縁部の隆線文は幅広く浅い特徴がある。地文は縄文の他に沈線文や構造工具による条線文がある。さらに、加曾利E2式土器では口縁部の隆線文はより高く、貼り付けたままのような形状である。器形は第1図02が典型的で、頸部の括れがやや弱くなるキャリバー形で口縁部に膨らみをもつ。Cは頸部の括れがほとんどみられない器形で、加曾利E3式古段階にみられる。

連弧文がこの段階まで存在し、第1図③にあるように平縁の他に波状口縁があり、口縁部文様帶に胴部中頃に円形刺突文が施されるものもある。いうまでもなく、連弧文系土器は胴部中頃で刺突文や沈線文で文様帶が分割する特徴をもつものである。器形の点から第1図01にみられるもので、次の加曾利E3式の新しい土器にもみられる。

<加曾利E3式新段階>

第1図⑤・⑥のように口縁部文様帶の渦巻き文と橢円区画がより入り組んだ文様になる。平縁の他に4単位の波状口縁がみられる。また、口縁部文様帶を失うものがある。胴部の文様は、逆



第2図 器形変化

U字状沈線文や第1図⑥・⑦・⑧のような「」状沈線文、H状区画をもつものがあるが、依然として擦消繩文手法である。また、並行沈線文間に蕨手文がみられるものがある。全体として、沈線文はより幅が狭い棒状工具で深く施される傾向がみられる。なお、吹付遺跡図104の86に類似する土器が第IV章第25図5（J 5）にみられるが、⑦や⑧と同じ段階に位置付けられる。

加曾利E 4 式の微隆起文につながる土器が⑨で、この段階ではR L繩文の上に隆起線文を貼付している。渦巻きなどのモチーフをもつ。本遺跡では少ないようである。

鉢形土器については口縁部に横位沈線文をもつ第1図⑨・⑩のような土器に加え、地文が繩文であるものもこの時期に伴う。加えて、第1図⑫のような両耳壺がみられ、加曾利E 4 式に量的に充実してくる。この時期の両耳壺は、⑫のように逆U字状沈線文や口縁部の無文帯の下に、口縁部の無文帯の下に渦巻き文や横円区画のモチーフをもつ文様帯をもつものがある。

<加曾利E 3 式土器と在地の土器について>

本遺跡でみられる特徴は、関東地方に分布する加曾利E 3 式土器が多くみられる。この加曾利E 3 式土器は第1図①～⑪で、南関東で出土する土器と酷似している。ただし、⑥の波頂部の窪みは独特のものであろうか。

第1図⑬は隆帶による渦巻き文と横円区画がみられ、胴部の綾杉文の地文に並行沈線文が施さ

れる。⑯は佐久系土器にみられる特徴である鱗文であろう。⑰は縦杉文上に並行沈線文が施されているが、地文を擦り消していない点は注意される。⑱は口縁部文様帯が幅広くとられており、渦巻き文と梢円区画が沈線によって施されおり、胴部のU字状のモチーフ内に蕨手文がみられる。⑲は口縁部文様帯の文様構成と胴部の「」状沈線文から、加曾利E 3式土器の新しい段階に相当しようか。加曾利E 3式土器の文様構成に曾利IV式土器の影響がみられる土器である。同様にして⑳も縦杉文上にU字状モチーフがみられる。口縁部に⑲のようなモチーフをもつ可能がある。86に類似する土器は第IV章第25図5（J 5）にみられるが、加曾利E 3式新段階に位置付けられよう。

唐草文系土器の㉑は胴部に隆帯による渦巻き文をもつ鉢形土器（第IV章第7図1・第2図E）で、曾利II式（第IV章第8図3）や加曾利E 3式土器の古手の浅鉢（第IV章第8図2）とともに住居跡から出土している。南関東でも曾利II式土器とともに住居跡などから出土しているが、㉒のような土器には口縁部文様帯の狭小化あるいは消失化がみられ、加曾利E 3式土器の口縁部文様帯消失化と何らかの影響が認められようか。

先の浅鉢（第IV章第8図2）に系譜がもとめられる器形第2図Iである21は、第2図Jの両耳壺につながる器形であろう。胴部の括れ部にある隆帯上に刻目と地文に繩文だけでなく、沈線文が加えられる点が在地的な特徴がみられる。

＜加曾利E 4式直前段階＞

逆U字モチーフが施される土器で、口縁部に羽状繩文が施されるものもある。施文手順は繩文を転がした後に沈線文が施され、加曾利E 3式にみられる特徴を堅持している。沈線文の施文具は比較的幅の狭い棒状工具を使用している。沈線文の間に蕨手文がみられるものがある。吹付遺跡では196が相当し比較的まとまっているようだが、本遺跡では少ないようだ。モチーフや施文具が加曾利E 4式と類似しているものがあり、判別が難しい。今後の資料の増加によっては細別できる可能性は捨てきれないが、現時点では磨消繩文手法がみられる点を重視して、加曾利E 3式土器新段階に含め考えたい。

＜加曾利E 4式古段階＞

微隆起文を文様要素としてもつものを新しくとらえたい。

幅が狭い棒状工具やヘラ状工具による深い沈線文で、胴部中頃で文様帯が分かれ、U字状ないし鋸歯状のモチーフが2段描かれる。器形は22や23のように口縁部が膨らみ胴部で括れる第2図Fのような形状を呈する。口縁部に羽状繩文がみられるものがある。施文手法はモチーフ内に繩文が充填される点で大きく変わる。また、この時期からL R繩文が目立ってくる点も大きな変化といえよう。

加曾利E 3式にみられた鉢形土器は胴部全体に膨らみをもち、より径の小さな底部をもつ器形

に変化をする。文様は縄文や棒状工具による条線文がみられる。胴部下半が無文であるものも少なくない。26のように口縁部に横位沈線文の代わりに微隆起文が巡るものもある。

両耳壺は第2図Jのように胴部に肩をもつようになる。27のように口縁部の無紋帶の幅が狭く、把手が競り上がった形状のものは古く考えられる。ただし、文様構成がわかる大形破片でないと細かな時期の特定が難しいものが多い。28と29は器形が加曾利E4式土器にみられる形状であるが、逆U字状沈線文内あるいは外に綾杉文が施されている。曾利式土器の影響が認められる土器である。

＜加曾利E4式新段階＞

30から33は口縁部に微隆起文がみられる土器である。31は口縁部が膨らみ胴部中頃で括れ、胴部下半で窄まり、より小さな底部をもつ不安定な器形で、第2図Fが相当する。口縁部が膨らみ胴部が括れる器形は、鋸齒状沈線文が施される土器の典型的な形といえる。30や32、33は把手をもつ土器である。33のように二単位であったり、ひとつだけ大きい把手があたりする。また、33や34・35・36は後期初頭の称名寺式土器のJ字モチーフにつながるようなモチーフが取り込まれている。これらはいずれもヘラ状工具ないしは先端の比較的尖った棒状工具で描かれている。37は逆U字状もモチーフ中央に微隆起状の突起がつけられる土器で、38のようなモチーフをもつ場合が考えられる。33や37は沈線文をもつ土器には珍しい第2図Gの円筒形を呈する器形である。

38と39は両耳壺で、把手は棒状に発達した形態で第2図Kに分類される。38の口縁部無文帶の下に羽状縄文がみられる。底部がより小さく突出した形状である。

微隆起文の土器群が40から42である。器形は、主として第2図Fの31のような沈線文が施されるものと第2図GやLのような口縁部から底部まで変化に乏しい円筒形があり、である42、おそらく胴部で括れる瓢箪形になるであろう41に分かれる。縄文が施される40と42は微隆起文が付けられた後に縄文が充填されている点を強調したい。

43と44は微隆起文の円筒形で第2図Lのような器形である。逆U字状モチーフ内に縄文あるいは綾杉文が充填されている。両者ともに無文部分が多く残されていることから後期につながる要素がみられるであろう。

＜称名寺式土器段階＞

47と48は称名寺I式土器で、これに一部伴うであろう土器が45と46である。口縁部に微隆起文が付けられており、45は突起部分に渦巻き状のモチーフがみられる。45は細い縄文を縦に転がしていることと胴部下半が無文である点から46とともに後期初頭まで残る土器であると考えられる。46は口縁部に微隆起文が巡る土器で、第2図Lが相当する。両者ともいわゆる粗製土器といえよう。

＜後期初頭の異系統土器＞

50は口縁に隆起上に刻目をもつ土器である。口縁部が開き、括れをもつ器形である。51は刺突文が施されている把手である。施文具は先の尖った棒状工具を用いる。49把手をもつ浅鉢形土器で、条線文が地文である。いずれも三十稻場式土器である。

B 施文手順

a) 慶消繩文

土器の時期区分は大形破片であれば、文様構成など情報量が多く細かい編年は可能であるが、大半が小破片である。埋設土器など住居跡に伴うものであれば時期を特定できるが、そのような土器がない場合が多い。土器編年は細別すればするほど、遺構を細かく認識することができるだけでなく、集落内での人間行動の軌跡を辿ることができる可能性があり、地域間での交流など多くの情報を引き出すことができる。しかし、そこには大きなリスクが伴っている。つまり、出土状態や事例の累積によってある程度の蓋然性が高まっていなければ、たとえ土器型式を鏡舌に分類細分したとしても「時間や地域間をはかるものさし」とは成り得ないことがある。この点を充分念頭にいれたうえで、中期終末の加曾利E 3式から加曾利E 4式土器についてまとめたい。

一口に言って、加曾利E 3式土器の特徴は、棒状工具によって繩文を擦り消す点にある。写真図版（文様拡大）は、口縁部文様帯をもつ土器の並行沈線文と繩文である。これと繩文地に波状沈線文がはいる②、やや繩文部分が幅狭くなった④、口状沈線文をもち並行沈線文の間に蕨手文をもつ⑥、口縁部文様帯を消失した⑧とを比較したい。加曾利E 3式古段階と新段階とではいくらか並行沈線文の幅が広く、また施文具である棒状工具の幅が狭いような傾向がみられるだろうか。しかし、胴部でも施文手順は“繩文→沈線文”であり、器形や口縁部文様帯などの文様構成がわかるような大形破片でないと判別できない（註）。

なお、加曾利E 3式土器にみられる“地文を擦り消す”という手法は綾杉文などの沈線文においても同様で、その観点においても⑩などを加曾利E 3式土器に位置付けるものである。

b) 充填繩文

加曾利E 4式になると沈線文の幅がより狭く深くなる。施文具として棒状工具の他にヘラ状工具を用いるものがある。写真図版22や24は尖端を有する施文具でモチーフを描いた後に繩文が付けられている。注目すべき点は繩文が細かくLRからLRに変わっていることである。31と33も同様に鋭利な施文具でモチーフを描いた後に細いLR繩文で充填されている。無文部分が多い点も特徴のひとつである。35・37も沈線文や繩文ともに細い施文具を用いている。

充填繩文とLR繩文は47や48のように称名寺式土器にも受け継がれる。沈線文の施文具は幅の狭い棒状工具で深く描かれる。



写1 ① 磨消繩文



写2 ② 磨消繩文(波状沈線文)



写3 ④ 磨消繩文



写4 ⑤ 磨消繩文(波状沈線文)



写5 ⑥ 磨消繩文(手文)



写6 ⑧ 磨消繩文(U状沈線文·手文)



写7 ⑩ 縹杉文



写8 ⑪ 縹杉文(U状沈線文)



写9 ② 充填繩文



写10 ③ 充填繩文(羽状繩文)



写11 ④ 充填条線文(櫛描文)



写12 ⑤ 充填繩文



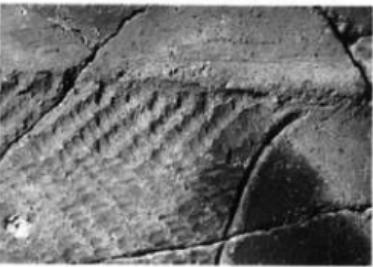
写13 ⑥ 充填繩文



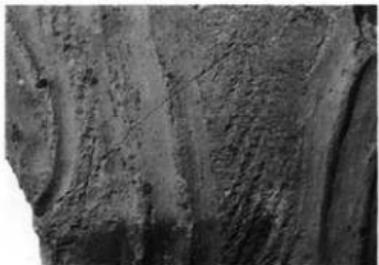
写14 ⑦ 充填繩文(羽状繩文·微隆起文)



写15 ⑧ 充填繩文(微隆起文)



写16 ⑨ 充填繩文(羽状繩文·微隆起文)



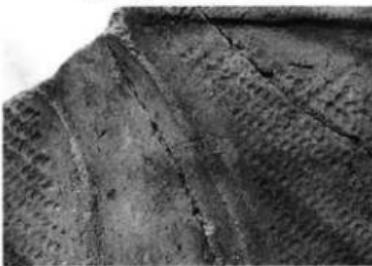
写17 ⑨ 隆起線文



写18 ⑩ 微隆起文(充填)



写19 ⑪ 微隆起文



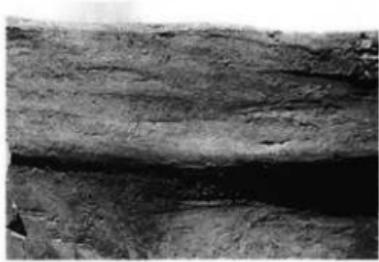
写20 ⑫ 微隆起文(充填、羽状绳文)



写21 ⑬ 微隆起文(充填绳文)



写22 ⑭ 微隆起文



写23 ⑮ 微隆起文(無文)



写24 ⑯ 充填绳文

c) 微隆起文

“隆起線文”と“微隆起文”との違いは隆帯の幅と断面の形状にある。前者が加曾利E 3式土器の口縁部文様帶の隆帯、隆線文のように断面が台形であり、貼り付け手法による。これに対し微隆起文は断面形のはとんどが三角形であり、貼り付け手法のほかに器面の抓み出しによるものも少なくない。“隆起線文”は加曾利E 3式新段階、“微隆起文”は加曾利E 4式土器にみられる。たとえば、隆起線文は⑨、微隆起文は⑩・⑪・⑫などである。⑨は縄文を施した後に、隆帯を貼付し縄文を消している。また、胸部に沈線文を施す土器ではある⑬では、口縁部の微隆起文の上に縄文が施されていることや、⑭などでは微隆起文によるモチーフを付けてから縄文が施されていることに、充填手法がみられる。

d) 粗製土器

微隆起文が口縁部のみにみられる土器が、中期末葉から後期初頭にかけて微隆起文が口縁部にみられ、胸部は無文あるいは縄文のみの土器が存在する。これらを粗製土器とするならば、加曾利E 4式土器や称名寺式土器に伴っている。本遺跡ではこの手の微隆起文土器、⑮・⑯が目立つようである。⑯のように、横位沈線文の代わりに微隆起文が施されるものもある。

また、本遺跡ではみられないようだが、口縁部に横位沈線文が巡る土器で、胸部にL R縄文が縦位に施されたために無文部分が縦に残されるものや、口縁部に微隆起文が巡り胸部には棒状工具による条線文が施される土器第1回淹沢遺跡出土がある。

(3) まとめ

加曾利E 3式土器と加曾利E 4式土器の区分を口縁部文様帶の有無やモチーフ、器形の点だけでなく、磨消縄文（擦消し手法）から充填縄文（充填手法）へと変化し、また施文具もR L縄文からL R縄文・幅広の棒状工具から幅狭の工具やヘラ状工具へと変わる点を強調した。これらの観点に立って、加曾利E 3式土器は古段階・新段階、加曾利E 4式土器も古段階・新段階と分けられるが、小破片になると明確な段階区分は難しいといえよう。

加曾利E 3式と加曾利E 4式土器について、中間型式で、「加曾利E 3-4式」とする見解（柳澤 1985・1987、1992）があるが、前に述べたよう、また明確に伴う住居跡が比定できない点からも加曾利E 4式土器に含め考えたい（山本 1992）。

中期後葉の佐久地域では、曾利式土器の後半では少なく、磨草文系土器がみられる程度で、中部地方の土器というより関東地方の加曾利E 3式が多い傾向がある。中期末葉でも同様の傾向で加曾利E 4式土器が目立つ。また、加曾利E 3式土器に佐久系土器などの在地化した土器が多く、この地域の独自性が現れている。後期初頭になると三十稻場式土器などの東北系（新潟県）の影響がみられる点は注意される。

今まで少なかった浅間山麓の縄文時代の遺跡は、本遺跡に統いて郷土遺跡や屋代遺跡など特に縄文中期の様相を明らかにしていくことができよう。

(註)筆者はかつて加曾利E 3式新段階の遺跡を報告した際、施文手法の手順に着目して充填縄文をもつて加曾利E 4式土器とした(本橋1986)。

2 浅間山麓の敷石住居址

(1) 中期後葉から後期初頭の遺跡分布

浅間山麓では、標高800から900m辺りに遺跡が分布している。浅間山麓では滝沢遺跡、西荒神遺跡、佐久市三田原遺跡群・岩下遺跡、湯川を挟んだ森泉山麓では、宮平遺跡をはじめ、軽井沢町市茂沢南石堂、南側に佐久市吹付遺跡・西片ヶ上遺跡が分布する。これらの遺跡の立地は、千曲川に注ぐ小河川に開析された台地縁辺部もしくは低位段丘面にある。

(2) 柄鏡形敷石住居址の様相

宮平遺跡では、加曾利E 3式期では円形竪穴住居址であったが、加曾利E 4式になると敷石住居址に変わり、後期初頭を経て堀之内1式期まで敷石住居址がみられる。宮平遺跡は調査範囲が限られているために明確ではないが、J-9号住居址では、円形の主体部に対ビットがみられ、柄鏡形住居址であったことがわかる。同様にして、滝沢遺跡でもJ10号住居址やJ8号住居においても主体部の掘り方は円形ないし方形ではあるが、大きさや位置において対応する対ビットが存在することによって上屋構造が柄鏡形住居址と大きく変わらないものと考えられる。

御代田や佐久地域においては加曾利E 4式期では、このような掘り方まで明確な柄鏡形を呈する住居址はみられないようであるが、後期初頭になると滝沢遺跡に近い三田原遺跡群3号住居址では柄部にまで敷石が施される柄鏡形住居址がみられる。佐久市吹付遺跡や小諸市郷土遺跡では、加曾利E 4式期の住居址がほとんどみな柄鏡形敷石住居址である点は注目される。吹付遺跡9号住居址は柄鏡形の掘りこみに主体部にのみ敷石が施されている。4号住居址は掘り込みは主体部しか確認されなかったものの、連結部に対ビットがみられる柄鏡形敷石住居址である。しかし、後期初頭においても西荒神遺跡J2号住居址のようなには円形の主体部の端に対ビットをもつが小さな張り出し程度の形状の住居址があり、吹付遺跡9号住居址や三田原遺跡群3号住居址にみられるような柄部が大形になる柄鏡形敷石住居址は定着しなかったようである。つまり、千曲川を下った小諸市久保田遺跡や屋代遺跡B地点などでは敷石住居址や柄鏡形住居址で集落が形成されている遺跡があり、中期末葉加曾利E 4式期から後期前葉堀之内式まで続くが、遺跡によって

は柄鏡形住居址でない敷石住居址も存在することから柄鏡形住居址が濃密に分布する南関東地域より独自性が強いといえよう（本橋 1989・1990）。さらに、重要なことは滝沢遺跡J10号住居址のように加曾利E4式の古段階に柄鏡形になるような敷石住居址が存在する点であり、加曾利E4式土器を伴っている点にある。

（3）柄鏡形敷石住居址の出現

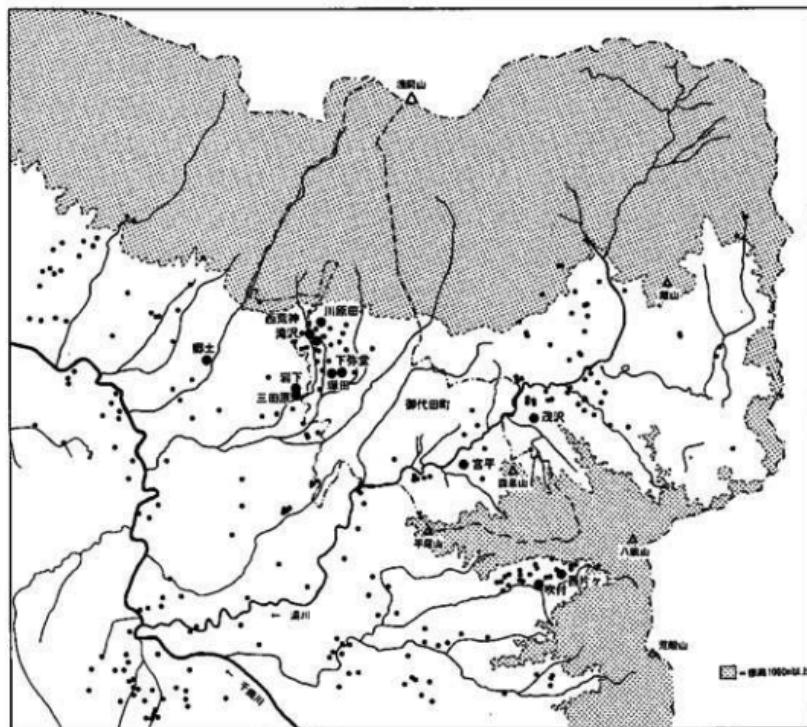
柄鏡形住居址の古いものは、南関東の神奈川県猿田遺跡や当麻遺跡、新戸遺跡で加曾利E3式新段階（口縁部文様帯の消失した土器）にみられたり、加曾利E3式土器に加曾利E4式土器が伴っていたりする。南関東では、加曾利E4式期以降柄形住居址が定着する。一方、敷石住居址は加曾利E3式土器の口縁部文様帯をもつ土器を伴って、群馬県富岡市田篠中原遺跡などでもみられ、星代B遺跡でもこの時期の敷石住居址が存在することより、中部地方でも加曾利E3式段階でみられることから土器編年との問題もあるが、早い時期に北関東・中部北信地域に伝わった可能性が考えられる（本橋 1988・1990・1996）。

宮平遺跡では柄鏡形（敷石）住居は、加曾利E4式期にみられ、それ以前は円形ないし楕円形の竪穴住居址であるようである。滝沢遺跡では加曾利E3式（新段階）にやや五角形ともとれる円形の竪穴住居J-13号住居址があり、加曾利E4式期になると楕円形のJ-7号住居址の他は対ビットをもつ柄鏡形敷石住居址や対ビットをもつ楕円形の竪穴住居址がみられる。宮平遺跡や滝沢遺跡周辺では小諸市の郷土遺跡や久保田遺跡、佐久市三田原遺跡群・岩下遺跡・吹付遺跡のような明確な張り出し部をもつ柄鏡形住居址は浸透しなかったのであろうか。いずれにしろ、浅間山麓南部から東部で、遺跡によっては加曾利E3式（新段階）期に柄鏡形（敷石）住居址が出現し、加曾利E4式から堀之内2式期に柄鏡形（敷石）住居址として存続していたと考えられる。このとき宮平遺跡や滝沢遺跡などの事例から“柄鏡形”というより“敷石”である点が、浅間山麓の加曾利E4式期において住居址を構築する条件であったとも考えられる。この傾向は柄鏡形住居址が最も濃密に分布する南関東と対称的であろう。敷石材の乏しい地域では“柄鏡形”であることには固執し、敷石や配石がない住居址が多いからである。

浅間山麓において受容の程度は遺跡によって大きく異なるが、早い時期から（柄鏡形）敷石住居址が加曾利E3式土器や加曾利E4式土器にともなって存在することは、関東地方の強い影響下にあった地域であることを肯定している。

（4）柄鏡形（敷石）住居址の構造

本遺跡では限られた調査であったために、住居址の形態がわかる敷石住居址はみられないが、そのなかでも中期末葉加曾利E4式期のJ-9号住居址や後期前葉堀之内1式期J-12住居址で



第3図 津間山麓周辺の横文遺跡分布

は板状の平石を敷石材として用いる。两者とも石圍炉で主体部全体に石が敷かれているようである。J-9号住居址では連結部に埋甕がみられ、対ビットが溝状に連なっている。J-12号住居址では炉址に土器が埋設されており、柄縫形敷石住居址の時期的な特徴を備えている。

滝沢遺跡では円形もしくは方形のプランに敷石が施される住居址で、掘り方が柄鏡形であるような住居址はみられない。加曾利E 4式期の敷石住居址はJ-8号とJ-10号などである。J-8号は楕円形の掘り方に石窯炉を中心として石が敷かれている。主体部の柱穴は6本ないし7本で、連結部とみなされる部分に対応する4本のピットがあり、間に調部下半から底部にかけての埋甃が存在する。J-10号は方形と想定される掘り方に柱の内側に敷石が施される住居址で、石窯炉の北側に一部石がない空間が存在する。柱と考えられるピットは6本で、南側対ピットがあり間に埋甃がみられる。埋甃は口縁から底部にかけての両耳壺が用いられている。他に遺存状態の良い住居址はJ-5号住居址で不整円形の掘り方に敷石が部分的に残存している。柱穴にな

りそうなピットは7本あるいは8本壁際にあるが、他にピットが7ないし8個ある。このうち、南側の壁際のピット2個が位置や大きさから対応しているようで、対ピットとみなされる。滝沢遺跡では竪穴の形態では柄鏡形とはなり得ないが、対ピットが存在することから上屋構造は柄部をもつ柄鏡形と大差ないと考えられる。

滝沢遺跡の事例と異なって西荒神J2号住は柱穴が壁よりで本数が多く、柄部も小規模ではあるが突出した特徴がある。柱穴は石圓炉を中心として同心円状の位置にあり、柄部ではピットが対応する位置にあり、土坑がみられる。敷石はおそらく住居使用時点にはあったであろうが、柄部や柱穴近くに残るのみである。称名寺式期である。

西荒神J2号住と同じく後期初頭の佐久市西片ヶ上遺跡第1号住居址は竪穴のプランにおいても明確な柄鏡形を呈する。主体部はやや楕円形に歪んだような形状であるが、柄部は長さが1m以上も張り出した柄鏡形住居址で、柄部の敷石は比較的遺存状況が良いようである。なお、連結部が括れたような形状で、主体部の東側にテラスをもっている。炉址は石圓炉であった可能性があり、他の敷石住居址と同じ長方形である。

佐久市吹付遺跡で遺存状態が良いのは、加曾利E4式期の4号住居址と9号住居址である。4号住居址は楕円形の主体部に炉址を中心として方形に石が敷かれ、連結部から柄部の一部に石が残された柄鏡形敷石住居址で、柱穴とみなされるピットは敷石に接する部分の角など5本あり、連結部に対ピットがある。柄鏡形住居址の多くは西荒神遺跡例のように壁に近い位置に柱穴が巡る“壁柱穴”が多いが4号住居址は壁と炉址との中间の位置にある点が特徴的である。連結部に1個、柄部に3個の土器が埋設されている。敷石材は板状石を用い、間隙に小礫を埋め込む点では敷石住居址によくみられる特徴がある。9号住居址の柄鏡形の竪穴住居址で、主体部のみ敷石がみられる。壁柱穴で、内側に敷石が施されている。連結部の対ピットの間に土坑、柄部には対応する溝がみられる。主体部の敷石には炉辺部右側から柄部にかけて敷石がみられない。炉址は方形で、底に加曾利E4式土器の大形破片が敷かれていた。敷石材はやはり板状石を用い、間隙に小礫を埋め込んでいる。9号住居址は壁柱穴であることと、対ピットや対の溝が柄部にみられる点は柄鏡形住居址の典型的な事例であろう（本橋 1988）。

西片ヶ上遺跡や吹付遺跡4号住居址にみられる特異な形状は地域的特徴というより、遺跡の個性あるいは遺構（住居址）の個性としてとらえられよう。

(5) 御代田・佐久地域の敷石住居址

当該地は、千曲川の支流に遺跡が位置しているためか、中期後葉に大木式土器の影響がみられる土器や後期初頭では新潟県の三十稻場式土器がみられる。たとえば、西片ヶ上遺跡では三十稻場式土器を伴った柄鏡形敷石住居址がある。各地域の要素が融合したような観を抱く。しかし、

浅間山麓の他地域に比べると、当地は碓井峠など山を隔てて北関東地方、利根川最上流域地域と隣接しているためにより加曾利E3式・加曾利E4式土器が多く出土する。特に群馬県松井田町では柄鏡形住居址や敷石住居址がみられる点からも、当地はより関東地方の影響が多くみられる地域であることが指摘できるのである。

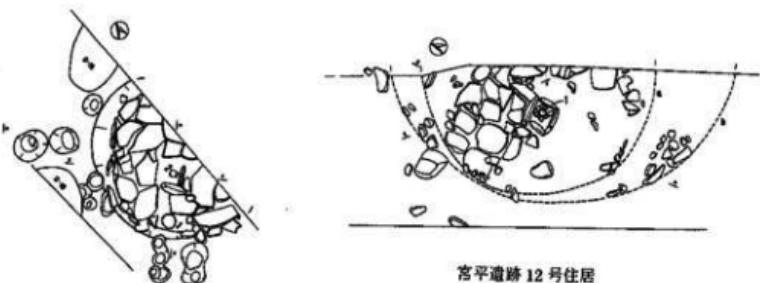
浅間山麓では加曾利E4式期の住居址は敷石住居址もしくは柄鏡形住居址であろう。敷石材は八風山の産地と考えられる板状石が用いられ、方形に囲った炉址を中心として石が敷かれている。佐久市や小諸市では明確な竪穴の柄鏡形に敷石が施される住居址であるが、御代田町では明確な柄部の張り出しがない敷石住居址が多い。なお、軽井沢町茂沢南石堂遺跡の後期の敷石住居では、竪穴は確認されない敷石住居であった。浅間山麓において御代田・軽井沢周辺のごく限られた地域で、柄鏡形住居址が流行する加曾利E4式期から後期前葉まで、明確な張り出し部をもたないあるいは竪穴の形状が柄鏡形でない敷石住居址が存在することは独自の地域性というものを考えねばならないだろうか。または、地域的な特徴というより遺跡ごとの個性としてとらえられようか。

(6) まとめ

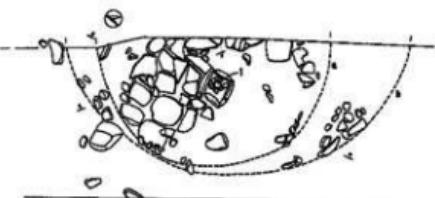
柄鏡形住居址は旧稿でのべたように(本橋 1988)、南関東で加曾利E3式(新段階)に発生したと考えられる。この時期以降、加曾利E4式期では柄鏡形(敷石)住居址が南関東を中心として、北関東、中部地方、東北地方南部まで分布が広がる。しかし、分布が最も濃密なのは南関東である。北関東では、加曾利E4式期に柄鏡形住居址で集落を構成する遺跡もあれば、同じ時期に円形の竪穴住居址である遺跡も存在する。たとえば、前者が荒砥二之坂遺跡などで、後者が荒砥北原遺跡などである。星代B遺跡では口縁部文様帯をもつ加曾利E3式土器をもつ柄鏡形(敷石)住居址が発見された。加曾利E3式土器の古段階では、円形竪穴住居が多いが敷石住居は既に存在しており、配石造構や埋甕と共に融合して柄鏡形住居址が出現したと考えられる。星代B遺跡の加曾利E3式期の柄鏡形住居址をめぐっては、柄鏡形住居址発生の問題だけでなく、土器編年問題にも言及する必要がでてこよう。

引用・参考文献

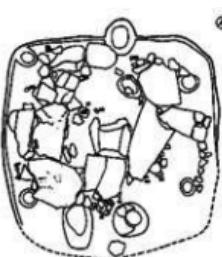
- 上野佳也ほか 1983 『軽井沢町茂沢南石堂遺跡』軽井沢町教育委員会
神奈川考古同人会 1985 『縄文時代中期後半の諸問題—とくに加曾利E式と曾利式土器の関係について』神奈川考古学会
小山岳夫ほか 1995 『東荒神遺跡・西荒神遺跡・下大宮遺跡・閑屋遺跡・中屋際遺跡』御代田町教育委員会



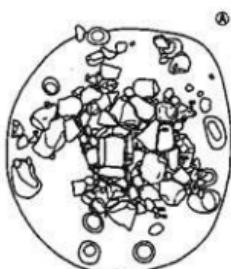
宮平遺跡 9号住居



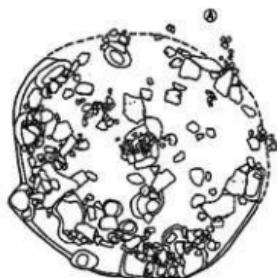
宮平遺跡 12号住居



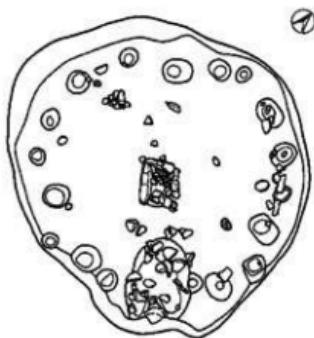
高沢遺跡 10号住居



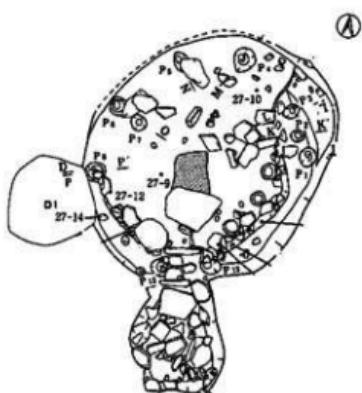
高沢遺跡 8号住居



高沢遺跡 5号住居

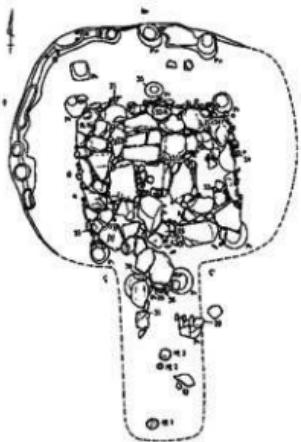


西荒神遺跡 2号住居

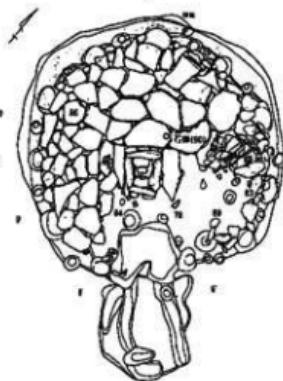


西片ヶ上遺跡 1号住居

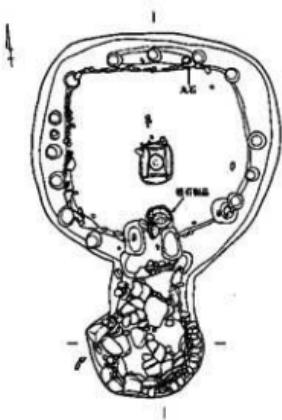
第4図 佐久地域の敷石住居



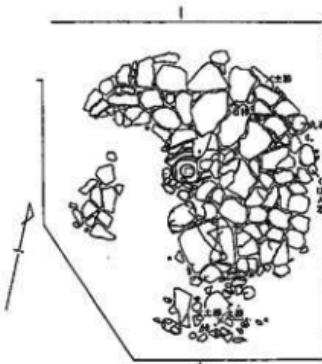
吹付遺跡 4号住居



吹付遺跡 9号住居



三田原遺跡 3号住居



茂沢南石堂遺跡 5号住居

第5図 佐久地域の敷石住居

- 小山岳夫ほか 1997 「塩野西遺跡群 龍沢遺跡」長野県御代田町教育委員会
- 羽毛田伸博ほか 1987 「佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第6集 淡淵・屋敷前・西片
ヶ上・曲尾III・曲尾I」佐久市埋蔵文化財調査センター
- 本橋恵美子 1988 「縄文時代における柄鏡形住居址の研究—その発生と伝播をめぐって」『信濃』
第40巻第8号・9号
- 本橋恵美子 1992 「『埋甃』にみる動態について—縄文時代中期後半の遺跡の検討から—」『古代』第94号
- 本橋恵美子 1995 「縄文時代の柄鏡形敷石住居址の発生について」『帝京大学山梨考古学研究報
告』第6集
- 百瀬忠幸他 1991 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2 佐久市内その2」日本道路公
團東京第2建設局 長野県教育委員会 財団法人長野県埋蔵文化財センター
- 柳澤 清一 1995 「加曾利E式土器の細別と呼称（前編）」『古代』第80号
- 柳澤 清一 1986 「加曾利E式土器の細別と呼称（中編）」『古代』第82号
- 柳澤 清一 1992 「加曾利E（新）式編年研究の現在」『古代』第94号
- 山本 孝司 1992 「加曾利E3-4式と曾利V式について—神奈川県新戸遺跡出土資料を再検
討して—」『古代』第94号
- 山本暉久 1976 「敷石住居出現のもつ意味」『古代文化』28巻

写真図版



図版
J-1 J-2号住居址



J-1号住居址（南方より）



J-2号住居址（東方より・手前はD-12）



J—3号住居址（西方より）



J—3号住居址（北西より）



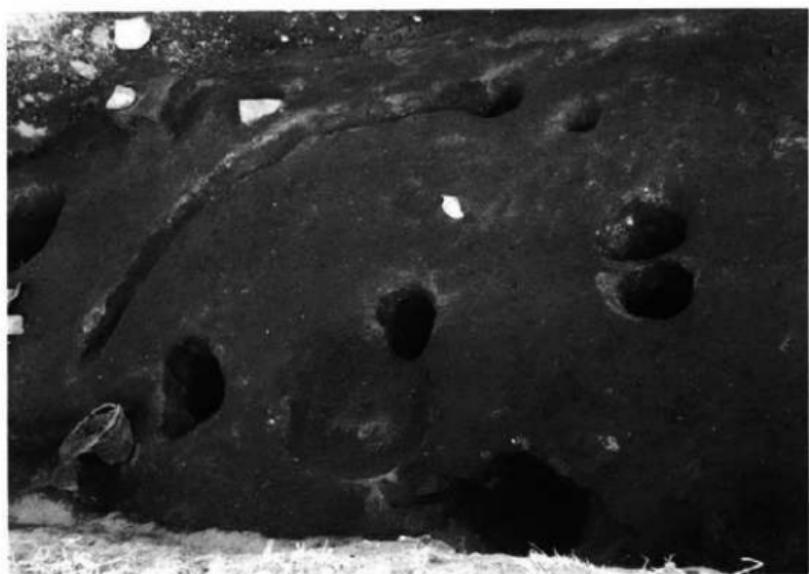
J—3号住居址浅鉢出土状態



J—4号住居址埋甌出土状態



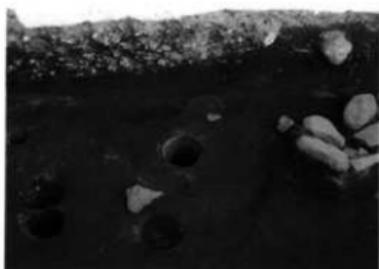
J—5号住居址埋甌出土状態



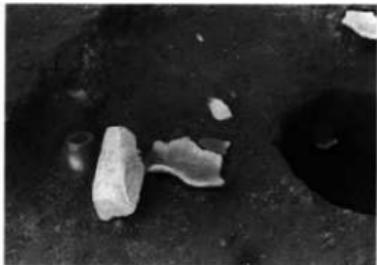
J-8号住居址（西方より）



J-11号住居址（西北より）



J—7号住居址（西方より）



J—7号住居址遺物出土状態



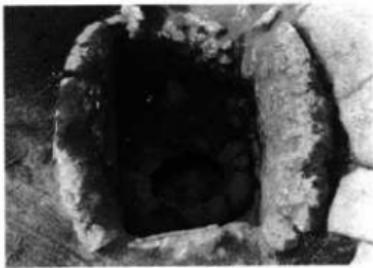
J—9号住居址（西方より）



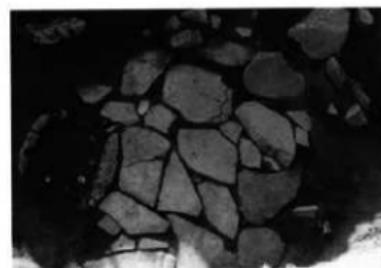
J-12号住居址（南方より）



J-12号住居址（東方より）



J-12号住居址炉



J-12号住居址敷石



J-13号住居址（東方より）



J-14号住居址（北方より）

図版
7 J-15号住居址



J-15号住居址（北方より・調査中の状態）



J-15号住居址埋甕



J-15号住居址埋甕



J—16号住居址（北西より）

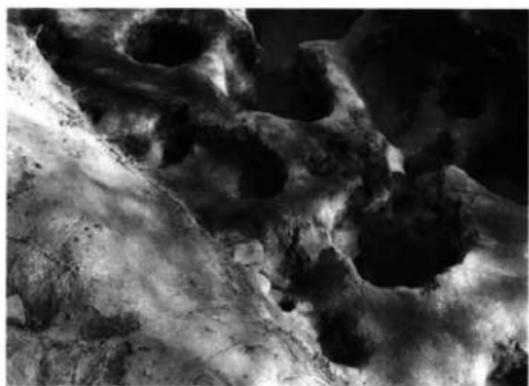


J—17号住居址（南方より）

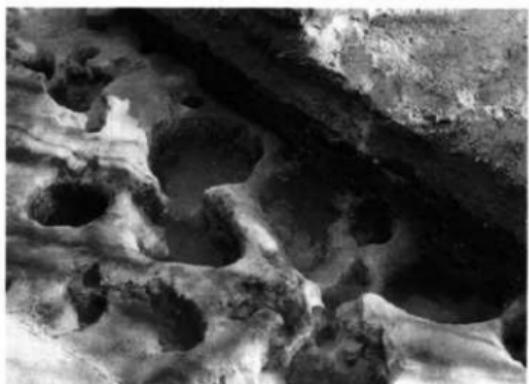


J—17号住居址炉





J—19号住居址（西方より）



J—20号住居址（西方より）



J—21号住居址（東方より）



J-22号住居址（南方より）



J-23号住居址（東方より）



J-24号住居址（西方より）



J-24号住居址炉（西方より）



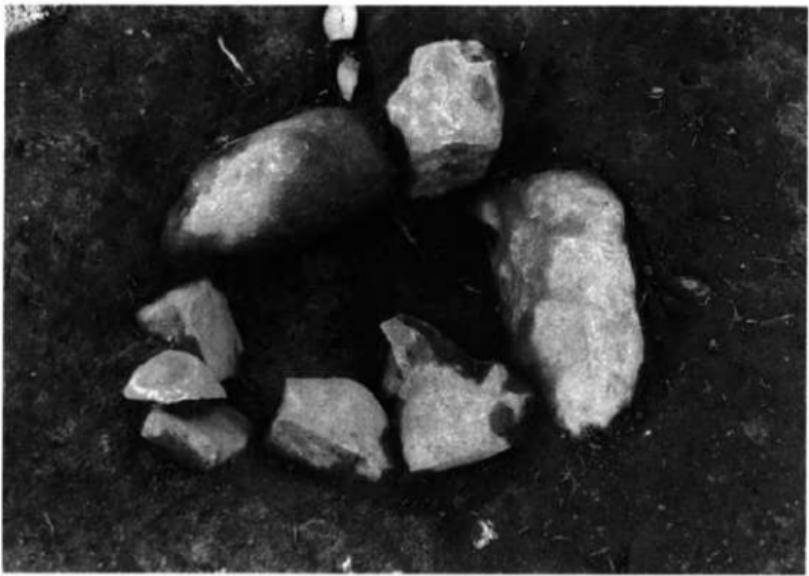
J-25号住居址（西方より）



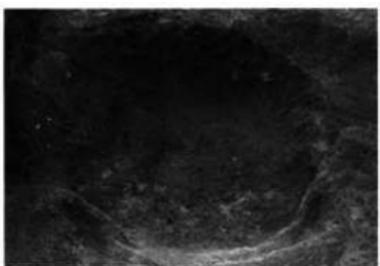
J-25号住居址炉（東方より）



J—26号住居址（南方より）



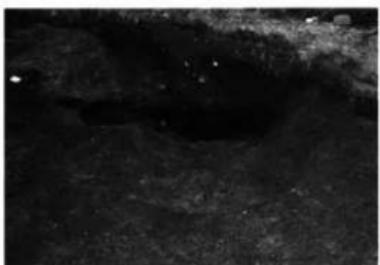
J—26号住居址炉（南方より）



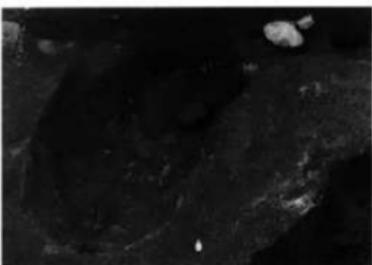
D-1号土坑（南方より）



D-1・D-3号土坑（南方より）



D-4・D-5号土坑（北東より）



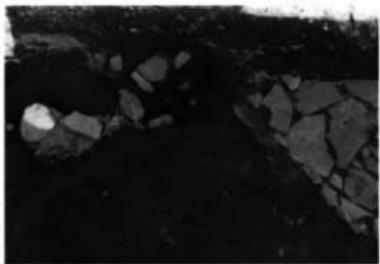
D-9号土坑（東方より）



D-11号土坑（東方より）



D-12号土坑（西方より）



D-15号土坑（西方より）



D-16号土坑（東方より）



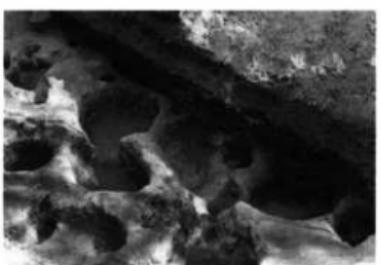
D-23号土坑（南方より）



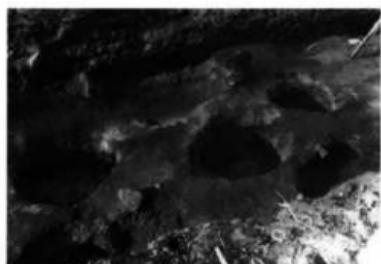
D-24号土坑（南方より）



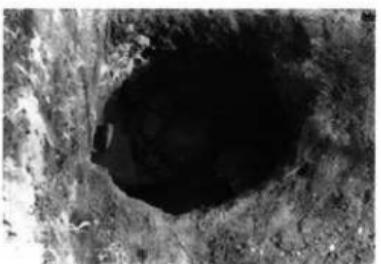
D-25・D-26・D-27号土坑（東方より）



D-34～D-40号土坑（東より）



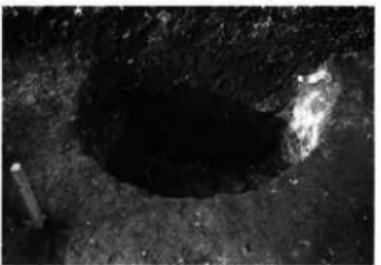
D-35・D-37・D-39号土坑（南より）



D-41号土坑（西方より）



D-41号土坑（南方より）



D-42号土坑（南方より）



D—43~D—45号土坑（東方より）



D—48号土坑炉（西方より）



D—48号土坑（北方より）



D-50プラン（南東より）（白い帯は灰層）



D-50号土坑掘り上がり



D—52号土坑掘り上がり（東方より）



D—52号土坑土器出土状況



D—52号土坑骨出土状況



D-19号土坑墓（南方より）



深鉢内の骨出土状況



D-18号石棺墓（東方より）



D-20号石棺墓（西方より）

図版
22
D-21号石棺墓・宮平遺跡近景



D-21号石棺墓（東方より）



宮平遺跡より浅間を望む



R—1号礫群（東方より）



R—2号礫群（東方より）



J-23号住居址付近より西を臨む



J-3号住居址より南を臨む



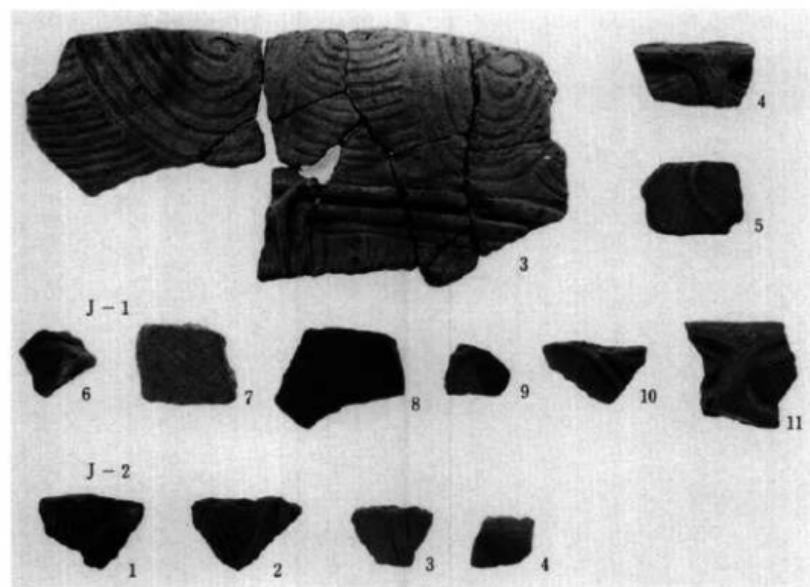
J-26号住居址付近より西を臨む



J-1 1



J-1 2



J-3 1



J-3 3



J-3 9



J-3 7



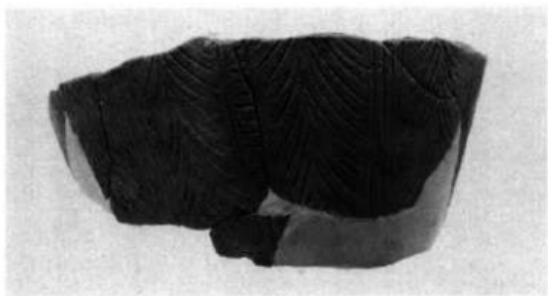
J-3 8



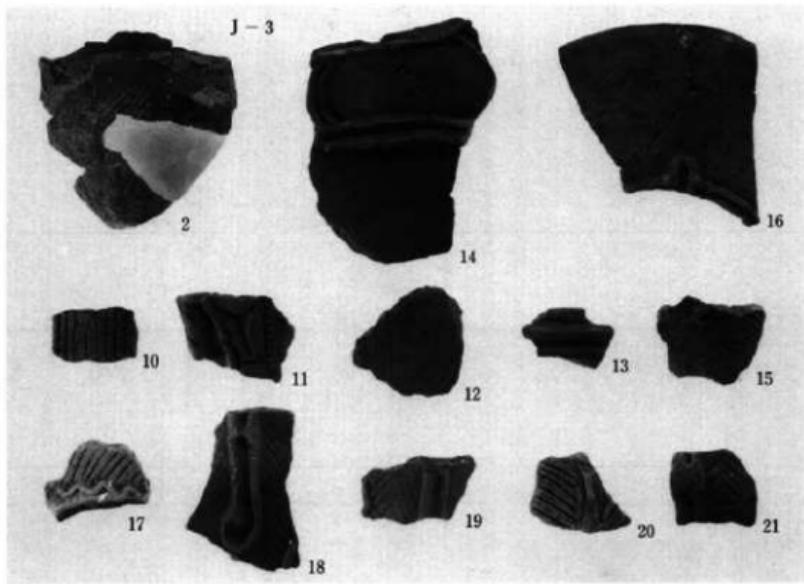
J-3 6



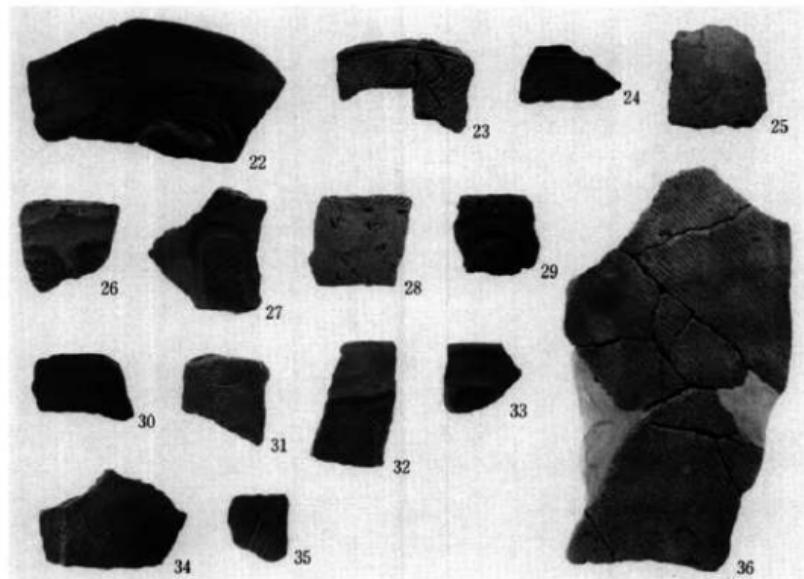
J—3 4



J—3 5



図版
J—3・J—4号・住居址出土土器



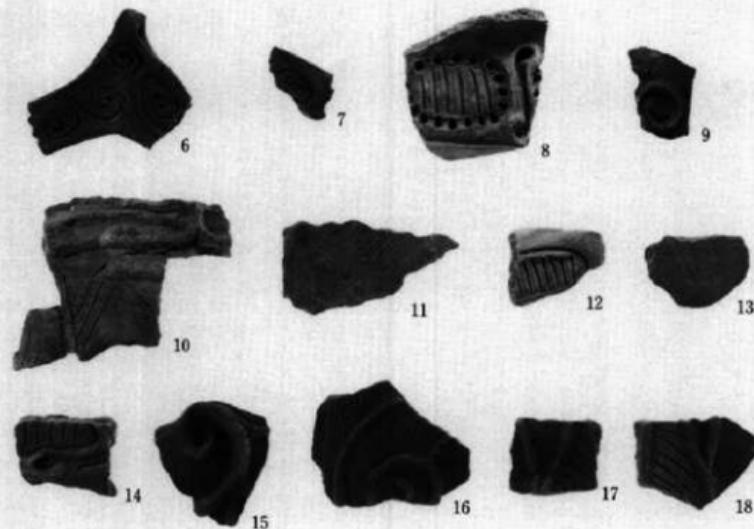
J - 3



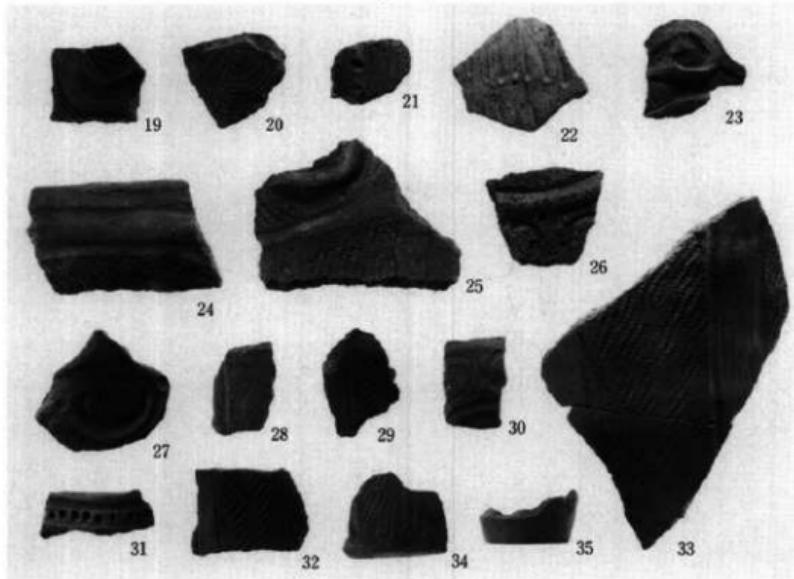
J - 4 1

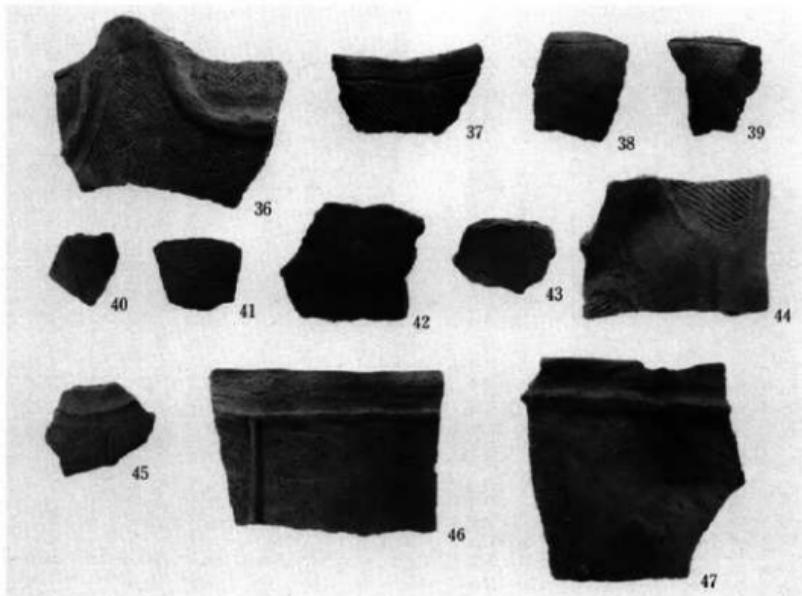


図版
30 J—4号住居址出土土器

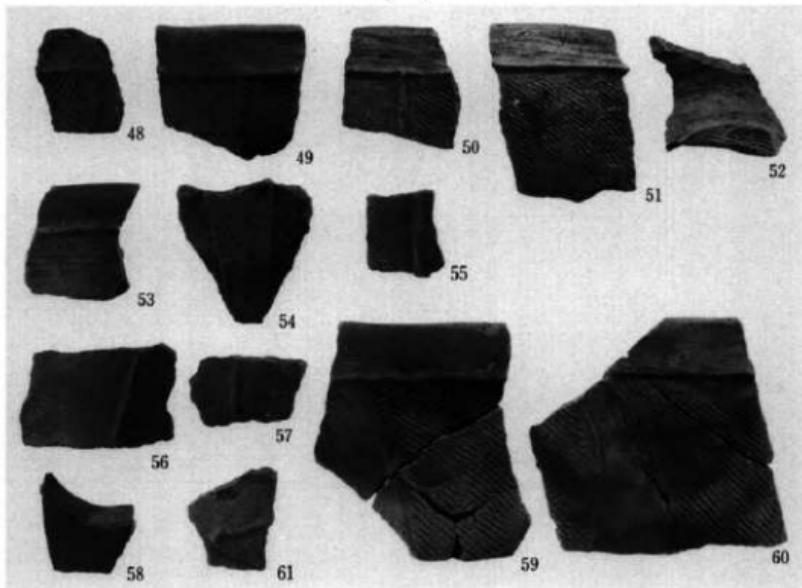


J - 4

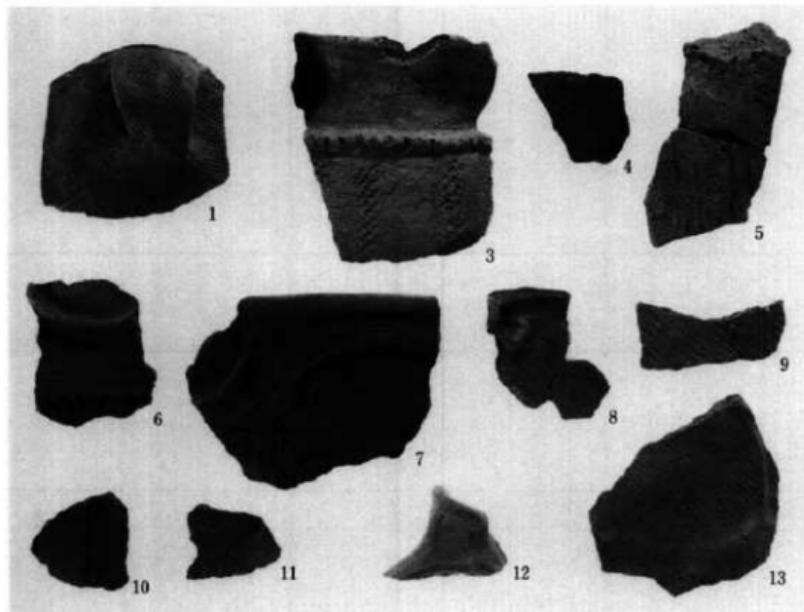




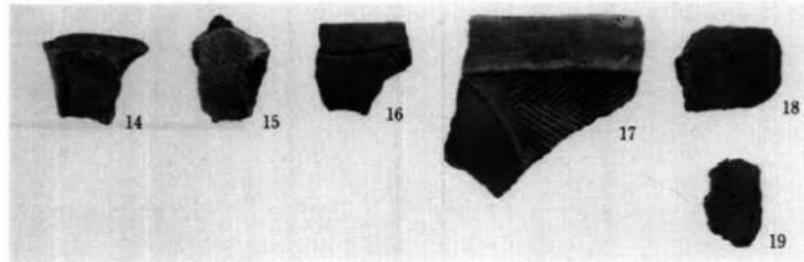
J-4



圖版
32 J—5號住居址出土土器



J—5

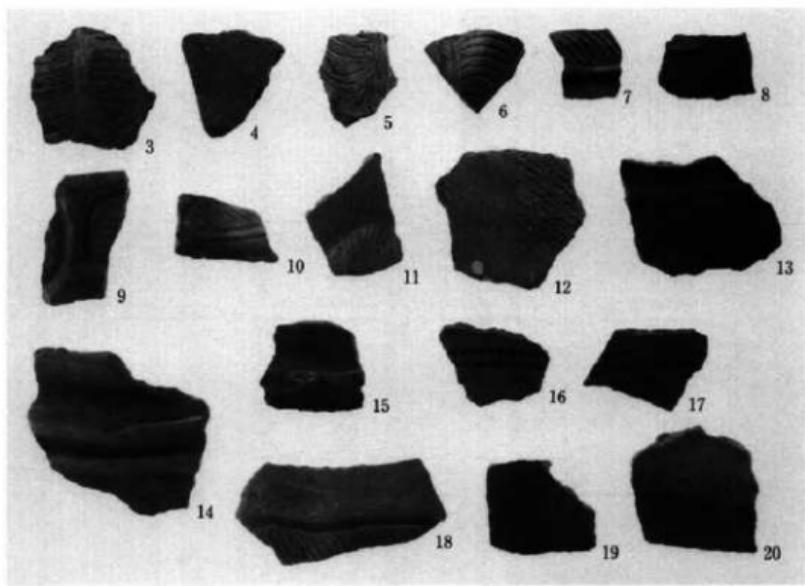


J—5 2



J-7 1

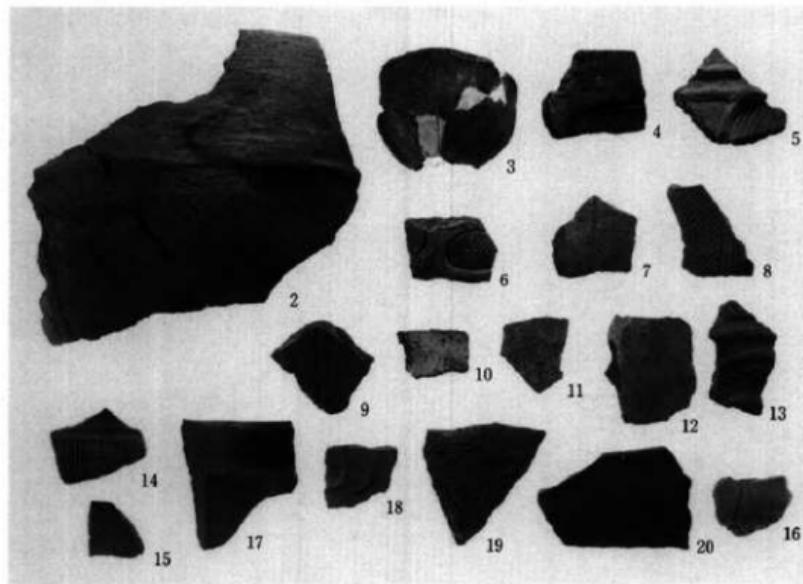
J-7 2



J-7



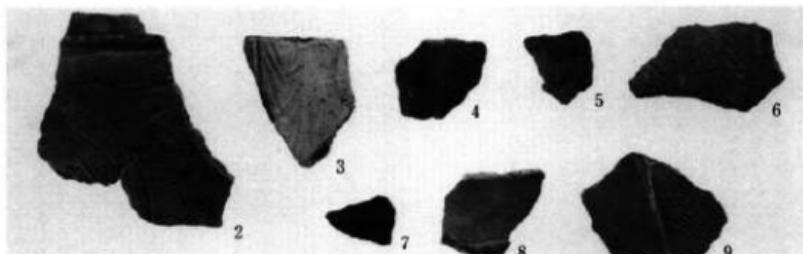
J-9 1



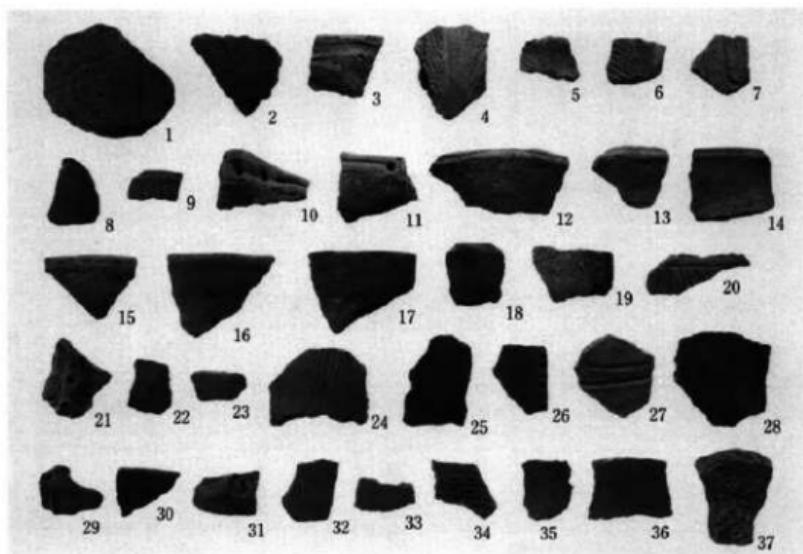
J-9



J-10 1



J-10



J-12

36

J—13·J—14號住居址出土土器

J—13 1



J—14 1



2



3



4



5



6



7

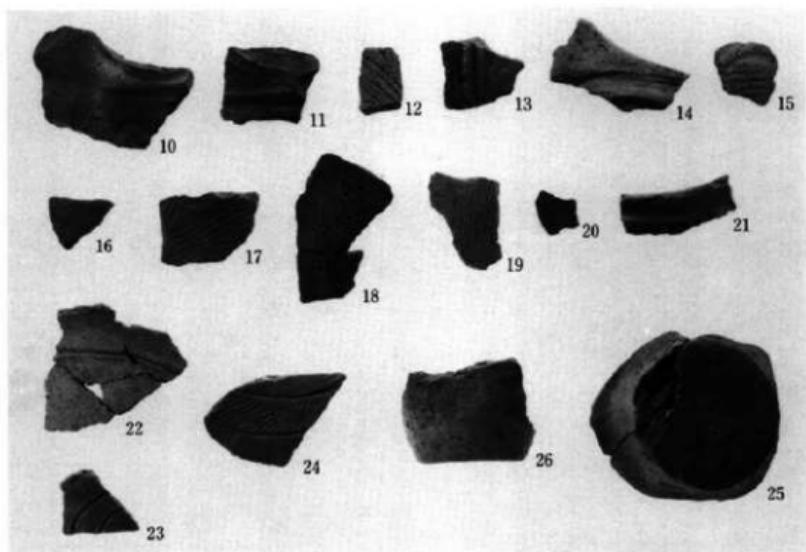


8



9

J—14



J—14



J—15 1

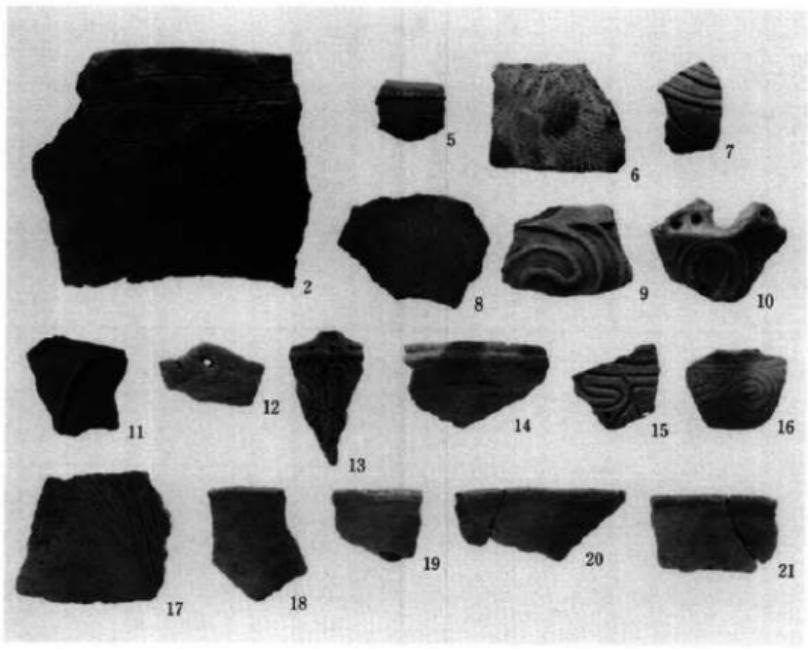
圖版
38
J—15號住居址出土土器



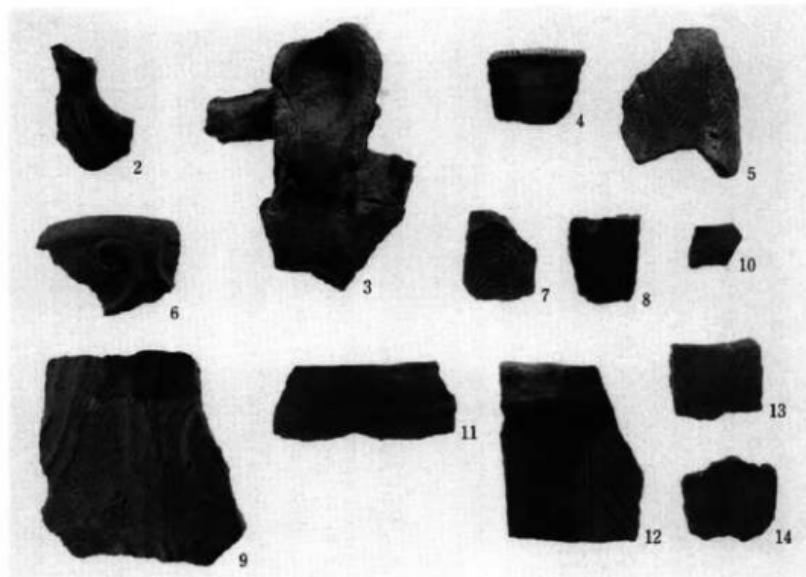
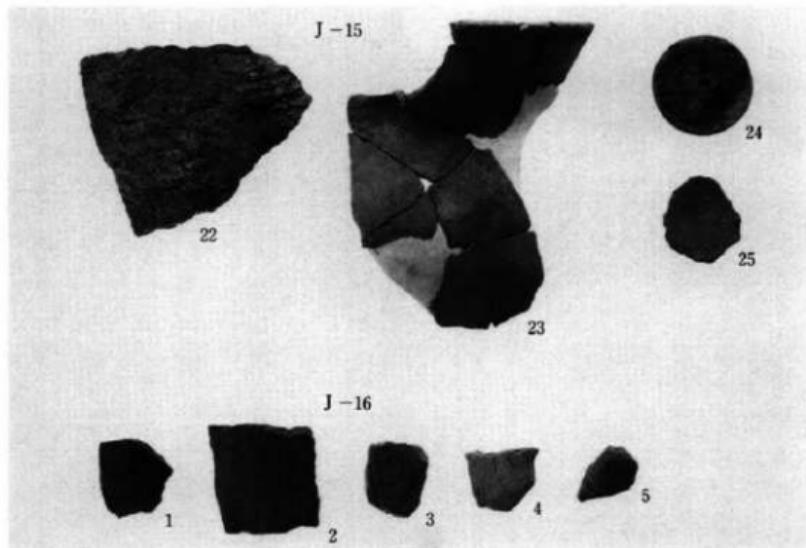
J—15 3



J—15 4

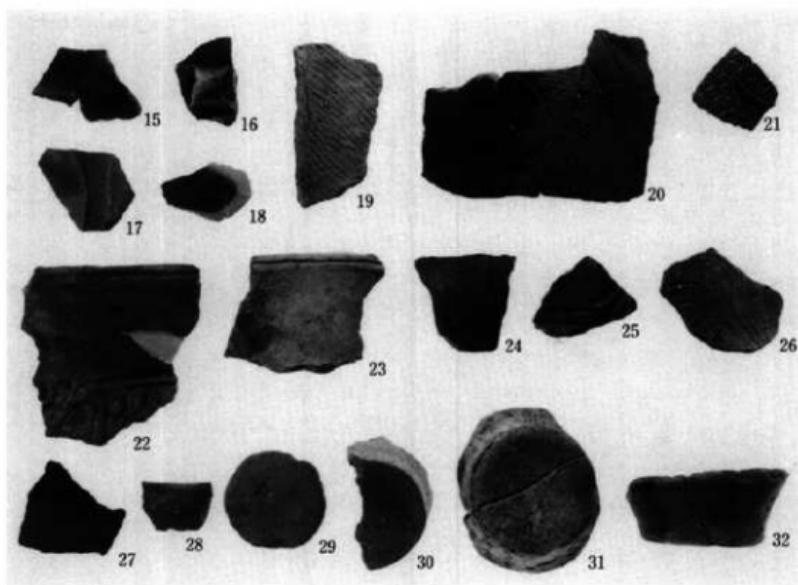


J—15

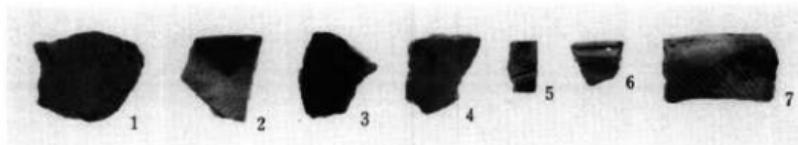




J-17 1



J-17



J-18